せられ、歴代村長を以て組頭とするの慣習であつた其の後本部及救護班の新設を見本部に本部長一小頭一喇叭班長一喇叭手十二を置き、救護班は之を二部に分ち各部に部長一人宛を置き、組員總數四百五十名となつた、施設の主要なるものは瓦斯倫喞筒二臺、腕用喞筒九臺、貯水池七十個所、火之見十三基である。

甲種金馬簾一條は組の優秀を示して居るが、組頭たりし齋藤萬壽雄佐久間義雄兩氏の外に尙三名の縣功勞章受賞者がある。

○千葉縣大原警察署管内

御宿町消防組　大正五年元須賀濱高山田久保新町六軒町の六區の各區にありし私設消防組を統一し、六部制組員三百六十名の公消防組が設置せられ、翌六年十二月新に救護班を、大正十四年一月警戒班を設置して本部附屬とし、昭和三年同八年及び同九年五月の三回に亘りて組織を變更し、警戒班長制を廢して副組頭制を設け、現在總員三二一名に整理せられた、施設の重要なるものは瓦斯倫喞筒四、腕用喞筒五、火之見鐵骨二、木造四、貯水池昭和七年末に於て五十五、此貯水量一一八石にして、逐次改善が企圖せられ着々として實現せられて居る。

本町は太平洋に面し波浪荒く消防組員は火災水害の警防に當り、各般の社會公共事業に奉仕するのみならず、遭難船あれば直ちに出動して水難救助に當り、其の功極めて大なるものあるは當組の特色である。

組としては甲種金馬簾四條を得、多數消防組員の受賞者を出したるは、之歴代組頭初め幹部諸氏の指導よろしきと、部員の獻身努力の致す所である。

東村消防組　大正十一年七月東村大宇山田區の一部と高谷區の一部とを合し、組頭以下四十六名よりなる公設消防組の設置せられたるを基とし、大年十三年一月佐室區に一ヶ部を、昭和四年一月山田第三區に一ヶ部、新田野區に一ヶ部を增設して四部制とし、昭和八年一月本部を置きて統制を嚴にし、更に昭和九年四月山田區第一區に一ヶ部を增設し、長志區上下に各一ヶ部を設け、東村消防組大成に向つて邁進しつゝあるのである、昭和九年四月に於ける主要機具は腕用喞筒五臺で、部の增加に連れて愈機具も改善增加の一路を辿つて居る、消防水利は私有池水の利用の便あり、貯水池は第一部に一ヶ所あるのみなるも是亦次第に整備せらるゝに至るであらう、要するに東村消防組は今發達の道程にあり、初代組頭たりし日置定二氏は、二代目組頭三上直二氏の辭職後再び組頭に就任し、組の發展に努力しつゝあるのである。

浪花村消防組　大正二年岩和田に組員七十名よりなる

公設消防組が設置され、伊藤岩藏氏が組頭に就任したかくて十一年を經大正十三年岩船區に第二部を增置し、岩和田を第一部とし二部制を布き、玉田竹次郎氏組頭に就任し、同時に副組頭を置き市原市松氏の就任を見、組員總員百十名となつた、更に昭和四年小澤小池の兩區同時に公設となり、小澤を第三部、小池を第四部とし、玆に全村に亘り四部制の消防組は大成せられ、之れと同時に本部を設置し、組頭一、副組頭一、本部長一、各部々長一、小頭各部に二名總員二二〇名となつた、而して後副組頭たりし市原市松氏組頭に就任したのである、現在施設の主なるものは瓦斯倫喞筒一、腕用喞筒三、火之見は岩和田に鐵骨のもの一、其の他各部に一基乃至二基の火之見梯子あり、水利は概ぬ河水の便あるも貯水池十四ケ所を設けて萬一に備へて居る、組員上下協力警火に努め無火災の成績を擧げて乙種金馬簾一條の使用允許を得、一方施設の改善消防技能の向上に精進するの外、海難救濟の功亦大なるものがある。

大原町消防組　明治四十二年三月第一部大原、第二部新場、第三部田町區及城山區、第四部根方區坂東の四部制の公設消防組が設置せられ、初代組頭長嶋金夫氏、第二代地井文吉氏、第三代中村一六氏夫々就任した、大正十二年三月中村氏組頭時代小佐部に第五部、寄瀨に第六部を增設して六部制となし、翌十三年三月第一部中大原北町を分離して第七部を置き、同十四年本部を設置し、本部に救護班、給水班兼傳令、喇叭班、給與班を置き各部より三名宛を選拔して本部各班員とした、越えて昭和三年三月六部を增設し第八部澁田、第九部北寄、第十部造式、第十一部貝須賀、第十二部大井、第十三部新田とし更に第十一部中町を分割して第十四部とし、各部共部長以下五十四名に統一した。昭和四年八月中村組頭辭任後昭和六年七月まで組頭を缺き、第二部長岩瀨忠二、第五部長山口太郎、第七部長仲佐酉造、三氏の合議制時代あり、昭和六年八月市原文雄氏組頭に就任同時に第五部長山口太郎氏が組頭補佐となつた、現在喞筒は自動車一臺手輓瓦斯倫六臺、腕用喞筒七臺、豫備腕用喞筒三臺で、貯水池は千六百石入一、五百石九、其の他大貯水池より鐵管にて引水のもの二百三十ケ所あり、火之見は大正十五年警察署側に鐵骨のものを建設したるを初めとし、年々一基宛鐵骨火之見を增設し、其の他に木造八基が有る

大原消防組は千葉縣消防組最優良消防組の一で、甲種金馬簾五條は其の紀律訓練の優秀施設の完備を有力に物語つてゐる。

長者町消防組　明治四十二年一月、組頭以下七十名よりなる公設消防組が長者區に設置せられ、大正十年江場

土區に一ヶ部を增設し長者區を第一部江場土區を第二部とし、二部制となり、昭和六年第三部三門區、第四部宮前、第五部井澤、第六部東小高區の四部を增設し、二百十名を增員、後副組頭を置くと同時に本部を設置し、本部に救護班、喇叭班を置き、玆に長者町消防組の大成を見たのである、施設の主なるものは瓦斯倫喞筒一臺、腕用喞筒六臺、貯水池十八ヶ所、火之見櫓七基て、之れに組頭たりしは石井久、平賀貞助、石井倉藏の諸民で、現組頭は田中恭三氏である。

甲種金馬簾一條は昭和九年其の使用を允許せられたもので、各部落の保安組合は消防組と連繫して災害豫防に努め良好の成績を示して居る。

東海村消防組　大正十年大原警察署長加藤仁三郎氏赴任するや、力を公設消防組の設置に竭し、東海村駐在巡査鈴木監作氏署長の意を體して本村消防組の公設に奔走し、同年四月二日東海村一圓を區域とし部數五組員數二百二十五名の東海村消防組設置認可指令があり、其の成立を見たのである、更に大正十五年十月日在區南日在に第六部が增設せられ、昭和四年二月副組頭を置き、本部を設置し、翌五年第七部及第八部の二部と新設し、總員四百四十九名となる。施設の主要なるものは腕用喞筒八貯水池五〇、火之見鐵骨一、木造十一である。

○千葉縣勝浦警察署管內

勝浦町消防組　明治二十七年消防組規則發布と同時に二部制、組頭一、部長二、小頭四、消防手八〇總員八七名の勝浦町消防組は設置せられ、熊切八十氏組頭に就任次で第二代組頭吉野金藏氏を經て第三代組頭渡邊八助氏組頭たるの時、東部西部の二部を四部制とし、組員總數を百七十三名に組總を變更し、更に瓦斯倫喞筒を第一部に配備するに及び、第一部消防手を七十名に增員し、內三十名を瓦斯倫喞筒係とした、次で吉野力太郎氏組頭就任の後、第五部と本部を新設し、第一部七十名を五十名に減員し、各部の定員を四十名と定め、本部に副組頭一本部長一、喇叭班五名、傳令五名を置き、本部付消防手は各部より二名宛を選拔して之に充てた、現在施設の主なるものは自動車喞筒一、オートバイ喞筒三、瓦斯倫喞筒二を常備とし、ガソリン喞筒一、腕用喞筒三の豫備を有し、貯水池二十三ありて消防水利に遺憾なく、鐵骨火之見櫓三、木造火之見四がある。

甲種金馬簾一條と乙種金馬簾一條とは紀律訓練の優秀と無火災を示し、組員は水火災の警防に一層の力を致すと共に、海難救助にも獻心的活躍を續けて功勞大なるものがある。

上野村消防組　大正十年、大字植野に組頭一部長一小頭二消防手六十六名より成る上野村消防組が設置せられ器具は從來植野にあつた私設消防組のものを襲用した、元來上野村には大字植野を初めとし一區又は二區區併合し村內十三の各字に頭取一、副頭取一、小頭三、副小頭三を役員とし、消防手は其の人員を定めざるも强壯なる男子を義務的に出動せしむる私設消防組があつて、植野の如きは器具の改善に留意し大正五年には新式腕用喞筒を購入した程である、而して植野に公設消防組設置後も其の他の私設消防組は存續し來りたるが、今や組頭渡邊嘉助氏等の努力により全村消防統一の氣運熟し、近く名實備はる上野村消防組は大成を見るであらう。

豐濱村消防組　明治四十三年四月十三日の設置で、四部制組頭一部長四小頭八消防手三〇七總員三二〇名により組織せられ、吉田豐作氏を組頭とした、其の後昭和九年組織を變更し、第一、第二、第三の各部を部長以下五〇名、第四部六十五名に減員し、總員二一六名となつた使用喞筒は大正十三年第四部に二〇馬力瓦斯倫喞筒一臺を配備し、次いで一〇馬力瓦斯倫喞筒三臺を購入して第一、第二、第三部各部に一臺宛を配屬せしめ、貯水池二六、火之見四を配備し、高丘に火災ある場合は二〇馬力喞筒により海岸大タンクより送水し、其他の喞筒が消火に當る仕組となつて居る、本村消防組も海難救助に偉功が少くない。

○千葉縣鶴舞警察署管內

內田村消防組　大正十二年の設置であつて組頭一、部長一、小頭一、總員五十一名によつて組織せられ、小出芳久氏之れが組頭であつた、元來本村は十二部落より成る山間の僻村で、家屋は點々として散在し且つ道路惡しく、若し組員を全村に求むれば非常時集合に機敏を缺き消防の目的に添はす、止むなく村の中心なる宿に一組を設置したるもので、各部落の警備には最も苦心の存する所であり、消防組の發達の遲々たるも交通不便より來るものといふべきである、現組頭小出喜平治初め組員一同困難と戰ひ、惡路に阻まれ、尙孜々として組の改善災害の豫防に精進するは以て多とせねばならぬ、宿以外の十一部落には夫々私設消防組があつて、區長を以て指揮者とし警備に當つて居るが、火災少きと養考川の支流井戸川村の中央を貫流し水利よく、近年大火なく一般消防に對し大なる關心を有せざるが如くであるが、消防智識の普及はやがて全村消防統一の時が來るであらう。

高瀧村消防組　大正十四年の設置で四部制百七十三名より成る、各部の使用喞筒は腕用であるが、手入保存よ

く行き屆き相當の成績を示して居る、養老川は本村を貫流するも河底非常に低く火防用として利用出來ず、水利極めて惡しきを以て貯水池の必要を感じながら、豫算の關係上未だ設置せられず、最近之れに對し輿論の大なるものがある、現在組頭征矢賢一氏其他幹部諸氏の不斷の努力はやがて施設の整備となりて現はるべく、其の日の速かならんことを期して待つ。

牛久町消防組　明治四十三年の設置で三部より成り、各部に腕用喞筒が配備せられたが、第一部と第三部とに瓦斯倫喞筒一臺宛が配備せられ、機械器具はよく整備せられて居る、火之見櫓は高臺に一基建設せられ、全町に警報を傳ふるに便し、灌漑用電力揚水喞筒あり水利は概して良好にして未だ貯水池の設備を見ぬ、歴代組頭初め組員上下協力一致組員の向上施設の改善を圖ると共に、火災の警防に努め、明治三十年以來殆ど大火を見ず、殊に近時著しき發展を示し昭和十年甲種金馬簾一條の使用が允許せられた。

戸田村消防組　昭和三年十二月七部制の戸田村消防組は設置せられ、關根菊氏を組頭に推した、乍去交通の便惡しさ山村のことゝて、機械器具の如き極めて幼稚なる舊式腕用喞筒を使用し、水利惡しきも貯水池等の設置なく、其の發達は全く將來に囑されて居る。

平三村消防組　大正十一年二月二十三日の設置にかゝり、五部制總員二八六名で竹下亮藏氏組頭として之を統帥した、大正十四年十二月消防手を二四九名に減員し、昭和八年十月十八日六部制に編成替をなすと共に、副組頭を置き部長一小頭二名を增員したが、消防手は以對に二二四名に減員した、施設の主なるものは腕用喞筒六、火之見六、貯水池各部平均三ヶ所があり、消防水利は平藏川の利用により概して良好である。

初代組頭竹下亮藏氏より歴代の組頭初め幹部諸氏の努力と、組員の勉勵とは遂に酬ひられ、甲種金馬簾一條は陣頭に輝いて居る。

里見村消防組　昭和七年三月の設置にかゝり、四部制にて外に救護班あり、組頭一、副組頭一、救護班長一、部長四、小頭八、消防手一五〇計一六五名によつて組織せられ、平野馨氏を組頭として居る。

當組は名は里見村消防組であるが、村内八區の中第一部飯給、第二部德氏、第三部田淵、第四部柿木臺であり他の四區は未公設である、他四區も町當局及び平野組頭の斡旋により漸く公設消防組設置の氣運に向つたといへば里見村消防組の大成も近き將來にあるであらう。

○千葉縣久留里警察署管内

馬來田村消防組　大正二年十二月八部制の馬來田村消防組は設置せられ、佐久間金衛氏組頭となり草創の事業に盡瘁せられ、次て東治三郎氏就任昭和八年六月まで組の向上發展に努力し、東氏死去後野村惠一郎氏組頭就任と同時に副組頭を置く、喞筒は各部に一臺宛の腕用喞筒が配備せられ、火之見亦各部に建設せられて居る、水利は山間谷合の關係上低地は概して便利なるも、高臺は水源乏しく貯水池の必要あり、昭和九年度に於て枠内にて最も人家稠密せる馬來田驛前に二個を築造したるを初め明吹孫の台其の他に築造すべく、繼續事業として毎年百五十圓の貯水池築造豫算が計上され、着々として其の完成に向つて進んで居る。

松丘村消防組　大正五年十二月二十六日、十二部制六三七名の松丘村消防組は設置せられ矢島源之助氏を以て組頭とした、後昭和六年五月組織を變更して六部制とし副組頭を置き、別に救護班を設置し、總員四百三十七名となつた、喞筒は新式のもの三臺、他の三臺は稍舊式に屬するがよく整備せられ、樞要の地點に貯水池を設け水利圖を作成して各員に配備し、水利々用の萬全を期して居る、火之見は各部は一基宛建設せらるゝ外、組頭矢島源之助氏を初め有志が私財を投じて建設したるもの參拾四の多きを數ふるは一異彩である。

本村に奥山官林と稱する四千町歩の國有林あり、始ど毎年山火事ありて其の都度組員は消防に必死の努力をなすのでめるが、爲めに本枠に對し若干の交附金がある、或る時直接組頭に其の交附金が下渡されたるにより、之れを基金として火防映畫を開催し、一般に火防宣傳をなしたるは美擧といふべし。

富岡村消防組　大正八年七月三部制百五十名の富岡村消防組は生れ、松崎九郎平氏を組頭に推した、而して五年を經た大正十三年三月第四部が增設され、昭和四年二月には本部及救護班が新設されて統制に一新期を劃し、昭和五年四月第五部が設置せられ、越えて昭和七年十二月第六第七の二部が生れ、之れと同時に各部の組員數が整理せられて組頭以下三七四名となり、翌八年七月第八部が增設せられ總員四一九名となり茲に全村消防統一は大成された。現在使用喞筒は第一部に瓦斯倫喞筒一臺、其の他の各部にば腕用喞筒一臺宛が配備せられ、貯水池は個人私有のものを合して百四十を越え、内コンクリート造のもの四十がある、火之見は鐵骨櫓一基の外に木造七基を有して居る。

本村は小櫃川流域に沿ひ第一第二第三の三部は水害防禦に偉功少からず、殊に第一部が光つて居る。

甲種金馬簾二條は組の榮譽に輝いて居る。

久留里町消防組　明治三十五年六月、二部組頭以下八十二名より成る久留里町消防組は設置せられたが、此消防組は全町統一のものではなく僅に市場區上町中町を第一部とし、下町新町を第二部としたに過ぎなかつた、かくて伊藤常吉、吉崎紋造、杉浦龜吉、佐治利右衛門、渡邊清造小川正吉の諸氏を組頭に迎え、更に藤平金吾氏組頭に就任の後、昭和八年十二月第三部を浦田、第四部を向郷に增設し四部百八十三名となつたが、尙未公設區を殘し、今や全町統一に一層の努力が向けられ、近き將來に於て實現するであらう。

是より先き大正元年救護班が設けられ、昭和三年瓦斯倫喞筒購入と同時に、第一部第二部より消防手各十名を選拔し、之れが操縱に當らしめた、此瓦斯倫喞筒一臺の外各部に腕用喞筒一臺宛が配備せられ、火之見五基があり水利は貯水池の外に水道さりて完備されて居る。

○千葉縣北條警察署管內

保田町消防組　明治三十一年十月十四日公設消防組認可あり、同三十四年六月六部制を布き石井專助氏組頭に就任、大正十五年七月オートバイ部を新設したるも昭和二年四月之を廢して組織を變更し、同年十月第七部を增設總員五三〇に改め、翌三年十月本部並に救護班を配備し總員を四五三名に改め、五年九月喇叭班を組織して本部に屬せしめ、七年四月第七部を廢して第六部に合併して今日に及び、其の間笹生楠太郎、早川儀之助、福原治一、關口二郎の諸氏を經て川崎米吉氏組頭となる、喞筒は大正十五年オートバイ喞筒を、昭和三年に第一部に瓦斯倫喞筒を、昭和四年には第三及第五の二部に瓦斯倫喞筒を、而して昭和七年には第六部に自動車喞筒を配備し現在二五馬力自動車喞筒一、二〇馬力瓦斯倫喞筒三、腕用喞筒二を有し、貯水池四十三ケ所、川堰止用水九の外に、野々倉及び江尻谷の耕地用大溜池は、非常に際し柵口を撤すれば十分乃至十五分にして町中に放水し得るのである。

甲種金馬簾四條は紀律訓練の優秀にして功績顯著なるを示し組の名譽を彰して居る。

神戸村消防組　大正三年神戸村聯合消防組を組織して消防の向上改善に努め來つた神戸村にては、大正十二年七月公設消防組設置の認可を得九部制の神戸村消防組は設置せられ、土橋角之助氏組頭に就任、昭和二年十二月副組頭を置き組頭を補佐せしむることゝなつた、昭和五年二月土橋組頭辭任し小澤熊次郎氏推されて組頭となり同時に副組頭の更迭があつた、組の創設當初の機械器具は私設時代のものを用ひたが其の後着々改善せられ、昭和三年喞筒は全部新式のものが整備せられ、其の他の器具服裝共に改善せられた。

富崎町消防組　明治四十四年の設置にかゝり、二部制にて組頭以下百十六名によつて組織せらる、創設當時は私設消防時代の器具を使用したるも漸次改善せられた。

當町には明治三十三年に七十戸、同四十二年に百三十八戸、同四十五年に百三十戸、等の大火あり、其の慘害の教訓により町當局及消防組は連絡を密にし、竈檢査警邏夜警を勵行し、消防組の考案になる用水罐三個を每戸に用意し、每月一回消防組員之れを檢する等、警戒怠りなく、一面一般の防火思想の普及を期し、遂に火災を克服し無火災の最高峰に達し、乙種金馬簾二條を得たるは偉とすべく、海難救助の功亦大なるものがある。

館山消防組　明治二十七年三部制の公設消防組は設置せられ、同四十二年第四部を增設し、大正四年豐津村と合併し六部編成となとし昭和元年二十五馬力瓦斯倫喞筒一臺を購入したるを初め、昭和七年更に之を增置し昭和六年より貯水池の設置に着手し動力喞筒用約五十を完成し、甲種金馬簾三條の使用を得て其の優秀を誇りたるが後館山町と北條町との聯合によつて北條町消防組を併せて愈其の整備に努め、昭和十年更に甲種金馬簾一條を得たのである。

西岬村消防組　大正十五年五月六部制の公設消防組の設置を見たが、是より先き各部落に設置せられた私設消防組は聯合し、會長、副會長を推薦して全村消防の統制を圖り、公設消防組亦此聯合會に基調を置いて組織せられたので、其の後組織の改變は行はれず今日に及ふ、施設に就ては喞筒は漸次改善せられて龍吐水は腕用喞筒となり、現在にては新式腕用喞筒一臺宛各部に配備せられ貯水池亦各部に二個所が設備せられて居る。

水難救助の功により數次の表彰を受けて居ることは、海岸にある當村消防組として當然ではあるが、其の功は大である。

豐房村消防組　昭和六年の設置にかゝり十部より成り機械器具は私設消防組時代のものが使用せられて居る、公設消防組設置以前の當村消防施設は、各部落每に消防組あり、其の各組が聯合して組長及び副組長を置き、鋭意消防の改善に竭し、消防機械器具の如きも改善せられ腕用喞筒一〇臺を有したのである、公設消防組設置後水利の整備に意を用ひ、現在にては貯水池の數三千に及んで居る。

岸井町消防組　明治四十五年公設となり七部制を布き施設の改善組員の技能進步に努力し、後本部及救護班を新設して陣容を新たにし、喞筒七臺の外火之見鐵骨二本

造三を有し、貯水池六十四個の中大なるは五間七間のものあり、小なるも九尺角である。

昭和八年十二月二十四日午前一時頃、組頭沼田清一郎氏夜警狀態巡視中久枝海岸に難破船あるを知り、直ちに組員を召集して暴風雨を冒し怒濤と闘ひ、十八名の乘組員を救助した美談あり、甲種金馬簾二條は紀律訓練の優秀施設の整備並に顯著なる成績を物語つて居る。

○千葉縣千倉警察署管内

千倉消防組　明治二十七年六月時の千倉町長建部丑之助氏の盡力によつて設置せられ、爾來六代の組頭を經て今日に及び、現在組織は本部の外八部編成にして救護班は本部に屬し、機械器具の改善整備よく行はれ、動力喞筒六、腕用喞筒二、貯水池の如き大は四千七百石、小は百石のもの五十二個所、貯水池間は水管を以て連絡し、又川尻川堰止めを設け水利の完全を期し、火之見は鐵骨六、木造五あり、紀律訓練の優秀にして功績の顯著なるは、甲種金馬簾四條を有するを以て知るべく、千倉博愛會を組織して社會公共のため奉仕を續けつゝあるは、當組の特異とする所である。

白濱町消防組　明治四十五年四月八部制の公設消防組は設置され、大正四年第九部を增設、大正十四年消防手を增員し總員六百九十三名とし、翌十五年二月副組頭一名を置き、動力喞筒の增置により組員を整理し、現在三九三とす。機械器具は大正五年オートバイ喞筒一臺を購入し更に昭和六年十一月十六馬力瓦斯倫喞筒一臺を第八部に配備し、貯水池は昭和三年一月以降各部に築造し、殊に昭和御大典記念事業として小學校々庭に深九尺面積六十坪の貯水池を設け、地勢家屋分布貯水池配置圖を各員に配布して非常に備へ、役場構内の鐵骨火之見櫓の外要所に火之見梯子九基が設置されて居る。甲種金馬簾二條及び消防聯合會よりの數次の表彰は、水火災害警防の功績と水難救助の功勞を有力に物語つて居る。

豊田村消防組　大正十五年三月二十一日、村内各部落の私設消防組を統一し五部編成の公設消防組に設置せられ、鵜山喜一郎氏組頭に川上良輔氏副組頭に就任し、總員三百六十九名によつて組織せられた、昭和八年十二月本部を設けて新に本部長一傳令二を置くと共に組員を整理し、組頭以下二百八十六名に組織を變更して現在に及ぶ、喞筒は各部に腕用喞筒一臺宛を配備し、水利は灌漑用大溜池村内六ケ所にあり又小川數流ありて概して良好なるも、防火專用貯水池百五十石位のもの八十六個所に築造して萬遺憾なきを期し、火之見は鐵骨一、木造八あり組員上下一致協力し災害の警防に專念し甲種金馬簾一

條の使用を允許せられた。

和田町消防組　明治四十二年五月の設置にかゝり、庄司松壽氏組頭となり總員三二七名によつて組織された、大正十五年組員の整理を行ひ、翌昭和二年副組頭を置き陣容を新にした、創設當初は器具は極めて幼稚であつたが、明治四十三年第四部に腕用喞筒を配備したる以來改善行はれ、昭和四年に至り瓦斯倫喞筒二臺が購入されて第一第三の兩部に配備され、新鋭を加へた、防火用水第二部を貫通し第三第四兩部は灌漑用水利用の便あり、其の他各部要所に百五十石乃至四百石の貯水池三十二個所あり、火之見櫓は各部に一基宛が建設されて居る、外觀の華を避けて内容の充實を計り、消防精神の作興と警火思想の普及に努め、甲種金馬簾一條乙種金馬簾二條の使用が允許された。

健田村消防組　明治初年より消防に留意し、明治二十年には五組の消防組を組織し火係、水係、機械係、等の職制を定めて非常に備えし健田村にては、明治二十七年消防組規則の制定後間も無く五部制の公設消防組を設置し、大正七年組頭以下二百八十名に減員し、昭和元年副組頭制を布きて今日に及び、創設以來機械器具の整備改善に努め、灌漑用大溜池及小川により水利は概して良好なるも、尙要所に七十石乃至二百石入火防專用貯水池二十數ケ所が特設されて居る。

甲種金馬簾一條は組の榮譽を代表して輝いて居る。

北三原村消防組　大正十四年十二月二年四日村内各私設消防組を統一し四部制總員三百二十名よりなる公設消防組は設置せられ、後昭和八年七月本部を新設して統制を新にした。當村は消防水利極めて惡しく、眞田組頭の就任後熱心に貯水池の築造に盡力し、年々一ケ部に二ケ所宛の貯水池築造の案を立て、百八十石入のもの四十九個を算し、年と共に其の數を增加しつゝあるが、組頭以下全員が出動手當其の他の一切を、貯水池築造費に充てつゝあるは偉となすべきである。

かく施設の改善を計ると共に災害の警防及防火思想の普及徹底を期した組員の努力は、甲種金馬簾及び乙種金馬簾一條となつて之れに酬ひられたのである。

丸村消防組　大正十五年三月の公設であつて、七部制組頭以下三百二十九名により組織せられた、其の後組織變更のことなくして昭和九年四月本部を置き統制を新にし、總員三百三十六名となつた、喞筒は創設當時は私設消防時代のものを使用し來たが、其後着々として改善され古きものは豫備として各部に保管し萬一に處し、消防水利は交通不便なる谷間を利用し堰堤を築造し溜を作りて消防水源とし、或は河川を利用するの外、三百石入貯

水池六十三個を設け、火之見は鐵骨二基木造六基が建設されて居る。

甲種金馬簾一條は昭和九年其の使用を允許せられ組に光輝を添へて居る。

南三原村消防組　大正四月四月一日公設消防組の設置により、從來封建制度の觀を呈した私設消防組は統一せられ、全村を分ちて五部とし本部を置きて統制を嚴にし且つ救護班を設け形式を整へ、內容を充實した、然し其の施設に至りては經濟關係等より未だ理想の實現には達しないか、二五馬力瓦斯倫喞筒一臺、新式腕用喞筒五臺貯水池五十三、火之見櫓鐵骨六、木造一を有し、農村としては決して遜色なく、實狀に即したる優秀のものである、組員の訓練に關しては消防精神の振興に重きを置き幹部演習と防空演習は其の特色である、平時に於ては巡檢査夜警に力を致して災害の豫防に努め、又警火思想の普及徹底を期し、消防本來の目的達成に邁進し居るのである。

金馬簾三條、それは村當局及組員の一致協力の努力に酬ゆるの榮譽であり光榮である。

○千葉縣鴨川警察署管內

天津町消防組　明治三十二年二月二十五日の設置にかゝり、當初は三部制にて組頭以下五十一名であつたが、大正十五年六月第四部及第五部の二部增設と共に本部を新設し、副組頭を置きて統制を新にし、組員總數二百十八名とし、更に昭和八年救護班を設け總員二百二十一名に組織を變更して現在に及ぶ、喞筒は大正十四年七月十六馬力瓦斯倫喞筒一臺を購入したるを初め、都合六臺の瓦斯倫喞筒を有し、之れが水源としては芝町にて每戶二錢宛の日掛を蓄積して得たる二千五百八圓と、芝町漁業組合員の寄附金四十圓に、役場よりの補助金二十圓を以て大貯水池を設け、之より水路五線を町內に派出し百石乃至三百石入貯水池二十五個に連絡せしめ、非常に際しては栓の開閉により適量の水を供給する仕組で、極めて優れたる設計である、火之見は第四部の高五十四尺のものを初め鐵骨四、木造二基がある。

甲種金馬簾三條及び乙種金馬簾一條は、紀律訓練の優秀、施設の整備、及び功績の顯著を彰して光輝を放つて居る。

鴨川町消防組　鴨川町消防組も千葉縣下に於て最も古き歷史を有する公設消防組の一つであつて、明治二十七年六月二十六日の設置にかゝり、設置當時は四部制組頭以下百七十三名であつた、明治四十四年從來第四部に屬したる大浦區に第五部を設け、昭和六年本部を新設し、

本部には傳令救護庶務の諸掛を置き今日に及んで居る、現在施設の主なるものは喞筒は瓦斯倫喞筒四臺、腕用喞筒一臺で、其の水利は町の中央を貫流する加茂川があるが、最大六百石入最小五十石入の貯水池二十八個を要所に設けて遺憾なきを期し、火之見は各部共鐵骨塔一基づゝが建設されて居る。

金馬簾は甲種二條乙種一條を有し、紀律訓練の優秀施設の整備を語ると共に、災害警防の努力の偉なるを示して居る。

江見町消防組　明治三十三年鎌田熊次郎氏を頭取として二部百二十六名より成る私設消防組を組織し、喞筒二臺を之に配備し設備訓練共に公設消防組に優るとも劣らなかつた江見町にては、明治四十四年四月之を公設消防組に改編し、大正十四年從來の第一部中東區を分離して第三部を新設して三部制とし、昭和四年には第二部の北區に第四部を設け、翌五年副組頭を置きて現在に及んで居る、喞筒は腕用喞筒一臺を各部に配備したるも、昭和七年瓦斯倫喞筒一臺を購入して第三部に配屬せしめた、消防水利は第二部には灌漑用大溜池三ヶ所より水路を派し要所に溜を設け、第四部は洲貝川流域で河水利用の便あるも、川名組頭時代大正十年より每年五十圓を以て繼續して貯水池を新設するの計畫を立て今日に及び、既に百石乃至百五十石貯水池二十ヶ所は完備せられ、其の何れもが湧水にて如何なる時にも涸渴せずといはれ、尙ほ續々增設されつゝあるのである、火之見は各部共に鐵塔が建設されて居る、全町民の消防に對する理解は施設の改善となり、警火思想の普及となつて現れ居るは當組の特色で、金馬簾は甲種乙種共に一條を有して居る。

會呂村消防組　昭和二年、五部制組頭以下二百三十三名よりなる公設消防組は設置せられ、後本部を設け副組頭を置きて統制を新たにし、救護班を新設して玆に形體を整へたのである、使用器具は初め私設消防組時代のものを使用し、漸次改善し手入及保存法大いに見るべきものがある、鈴木源氏、鈴木利一氏、和泉隆二氏の歷代組頭初め幹部諸氏の向上發展に努め、組員又其の意を體し上下協力技能の進步と災害の警防に竭し、警火思想の普及に力めたる結果、甲種金馬簾一條を得た。

田原村消防組　田原村には五部の私設消防組がめつたが、公設消防組設置の必要に漸進主義を採り、大正十四年度に於て村費百五十圓を支出して私設消防組の機械器具の改善を行ひ、聯合演習を擧行する等公設消防組設置の機運を促進し、大正十五年一月の村會に於て公設消防設置を決議し、同年二月十日千葉縣知事の認可を得、玆に五部制二百一名よりなる當組の成立を見たのである。

昭和三年七月副組頭及本部を新設して統制の萬全を期し救護班を設けて能力の發揮に資し、總員三百三十名に改編した、喞筒は各部の腕用喞筒の改善を圖ると共に、昭和四年五月第五部に二十馬力瓦斯倫喞筒一臺を配備した昭和二年五月役場庭前及新校舍側へ八十石入コンクリート貯水池各一個築造に際しては、組員全部平均一日の勞力奉仕をなして之を完成し、昭和四年御大典記念事業として六十石乃至百二十石入貯水池二十個が組員の手によつて建設され、火之見は昭和六年九月村役場前に四十二尺鐵骨火之見一基が建設せられた。

甲種金馬簾二條は組員一致協力の賜として榮光に輝て居る。

主基村消防組　大正十五年二月四日、各字に配備しありたる私設消防組會長を召集し、公設消防組設置の理由を說き、私設消防組解散と公設消防組設置の議を諮り、滿場異議なく可決し、同月十三日縣知事の設置認可ありて主基村消防組は設置された、其の組織は四部制で組頭以下二百四十一名で、川名傳氏組頭に就任したのである降つて昭和四年一月副組頭を置くと共に本部を設け、之れに救護班を屬せしめた。喞筒は各部に一臺を配備し、一臺を豫備とし、水利は各要所に貯水池を設け、西川部落にては動力により川より直接揚水する施が施されてある

小湊町消防組　明治四十二年四月二十四日の設置にかゝり、二部制組頭以下一一四名により組織された、降つて大正十五年二月第三部を增設し、昭和四年一月副組頭を置き、同年二月十八名より成る第四部を新設し之れに自動車喞筒を配備した。

喞筒は大正三年腕用喞筒購入に改善の端を發し、大正十五年二〇馬力瓦斯倫喞筒を購入して新設第三部に配備し、昭和六年自動車喞筒の講入に次で昭和六年二月及び翌七年二月の二回に瓦斯倫喞筒二臺を購入し、第一部及第二部に配備し、水利に關しては貯水池六個所川堰二個所あり、海水利用のため消防組用海路五線が特設されて居る。

金馬簾甲種二條が紀律訓練の優秀施設の完備並に顯著なる功績を物語つて居る。

西條村消防組　昭和二年四月の設置で四部より成り、組頭一、副組頭一、部長四、小頭八、消防手一八八總員二百二名であつたが、昭和八年四月第三部にて瓦斯倫喞筒の購入と共に其定員を減し組頭以下百九十二名とし、昭和九年四月本部を新設し本部長一名小頭一名を增員した、當組に組頭たりしは野村錠太郎、近藤清治、鳥海完の諸氏で、小倉要藏氏現に組頭の職にあり、上下一致協力紀律の肅正施設の改善に努め、災害の警防警火思想の普及に竭し、金馬簾甲種一條は其の努力を物語つてゐる

○千葉縣旭町警察署管內

旭町消防組　大正八年の設置で當初四部制であつたが人正十二年七部制とし、更に昭和六年十三部制とした、之より先き昭和二年二月副組頭制を布き、翌三年十二月本部を設置して統制を嚴にした。大正十二年十月第二部に森田式十四馬力瓦斯倫喞筒を配備したるを初めとし、昭和二年一月第五部に同式二〇馬力、同年二月第十三部一五馬力、同三年第一部に二五馬力、同五年第四部に一に八馬力次いで第五、第六の兩部にも夫々瓦斯倫喞筒を購入し、更に本部にB型三輪自動車喞筒を配置し、地上三尺は石材地下七尺コンクリート造防火專用大貯水池以下百四十七個所が特設せられ、釣堀六ケ所(四千石)利用の便がある。

昭和五年少年火防宣傳隊を組織し一般警火思想の普及に努め業績極めて大であり、甲種金馬簾三條は組の紀律訓練の優秀と施設の完備及び顯著なる功績を彰して居る

○栃木縣宇都宮警察署管內

宇都宮市消防組　明治二十七年以前は町火消と稱し各町協議會に依り組織せられしを、消防組規則發布と共に市內を九部に分ち、組頭一名、各部に部長一名小頭二名消防手三十五名乃至四十名を以て組織し、其經費は總て公費支辨に改め、明治四十二年には九部制を十部制とし爾來器具の改善水道の完備等に依り屢其組織を變更し、大正十二年四月常備消防部の設置と共に組員數三四八名を二五十名とし、外に常備十名の組織に改め、尙大正十五年常備消防手を十六名、昭和四年十八名に增員、各部定員を消防手二十名乃至二十五名とし、副組頭を置き、組員二百五十二名に組織を變更した。喞筒は明治四十一年蒸汽喞筒一臺を購入以來大正四年蒸汽喞筒一臺を增置し、同六年水道完成と共に第二部及第八部の腕用喞筒を廢して水管車を配屬し、大正十二年自勵車喞筒一臺及水管自動車一臺を購入し、更に大正十四年八月自動車喞筒一臺と瓦斯倫喞筒二臺とを新規購入し、同九月には水管自動車に喞筒を取付くる等、漸次機械喞筒を增加し、現在にては自動車喞筒四、水管自動車一、瓦斯倫喞筒二、蒸汽喞筒二、水管車八を有し、水道消火栓は二丁毎に設置され其の數四百六十三個私設水道消火栓百八十四個で河川利用は田川に自動車使用二十個所、釜川に同じく二十二ケ所、新川に同じく二十五ケ所を設置し、他に求食川あり、水門數ケ所を設け、將來市內に非常水を疏通せしむる計畫あり、火之見九個所の外に、常備部に全市を

一望に收むる大見張臺ありて四六時中消防員之れに登りて見張し、警火に力めて居る。

施設は改善せられ組員の紀律訓練の優秀なるにより優良消防組として旗冠及び金線一條を授與せらるゝ榮譽を得て居る。

横川村消防組　公設以前い消防施設は之を詳にすることを得ざるも、各字並に有力者宅に龍吐水を備へ、一朝有事の際は區長指揮の下に近隣相馳せ付けて隣保の誠を致し消火に努めた、明治二十七年消防組規則發布と共に八部制の横川村消防組は設置せられ、組頭以下三百三十名腕用喞筒八臺を以て消防に當り、大正六年第九部を更に第十部を增置し、現在組頭以下五百五十五名よりなる其の間組頭五人副組頭四人の更迭あり、現組頭は大塚吉右衛門氏で副組頭を缺いで居る、喞筒は瓦斯倫喞筒一臺腕用喞筒十五臺を有し、第三部は高台にて水利惡しきため二十五石入貯水池を設け、火之見十六基を村内要所に建設し、内一基は殊に大規模で以て村内火災の報知に便ならしめてある。

横川村には互助救護會あり、會員は村内の一戸一人以上を強制的會員とし、村長を會長消防組頭を副會長とし各區長及消防部長を理事とし、火災に遭遇せるものあれば理事會に於て火災の損害程度に應じ見舞金額及各會員の負擔額を決定し、罹災者に見舞金を贈呈し、一面警火思想の普及に努めて居る。

大正七年滿二ケ年無火災表彰を受けた。

瑞穗野村消防組　瑞穗野村は鬼怒川の沿岸に位置し古來水害を蒙ること多く、村民協力部署を定めて水防の事に從ひ、火災に際しても統制ある組織の下に災害防止に當ること、公設消防に異ならなかつた、明治二十七年消防組規則の發布と共に七部制、組頭一名、部長十名、小頭四五名、消防手三八〇名の公設消防組は設置せられ、腕用喞筒一と龍吐水を使用し、火災よりも寧ろ水防に重きを置いて活勤し、翌二十八年第二部を別ちて第八部を增設し、現在組頭一名、部長八名小頭四十九名、消防手四百三名によつて組織せられ、機械器具は改善せられ、龍吐水は腕用喞筒となり、瓦斯倫喞筒一臺が設備されて居る、創設以來組頭更迭八代、現組頭增淵平右衛門氏は昭和二年以來其職にあつて組の改善に努力しつゝあり。

昭和二年に第八部、同六年第七部、は共に滿三十年無火災なるにより縣消防義會より賞狀を受く。

雀宮村消防組　本村の雀宮宿は古くより奥州街道の一要宿として繁榮し、德川時代既に鳶職ありて消防の事に當り、明治九年　明治大帝東北御巡幸の際火消は御警備及防火の任に當るの光榮に浴した歴史を有し、明治二十七年消防組規則の發布せらるゝや全村十部落に各一部を置き十部制組頭以下四百三十一名の公設消防組は設置せられ現在組頭一名、副組頭一名、部長一〇名、小頭五〇名消防手三百五十三名よりなる。往時現今の第一部なる雀宮宿は消防發達したるも其の他に於ては龍吐水さえ備付けられざりしも、現今は各部一臺の腕用喞筒を有し、組員一人の受持平均戸數は　一・六の割合を示して居る。

平石村消防組　明治二十七年六月四日公設消防組設置當時は六部制なりしも、同三十六年十一月大字峯に第七部を設置し、其の後人口及戸數の增加に伴ひ全部を通じて組織を改めて十三部制とし、更に大字石井の内大島坪は不便なる地とて、特に一部を設け十四部制に改め、組頭以下五百七十一名により組織せられて居る。喞筒は瓦斯倫喞筒一、腕用喞筒十三を有し、創設以來組頭の更迭十代、福島武宣氏は昭和三年四月組頭就任以來其の職にあり、之を補佐するに大正十五年九月就任の副組頭竹村松男氏がある。

明治四十二年陸軍特別大演習の際の警備、同四十三年縣下大洪水に際し水害防禦及救護の功により、何れも縣知事より表彰を受け昭和五年十一月名譽の旗冠を授與された。

本村大字上越戸新田は他字を距るゝこと遠く然も戸數僅かに十一戸にして消防組一部を設くること能はず、因つて大正四年十二月火災豫防組合を設置し、組長一名、副組頭一名、幹事一名、組合員七名、一致團結して災害の豫防に努め良好なる成績を示して居る。

絹島村消防組　明治二十七年三部制の公設消防組は設置せられ、其の後第三部を二分して第四部を、第二部を二分して第五部を、而して更に第三部を分ちて第六部を新設し、現在六部制組頭以下三百十六名より成り、創設當初は現在の第三部及第四部に相當する部に腕用喞筒一台を有し、他は龍吐水を使用したるも、漸次改善せられ殊に大中坪の火災に氏家町及上阿久津消防組が瓦斯倫喞筒を携へて來援し、自組の腕用喞筒にて防火し得ざりし猛火を直に征服したるに鑑み、第三部に瓦斯倫喞筒購入したるを始め、現在瓦斯倫喞筒二台、腕用喞筒四台が設備せられて居る、組頭の更迭は創設以來六氏にして、江連良德氏は現組頭であり之を補佐するに副組頭鈴木慶一郎氏がある。昭和八年滿二ケ年無火災表彰を受け、翌九年優良消防組として旗冠を授與せらるゝの名譽を擔ふ。

姿川村消防組　明治二十七年七月一日公設となり八部制組頭以下三七四名により組織せられたが、大正元年組織を變更し組頭一名、部長八名、小頭三二名、消防手三五一名計三九二名となし、更に昭和二年副組頭一名を置

き總員三九三名となる、喞筒は現在瓦斯倫喞筒一台腕用七台にして、第八部(鶴田)には相當大なる貯水池を設け其の他の器具及施設大いに改善せられ、殊に第三部にては大谷石造灰置場を各戸に備へ以て失火を少なからしめんとしたるは、當を得たる施設といはねばならぬ、初代組頭坪山平八郎氏の十ケ年、四代組頭荒川淺藏氏の六ケ年、七代組頭加藤要助氏の五ケ年五ケ月を除きては、長きも四ケ年短きは半年にして組頭更迭し、代を重ねる十三代なるは、他に多くの類例を見ず、副組頭亦昭和二年以來既に五代である。

昭和四年警察表彰を受け、翌五年優良消防組として旗冠を授與せられ、第五部は滿二十三ケ年間無火災の故を以て表彰せられた。

古里村消防組　奥州街道の一宿なる本村の白澤宿には古より火消組があつた、而して消防組規則の發布と同時に七部制組頭以下四百名より成る公設消防組が設置されたが、其の創設當時は白澤部落に腕用喞筒ありたるのみにて、其の他は龍吐水を用ふるに過ぎなかつた、其の後何等の改善なくして昭和四年に至り組織を十三部とし、現在勢力は組頭一名、副組頭一名、部長十三名、小頭四〇名、消防手四二三名である、施設の主なるものは瓦斯倫喞筒三、腕用喞筒一〇、鐵骨火之見四基、昭和御大典紀念事業として築造せる南北兩小學校庭の百五十石入貯水池、及び皇太子殿下御降誕紀念事業なる各部の石造灰置場の完成である、組頭は代を重ねること九代副組頭三代である。昭和三年六月優良消防組として旗冠を授與せられ、同四年十月滿二ケ年無火災に依り栃木縣消防義會宇都宮支部より優秀旗を受け、第七部は滿四十年間無火災の記錄を有し優秀旗を授與せられた。

豐郷村消防組　消防組規則に基き村一圓を統一して設置された、當初は八部制組頭以下三二五名より成り、各部に腕用喞筒一台宛を新調し當時にあつては相當完璧のものであつた、其の後第二部の海道新田と分離して第九部を設け、大正十四年第一部の今泉新田を分離して第十部とし、現在にては十部制正副組頭以下總員四〇三名で瓦斯倫喞筒一台、腕用喞筒九臺を有し、昭和三年御大典紀念事業として役場敷地内に村内を一眸に收むる鐵骨大火之見櫓と各部に一基宛の火之見を建設して警防に便した、消防水利は東部に山田川御用堀西部に田川の貫流するあり、其の他灌漑用水路縱横にありて便利である、初代組頭木村佐與氏より現組頭半田喜太郎氏に到る五代の組頭及副組頭六代の諸氏を初め、幹部組員上下協力一致努力の結果、昭和十年五月旗冠を授與せられ優良消防組として表彰せられた。

田原村消防組　明治二十七年十月二部百一名の公設消防組は設置されたが、當時の田原村消防組は名のみであつて消防器具はバケツ手桶に過ぎなかつた、明治三十年二月六部制に改め、大正五年第七部、大正十一年九月第八部、同十三年第九部を設置し、現在九部制組頭以下三七六名で、副組頭を缺いて居る、明治三十年の組織變更を機とし機械器具の整備行はれ、順次各部共面目を一新し、今日にては各部共腕用喞筒一臺宛配備せらるゝに至つた。初代組頭櫻井仙次郎氏より現組頭木村大吉氏に至る歴代組頭並に幹部諸氏は、組員を督勵して災害の豫防に努め、遂に昭和八年四月縣消防義會宇都宮支部より優秀旗を授與せられ無火災を表彰された。

羽黒村消防組　明治二十七年消防組規則に基き八部制組頭以下四百名を以て組織せられ、大正十三年三月第九部を新設し、大正十五年副組頭を置き、更に部の併合を行ひて、六部制とし、組頭以下四九五名によりて組織せられ、外に消防醫が置かれて居る。機械器具は公設々置と共に整備せられ引き續き改善を怠らず、腕用喞筒九臺が配備せられ、鐵骨火之見四基、木造火之見十四基あり消防用水利は灌漑用水の利用極めて便利である。昭和二年二月優良消防組として旗冠を授與せられ、同年四月宇都宮支部より成績優秀により表彰せられ、同十一月宇都宮署管内一市十三町村聯合點檢に技術優秀に依り表彰を受けた。

國本村消防組　明治二十七年公設せられ八部制が布かれた、其の後戸祭の内柿塚を第九部とし、大正八年第十部及び第十一部を設置し、更に第十二部を新設し現在十二部制正副組頭以下五一一名により組織せられ、喞筒は公設以來數度改善せられ各部に一臺宛の腕用喞筒が配備せられ、消防水源は村内を流るゝ姿川及び各戸の私設用水を以て充たされてゐる。初代組頭半田審一氏より現組頭高橋左京氏に至る歴代の組頭を初め幹部諸氏の努力と組員の一致協力とは組の紀律訓練を優秀ならしめ、成績亦顯著で大正十三年三月縣消防義會より旗冠を授與せられた。

富屋村消防組　創設當時は五部制組頭以下三百名を以て組織せられ、其の後第六部が新設せられ正副組頭以下二九七名より成る。公設となるや一切の機械器具を新調したが、大正十一年第四部に、昭和二年第一部及第五部の二部に瓦斯倫喞筒を配備し、第一、第三及び第六の三部には各一臺の優秀腕用喞筒が配置されてゐるが、此等喞筒の購入費用は何れも有志の寄附によるものである、消防水利は村内に縱横に流るゝ灌漑用水あるも尚ほ火防用貯水池二ケ所を設置して遺憾なきを期し、火之見は各

宇に一基が建設されてゐる。初代組頭以來組頭の更迭八回現組頭相場覺次氏に至る。大正十三年設備訓練優秀なるにより縣消防義會宇都宮支部より優秀旗を授與せられ昭和二年二月縣義會より優良消防組として旗冠を授與せられ、越えて同八年十二月五ケ年無火災により宇都宮支部より表彰せられた。

篠井村消防組　明治二十七年公設せられた篠井村消防組は十二部制であつたが、翌二十八年第三部と第四部との併合を行ひ第五部以下を順次操上げて十一部制とし、昭和三年副組頭を置きて今日に及び、現在十一部制にして正副組頭以下六四七名により組織せられ施設の主なるものは腕用喞筒十一臺を有し、消防水利は鬼怒川及び大谷川の支流と田川あり、之れに灌漑用水の縱横に流るゝありて大なる利便を有して居る。初代組頭阿久津朝吉氏より現組頭和田稻市氏に至る歷代組頭及び幹部諸氏組の向上發展に竭し、組員亦共の意を體して勉勵努力し、昭和三年六月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與せられた。

城山村消防組　城山村消防組も他町村と同じく明治二十七年の創設にかゝり、現在勢力は十六部制で組頭一名副組頭一名、部長十六名、小頭三十名、消防手五五七名によつて組織せられ、組員一人の受持平均戸數三戸に當る其の施設の主なるものは瓦斯倫喞筒一臺、腕用喞筒一五臺にして、歷代組頭及び幹部諸氏の努力は機械器具の整備となり、紀律訓練の優秀となり、組員の勉勵は消防技術を進歩せしめ、災害警防の功勞を顯著ならしめ、昭和八年五月優良消防組として旗冠の授與を受くるの榮譽を得たのである。

○栃木縣足利警察署管內

足利市消防組　元足利町消防組と稱し、明治二十七年五月十日を以て公設され、其の後幾多の變遷を經、大正十年一月一日市制施行により、足利市消防組と改稱、昭和元年常備消防部を設置し消防合理化により人員を整理し、現在組織は五部制にして組頭一名、部長五名、小頭二四名、消防手一六一名計一九一名より成り、中に常備消防手九名、組頭付傳令一名を第一部に屬せしめてある消防施設の改善は最も意を用ひし所で、曩に蒸汽喞筒二臺を設備して機械喞筒使用の端を發し、次で大正九年瓦斯倫喞筒を採用し、大正十五年七月自動車喞筒を購入して常備消防部に配備し、現在にては自動車喞筒二臺、瓦斯倫喞筒五臺を有し、昭和五年水道完成と共に腕用喞筒の全部を廢して消火栓專用水管車五臺を各部に配備した消防水利は水道消火栓公設三九〇、私設三、貯水池七、井戸五を主とし河川の利用がある、火災覺知機關としては常備部に見張臺を有する外、御大典紀念事業として昭和四年二月、二萬四千圓を投じてMM式火災報知機六十五受信機一を備へ、外に公衆電話及警察專用電話が設置されてゐる。足利市は戸數八、七六四、人口四六、六三一を算し有數なる工業地たるに拘らず、過去十年間火災僅に十七回、此損害二萬圓に過ぎざるは、以て如何に組員が火災の豫防と警火思想の普及に努力しつゝあるかを知るべく、其の施設に於て紀律訓練に於て又共の業績に於て縣下第一の優良消防組たるを失はず、無火災にて表彰せられしこと數次、大正十一年十一月旗冠を授與せられ昭和六年五月全線一條を追授せられ、同年十月には大日本消防協會全國第一回の表彰に選ばれて表彰旗授與の消防組としての最大名譽を擔ひ、更に昭和八年二月十一日栃木縣に於ける消防團體紀元節表彰の第一回の選に入りたる、實に謂なきにあらずといふべきである。

御厨村消防組　明治二十七年公設後幾度か共の組織に改變が行はれ、現在七部制で組頭一名、副組頭一名、部長七名、小頭三一名、消防手三三七名總員三七七名によつて組織せられ、組員一人平均受持戸數は二・六に當る機械器具其の他の施設も改善の跡顯著であつて、喞筒は瓦斯倫喞筒三臺、腕用喞筒六臺を有し、歷代組頭初め幹部諸氏の努力と組員の精勵とは、消防技能を發達せしめ災害警防の功勞顯著にして、警火思想の普及行はれ、大正十三年三月十七日優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與せられ、越えて昭和七年五月二十五日金線一條を授與せられ、其の名縣下に高いのである。

吾妻村消防組　明治二十七年七月の公設であるが、之より先き本村には德川時代より若衆連によつて組織せられし團體ありて水火災の警防に當り、明治十八年縣諭告に基き各字に消防組の設置を見たが、公設消防組の設置により之等を統一し、四部制組頭以下百八十一名の吾妻村消防組となつた、其の後數次の改變行はれ部數は四部なるも副組頭が置かれ、組頭以下一九三名より成る、創設當初は龍吐水を主要機としたが共の後改善行はれ、腕用喞筒四臺が各部に一臺宛配備せられ、大正七年第二部に鐵骨火之見櫓建設後、各部に同樣望樓の建設を見た。初代組頭內藤爲之助氏より現組頭島田武氏に至る歷代組頭初め幹部諸氏並に組員上下一致協力改善に精進し、今後の發達が期せられて居る。

葉鹿町消防組　明治六年八月二十三日町立小學校の燒失に鑑み、同年「は組」「熊組」の二組の消防組が設置され、越えて九年「ひ組」を加へ、同二十年三月消防組中合規約を設けて各組を統一し、二十七年消防組規則に準じ

三部制組頭以下百四十六名の葉鹿町消防組は公設された其の後大正十年及び昭和九年一月の二回組織を變更し、組頭一名、部長三名、小頭十六名、消防手一二七名とした。喞筒も漸次改善せられ、昭和九年一月第一部に瓦斯倫喞筒一臺を新調し、他部には腕用喞筒が配備せられ、火之見は大正三年第一部に鐵骨櫓を建設したるを初め、各部にも之を設け他に夜警詰所三個所を設けてある。昭和二年二月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與せられ、昭和四年無火災優秀旗及び金線一條を縣消防義會足利支部より授與せられた。

毛野村消防組　明治初年頃より各大字に設けられ各字の頭字を冠した消防組は其の數十組あつたが、明治二十七年之等を統一して七部制組頭以下三七九名の毛野村消防組は公設せられた、其の後大正四年三月增員し、更に副組頭を置く、現在にては組頭以下三九八名より成る。喞筒は明治三十年頃より漸次精鋭なるものに改善せられ更に大正十五年第二部に瓦斯倫喞筒一臺を購入し、續いて第三部にも同樣の配備をなし、外に腕用喞筒六臺がある、消防水利は渡良瀨川袋川七ヶ村堰用水堀等ありと雖第三部には消防專用貯水池四個所が特設されて居る、火之見は鐵骨のもの各部に建設され施設稍完璧に近い。これ歷代組頭初め上下協力一致不斷の努力によるもので、

其の活動は施設の改善に止らず災害の豫防警戒防禦に於ても功勞顯著であり、大正十三年十二月無火災優秀旗を得昭和七年十二月第一部は二十七年無火災により表彰せられ、昭和九年五月第三部は模範部として縣消防義會より部旗を授與表彰された、

山前村消防組　明治の初年本村は坂西村と稱し、大組か組、小組、や組等各字の頭字を冠したる消防組があつたが、明治二十六年三月坂西村は三重村及び山前村の二村に分村され、山前村にては明治二十七年消防組規則發布と同時に四部組頭以下二四三名の山前村消防組が公設された、其の後昭和三年三月副組頭を置きたる外組織の變更を見ない、創設當時の喞筒は幼稚なる腕用喞筒なりしが、漸次改善せられ精鋭のもの四台を配備し、昭和六年一月瓦斯倫喞筒一臺を購入すると共に、水利調査を行ひ天然水利を利用して貯水所二十一個所を設け、一朝有事の際は百五十間のホースを以て、村內何れの個所にも放水し得らるゝ設備が施されて居る。火之見は從來木造梯子四基ありしが、大正十二年同十三年に亘り全部鐵骨櫓に改められた、本村消防組は水防團、火災警防組合、犯罪豫防組合の事業を兼ね行ひ、消防組の補助機關として靑年團各支部員より選拔した警備隊がある。大正六年二ヶ年無火災に依り足利支部長より優秀旗を授與せられ昭和八年五月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與せられ、更に昭和九年三月二ヶ年無火災により金線一條を授與せられた、之等表彰は歷代組頭及幹部諸氏の努力と組員の精勵の賜といはねばならぬ。

三重村消防組　坂西村が山前村と三重村の二村に分離せられ、三重村にては明治二十七年四部制の三重村消防組が公設せられ、其の後數次の組織變更行はれ、副組頭が置かれ、現在は組頭一名、副組頭一名、部長四名、小頭一三名、消防手一六八名總員一八七名によつて組織せられ、部數は從來の四部制である、喞筒は腕用喞筒四臺の外に瓦斯倫喞筒一臺が購入せられ、各部より消防手を選拔して之れが操縱に當らしめ、水利の調査整備亦行はれ、非常に際し萬遺漏なきを期して居る。昭和八年五月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與せられたるは、上下協力一致消防本來の目的達成に努力の結果に外ならぬのである。

梁田村消防組　明治二十七年各字に設けありし、や組志組、一番組、二番組、三番組及び四番組等の私設消防組を統一し、三部制組頭以下二百三名の梁田村消防組は公設となり、大正三年三ケ部を增設して六部制とし、同十五年副組頭を置き組員を整理し、正副組頭以下二〇一名に變更した。機械器具は創設以來屢々改善せられ、精鋭たる腕用喞筒六臺を有し、火之見は大正二年十月第二部を魁に各部共鐵骨櫓に改造された、本村は水害地なるを以て消防器具の外に水防器具が用意され、水害警防の功勞亦極めて大なるものがある。無火災のため表彰せらるゝこと前後五回、優秀旗及び金線四條を授與せられ、昭和五年優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與せらたる外、第三部は昭和六年一月二十六箇年無火災により、第四部は同七年一月十五箇年無火災により、縣消防義會足利支部より感謝狀を授與せられた。本組には救護班が特設せられ、班長に醫師今井武十郎氏を推し、各部に班員一名宛を配屬せしめ班員には救急手當法を練習せしめ、急救材料及藥品が用意されて居るを特色とす。

北郷村消防組　北郷村にては明治二十七年北郷村消防組が公設せられて全村の私設消防組は統一された、公設消防組は其の後數次の組織變更と機械器具の改善が行はれ現在組織は七部制で組頭一名、副組頭一名、部長六名小頭二八名、消防手三四七名總員三八四名よりなり、組員一人平均受持戶數 三・二に當り、施設の主なるものは腕用喞筒七臺であるが、其の手入保存法等大いに見るべきものあり、非常に際し萬遺憾なきを期して居る。春秋二季の定期演習を初め臨時演習を勵行し、講習會の開催等によつて組員の技能及び學術の向上を圖り、一般警火

思想の普及徹底に上下協力して努力を忘らぬのである、今後の發展期して待つべし。

筑波村消防組　明治九年村内各字に字名の頭字を冠したを組、た組、は組、み組の四組の消防組は江戸火消に倣ひて組織され、明治十九年此四組を一丸として筑波消防組と改稱した、降つて明治二十七年消防組規則發布と共に四部制の公設消防組は設置せられて面目を一新した然るに明治三十三年大字瑞穗野は久野村に編入せられ、御厨町の大字縣を本村に編入せられたるを以て、部數は四部なるも其の配置を變更し、後副組頭を置きて統制の萬全を期し現在組織は正副組頭以下二六一名となつて居る。喞筒は腕用喞筒四臺を各部に一臺宛配備し豊富なる天然水利の外に消防專用井を設け、火之見は各部に鐵骨櫓一基を建設し非常警報の備としてある。組員は專ら火災豫防に努め、之を補佐して五學年以上の小學兒童が、火災期各大字を分擔し毎夕食前警邏するは他に稀れなる所で、無火災に依り縣消防義會足利支部より表彰せらるゝこと三度に及び、昭和三年六月優良消防として縣消防義會より旗冠を授與表彰せられたのである。

三和村消防組　明治二十七年三和村に設置された公設消防組は其の後組織を變更すること數次にして、現在組を四部に別ち組頭一名、副組頭一名、部長四名、小頭二〇名消防手二一六名總員二四二より成り、組員一人平均受持戸數一一・九である。村當局及び消防組員上下一致の熱誠と、村民の消防に對する理解とは消防施設の著しき改善となり、自動車喞筒一、腕用喞筒八が配備せられ、之れに伴ふ消防水利及び道路の調査並に施設よく行はれ昭和九年度警備豫算の如き一、九三一圓が計上せられて居る。足利警察署管内に於て足利市を除き自動車喞筒を有するは三和村たゞ一村で、之れが運用を誤らざる爲めには水利に道路に又其の運轉操縱に組員は非常の努力を拂つて居るのである。昭和十年五月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰せられ、組員は一層勉勵以て消防報國の誠を致さんと精進を續けて居る。

山邊村消防組　明治二十七年山邊村一圓を區域とする六部制の山邊村消防組は公設せられ、組頭以下三八七名を以て組織された、其の後組織を變更し副組頭を置き、現在組頭以下三五〇名に減員せられて居るこれ消防合理化より來るものといふべし、即ち從來使用し來れる喞筒は改善せられて精鋭なるものとなり、第一部及第五部に瓦斯倫喞筒各一臺が配備せられたるが故である。瓦斯倫喞筒二臺腕用喞筒八臺を有する當組は、消防水利を完全にし喞筒の全能力を發揮せしむるため、各部に多きは十三少きも二個合計三十七個の貯水池を特設し、鐵骨火之見五基木造火之見梯子三基あり、警報に便して居る、

組員上下一致協力技能の進歩と施設の改善を計り災害警防に竭したるの結果、昭和三年六月優良消防組として旗冠を授與せられ、無火災に依り足利支部より金線二條を受け、第六部は三十箇年無火災の記錄を有し優秀旗を授與表彰せられたのである。

菱村消防組　古老の言に依れば、明治初年各部落に消防團體ありたるものゝ如くなるも據るべき記錄なく、明治十八年申合せを作り非常係を設け、同二十二年足利警察署の認可を得て各部落に消防組が組織されたが、明治二十七年之等を統一して三部制の菱村消防組は公設され、其の後數次の組織變更に副組頭を置き統制を嚴にした、其の組員を整理し、現在にては組頭以下二三四名となつた。消防器具は龍吐水が喞筒となり續いて所謂獨乙型が一面採用せられ、各部に一臺宛計三臺が整備せられ、天然水利に惠まるゝも小學校庭に消防專用貯水池が設けられ、第二部に鐵骨望樓一基各部の要所には木造火之見梯子數基を建設し非常警報に備へ、且つ連絡を計つて居る。歷代組頭初め組員協力して災害の豫防に力め、無火災表彰を受くること既に四回組の業績以て知るべし。

小俣町消防組　明治二十七年消防組規則發布と共に、明治九年以來小俣町に存したる私組消防組は整理せられ四部制の公設消防組は設置せられた。其の後組織變更行はれ、現在部數に變化なきも、組頭一名、部長四、小頭一六名、消防手二臺五名計二二七名となつた、而して其施設の主なるものは一五馬力瓦斯倫喞筒一臺(第一部)、腕用喞筒三臺にして、水利は天然水利に惠まるゝも、稍不便の個所に消防專用貯水池が設けられ、各部に鐵骨火之見櫓あり、第三部には二基が建設せられた、災害の警防警火思想の普及に關する組員の努力目醒しく、無火災表彰を受けて居る。

○栃木縣日光警察署管内

日光町消防組　明治二十七年の公設にて從來の一番組より八番組に至る所謂番組を統一したるもので、當初は十六部制であつたが其の後機械喞筒の增加による消防合理化は數組の組織變更を促し、現在にては十一部制にて組頭一名、副組頭一名、部長一一名、小頭二九名、消防手二六一名によつて組織せられ、其の區域内には田母澤御用邸及び名にし負ふ日光の大建築あり、組員上下擧つて水火災の警防に獻身的努力をなしつゝあり、其の施設の主なるものは八〇馬力自動車喞筒四、撒水兼用喞筒一小型自動車喞筒一、瓦斯倫喞筒一、腕用喞筒四にして、之等喞筒に應ずるため水道消火栓三、貯水池一二を特設

し、大谷川の利用方法が講じられ、此外日光山内には特設水道と電動喞筒とがある、而して警報機關としては火之見鐵塔十五基がある、日光町には消防共濟會ありて組員の相互救濟を圖り、撒水兼用喞筒自動車を利用して町内の撒水を行ひつゝあるは組の特異であり、部落民の自發的組織による山林消防隊のある事も一の特色である。

日光町消防組は優良消防組として大正十三年三月名譽の旗冠を授與せられ、組員よりは櫻井才次郎氏其の他多數の特別功勞者を出し、町には齋藤孝氏の如き消防熱心家があつて、警火思想の普及に竭し、組の將來の發展愈大なるものがあるであらう。

今市町消防組　明治二十七年六月公設消防組の認可を得て設置せられ、明治三十七年及び大正二年の二回に亘り消防組改善發達のため組織を變更し、現在組織は十二部制で組頭一名、副組頭一名、部長一一名、小頭三五名消防手二五二名よりなり、自動車喞筒二、瓦斯倫喞筒六腕用喞筒五を有し、五個所の貯水池は天然水利と相俟つて消防水利に遺憾なく、火之見一三基が空に聳えて居る由來本消防組は組員協力一致機械器具の改善技能の練磨其の他一般消防施設の整備に努力し、大正二年卒先して七千圓の巨費を投じて瓦斯倫喞筒二臺を購入し、同十年三臺、昭和四年一臺、同六年二臺を增設し、尙ほ大正十年中自動車喞筒を新調し全國公設消防組に先鞭をつけ、縣下消防組に一大奮起を促し、內は益組員の訓練紀律の振肅素質の向上に努力し、部民の警火思想の涵養に力を致し、過去五年間に於ける火災僅に八回に過ぎざるは以て其の全般を窺ふに足るべし。大正十一年十一月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與せられ、更に昭和六年五月金線一條を受け、昭和九年二月十一日紀元節表彰の選に入りて縣知事より表彰旗を授與せらるゝの名譽を擔ひ、佐野町消防組と相並びて縣下町村消防組の最高峯と仰がれて居るのである。

○栃木縣栃木警察署管內

栃木町消防組　德川時代の末期に源を發する栃木町の自治消防は、明治二十二年町制實施當時十三組を數えた明治二十七年十二月消防組規則により十組より成る栃木町消防組が設置されたが、當時は腕用喞筒僅かに三臺に過ぎず、役員の呼稱も舊來のものを襲踏し、內容は殆ど改善の實なき有樣であつた。然るに明治四十年三月四百戸燒失の大火ありしに刺戟され、同四十二年大英斷を以て消防組を改革し十五部制とし、越えて大正三年組員の素質向上を目的に大改革を行ひ十部制とし外に機關部二部を置き、更に數次の變遷を經、現在組織は八部制で正副組頭以下三〇五名より成る。機械器具は明治四十二年の改革により獨逸式腕用十五臺を配備し、大正三年蒸汽喞筒二臺を購入し、同十一年瓦斯倫喞筒二臺を購入して新鋭を加へ、漸次機械喞筒を增加し、現在にては自動車喞筒一、瓦斯倫喞筒四、蒸汽喞筒二、腕用喞筒一〇が配備せられ、水利亦之に伴つて整備せられて居る。元來當町消防組は火災豫防第一主義の傳統を有し、組員は火を消すより火災を起さぬことに努力し、無火災表彰を受ること數次、大正十一年十一月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與せられ、昭和九年五月重ねて金線一條を授與せらるゝの名譽を得た。

靜和村消防組　日光例幣使街道の一宿たる茂呂宿の所在地たる本村は早くより消防施設あり、明治二十二年には四部制の靜和村消防組が組織された。かくて明治二十七年八月改めて八部制の靜和村消防組は公設せられ、初代組頭として後藤孫三郎氏が就任した、其の後多少の改變あり現在にては正副組頭以下三三〇名によつて組織せられ腕用喞筒八臺は各部に配備せられ、鐵骨火之見四木造火之見四がある。組員上下協力災害豫防に努め、大正十二年、昭和五年、同六年の三回に亘り無火災表彰を受け紀律訓練優秀にして機械器具の整備よろしく、爲めに大正十三年優良消防組として旗冠を授與せられた。

岩舟村消防組　明治二十七年公設せられ當初七部制組頭以下二百八十名であつたが、大正二年第三部と第四部とを併合して第三部とし第七部を第四部と改稱して六部制となし、更に昭和九年副組頭の設置に伴ふ組織變更あり、現在組頭以下二六三名より成る。腕用喞筒六臺は各部に配備せられ、消防水利は主として個人の私設井戸に據つて居る。歷代組頭初め幹部諸氏の指導よろしきと組員の勉勵とは災害警防に大いなる功勞あり、殊に力を災害の豫防に致し、昭和九年滿二箇年無火災にて表彰せられ組員は技能の進步素質向上に勵み組の改善に努力しつゝあるのである。

赤麻村消防組　赤麻村は元赤麻村と大前村に分たれ、明治二十年九月兩村に消防組が設置せられ、明治二十二年町村制施行の際二村併合して現在の赤麻村となつたが消防組は對立して居つた。明治二十七年消防組規則に基き兩消防組は統一され七部制の赤麻村消防組は公設され組頭以下三八七名によつて組織された。創設當初の機具は龍吐水であつたが明治四十年頃より漸次改善せられ、現在は精鋭なる腕用喞筒七臺が各部に配備せられ、赤麻沼より發する灌漑用水と高地の各所に設けられた非常井戸を利して居る。大正十五年及昭和五年の二回無火災表彰を受け昭和四年優良消防組として旗冠を授與せられた

稲葉村消防組　明治二十七年五月の公設にかゝり、當初は十三部制組頭以下四九八名であつたが、大正十四年副組頭を置き後組員を整理し總員を四六七名に減員した消防器具は漸次改善せられ、現在にては新式腕用喞筒十三臺を各部に配備し、消防水利は豐富たる灌漑用水使用の便あり、鐵骨火之見櫓の外要所に火之見梯子が建設されて居る、組員上下協力紀律の振肅技能の向上施設の改善に努め、災害警防の功亦大なるものあり、大正十三年三月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與せられ昭和三年及び昭和九年の二回無火災表彰を受け優秀旗及金線一條を保有して居る。

國府村消防組　明治二十七年四月十四部制組頭以下五百名よりなる公設消防組は設置せられ、大正十五年一部を增設して十五部制とし、昭和二年副組頭を置き現在總員五三二名である。消防機具は明治三十年第六部に腕用喞筒一臺を購入したるを初めとし、漸次龍吐水雲龍水を廢して各部に腕用喞筒十五臺が整備せらるゝに至り灌漑用水用水堀及び各個の井戸を消防水源として利用し鐵骨火之見櫓一基を第九部に設け他の要所に木造火之見梯子が建設され居る。

皆川村消防組　明治二十七年の公設であつて、創設當時は七部制組頭以下二二一であつたが大正十二年各部に小頭一名を增員し昭和五年副組頭を置き、一部組員を增員して二二五名となして現在に及び、消防機具は公設以來鋭意改善充實せられて腕用喞筒七臺が各部に配備せられ、之れが水利は永野川を利用して居るが冬期川水枯竭し不便尠からず、目下之れが對策を講ずると共に冬期火防宣傳に努め警戒を嚴にし、火災の豫防に大なる活動をなしてゐる、火之見は大正十五年各部に一基宛の鑛骨火之見櫓を建設し、更に昭和七年第六部に屬する岩出に一部を增し計七部となつた。昭和三年以來無火災表彰を受くること三度優秀旗及び金線二條を授與せられた。

大宮村消防組　明治二十七年本村一圓を區域とし十五部制の公設消防組は設置せられ、後之を十四部制に改め昭和二年副組頭を置き組頭以下總員四百四名となして今日に及び、歴代の組頭施設の改善と組員技能の進歩に努め、腕用喞筒十四臺を各部に配備し、消防用水は村内の豐富なる灌漑用水が利用されて居る。火之見は第九部に鐵骨火之見櫓を建設したるを初めとし、順次第十一第五第六第七第二の各部に建設され、其の他の各部には要所に火之見梯子がある、組員は災害の豫防と警火思想の普及に努め其の實績極めて顯著にして、昭和五年十一月優良消防組として旗冠を授與表彰せられ、昭和七年二月及び同九年二月無火災表彰を受けた。

吹上村消防組　明治二十七年消防組規則の發布後間もなく、明治十五年頃より村内各部に設置され居たる十五組の私設消防組を整理統一し、十五部制組頭以下四百五十名より成る吹上村消防組は公設となつた、後明治二十九年組織を變更し九部制組頭以下三四〇名とし、器具の充實を計り面目を一新した、其の後昭和七年副組頭を置き、更に同九年九月組頭以下三五一名に增員して現在に及ぶ。喞筒は創設以來幾度か改善せられ、昭和七年二號型腕用喞筒一臺を第二部に、翌八年同樣第八部に新規購入配屬せしめ精鋭を增した。本村の東部は水利の便良好なるも西部及び中部は概して冬期水利惡しく、澤水を用水堀に取入れ堰を設けて貯水して居る、火之見は第一部に於て御大典紀念事業として昭和三年鐵骨火之見櫓を建設なし、其の他各部には木造火之見がある。

赤津村消防組　明治二十七年の公設であつて、赤津村一圓を以て區域とし、十三部制で、當初は組頭一、部長一三、小頭三五、消防手四三八であつたが、大正十五年第九部に小頭一名を增員し、昭和八年副組頭を置き、總員四八九名となりて今日に及び、腕用喞筒十三臺は各部に一臺宛を配備し、組員協力施設の改善、訓練の勵行、紀律の肅正、及び警火思想の普及と災害の豫防に竭し、昭和八年無火災表彰を受け、同年五月優良消防組として旗冠を授與表彰された。各部器具置場に愛宕神社を祭祀し點檢日を以て例祭日とし、點檢官參列の上神官祭典を執行し、一同玉串を捧げて無火災を祈願するは、本組の特色である。

豐田村消防組　明治二十七年八月十九部制の豐岡村消防組は消防組規則に據つて設置され後第十四部と第十五部とを合して第十四部とし十八部制となり、降つて昭和二年副組頭を置き組頭以下五〇七名に變更して今日に至る喞筒は腕用一八臺を各部に配備し、其の他施設の改善見るべきものあり、火之見は鐵骨のもの十基の外要所に木造火之見梯子が建設されて居る。昭和九年五月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰された。

中村消防組　明治二十七年公設せられ當初は八部制組頭以下一七七名で、第三部第七部及び第八部には小頭を置かなかつたが、明治三十年十月第九部を新設し總員二十名とし、翌三十一年更に各部の定員を改め、昭和二年三月副組頭を置き現在組頭以下三〇四名により組織せられて居る。公設當時は消防器具は腕用喞筒僅に二臺に過ぎなかつたが、其後漸次改善せられ龍吐水雲龍水は今日全く影をひそめ、新式腕用喞筒九臺が、各部に配備せられ、豐富なる灌漑用水を利して火災の防禦に當り、火之見は木造ながら十一基がある。火災豫防に關しては組員

は一致協力して竈檢査、消火器の各戸設置、金屬製マッチ函を配各戸に布し、兒童の弄火を防ぐため之を床上三尺の所に設備せしむる等、活躍目醒しく、大正十二年以降昭和七年までに無火災表彰を受くること四回、昭和十年六月優良消防組として旗冠を授與表彰せられた。

部屋村消防組　巴波川による水運盛なりし時代、部屋の宿場は沿岸聚落として殷賑を極め、人家稠密にして一番組より五番組までの番組があつて消防の事に當つた、明治二十七年消防組規則の發布せらるゝや番組を整理し十一部制組頭以下五〇〇名の公設消防組は設置せられ、後數次の組織變更、更に副組頭は置かれ組員は增加され現在組頭以下五三一名により組織せられて居る。公設當時は消防器具各部により區々であつたが鋭意改善に努め今日にては瓦斯倫喞筒四、腕用喞筒一〇が整備せられ、水利惡しき新波及び中根方面には貯水池が設けられて居る。昭和六年及び同八年無火災表彰を受け、縣義會栃木支部より優秀旗及金線一條を授與せられ、昭和十年五月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰された

赤津村消防組　明治二十七年消防組規則に準據し、從來の私設消防組を整理し公設せられ、其の當時は五部制にて組頭以下二四一名であつたが、後部數に變更なきも組員數を增加し、現在にては總員二七二名により組織せられて居る。創設當時は私設消防時代の器具を全部繼承し其の後改善せられ今日にては新式腕用喞筒五臺が各部に一臺宛配備せられ、鐵骨火之見櫓四基、木造火之見梯子一基がある。無火災表彰を受くること二回、優秀旗及び金線一條を得、組員一同愈紀律の振肅技能の向上施設の改善に竭し、災害の豫防警火思想の普及に精進を續けて居る。

寺尾村消防組　明治二十七年六部制組頭以下二〇五名の當組は公設せられ、本村一圓を以て其の區域とした、降つて明治三十年五ヶ部を增設して十一部制となし、其後數次の組織變更に副組頭を置き總員二五〇名に增員された、歴代の組頭初め幹部諸氏は組の向上發展と施設の改善に努め、組員亦其の意を體して勉勵措かず。喞筒の如きも昭和四年瓦斯倫喞筒一臺を第十一部に配備したるを始とし、瓦斯倫喞筒三臺、腕用喞筒九臺あり、中央に永野川、西部に出流川あり、自然の溜池及び井水豊富にして消防水利よろしきも、稍不便を感ずる第九部には貯水池を設けて萬一に備へ、鐵骨火之見櫓二基の外に木造火之見梯子がある。當組第六部は無火災優秀部として栃木縣消防義會より部旗を授與表彰せらるゝの名譽を得た

瑞穗村消防組　明治二十七年の設置であつて、創設當時は十部制以下二八〇名であつたが、昭和二年副組頭を置くと共に各部の定員を部長一小頭三消防手三二名に一定し、組頭以下總員を三六二名に改めた。消防器具も當初は第一部に腕用喞筒其の他は龍吐水を用ひたるも漸次改善せられ、現在にては腕用喞筒一〇臺を各部に一臺宛配備し、火之見は昭和二年までに從來の木造火之見梯子を全部鐵骨櫓に改築し、消防水利に就ても綿密なる方策が講じられて居る。歴代組頭初め幹部諸氏並に組員の不斷の努力は、紀律訓練の優秀となり、施設の改善となり災害警防上の功勞亦顯著なるものあり、大正十五年及び昭和四年の二回に亘り無火災表彰を受け、昭和八年五月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰せられた。

富山村消防組　例幣使街道の一宿場として殷賑を極めた當時は、早く江戸火消を倣ひて火消組を設け、其數十八組に達し、明治二十七年之等の私設消防組を整理し十一部制の公設消防組は設置された。其の後組織の變更數次あり現在組頭一、副組頭一、部長一〇、小頭二二、消防手三八六總員四二五名により組織せられ、消防器具も亦改善せられ腕用喞喞一〇を主なるものとし、水利不便なる大字富田には貯水池が設置せられ、鐵骨火之見櫓が連立して居る。昭和四年及同六年無火災表彰を受け、優秀旗及金線一條を授與せられ、昭和五年十一月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰せられたるを以て見ても、其の功勞顯著なるを知るべし。

南犬飼村消防組　本村の安塚は宇都宮街道の宿場で、明治十四年安塚消防組は設置された、之れ本村消防の濫觴である。其れに倣ひ各字にも消組防が設置された、降つて明治二十七年六月其れ等の私設消防組を整理統一し七部制の公設消防組は設置され、昭和五年まで組織變更なかりしが、同年副組頭を置くに際し組員二十六名を減員し、組頭以下四一〇名となつた。創設當時の消防器具は漸次改善せられ新式腕用喞筒一〇臺を有し、概して消防水利の稍不良なる第五第六第七の三部に備ふるため、役場より約百五十米を隔りたる地點に養魚池を兼ぬる一大貯水池を設置し、鐵骨火之見櫓五基と其の他に木造火之見を要所に建設されて居る。救護班危險防止班の活動火焚場檢査提要の作成、等は本組の特色である。昭和五年六月同八年六月の兩度無火災表彰を受け優秀旗及金線一條を授與せられ、同五年十一月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰せられた。

家中村消防組　明治二十七年消防組規則に準據して公設せられ、十一部制組頭以下三八四名により組織せられた、其の後一度も組織變更なく、組頭一名、部長一一名小頭二二名、消防手三五〇名で、歴代組頭初め幹部諸氏

は機具の改善組員の向上に努力し、喞筒も瓦斯倫喞筒一臺腕用喞筒一〇臺を整備し、之れに伴ふ水利道路に就ても多大の注意が拂はれ、其の他の施設亦着々完成せられつゝあり、組員亦幹部の意を體し災害の警防と警火思想の普及に努め、其の業績顯著なるものがある。

三鴨村消防組　明治二十七年の公設で現在六部制で組頭以下總員三〇九名より成り、瓦斯倫喞筒一臺腕用喞筒六臺あり、小學校々庭の百五十石入貯水池、各部内數個宛の非常井戸等、皆組員の勞力奉仕によつて完成されて居る。殊に瓦斯倫喞筒購入に就ては一の美談がある豫て三鴨村にては瓦斯倫喞筒購入の希望ありたるも、經費の關係上實現容易ならざりしが、偶々第一部の腕用喞筒破損して更改の必要に迫られたるも、前年に引續く旱害に村經濟疲弊し、村費を以て購入するは到底之を許さず、已むなく購入資金を有志寄附に求めんとしたるも、農村不況の折柄之を穩當ならずとなす部落民の反對あり、組と部落との間に挾る部長の苦心想像に餘るものがあつたかくて目前の必要を感じつゝある瓦斯倫喞筒の購入も一頓挫の有樣となつた、仍て組頭上岡泰一氏は第一部長に協議し相伴ひて上京し、部落出身者にて在京成功者たる中田利吉、上岡魂三、上岡尙藏の三氏を訪問、事情を訴へて懇談したるに三氏は快諾し、多忙中各方面に奔走し

約四百五十圓の寄附を取纒められた、玆に於て組頭は部長以下の各役員を督勵し、救農事業に出勞して得たる金三百圓を、擧げて購入資金に提供せるを以て、組員全部之に刺戟されて蹶起し、約六百圓の寄附を部民の間に求め得た、之れに本字外二ケ字共有財産中より金四百圓の補助を受け、かくて得たる千七百五十圓を以て精鋭なる新式瓦斯倫喞筒を購入したのである。之偏に上岡組頭を初めとし役員以下組員の熱誠にも因るが、前記中田氏と上岡兩氏鄕黨愛の發露に負ふ處大である。大正十一年優良消防組として旗冠を授與せられたるも亦組員の熱誠によるものである。

水代村消防組　明治二十七年の公設で當初十部制組頭以下四〇一名であつた、其の後數次の組織變更に副組頭を置き組頭以下四三一名に增員された。消防機具は元私設消防組時代のものを使用し來れるが、其の後漸次改善せられ新式腕用喞筒十臺は各部に一臺宛配備せられ、水利の稍不便なる部には火防用井戸が堀鑿されて居る、火之見は第一第六第七の各部に一基宛第五部に三基の鐵骨火之見櫓が建設され、其の他に木造火之見梯子がある。組員上下協力一致努力の結果、昭和八年第六部は三十五年間無火災のため表彰せられ、昭和六年優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰された。

藤岡町消防組　明治二十七年、從來村内各字に獨立せる私設消防組を統一し、消防組規則に據り八部制組頭以下三〇四名の公設消防組は設置され、柴田市三郎氏初代組頭として就任した、現在も同樣八部制にして組員中、小頭一名、消防手四名の增員を見たに過ぎぬ、其の間組頭の更迭十三回、昭和八年五月現組頭阿部松三氏の就任を見た。消防器具は時運に伴ひ改善せられ、第一部に瓦斯倫喞筒一臺、其の他の各部には新式腕用喞筒各一臺が配備せられ、鐵骨火之見櫓五基と木造火之見梯子がある警備豫算は昭和九年度五百三十五圓で、其他各部の負擔として支出せらるゝもの相當多額に上るといふ。昭和二年二月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰された。

○栃木縣佐野警察署管内

佐野町消防組　いろは組を過ぎて番組時代に入り、明治二十一年獨逸型喞筒を購入し江戸町喞筒組を設けた佐野町にては、明治廿七年六月、從來の十一番組及江戸町喞筒組を解散し六部制の佐野町消防組は公設され、明治三十二年三月組員數を變更し、同三十九年第七部を新設した、越えて大正十三年一月消防組改善調査會を設けて三年繼續事業を以て消防組改善するの案を確立し、昭和二年七月組頭を除き全組員を解職し、組員は公募の上志願書及履歷書を徵して採用し、同年九月七部制を廢して五部制を實施し、昭和五年二月二十八日組頭一名、部長五名、小頭一四名、消防手九九名、總員一一九名として現在に及ぶ。かく從來の弊風改善と組員の素質の向上を圖ると共に、機械器具の改善、一般施設の整備に努め、大正十三年消防改善の調査會の調査に基き三年間に瓦斯倫喞筒四臺を購入し、更に昭和五年自動車喞筒一臺を增設して動力喞筒の完備を期し、併せて貯水池の新設に努め、附近市町村に先じて鐵骨火之見を建設した　今其の施設を見るに自動車喞筒一臺、瓦斯倫喞筒四臺、腕用喞筒四臺、百石乃至百五十石貯水池二十八、火之見六基あり、組員上下協力して紀律を嚴正にし、技能の熟達に力め、災害の警防に竭し、其の成績極めて良好にして優良消防組として縣下に範を示しつゝあるのである、明治四十三年八月縣下大洪水に際し水防の功勞顯著にして栃木縣知事より賞狀を受け、縣消防義會より大正十一年十一月旗冠を昭和六年五月金線一條を授與表彰せられ、更に昭和八年二月十一日紀元節の佳節に縣知事より表彰旗を授與せられた。當組の此の發達は、現組頭山田元吉氏の大正十一年以來の努力と、組員の熱誠に負ふ所極めて大である。

堀米町消防組　明治二十七年消防組規則に準據して公設せられ、現在四部制で、組頭一名、部長四名、小頭八名、消防手一一〇名、總員一二三名により組織せられ、組員一人平均受持戸數五・三に當つて居る。其の施設の主なるものは自動車喞筒一臺、腕用喞筒三臺で、其の他の施設亦整備せられ、殊に自動車喞筒運用をして最も有効ならしめ其の能力を遺憾なく發揮せしむるため、組員は水利道路の調査修理に努めて居る、而して災害の警防消防技能の進歩に對す組員一致の精進は、紀律訓練を優秀ならしめ、災害を減少し一般警火思想を增進せしめて居る。

犬伏町消防組　明治二十年には犬伏、富川、鐙黑石、富淺の四消防組があり、同二十三年是等を統一して犬伏町消防組を起し一番組より四番組までの番組としたが、明治二十七年消防組規則の發布せらるゝや從來の消防組を解散し、四部制組頭以下三百名より成る公設消防組が設置された。其の後數次の變遷を經、現在にては五部制組頭一名、部長五名、小頭一五名、消防手一七九名となつて居る。機械器具も漸次改善せられ第一部に瓦斯倫喞筒一臺其の他の部は腕用喞筒一臺宛を配備し、貯水池二火之見一三が建設されて居る。組員上下一致協力消防事務の改善に竭し、昭和十年五月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰せられた。

界村消防組　明治二十七年六月の公設で、明治十九年に設置せられ而して公設消防組の設置により解散せられた番組の區域を襲踏して四部制とし、當初組頭以下一八四名であつたが數次の組織變更により現在一九一名により組織せられ、施設の主要なるものは腕用喞筒四臺で各部に一臺宛が配備せられて居る。組員上下一致協力して紀律の肅正施設の改善を圖り訓練を勵み災害の警防に努めたるの結果、大正七年十二月第四部は拾年以上、第二部は五年以上無火災により優秀旗を授與せられたるを初め、第二部及び第四部は表彰せらるゝこと數次、組としては大正十一年十一月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與せられ、昭和九年七月無火災表彰を受けた。

植野村消防組　本村一圓を區域とする本消防組は消防組規則に據り明治二十八年六月設置せられ、初め八部制であつたが明治三十八年第九部、大正十三年第十部を增設して十部制とし、組頭以下四百二十名となりて現在に至る消防器具も漸次改善せられ第二部及第十部に瓦斯倫喞筒各一臺、其の他の部に新式腕用喞筒を配備し、消防水源は概して豊富なるも稍不便の地に火防專用井五十六ケを設けて非常に備へ鐵骨火之見櫓九基の外に木造のもの二基あり、昭和二年二月縣消防義會より優良消防組として旗冠を授與表彰された。

旗川村消防組　明治二十七年消防組規則の發布と同時に公設となり、其の後組織變更を行ひ副組頭を置き現在五部制にして組頭一名、副組頭一名、部長五名、小頭一六名、消防手一九九名總員二二二名より成り、組員一名平均受持戸數二・七に當る。腕用喞筒五臺が各部に一臺宛配備せられ、其の手入保存見るべきものあり、昭和九年度警備費豫算四百圓が計上せられて居る。組員上下協力一致して消防の改善を圖り訓練を勵み其の紀律訓練優秀災害警防の功勞顯著なるにより、大正十一年十一月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與され、其の第四部は昭和七年五月優秀部として同じく縣消防義會より旗冠を授與表彰れた。

赤見村消防組　明治十九年五月大字赤見にあ組と稱する消防組が組織せられ、同二十四年には各部落に赤見に倣ひ消防組が設置された、明治二十七年消防組規則發布せらるゝや大字消防組の幹部折衝の上、同年八月從來の私設消防組を整理し村一圓を區域とする九部制組頭以下五百名より成る公設消防組は設置された。其の後組織變更行はれ昭和二年副組頭を置き現在組頭以下四〇五名により成る。創設當時は私設消防組の器具を繼承使用したが漸次改善せられ、現在にては第三部及第七部に各一臺の瓦斯倫喞筒を、其の他の部には腕用喞筒一臺宛が配備せられ、水利不便の個所に貯水池十六を特設し、各部に鐵骨火之見を設けて居る。大正十三年赤見村消防義會が設置され、以來消防組を後援し、施設の改善、組員の慰安救濟、警火思想の普及、等に活潑なる活動を續けつゝあるは本村の特色である。之れに力を得て組員の精勵大なるものあり、昭和二年二月優良消防組として縣消防義會より表彰され無火災表彰を受くること數次に及んで居る。

田沼町消防組　明治二十七年の設置にかゝり、これと同時に從來の消防組は解消された。其の後數度の組織改變あり現在十五部制で組頭一名、副組頭一名、部長一五名、小頭三五名、消防手四九四名、總員五四六名にて組織せられ消防機具は漸次改善せられ瓦斯倫喞筒一臺、腕用喞筒一五臺となり、之れにて貯水池二五〇が設置せられ、各部に鐵骨火之見櫓が建設せられて居る。大正十三年三月優良消防組とし栃木消防義會總裁より旗冠を授與表彰せられたるは、組員上下一致協力施設の改善技能の進歩紀律の肅正を圖り、災害の警防に獻身的努力をなしたるの賜である。

三好村消防組　本村は元戸室村、富崎村、舟越村の三村で、明治二十年二月各村獨立の消防組が組織せられ、同二十二年四月町村制施行に三村合併して三好村となる

と同時に各消防組亦合併して三好村消防組と稱し、明治二十七年消防組規則の發布により改めて三部制公設消防組が設置せられた、降つて昭和九年三月一ケ部を增設して四部制とし、組頭以下一八〇名となつた。施設は創設以來組員協力して之れが改善に努め、喞筒は新式のもの四臺を各部に一臺宛配備し、火之見は各部共に二基の鐵骨火之見が建設せられて居る。昭和九年五月優良消防組としてして栃木縣消防義會より旗冠を授與表彰せられ、第一部は同年三月、二十ケ年無火災により縣消防義會佐野支部より優秀旗を授與表彰せられた。

新合村消防組　明治二十七年、從來各部落に存置せし私設消防組を整理し、本村を區域として設置せられたる公設消防組は、其の後殆ど組織の變更を見ず、今日尙六部制組頭以下二六八名によつて組織せられて居る。其の施設は創設以來組頭以下全員の不斷の努力の結果異數の發達をなし、新式喞筒六〇を各部に一臺宛配備し、之れに對する貯水池三一個が特設せられ、鐵骨火之見櫓七基木造火之見櫓五基がある、昭和三年六月優良消防組として栃木縣消防義會より旗冠を授與表彰せられたる外、第一、四部は同年十一月、二十ケ年無火災により縣消防義會佐野支部より表彰せられ、同九年滿二十五ケ年無火災により優秀旗を授與せられ、組としても昭和九年三月、三ケ年無火災により佐野支部より優秀旗を授與された。本村には消防義會があつて組員の弔慰救濟表彰其他消防組の後援團體として活動を續けて居る。

飛駒村消防組　明治廿一年根本組と稱し三部編成にて各部定員七十五名を以て消防組の組織を見た、之れが本村消防組の濫觴で器具は龍吐水を中心に一般設備を施し活動し來りたるが、明治廿七年消防組規則に準據して飛駒村消防組と改稱し公設となつた、三部制にて各部定員四五名宛を以て組織せられ、同廿九年各部定員を七十五名として現在に至る。火防用水は概ね自然に惠れ居るも五十石程度の專用貯水池十九個を特設非常に備へ火之見は鐵骨櫓四基木製三基がある。大正八年無火災優秀旗を授與表彰せられしを初め無火災にて三回の表彰を受けた

葛生町消防組　明治二十七年消防組規則により、葛生町一圓を區域とし當組は公設消防組として設置せられ、現有勢力は四部制にして組頭一名、部長四名、小頭一四名消防手一三五名、總員一五四名であり、消防組員一人平均の受持戸數は八・六に當る。創設以來組頭以下組員相協力して設備の改善と技能の進歩に努め、喞筒の如きも腕用喞筒を全廢し瓦斯倫喞筒四臺、水管軍一臺を以て之に代へ、貯水池一七個所を設けて水利の完全を期し、火之見七基が建設せられて居る。昭和五年十一月優良消防

組として栃木縣消防義會より旗冠を授與表彰せられたる外、數次表彰せられたるは以て紀律訓練の優秀と功勞の顯著なるを知るべし。

常盤村消防組　慶應二年上牧に本村消防組の濫觴である上牧一番組と稱する消防組が設置せられ、明治二十一年二月設置せられた仙牧三番組を殿に八組の消防組があつた、明治二十七年消防組規則發布せらるゝや、此等各組幹部は折衝を重ね全部解散し、改めて同年七月八部制組頭以下四一六名により設置せらるゝ常盤村公設消防組は設置せられ、其の後數次の變更行はれ、現在定員組頭以下三七九名となつた。機械器具は創設當時は番組時代のものを使用し、後漸次改善せられて腕用喞筒八臺其他が整備せられ、百石內外の貯水池を七個所に設置し、個人の溜池を併せ消防水利の萬全を期しつゝあるも、未だ完全とはいへず其の完備に努力しつゝあるのである。

氷室村消防組　明治二十七年消防組規則に準據して設置せられ本村一圓を以て區域とし、三部制組頭以下二〇三名を以て組織せられ、創設以來組員上下協力一致施設の改善と技能の進歩に努め、腕用喞筒三臺の外に瓦斯倫喞筒一臺を購入して精鋭を加へ、其の他の施設亦整備されて居る。昭和六年五月優良消防組として旗冠を授與表彰せられたるの外、大正九年十一月無火災優秀旗を、更に昭和八年七月無火災優秀旗を栃木縣消防義會佐野支部より授與せられたる、以て紀律訓練卓越し、災害警防の功勞顯著なるを知るべし。

○栃木縣小山警察署管內

小山町消防組　明治五年小川讓介氏の盡力により設立された各字消防組は、明治廿七年公設消防組の設置に當つて解消せられ、新に同年七月六部制組頭以下三百十名の小山町消防組は公設せられ、明治四十四年一部增員を行ひたるが、昭和二年十月大改革を行ひて八部制とし、副組頭を置き、更に昭和八年第七部を第六部に併合して七部制となし、正副組頭以下一六四名となつた。機械器具は第二部に中澤氏より瓦斯倫喞筒を寄贈されたるを機とし漸次機械喞筒の數を增加し、自動車喞筒二臺、オートバイ喞筒二臺、手輓瓦斯倫喞筒二臺、腕用喞筒一臺となり、之に對する水利は現在にては不充分なるを以て大規模の計畫が立てられ、將に實行されんとして居る。大正十三年三月優良消防組として栃木縣消防義會より旗冠を授與表彰せられた。

間々田町消防組　奥州街道の一要宿であつた間々田は古くより消防施設發達し、公設消防組設置の直前消防組の數十三であつた。明治二十七年此等の私設消防組を解

消せしめ、十五部制の間々田町消防組は設置せられ、組頭以下四七一名により組織せられ、大正五年六月渡良瀬川河川改修の結果、野木村大字友沼河岸が當町大字乙女に編入せられれ、此所に一部を增設し十六部制とし、更に大正十五年副組頭を置き、正副組頭以下四三七名となつた。現在施設の主なるものの中、喞筒は瓦斯倫喞筒六臺、腕用喞筒一〇臺を配備し、之れに對する消防水利は河川の外貯水池八個所、井戸四十三が設備せられ、火之見は鐵骨火之見櫓九基と木造火之見七基で、木造のものは頃次鐵堵に更められつゝある、施設かくの如く整備され組員の努力は其の技能を進歩せしめ、紀律亦嚴正にして災害警防の功勞亦顯著なるものあり、大正十三年三月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰せられ昭和九年二月紀元節の佳辰に、縣知事より本縣消防組の最大名譽たる表彰旗を授與せられた。

桑村消防組　本村消防組の濫觴は、今の羽川往時の大町新田に天保年間大火あり、宿の殆ど全部を烏有に歸せしめたるが動機となり、土地の俠客熊太郎親分事福田熊吉が部下を以て火消を組織し、其の使用法は「吼吐水に「い組」を刻したるにあり、其後各字にも江戸火消に倣ひ火消組が置かれた。明治二十七年此等私設消防組を整理統一し桑村消防組が公設せられ、當初八部制組頭以下三百名であつたが、明治三十年第九部を、更に第十部より第十二部までの三部が增設せられ、副組頭は置かれ、現在十二部制組頭以下五〇六名によつて組織せられて居る。喞筒は新式のもの十二臺を有し、第四部に消防井四個を有する外各戸の井戸又は溜を利用し、鐵骨火之見櫓四基の外に木造火之見梯子の設備がある。組員は訓練に勵み技能の向上を計ると共に、竈檢査其の他警火に努力し、昭和三年六月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰せらた。

穗積村消防組　明治二十七年、從來存置した九組の消防組を解散して、新たに十一部制組頭以下三七五名の穗積村消防組は公設せられ、大正十五年副組頭を置き、現在にては組頭以下三七七名により組織されて居る。創設當時は私設消防組時代の器具を使用したが漸次改善せられ、新式腕用喞筒十一臺其の他の器具を設備して面目を一新し、豊富なる灌漑用水を利して防火た努め、鐵骨火の見櫓四基の外に木造火之見梯子が各部に建設されて居る。大正十三年縣消防義會小山支部より無火災により優秀旗を授與せられ、昭和五年十一月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰せられた。

姿村消防組　姿村は元十二ケ字より成る大村であつたが、明治二十五年村内の主要區たる石橋外五字が分離して石橋町となり、純農村部落によつて姿村の名を保つに至つたため、一時消防組も衰微を來したが、明治二十六年一番組より十番組までの番組が組織された、而して翌二十七年には消防組規則發布せられ、番組を解散して改めて八部制組頭以下三百三十一名よりなる姿村消防組が公設せられ、其後少しの變遷あり昭和二年副組頭を置き現在組頭以下三六八名により組織せられて居る。喞筒は新鋭の腕用喞筒八臺あり、　皇太子殿下御降誕記念事業として各部に二ケ所宛の消防井戸を新設し、各部に火之見梯子がある。組員は施設の改善と技能の進歩に努め、各戸に灰置場を設置しあるは他に多くの例を見ざる所であり、第六部は滿二十箇年無火災の記錄を有し、第一部には青年團員よりなる青年消防隊あり、消防組を應援しつゝあるのである。

絹村消防組　明治二十七年の公設にかゝり、十部制組頭以下五七〇名なりしが、第一部にて水防上手不足を感じ明治二十八年十名を增員し、鬼怒川改修工事の結果水防の手を省き得るに至りたると生活樣式變更によりで減員し、又副組頭を置き、現在組頭以下五六二名となつた公設以來機械器具は漸次改善せられ、今日にても新式腕用喞筒十臺の外に豫備の喞筒を有し、消防水利は極めて良好にて僅に第二部の一部に數個の消防井が設けられて居る、火之見は大正七年第二部及第三部に鐵骨火之見櫓を建設したるを機とし各部に之を設け、今只一つ殘る十部の木造火之見を近く鐵塔に改良する計企である。大正十三年三月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰せられ、大正十四年、昭和二年、昭和八年の三回、消防義會小山支部より無火災優勝旗を授與せられた。

野木村消防組　明治二十七年の設置で二十三部に別たれ、現在組頭一名、副組頭一名、部長二三名、小頭四六名、消防手六二二名、總員六九三名より成り、副組頭は昭和二年に置かれたのである。創設當時は私設消防の使用したる機械器具を流用したるも漸次改善せられ、大正十五年第十八部に瓦斯倫喞筒を購入配備したるを初めとし、昭和二年第十四部に、同三年第十五部に、瓦斯倫喞筒各一臺を設備し、其の他の部には薪式腕用喞筒一臺宛が備へられ、防火專用井戸三五〇が要所に堀穿されて居る。火之見は第十三部を初め五基の鐵骨火之見櫓があり其の他の木造火之見も漸次鐵骨に改造の豫定である。昭和九年一月縣消防義會小山支部より優勝旗を授與表彰された。

國分寺村消防組　明治二十七年從來の一番組より九番組までの番組を整理統一し、九部制五二五名の國分寺村消防組は公設せれ、其の後副組頭を置く等の組織變更行

は、組頭以下五二九名となつた。公設以來機具の改善に努め、今日にては新式腕用喞筒を各部に一臺宛配備し消防水利は灌漑用水使用の便あるも、市街地を形成する國道に面する第一第二の兩部にては、昭和御大典記念として十二個所(第二部)、皇太子殿下御降誕記念として十一(第一部)の貯水池を設置し、火之見は鐵骨三基の外木造火之見梯子が建てられて居る。

大谷村消防組　明治二十七年八月四日公設消防組設置認可ありて十一部制組頭以下四六六名により組織せられ其後數次の變遷を經現在組頭一名、副組頭一名、部長一一名、小頭三五名、消防手四三九名となつた。歴代組頭初幹部諸氏の不斷の努力は施設の改善となり、喞筒の如きも龍越や「テレキ水」は新式腕用喞筒となり各部に一臺宛が配備せられ、其の水源たる消防專用井戸は各部共三戸乃至五戸に付一個の割合にて堀鑿せられ殆ど完備に近く、昭和四年第四部に鐵骨火之見を建設したる以來第二第五、第九の各部に順次之を建設し、其の他の火之見梯子も順次鐵骨に改造の計畫である。昭和七年縣消防義會小山支部より表彰せられた。

石橋町消防組　明治二十五年姿村より分離した石橋町は姿村の重要地點なりしだけに消防防施設も行き渡り居たるが、明治二十七年之等を統一し石橋町消防組は公設せられ、現在六部制で組頭一名、副組頭一名、部長六名小頭二四名、消防手一九三名によつて組織せられ、機械器具も改善に改善を重ぬ、腕用喞筒五臺の外に自動車喞筒二臺を有し、之れに伴ふ施設も亦整備せられて居る歴代組頭初め幹部諸氏は施設の改善に力むると共に組員の技能の向上を圖り、紀律訓練優秀にして、昭和二年二月優良消防組として栃木縣消防義會より旗冠を授與表彰せられたのである。

○栃木縣鹿沼警察署管内

北犬飼村消防組　明治二十七年七月從來の池の森の『池組』其の他の私設消防を整理し、本村一圓を區域とする八部制組頭以下三六名の北犬飼村消防組は公設せられ大正十五年八月一ヶ部を增設して九部制となすと同時に副組頭を置き組頭以下四五六名となつた。創設當時ぱ龍吐水を主要器具としたが、明治二十八年第一第二第三第四第六の各部に腕用喞筒を配備し、爾來改善に改善を重ね、今日にては各部共精鋭なる腕用喞筒が配置されて居る。歴代組頭始め幹部諸氏の努力と組員の精勵とは共の業績愈上り、今後益大なる發展に向つて居る。

板荷村消防組　明治九年番組制度が設けられ、同二十一年以來警察官の監督の下に行はれ大いに災害の防禦に竭す所があつた、降つて明治廿七年六月番組を廢し番組時代の區劃に從つて九部制組頭以下二七一名の板荷村消防組は公設せられ、大正十四年十二月副組頭を置く等の改變行はれて今日に及ぶ、公設となるや各部競つて施設の改善に努め名實共に面目を一新した、組員一致協力災害の警防に竭したるの結果、昭和七年五月第四部は三十七ヶ年無火災の優秀部として栃木縣消防義會より名譽の部旗を授與表彰せられ、翌八年同義會鹿沼支部より組に對し優秀旗が授與せられた。

北押原村消防組　德川時代一村皆消防主義を採り、舊正月に非常揃なる行事をなし消防器具を整理し、弘化三年正月二十四日未曾有の奈佐原宿の大火に大活躍をなしたる歴史を有する當村は、明治二十三年町村制施行に當り奈佐原宿を初め一宿七ヶ村が合併し、各字に一組又は二組の消防組が設置された、明治二十七年五月私設消防組を解散し十部制組頭以下三三三名の北押原村消防組は公設せられ、其の後副組頭の設置其他組織變更數次にして現在組頭以下三六五名より成る、明治三十二年初めて獨逸型腕用喞筒を購入、爾來機械器具其の他の施設の改善整備に努め、名實共に備はり組員の技能亦進歩し大正十二年四月鹿沼署管内優秀旗授與審査會に於て第一等を得、大正十三年三月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與せられたる外、表彰せらるゝこと數度に及ぶ。

南押原村消防組　明治二十七年八月八部制組頭以下三九九名より成る南押原村消防組は公設せられ其の後副組頭を置き組員の增減を行ふ等の組織變更行はれ、現在組頭以下三八〇名により組織せられて居る創設以來施設の改善に最も意を用ひ、瓦斯倫喞筒二臺、腕用喞筒一〇臺を有し、豊富なる灌漑用水を利して警防に備へ、大正十年第一部に鐵骨火之見櫓を建設以來第四第五の兩部にも之を設け、他部の火之見梯子も漸次鐵骨火之見に改善が企圖せられて居る。

加蘇村消防組　七部制組頭以下三一六の當組が公設せられたるは明治二十七年であつて、大正十五年副組頭を置いた。創設以來器具の改善行はれ、今日各部共精鋭なる腕用喞筒を配備せられて居るが、之等の器具其の他の設備は各部の負擔によるものである消防水利は荒井川及び隨所に多數の澤水に加ふるに豊富なる灌漑用水の利用の便ありて、別に貯水池の設置なきも、火之見は第二部に鐵骨火之見櫓の建設あり各部の要所には一基乃至二基の木造火之見梯子が設けられ、非常警報を發すると各部の連絡に備へられて居る。昭和八年九月縣消防義會鹿沼支部より無火災優秀旗を授與表彰せられたるは以て組員の災害豫防に對する努力を窺ふに足るべし。

東大芦村消防組　明治十七年初めて各字に消防組設置され其の數七を算したが、明治二十七年五月之等を整理統一して東大芦村消防組は公設せられ、其の後數次組織變更行はれ、大正十五年副組頭を置き、現在七部制組頭一名、副組頭一名、部長七名、小頭二四名、消防手二五三名によつて組織せられて居る。創設當時は私設時代の器具を使用したるも漸次改善せられ、第六部の瓦斯倫喞筒を初め各部共に精鋭なる腕用喞筒が配備せられ、之れに伴ふ諸施設亦着々として整備せらて居る、大正十三年三月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰せられたるは、紀律訓練の優秀と功績顯著なるを有力に物語つて居る。

菊澤村消防組　玉田村、見野村、下達部村、富岡村、武子村、栃窪村及び千渡村には夫々明治二十年六月の本縣訓令に基き消防組が設置せられたか、同二十二年四月町村制實施により前記七ケ村は合併して菊澤村となり、同二十三年二月本縣訓令に因り消防組組織の變更を行ひ災害防禦に努め來つた、かくて明治二十七年消防組規則の發布せらるゝや、從來の消防組を整理し全村を區域とする九部制の菊澤村消防組は公設せられ、同二十八年二月第三部に小頭一名消防手十名を增員し、同三十一年一部を增設して十部制とし、昭和三年副組頭を置き、現在

組頭以下三五〇名により組織せられて居る。公設以來施設の改善に努め、今日にては瓦斯倫喞筒三臺、腕用喞筒七臺、及び之れに伴ふ諸施設整備せられ、紀律訓練優秀にして災害警防の功亦少くない、昭和七年五月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰された。

南摩村消防組　明治十四年非常掛を設け、同二十一年九組の番組を組織し、同二十二年頃より統一的機運進み同二十七年消防組規則發布せらるゝや番組を廢し九部制組頭以下三六〇名の南摩村消防組は公設せられ、大正十五年副組頭を置き、昭和元年同六年に組員を增員する等の組織變更行はれ、現在にては組頭以下三七一名より成る。昭和元年十二月第三部新鋭腕用喞筒を、次で第四部に瓦斯倫喞筒を配備する等、順次喞筒の改善行はれ、之れに伴ふ諸施設亦着々と整備せられ、組員協力一致向上の一路に邁進し、災害の警防に竭し、其の功勞顯著なるものがあり、昭和八年四月縣消防義會鹿沼支部より無火災表彰を受け、同九年五月優良消防組としし縣消防義會より旗冠を授與せらるゝの名譽を得た。

鹿沼町消防組　明治二十七年の公設にかゝり、當初は十五部制組頭以下四六九名であつたが、同三十五年十四部制に改め、同三十九年十部制とし、大正十四年一ケ部を增設し副組頭を置き、更に昭和九年自動車喞筒の配備に伴ひ六部制とし組頭一名、副組頭一名、部長六名、小頭一三名、消防手一〇九名として今日に及ぶ、創設以來組員協力施設の改善に努め、昭和八年度に於ては瓦斯倫喞筒十一臺、豫備腕用喞筒五臺を有したが、更に昭和十年度自動車喞筒二臺を新調し、水利に就ては大正十五年水路部を設け全町を五區に分ちて水路を巡視し水利の萬全を期し、更に貯水池十五を特設して非常に備へ、鐵骨火之見櫓十二基が建設されて居る。かく施設の改善着々實行せらるゝと共に組員の素質の向上技能の熟達亦著しく災害警防の功勞顯著であつて、大正十三年三月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與せられ、更に昭和八年五月金線一條を授與表彰せらそた。

西大芦村消防組　明治十八年引田村、下大久保村、上大久保村、及び草久村の戸長役場が引田村に設置されたるにより、引田を甲號、下大久保を乙號、上大久保を丙號、草久を丁號と呼び、此四組を統一して引田組なる消防組が組織され、年中行事として春季聯合點檢が引田村で行はるゝを例とした、降つて明治二十三年引田村を除く下大久保、上大久保、草久の三村合併し西大芦村となるに及び、一番組以下七番組までの番組を設け西大芦消防組と稱した、明治二十七年八月番組を廢し六部制の西大芦村消防組は公設せられ、同三十七年組織を變更し、大正十五年副組頭を置く等の變遷を經て今日に及び、組頭以下二五七名によつて組織せられて居る。現在施設の主なるものは瓦斯倫喞筒一臺、腕用喞筒五臺で、其の他の施設亦整備せられ、紀律訓練優秀であり、昭和二年二月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰せられ、同七年五月第三部は滿四十三年間無火災の優秀部として縣消防義會より名譽の部旗を授與せられ、同八年四月消防義會鹿沼支部より組に對し無火災優秀旗が授與された。

西方村消防組　明治十七年消防組の基礎を作り、同二十三年十四組消防夫五六八名を置きたるが、同二十七年前十四組の區域を其の儘十四部制の西方村消防組は公設せられ、現在にては正副組頭以下五〇八名となつた。公設以來施設の改善に努め瓦斯倫喞筒一臺、新式腕用喞筒一三臺が配備せられ、地勢平坦にして用水村内を縱横に貫流し縣下第一と稱せらるゝ消防水利は、此等喞筒の使用を便ならしめて居る。火之見は鐵骨火之見櫓四基の外に木造のものがある。組員一致協力不斷の努力は昭和五年十一月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與せられ、昭和六年五月第九部は滿三十三年間無火災の優秀部として、縣消防義會より名譽の部旗を授與表彰せらるゝに至らしめた。

粕尾村消防組　本村は明治初年上粕尾中粕尾下粕尾の三村に別たれて阿蘇郡に屬し、後都賀郡に附せられ、明治二十二年四月町村制施行の際三村合併して單に粕尾村と稱し上都賀郡に編入されたもので、三村分立の頃各字に字名を冠した消防組が設置され、併合後一番組以下九番組までの番組制となり、明治二十七年粕尾村消防組の公設せらるゝや番組を廢し、番組の區域を其の儘九部制が布かれた。其の後數次の組織變更あり又副組頭制を採用し、現在組頭以下四〇五名となつた。本村には度々大火あり明治四十二年には大字松崎の八割六十戸と片側小林を燒失し損害十五萬圓に及び、昭和三年三月五六十町歩を烏有に歸せしめた山火事ありて一層施設の改善の必要を感じ、昭和四年第九部に同八年第一部に瓦斯倫喞筒を配備し、瓦斯倫喞筒二臺、腕用喞筒七臺を有し、之れが水利に多大の考慮が拂はれつゝあり、要所に火之見が設けられて居る。本村は山間の僻地なるに、かく施設整備され紀律訓練成績共に優秀なるにより、昭和三年六月優良消防組として縣消防義會より旗冠授與を表彰せられたのである。

粟野町消防組　非常掛時代、伊呂波組時代、番組時代を過ぎて明治二十七年既設七番組を解散し八部制の粟野町消防組が公設せられ、町制實施に伴ひ粟野町消防組と改稱し、明治四十五年第九部を增設し、大正十一年第八部に小頭二名を增員し、現在組頭以下四〇一名によつて組織されて居る。喞筒は明治十三年龍吐水を購入したるが本町消火器設置の濫觴で、明治二十二年三月鐵製腕用喞筒三臺を購入し、公設となりてよりは鋭意器具の整備改善に努め、大正十四年第二部に二十馬力瓦斯倫喞筒を配備し、昭和三年更に二臺を加へ、現在瓦斯倫喞筒五臺腕用喞筒五臺を有し、之が水源として昭和六年第一小學校に貯水池を築造し、昭和九年二月　皇太子殿下御降誕紀念事業として用水路を新設し、火之見は鐵骨望樓四基と火之見梯子が要所に設置されて居る。組員協力一致消防事務に精勵し、紀律訓練優秀功勞顯著なるにより、昭和二年二月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰せられ、昭和三年三月谷倉國有林火災に出動して偉功を樹て、東京營林局長より感謝狀を贈られた。

永野村消防組　明治二十七年二月消防組規則の發布せらるゝや、永野村に於ても從來の私設消防組を解散せしめ、改めて永野村消防組は設置せられた、其の後數次の改廢行はれ、現在六部制にて組頭一名、副組頭一名、部長六名、小頭二二名、消防手二四二名、總員二七二名よりなり、組員一人平均受持戸數一・五に當つて居る、施設の主なるものは精鋭なる腕用喞筒六臺で、之を各部に一臺宛配備し、其の他の諸施設亦整備せられ、組員は上下協力して紀律の肅正技能の進歩向上に努め、災害の防禦警戒に竭し、昭和十年五月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰された。

○栃木縣足尾警察署管内

足尾町消防組　銅山を以て有名な足尾町は、爾來屢々大火あり縣下に火災地として有名であつた。之れを征服し火災地の汚名を克服したるものは足尾町消防組の努力が與かつて力がある、其の足尾町消防組は明治二十七年從來の私設消防組を整理して公設せられたもので、公設後數次の改廢行はれ、現在八部制で組頭一名、副組頭一名、部長八名、小頭四〇名、消防手四〇五名、總員四五五名で、組員一人平均受持戸數は一一・五である。其の施設の主なるものは瓦斯倫喞筒三臺、腕用喞筒一一臺、水管車二臺を有し、之れに對し貯水池二五とハイトランド設備を以て消防水源とし、火之見八基がある。組員の訓練に就ては前に其の一例をのべたが、不斷の努力は施設の整備と相俟つて其の功績を顯著ならしめ、昭和三年六月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰せられた。

足尾町には別に銅山消防隊、同婦人消防隊あり、銅山消防隊は町消防組と相聯携して災害の警防に當り消防組及消防隊を補佐するものに帝國在鄉軍人會足尾通洞分會警備中隊獨立小隊、足尾銅山通洞青年聯盟防護隊、等がある。

○栃木縣矢板警察署管内

矢板村消防組　明治二十七年公設消防組として設置せられ、當初十部制組頭以下四九一名であつたが、同四十三年十月十四部制に改め、更に大正十二年三ケ部を增設して十七部制とし、同十四年副組頭を置き、現在にては組頭一名、部長一七名、小頭七三名、消防手七三五名によつて組織せられて居る。公設々置以來施設の改善を圖り、現在にては自動車喞筒一臺、瓦斯倫喞筒三臺、腕用喞筒一三臺、水管車五臺を有し、三百石以上の貯水池六ケ所を設けて水利の完備を期し、火之見一五基の中、町役場構内のものにはサイレンを設備し時報及非常警報に備へてある。昭和六年愛國開墾として國有地河川敷、町有部落有地の占有權を得、畑二町五反歩を開墾し、之より生ずる收入は基金造成及び消防機具購入費に充て、耕作は全組員の勞力奉仕によるは當組の特色である。組員上下協力不斷の努力かく施設の整備、愛國開墾による自力更生となり、組員の紀律訓練亦優秀にして功勞顯著で

ある、昭和二年二月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰せられたる、又謂なきにあらずである。

片岡村消防組　明治二十七年從來の各私設消防組を整理し六部制の片岡村消防組は公設せられ、降つて昭和二年一ヶ部を增組し、其の他組員の增減副組頭の設置等の組織變更あり、現在組頭一名、副組頭一名、部長七名、小頭三二名、消防手四一〇名によつて組織せられ、公設以來機具は漸次改善せられ、精鋭の腕用喞筒七臺が各部に一臺宛配備せられて居る。本村は概ね消防水利不便にして要所に六個の消防貯水池を設け、火災豫防に全員獻身的活動をなして怠らぬ、其の結果昭和六年第一回無火災表彰を受け優秀旗を授與せられ、更に同八年第二回無火災表彰を受け金線一條を授與せられたのである。

大宮村消防組　明治二十五年大宮及び大久保の二字に消防組を設置し、毎年警察官の點檢を受け活動を續けた明治二十七年前記二組を基礎とし九部制の大宮村消防組は公設せられ、其の後數次の組織變更ありて現在に及び組頭一名、副組頭一名、部長九名、小頭三四名、消防手三八三名により組織されて居る。機械器具は公設以來改善に改善を重ね、龍吐水は腕用喞筒となり更に瓦斯倫喞筒となり、松川及び豊富なる灌漑用水を利して萬一に備へてある。昭和五年十一月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰せられたるは、組員の不斷の努力の賜である。

船生村消防組　明治二十七年本村一圓を區域とし六部制の船生村消防組は公設せられ、大正十一年便宜上特に副組頭を置き同十四年制規に基きて正式に副組頭が置かれ、現在にては組頭一名、副組頭一名、小頭三四名、消防手三二四名により組織せられて居る。施設の主要なるものは自動車喞筒一、瓦斯倫喞筒一、腕用喞筒四臺で、國道兩側を始め各所に平作堀ありて水利に惠まれ、組員は上下協力して施設の整備と技能の向上に力め、災害の警戒防禦に竭し、昭和三年六月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰せられ、同七年縣消防義會矢板支部より無火災優秀旗を授與せられた。

泉村消防組　明治二十七年本村一圓を區域として九部制の泉村消防組が公設せられ、大正二年十部制に改め、同十四年副組頭を置きて統制を新にし現在組頭以下五〇六名によつて組織されて居る。公設以來機具は漸次改善せられ新式腕用喞筒一臺が各部に配備せられ、昭和九年十一月第二部に瓦斯倫喞筒一臺が購入された。組員は施設の改善技能の向上を圖ると共に災害の豫防警戒と警火思想の普及に力め、昭和六年十二月縣消防義會矢板支部より無火災優秀旗を授與せられ、更に昭和九年無火災に

依り同樣表彰を受けた。

○栃木縣喜連川警察署管内

阿久津村消防組　本村上阿久津は、舊幕時代明高船による江戸との交通旺にして、參勤交替の諸侯之れにより江戸火消に倣ひて火消が設けられ、明治十八年『テレキ水』を購入し上阿久津大谷の消防組に備へた、明治二十七年各字消防組を廢し五部制の阿久津村消防組公設せられ、逐次部を增加して明治四十三年には十部制となり後副組頭を置きて現在に至り、組頭以下六六二より成る機械器具は公設後改善を重ね、自動車喞筒一臺、瓦斯倫喞筒一臺、腕用喞筒一〇臺を有して居る。當組の特色は破壞隊で第九部が主として之に當り、破壞により消火線を作り災害を最少限度に止むるため相當の訓練が施されて居る。空襲は豫想せらるゝ今後の消防訓練として、當組の方策は時宜に適するものといはねばならぬ。尙本村には消防應援團體として青年消防後援隊あり、外に昭和九年十月婦人消防後援團を組織し、主婦及び女子青年團員中より一部十名乃至三十名團員を得、十部二百餘名の團員は平時家庭的警火思想の普及に力め、有事の場合は出でゝ傷痍病者罹災者の救護、炊出、各家庭の安寧秩序の維持、等を分掌するの仕組である。

喜連川町消防組　喜連川町は舊幕時代火事奉行が置かれ、江戸火消に模して火消が設けられ、降つて明治時代に入り明治九年各町内に消防組の設置を見た、而して明治二十七年從來の消防組を整理し十部制の喜連川町消防組が公設せられ、大正九年第十一部が增設せられ、更に昭和八年第十二部が新設せられ、其の他大正十四年副組頭制が布かるゝ等人員の增減屢行はれ、昭和十年一月現在にては組頭一名、副組頭一名、部長一二名、小頭四三名、消防手五三〇名により組織せらるゝに至つた。消防機具は設置當初は龍吐水を使用したるが漸次改善せられ現在にては瓦斯倫喞筒二臺、腕用喞筒一二臺配備せられ豊富なる天然水利が利用され火之見十八基がある。

上江川村消防組　明治二十七年の公設にかゝり六部制であつて、大正十五年副組頭制を布きて統制の確立を期し、現在組頭一名、副組頭一名、部長六名、小頭三四名消防手三七四名、總員四一七名によつて組織せられ、歴代組頭及び幹部諸氏は施設改善に努力し、腕用喞筒一臺宛を各部に配備し、從來使用せる『テレキ水』を豫備とし水利不便の個所には揚水の爲め足踏喞筒が設備されて居る。昭和三年第四部に鐵骨火之見櫓が建設され、其の他には要所に火之見梯子がある、當組第三部は模範部とし

て昭和七年五月縣消防義會より名譽の部旗を授與表彰された。

熟田村消防組　舊幕時代より火消に名を得た熟田にては、明治初年大字松山に一組の消防隊を設け、後明治二十三年五月『一組』を、同年八月熟田本組を組織し、毎年舊正月八日に出初式を行ひて警察官の點檢を受くるを例とした、明治二十七年前記二組を基礎とし改めて九部制の熟田村公設消防組は公設せられ、降つて大正七年三月一ヶ部を增設して十部制とした、而して屢々組員の增減行はれ又大正十四年副組頭制を布き、現在にては組頭一名、副組頭一名、部長一〇名、小頭五四名、消防手五〇〇名によつて組織せられて居る。公設以來組員上下協力機具の改善に技能の向上を圖り、自動車喞筒一臺瓦斯倫喞筒二臺、腕用喞筒一四臺を有し、消防水利は絹川の支流市堀用水の豐富なる水利を活用されて遺憾なく、鐵骨火之見櫓が各部に建設され、農村消防として稀に見る優良消防であり、災害警防の功亦顯著でてる。大正十三年三月優良消防組として縣消防義會より榮譽の旗冠を授與表彰せられ、其の前年同義會喜連川支部より無火災優秀旗を授與せられた、本村には婦人消防團が組織せられ消防組を補佐し多大の効果を收めて居る。

北高根澤消防組　明治二十年頃より各字に組織された消防組は、毎年正月出初式を行ひ警察官の臨席を得て放水其他の技を競ひ、一朝有事の際は災害防禦に活躍したが、明治二十七年是等の私設消防組を整理し、十一部制の公設消防組は設置せられ、其後數回編成者及び組員の增減行はれて今日に及び、現在は十七部制で組頭一名、副組頭一名、部長一七名、小頭七七名、消防手九〇〇名總員九九六名によりて組織せられ、組員一人平均受持戸數一・六となつて居る、施設の重なるものは瓦斯倫喞筒一臺(第六部)、腕用喞筒一六臺で縱横に貫流する灌漑用水は豐富なる消防水源となし、火之見は次第に鐵骨を增し來つた。組頭不斷の努力は紀律訓練を優秀ならしめ、遂に昭和七年五月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與せらるゝに至らしめた。

氏家町消防組　明治二十七年の公設にかゝり、公設前各字に設置せられたる消防組は公設消防設置を機として解消し、其の使用器具は之を一旦氏家町に寄附し、改めて氏家町消防組にて使用したのである。公設後組員上下協力して組の向上發展に竭し、其の間數次の組織變更行はれて今日に及び、昭和十年一月一日現在にては十部制にて組頭一名、副組頭一名、部長一〇名、小頭三五名、消防手五〇〇名によりて組織せられ、消防器具も改善せられ自動車喞筒一臺、瓦斯倫喞筒二臺、腕用喞筒一三臺

を有し、之れに伴ふ水利施設、道路、其の他の諸設備に就ても多大の用意が拂はれ喞筒の利用に遺憾なきを期し火之見一五基が建設されて居る。組員の紀律訓練亦優秀にして災害の警戒防禦の功勞顯著なるものあり、昭和五年十一月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰せられ、其の第九部は昭和三年六月優秀部として縣消防義會より銀盃を授與された。

○栃木縣烏山警察署管内

烏山町消防組　烏山町は古き城下町だけに其の消防の起源は德川時代にあり、肝煎役があつて火消を指揮監督し、毎年十一月(舊)朔日を非常揃と稱し、此日消防器具の點檢を行ひ、所謂火消氣質横溢し意氣熾なるものがあつた。廢藩置縣後一時火消熱は著しく衰微したが、明治八年四月十七日百餘戸を烏有に歸せしめた大火に消防の必要を痛感し、三組の消防組が組織され、同十年四月瀧田村より出火し、中町、鍛冶町、泉町を燒土に化し、百七十餘戸を燒失したるに鑑み、同十三年各町に消防組が設置され、十七年四月番組制を設け面目を改めた、二十七年五月番組を廢し六部制の烏山町消防組は公設せられ三十五年一ヶ部を增設して七部制とし、降つて大正十三年五月從來の七部制を四部制に改め、昭和七年自動車班を設け、班長以下十二名を以て之を組織し組頭直屬とする等、數次組織の變更あり、現在組頭一名、副組頭一名部長四名、小頭一二名、消防手一四〇名によつて組織せられて居る。喞筒は改善を重ね現在にては自動車喞筒一臺瓦斯倫喞筒四臺、腕用喞筒四臺を有し、是等喞筒に對應し水利の便を期するため六十間々隔に水量百石の貯水池設置の計畫を樹立し、既に完成せるもの五十三個にして着々工事を進めつゝあり、全部完成の曉は六十個の大貯水池を有することゝなるのである。組員の紀律は嚴肅にして技能熟達し、平素竈檢査を行ひて一般警火思想の普及を計り、昭和六年十月以降昭和九年末に至るまで無火災の好成績を擧げ得たるは、組員の不斷の努力の然らしむる所といふべく、縣消防義會烏山支部より無火災表彰を受くること三度にして、昭和二年二月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與せられ、更に昭和十年二月十一日栃木縣知事より縣下表彰の最高たる表彰旗を授與せられたる亦故なしとせず。當組を應援するものに建築事業に從事するものゝ組織する勇消團と婦人防火會あり、又組の發達を後援するものに元消防組役員より成る消防後援會がある。

武茂村消防組　明治二十七年五月の公設にかゝり、設置當時は第一部北向田、第二部久那瀬の北部、第三部久

那瀬の南部、第四部松野であつたが、明治四十一年一月第二第三を併せて第二部とし新に富山を第三部とした、組員數も數次增減行はれ大正十五年副組頭を置きて今日に及び、組頭一名、副組頭一名、部長四名、小頭二八名消防手二五五名により組織せられ、創設時代の「テレキ水」龍吐水等は漸次改善せられ、瓦斯倫喞筒二臺、腕用喞筒七臺を有し。一般に水利に便なるも特に各部に貯水池一個宛が配備されて居る。組員の不斷の努力はかく設備を整備せしめ且つ紀律訓練優秀にして、昭和九年五月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰された。

下江川村消防組　明治二十七年從來の各字消防組を整理し、消防組規則に準據し村內一圓を區域とし下江川村消防組は公設せられ、組を分ちて十一部とし、現在組頭一名、部長一一名、小頭六四名、消防手六六八名、總員七六五名によつて組織せられ、組員一人平均受持戶數一・六に當る。公設以來組員協力して施設の改善と技能の進歩向上を圖り、テレキ水、龍吐水等の原始的器具は次第に改良せられ、各部共新式腕用喞筒が配備せられ、第一、第二、第三、第四、第五、第六、第九、第十の各部は一臺宛、第八部は二臺、第七、第十一の各部は各三臺を有し、其の他の器具亦整備されて居る。

境村消防組　明治二十七年、本村八大字中大澤及び小

原澤の各大字を除きたる六大字を區域とし六部制の境村消防組を公設し、組頭一名、部長六名、小頭二二名、消防手二七九名によつて組織され、降つて大正十五年一月二ヶ部を增設して八部制とし、部長二名、小頭九名、消防手七九名を增員し、昭和九年十二月副組頭を置きて統制の確立を期し、現在組頭一名、副組頭一名、部長八名小頭三一名、消防手三五八名より成り。組員一人平均受持戶數一・六に當り、腕用喞筒一四臺が配備されて居る消防水利は極めて不便にして個人の井戶及び溜を利用するに過ぎず、僅に第六部に消防用貯水池數個があるのみで水利改善の方策が講究されつゝある。

向田村消防組　明治十九年各大字に消防組が設置されたが同二十七年此等の全部を解消して新に本村一圓を區域とする五部制の向田村消防組は公設せられ、昭和六年副組頭を置きて陣容を整へた、組員數は屢々變更され、現在にては組頭一名、副組頭一名、部長五名、小頭二〇名、消防手二六一名、總員二八八名であり、組員一人平均受持戶數一・二に當る。施設の主なるものは腕用喞筒五臺であるが、村內概して水利惡しく近く貯水池築造が企圖され、組員は鋭意火災の豫防に力め、昭和六年縣消防義會烏山支部より無火災表彰を受け優秀旗を授與せられた。

○栃木縣茂木警察署管內

茂木町消防組　公設消防組設置の直前には町內各町に獨立して設けられたる消防組は十組を算へた、明治二十七年此等の消防組の全部を解散せしめ、九部制の茂木町消防組が公設せられ、後桔梗町の發展に連れ同町に一ヶ部を新設して十部制とし、大正十五年副組頭を置き現在にては組頭一名、副組頭一名、部長一〇名、小頭五四名消防手六二〇名、總六八六名によつて組織せられ、組員一人平均受持戶數二である。公設以來施設の改善に努め現在使用喞筒は瓦斯倫喞筒四臺、腕用喞筒一三臺、水管車三で、逆川と灌漑用水路は充分なる消防水源をなし、火之見一一基が警報のために備へてある。組員は上下協力して組の向上發展と技能の進歩を圖ると共に災害の警戒防禦と警火思想の普及に力め、無火災表彰を受くること三度に上り、昭和三年六月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰せられ、更に昭和十年五月第三部は優秀部として縣消防義會より名譽の部旗を授與せられた。

小貝村消防組　明治二十七年各字に獨立して設置されありし消防組を整理し、村內一圓を區域とし八部制の小貝村消防組は公設せられ、其の後數回の組織變更行はれ大正十四年副組頭制を布き、現在組頭一名、副組頭一名部長八名、小頭四三名、消防手四九六名、總員五四九名によつて組織せられ、組員一人平均受持戶數一・六に當る施設の改善には設置以來最も意を用ひられ、現在使用の喞筒は腕用喞筒一二臺で、小貝川其の他の小流が豐富な消防水源をなし居る。昭和七年五月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰せられ、第一部は縣消防義會茂木支部より無火災表彰を受けたるは、紀律訓練優秀にして諸施設整備され、災害警防の功勞顯著なるを有力に物語り、組員不斷の努力よく之を贏ち得たものといへる。

市羽村消防組　明治十九年各大字に設けられた各獨立の消防組は明治二十七年悉く之を解散し、改めて村內一圓を區域とする市羽村消防組は公設せられ、漸次部を增設し十三部となり、大正十四年には副組頭を置く等の變遷ありて現在に及び、組頭一名、副組頭一名、部長一三名、小頭六五名、消防手六八八名、總員七六八名にして組員一人平均受持戶數一・四となつて居る。公設以來幼稚なりし消防施設は漸次改善せられ、現在使用喞筒は一四臺で、之れに伴ふ諸施設亦整然、組員一致協力の精進は紀律訓練を優秀ならしめ、災害の警戒防禦の功顯著であつて、昭和五年十一月優良消防組として縣消防義會よ

り旗冠を授與表彰せられた。

逆川村消防組　明治二十七年消防組規則發布せらるるや、公設消防組設置の前提として先づ從來の各字に獨立して設置された消防組を全部整理し、改めて逆川村消防組が公設消防組として設置され、其の後數次の組織變更ありて今日に及び、組を分ちて八部とし、組頭一名、副組頭一名、部長八名、小頭四五名、消防手四八七名、總員五四二名によつて組織せられ、組員一人平均受持戸數一・八となつて居る。設置以來組員協力して向上發展の一路を辿り、施設は改善せられ現在使用喞筒は腕用喞筒一三臺、其の他の器具亦整備せられ、昭和八年五月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰せられたるは、組員不斷の努力の功といふべし。

○栃木縣上三川警察署管內

上三川村消防組　明治十九年各字單位の消防組が設置せられたが、同二十七年之を解散せしめ改めて七部制組頭以下二五〇名の上三川町消防組は公設せられ、次で町村の併合により六ケ部を併せて十三部制となり、明治三十二年第十四部、翌三十三年第十五部、更に昭和二年第十六部を增設し、其の間組員の整理增員あり、大正十三年副組頭が置れ、現在組頭一名、副組頭一名、部長一六名、小頭三六名、消防手五〇五名、總員五五九名によつて組織せられ、組員一人平均受持戸數一・九に當つて居る。昭和元年第一部に、同三年第二部に、瓦斯倫喞筒各一臺を配備し、現在瓦斯倫喞筒二臺、水管車二臺、腕用喞筒十四臺を有し、漸次腕用喞筒を瓦斯倫喞筒に改むるの計畫あり、之れに伴つて水利施設改善の必要を生じ、貯水池の增設が目論まれて居る。鐵骨火之見櫓は警察署構內に建設されたるを初めとし、第三、第十、第八に順次建設せられ、其の他の木造火之見梯子も追々鐵骨に改めらるるであらう。當組第二部は優秀部として昭和六年五月縣消防義會より旗冠を授與表彰せらるるの名榮を得た。

明治村消防組　明治二十七年公設せられ當初七部制であつたが、同三十年十一月第八部、同三十一年第九、第十の二部を增設し、更に大正十年第十一部が新設され、同十五年十二月副組頭を置き、其の間人員の整理增加等が行はれて今日に及び、組頭一名、副組頭一名、部長一一名、小頭四四名、消防手四二六名、總員四八三名によつて組織せられ、組員一人平均受持戸數一・四となつて居る。現在使用喞筒は腕用一四臺で各部に一臺宛、第二部に限り四臺、が配備せられ、概して水利よろしきも第二第八の二部は稍不便なるを以て消防專用井戸要所に堀

鑿し、火之見は第二部に鐵骨望樓一基、其の他各部に木造火之見梯子がある。

本郷村消防組　明治二十七年の公設にかかり、當初十部制であつたが明治四十年二ケ部を增設して十二部制とし、大正十年定員を改正し同十五年副組頭を置きて今日に及び、組頭一名、副組頭一名、部長一二名、小頭四一名、消防手四四五名、總員五〇〇名によつて組織せられ組員一人平均受持戸數一・五に當つて居る。現在施設の主要なるものは瓦斯倫喞筒一臺、腕用喞筒一一臺で、第一部及第二部に鐵骨火之見櫓各一基あり、其の他の部には要所に木造火之見梯子が設けられて居る。

藥師寺村消防組　明治二十七年七部制組頭以下三〇〇名の公設藥師寺村消防組は設置せられ、數次組員數を增減し大正十三年には副組頭を置きて今日に及び、現在には組頭一名、副組頭一名、部長七名、小頭二九名、消防手三二〇名、總員三五八名によつて組織せられ、組員一人平均受持戸數一・八に當つて居る。設置以來組員上下協力して組の向上發展に竭し、喞筒は新式腕用喞筒七臺を各部に一臺宛配備し、其の手入保存見るべきものあり之れに伴ふ器具整然、其の他の諸施設亦よく整ひ、組員の紀律訓練優秀で災害警防の功顯著である、昭和五年十一月優良消防組として縣消防義會より旗冠を授與表彰せられ、同六年縣消防義會上三川支部より表彰を受たるは故なきにあらず。

第八章　賛助員略傳

（順序不同）

千葉縣千葉警察署管內

蘇我町　鴻崎豊吉氏

氏は蘇我町屈指の豪商にして又地方政界の重鎭である若くして千葉中學に學びて俊才の聞あり、業卒りて近衛歩兵第四聯隊に入營優秀な成績を擧げて下士適任章並に善行證書を得、除隊後帝國在鄕軍人會蘇我町分會役員同分會長に歷任し分會の爲めに竭すこと十年、帝國在鄕軍人會長川村大將より表彰され、大正十三年衆望止み難く前組頭の後を受けて蘇我町消防組頭に就任、爾來其の職にあつて功勞多く表彰を受くること二十數回、縣下組頭中の白眉である、町會議員、方面委員、家屋稅調査委員金錢貸借調停委員、漁業組合長、等幾多の公職にあつて信望極めて厚く、氏の經營に係る肥料商は日に繁榮を加

へつゝあるのである。

都　村　日暮權次氏

氏は白井村に生れ資性溫厚にして謙讓、大正七年近衛歩兵第三聯隊除隊後懇望せられて日暮家の人となり、在郷軍人分會長として青年の訓練指導に盡して貢獻大なるものがある、其の人格手腕並に才氣に村民氏の消防組頭就任を請ふて止まなかつたので、遂に大正十一年都村消防組頭に就任して今日に及び、功勞極めて顯著である、氏は又村會議員、區長、學務委員、方面委員、戸數割調査委員、農會評議員、等の公職にあり農村自治の開發に身命を擲て努力すること十有五年、村民に師表と仰がれて居る。

都　村　中島光太郎氏

氏は精農家を以て知られ質實剛健、大正十一年消防界に入り、同十四年都村消防組小頭を命ぜられ、昭和二年推されて第五部長に就任、組頭を補佐して組の向上發展と組員の指導に竭して令名あり、昭和五年千葉警察署管内消防聯合會より賞狀を授與せられ、其の他表彰せらるゝこと一再ならず、村會議員、方面委員、等の公職にあり、殊に區長として部落民の休戚を擔ふこと二期、功勞甚だ大にして年と共に名望愈高いのである。

白井村　淺川安次郎氏

氏は白井村屈指の素封家にして、日露戰爭に出征して偉勳あり勳八等に叙せられ、村會議員たること八年、又白井村助役の現職にありて村政に鞅掌し、區長、家屋稅調査委員、等に擧げられ自治に關する功勞極めて多く、大正九年九月白井村消防組小頭を拜命、後二年にして部長に推され、昭和七年衆望により組頭に就任し、組の發展と組員の指導に竭して慈父の如く敬慕せられ、學校購買組合理事、農會役員、社寺總代、等として社會公共事業に盡瘁して德望厚く、村民の等しく尊敬して措かざる所である。

白井村　土屋毅一氏

氏は資性溫厚にして素朴、明治四十五年白井村消防組に入りて消防人となり、大正七年小頭を拜命し、後幾何もなく推されて部長の要職に就き、消防改善に竭して今日に及び、十ケ年勤續賞其の他賞狀を受くること枚擧に遑なく、又區長として部落民の啓發に努め、養兎養鷄等農村副業の開發に力を致し、其の功績亦大である。氏の嚴父周五郎氏は村會議員其他公職にあり、村治に參與し自治の功勞者として知られ、齡古稀を過ぎ尙矍鑠として壯者を凌ぐといふ。

千葉縣船橋警察署管内

船橋町　植草佐吉氏

氏は明治四十二年消防人となりて活躍、同四十四年近衛歩兵第三聯隊に入隊、軍務に精勵し下士適任章及善行證書を授與せられて除隊後、再び斯界に入り小頭部長副組頭と歷任し、昭和五年組頭に就任して今日に及び、組の向上發展と組員の素質の向上技能の進歩に努力し、組として金馬簾三條を得せしめ、年功徽章功勞章を授與表彰せられた、又町會議員として町治町政に奔走し、各般の社會公共事業に關して貢獻大なるものあり、海神區に盛大なる肥料商を營み、年と共に信望益厚きを加へつゝあるのである。

船橋町　横瀨恒太郎氏

氏は齡未だ不惑に達せず進取氣鋭、大正十年消防界の人となり、小頭部長を歷任して昭和八年船橋町消防組副組頭に擧げられ、寢食を忘れて組の向上發展に竭し、組員の統制と技能の進歩を圖り、昭和八年縣知事より其の功績を表彰せられたるの外賞狀を授與せらるゝこと數次今や船橋町消防組の柱石と仰がれ、年と共に進む手腕信望は愈重きを加へて居る、船橋一と稱せらるゝ菓子舗を營み繁榮を極むるも亦氏の性格の反映といふべし。

津田沼町　三橋彌惣吉氏

氏は篤農家を以て知られ資性溫厚篤實、明治四十一年本町消防組が公設となるや間もなく入りて消防人となり昭和五年小頭を拜命、昭和八年衆望により第三部長の要職に就きて今日に及び、組頭を補佐して組の發展と部員の素質及び技能の向上に努め、業績甚だ擧り、表彰せらるゝこと數次、組員及町民信望極めて大である。

津田沼町　織戸一郎氏

氏は近衛歩兵第四聯隊に入りて軍務に服し精勵を以て聞え、除隊後在郷軍人分會幹事、青年訓練所指導員として貢獻大なるものあり、帝國在郷軍人會長鈴木莊六大將より賞狀を賜り、國勢調査委員、農業調査員、等に擧げられてよく其の手腕を發揮し、社會公共事業に功勞あり殊に消防に關しては早く既に消防人となり、昭和八年一月小頭拜命と同時に推されて津田沼町消防組第六部長に就任し、組頭を補佐して消防事業の改善發達に盡し、信望極めて大である。

津田沼町　織戸政吉氏

氏は農を以て業とし、夙晨薄暮鍬鋤に親みて倦まず、精農家として知られ、青年團支部長、生産組合長として令名あり、大正十二年津田沼町消防組消防手を拜命し、昭和七年小頭に擧げられ、翌八年衆望により第七部長に就任、寢食を忘れて消防事務に盡瘁し、溫厚なる資性と清濁併せ呑むの雅量とは、其の熱誠と相俟つて典型的消

防幹部と仰がれて居る。

大和田町　長岡　益氏

資性溫厚にして篤實精農家として名あり、國勢調査員統計調査員等に擧げられて煩瑣なる調査事務を完了し、在鄕軍人分會評議員其の他社會公共事業に關し寄與大なるものがある、大正十年十九歳にし消防界に入り、大正十三年小頭に擧げられ、昭和六年大和田消防組第四部長に推され、消防事務に獻身的努力を致すこと十有四年、其の功績極めて顯著である。

千葉縣市川警察署管內

市川市　平松元治郎氏

市川市(元八幡町)の資産家にして菓子商を營み、元八幡町々會議員、區長、學務委員等として自治に關する功勞顯著なるものあり、八神幡社氏子總代として大いに敬神思想を皷吹して日本精神の發揚に力め、社會公共事業に盡瘁して寄與する所多く、殊に消防に關しては私設消防時代世話役として八幡消防組の發展に盡し、明治四十二年公設せらるゝと同時に第二部小頭兼部長を拜命、昭和五年副組頭となり、同七年組頭に就任し、八幡消防組の發展は氏の力に負ふ所極めて多く、其の人格と共に眞に組の柱石と仰がれて居るのである。

行德町　飯塚米藏氏

氏は行德町原木に廣大なる養魚場を經營し、區長、町會議員、資力調査員、町土木委員、等幾多の公職にあつて自治のために奔命して功勞極めて多く、社會公共事業に寄與する所亦大である、殊に稀に見る消防熱心家にして、私設消防組時代世話人として活躍し、公設となりてよりは小頭副組頭を歷任し、昭和六年衆望により組頭に就任して今日に及び、熱誠以て消防事務の改善に盡し、表彰せらるゝこと數次、氏の人格と手腕とは組員及び町民の師表として仰望せられて居るのである。

行德町　岩崎慶次郎氏

氏は關ヶ島に盛大なる酒商を營み業務日に殷賑を極めて居る、夙に社會的施設としての消防の重要性に鑑み、其の向上發展のため入りて消防人となり、現に推されて行德町消防組副組頭の要職にあり、組頭を補佐して消防事務の向上發展に竭して功勞顯著なるものあり、或は縣知事より、或は市川警察署管內消防聯合會より表彰せらしこと數次に及び、信望甚だ厚きものがある。

行德町　石井利秋氏

氏は原木の豪農であつて、大正十年佐倉步共第五十八聯隊に入り、軍務に精勵して善行證書を授與せられ、除隊後帝國在鄕軍人會行德分會副會長に推され、又青年團原木支部長に擧げられ、青年の訓練指導に貢獻する所大であつた、消防に關しては齡十八歳にして消防人となり昭和八年十一月選拔せられて行德町消防組第十四部々長に就任、組頭を補佐して粉骨碎身消防事務の改善に當り年と共に進む手腕と人格とは、組員の信望を愈厚からしめて居る。

行德町　篠田喜一氏

氏は上妙典に釀造工場を有する篠田商店の本家に生れ現に醬油小賣部主任の地位にありて活躍しつゝあり、先に大正十一年世田ヶ谷野砲兵大隊に入り精勵を以て聞え下士適任章を得て除隊後、在鄕軍人分會副會長、理事等として同會の爲めに寄與し、青年團上妙典支部長として青年の指導陶冶に努めて令名高く、夙に消防人となりて活躍し、昭和八年十一月部長に任命せられ、天禀の義俠心を發揮して其の任務の遂行を期し、典型的消防幹部として稱揚せられて居る。

行德町　金柱榮一氏

氏は十七歳にして消防人となり、大正十年朝鮮羅南第十九師團に入りて兵役に服し、後除隊となるや、再び入りて消防事務に竭し、昭和七年十一月推さて部長の要職に就きて今日に及び、軍人精神を移して消防精神の振興に力め、大いに紀律を肅正し功勞大である、氏は又在鄕軍人分會評議員たること四年、大いに同會のために寄與する所があつた、家業なる農事に對しては其の精勵なること多く其の比を見ず、精農家として村民の師表と仰がれて居る。

行德町　宇佐美三郎氏

氏は神道無念流の達人にして千葉縣警察部劍道師範であつたが、昭和三年勇退して行德に道場を開きて門人を指導誘拔し、我國劍道の向上と日本精神の作興に竭しつゝあるのである。昭和八年推されて行德町消防組第一部長に就任し、爾來組頭を補佐て消防事務の改善と組員の練磨に力を致し、部員の信服を受け名聲甚だ旺である。

行德町　鈴木敏氏

氏は齡而立を過ぎて幾歳ならざるも肥料商を營みて業務日に盛大を極めて居る。嘗ては青年團河原支部長として青年の指導陶冶に當りて令名があつた、消防熱心家たる氏は年十九にして斯界に入り、常に義俠的精神を發揮して活躍すること約十二年、昭和七年小頭に擧げられ後幾何もなく部長の要職に就き、組頭を補佐して消防事務の改善と組員の指導に力めて今日に及び、信望極めて厚きものがある、典型的消防幹部として其の將來が囑されて居る。

松戸町　石塚龜次郎氏

氏は大正十四年松戸町消防組小頭を拜命、昭和二年部長に推され、同四年一月副組頭に就任して本部長を兼ね越えて七年組頭となつたが、八年四月明松戸合併の際一時退職、合併後再び衆望により組頭に就任して今日に及び、消防事務の改善に努力して功勞顯著なるものあり、功勞徽章其他表彰を受くること數次、組員皆其の功と德とに信服し統制自ら成り業績極めて擧る、又區長、戸數割調査委員、等に擧げられ自治に關する功勞多く、在鄕軍人分會副會長理事として同會の爲めに寄與し、其他社會公共事業に貢献せし所大である。

松戸町　深山榮一氏

氏は下矢切の豪農にして德望高く、町會議員、耕地整理組合副組合長、方面委員、戸數割調査委員、區長代理等の公職にあつて自治に關する功勞多く、氏子總代其の他社會公共事業に關與し貢獻する所亦大である。殊に消防に關しては私設消防時代世話人として盡力し、昭和五年松戸と合併公設となるや第一部長に推され、後幾何もなく副組頭に就任し、組頭を補佐して組の向上發展と組員の統制に力め、近衛步兵第四聯隊にありて練磨された

る軍人精神を移して消防精神を作興し、服裝改善に努力する等、功勞顯著なるにより功勞章授與、其の他の表彰を受くること數次、組の柱石と仰がれて居る。氏齡未だ不惑に達せず其の手腕人望今後の氏の發展愈大なるべきを思はしむるのである。

松戸町　澤田秀雄氏

自治の功勞者として知らるゝ父君の傳統を承けたる氏亦區長として部落民の休戚を擔ひて其の啓發に力め、夙に消防の改善に盡瘁し、大正十四年小頭を拜命、昭和四年部長に推され、更に本部長に就任、精勵其の職に盡して今日に及び信望極めて厚く、氏の手腕人望に其の將來が囑されて居る。

松戸町　山口清一郎氏

自治の功勞者であり、公設以來昭和三年まで明村消防組頭として令名あり、信用組合長たる岩次郎氏を父君とする氏は、步兵第四十九聯隊にありて兵役に服し、少尉に任ぜられ、在鄕軍人分會長、青年訓練所指導員として功勞あり、昭和二年消防人となり、同六年小頭を拜命、更に同八年第七部長に推され、見事なる統制に令名甚だ高く、典型的消防幹部として其の將來が囑せられて居る

松戸町　近藤竹松氏

近衛步兵第四聯隊にて兵役を了したる氏は、在鄕軍人分會班長として同會のために貢献すること五年、組長、耕地整理組合會議員、町農會害虫驅除委員、等の現職にありて自治に又農事に貢献し、夙晨簿暮鍬鋤に親みて倦まず精農家として知られて居る。消防に關しては私設時代世話役として消防に力め、公設となるに及び班長を經て昭和七年十一月小頭を拜命、翌八年六月第一部長に推されて今日に及び、功績大にして數次表彰せられた。

松戸町　田中與助氏

氏の嚴父淺次郎氏は私設消防時代世話人として活躍した、其の傳統を承けた氏は明治二十九年消防人となり、爾來松戸町消防のため活躍すること四十年に近く、現に第四部長の要職にあり、組の生字引として尊敬せられ、慈父の如く敬慕せられて居る、氏の消防に關す功勞は犧牲的精神を發揮してなしたる献身的活躍のみならず、自動車喞筒購入に際しては私財を投じて其の擧を容易ならしめたる等、義俠的行爲實に枚擧に遑なく、縣知事より表彰せられしこと數次に及んで居る、聖德太子會の副會長として思想の善導に竭し、松戸町の料理業者としても信用絕大なるものがある。

富勢村　成島勇氏

氏は富勢村の豪農に生れ、札幌農科大學に學び卒業後直ちに臺灣製糖株式會社に入り、農務課長となり、在職十年にして歸鄕し、大正十二年富勢村々長に就任と同時に富勢村消防組頭となり、消防の向上發展に竭し組をして金馬簾二條を得せしめ、功勞顯著にして數次表彰せられた、現に縣會議員、縣參事會員、富勢村々長、郡農會長、煙草耕作聯合組合長、富勢村消防組頭、大日本消防協會代議員並に評議員の要職にあり、又地方政界の重鎭である。

富勢村　倉持庄太郎氏

明治四十一年下志津騎砲兵隊に入り精勵軍務に服し、下士適任章及び善行證書を授與せられたる氏は、私設消防時代小頭として活躍し、公設となりて後大正十一年第二部長を拜命し、昭和七年推されて副組頭に就任して今日に及び、大正八年松戸警察署管内消防聯合會より表彰せられたるを初め、昭和二年々功徽章、昭和三年功勞章等を授與表彰せられ、昭和四年一月　聖上陛下御親閲に際し選拔せられて參加の光榮に浴したるは、氏の人格の然らしむる所にして組員の信望極めて大である。

富勢村　染谷一郎氏

氏は思想剛健青年團支部長として青年の指導陶冶に當りて令名あり、大正四年富勢村消防組公設せらるゝや入りて消防人となり、初代部長たりし嚴父九郎氏と親子相協力して消防事務の改善に竭し、昭和二年小頭を拜命し

同四年推されて部長の要職に就きて今日に及び、其の功績顯著なるにより大正十五年松戸警察署管内消防聯合會より表彰せられ、重ねて昭年八年縣知事より表彰せられ組員より絶大の信望を受けつゝあるのである。

富勢村　飯田輝三氏

氏の嚴父佐太郎氏は初代部長として富勢村消防界に活躍して聲名高かりしが、氏亦父君の志を承け大正八年消防人となり、大正十一年第四部長に任ぜられて今日に及び、斯界に活躍すること二十年、部員皆氏に心服し統制自なるの慨がある、昭和四年縣知事より其の功勞を表彰せられたる亦故なしとしない、氏は啻に消防功勞者たるのみならず、十八年間統計調査員として盡瘁し、昭和五年十一月時の内務部長鈴木茂氏より表彰せられ、又青年團久寺家支部長として青年の指導陶冶に當ること四年、貢献大にして郡青年團より表彰せられた。

富勢村　野口俊一氏

氏は大正四年消防人となり、大正十四年小頭を拜命後幾何もなく第三部長に推され、爾來十年消防の改善に竭し、富勢村消防組の今日あるは氏の力に俟つこと甚だ大である、自治に關しては統計調査員として努力十五年にして功績大なるものあり、此等功勞により表彰せらるゝこと數次に及んで居る、氏は又精農家として知られ、其の精勵他に多くの比を見ず、氏の崇高なる人格と共に村民の師表と仰がれて居る。

富勢村　關根正氏

氏は年十八歳にして消防人となり、大正七年中野電信隊に入營のため一時消防人生活を中斷したるも、除隊後再び入りて消防に盡瘁し、昭和七年富勢村消防組第一部長を命ぜられて今日に及び、組頭を補佐して消防事務の改善に力め、部下を指導して其の技能を進歩せしめ、功勞の大なるものあり數次表彰せられた、富勢村青年團布施分團長として青年の指導陶冶に當りて令名あり、嘗ては在郷軍人分會常務理事として四年間同會のため寄與大なるものがあつた、家業たる農事に精勵なると資性の溫厚なるにより、村民の信望絶大なるものがある。

馬橋村　大川五兵衛氏

氏は埼玉縣吉川町に生れ、懇望せられて大川家の人となり、岳父逝去と共に五兵衛を襲名、大正二年馬橋村々長に就任、同六年重任せられ、大正八年縣會議員に當選し、同時に縣參事會員となり、其の他村會議員、所得税調査委員、等に擧げられ、大正十二年二月公設消防組設置せらるゝや、衆望により組頭に就任して現在に及び、同年松戸警察署管内消防聯合會設置と共に其の副會長に推され、縣消防義會理事たること數年、現に其の評議員

である、各方面に涉る氏の功績は今更言ふまでもなく、溫厚篤實なる資性、圓熟せる手腕、崇高なる人格、實に馬橋村に於ける第一人者にして、同村自治及消防界の恩人である。

馬橋村　齋藤新藏氏

氏は德川時代なれば冥加出役を仰せ付けらるゝ建築業を營み明治三十一年私設消防組時代より馬橋消防界に活躍し、大正九年公設となるや小頭を拜命後五年にして部長に推され、往時歩兵第二聯隊にありて練磨せられたる軍人精神を移して消防精神の振興に力め、大いに紀律を肅正して今日に及び、其功績を表彰せらるゝこと數次、昭和四年一月六日　聖上陛下御親閲に際し選ばれて參列の光榮に浴したるは、實に氏の功勞顯著なる賜である、氏の兄弟三人共に國家の干城として選ばれ、昭和七年勅令第二五九號により勳賞局總裁より賞狀を下附せられたるは、家門の譽といふべし。

馬橋村　伊澤義之助氏

氏は資性溫厚にして道義に厚く、精農家を以て知られ村内組合理事として隣保の誠を致して令名高く、大正七年消防手を拜命し災害の警防に竭すこと十有餘年、昭和六年第六部長に任ぜられ部員の指導訓育に當りて今日に及び、功績顯著にして數次表彰せられ、村長より木杯一個を授與せられ、組員及び村民の信望極めて大である。

馬橋村　中村喜八氏

氏は馬橋に酒類販賣を兼ねて料理業を營み業務盛大を極めて居る、消防熱心家たる氏は大正三年私設消防組時代より消防に盡力し、大正九年公設となるに及んで小頭を拜命し、後幾何ならずして第二部長に推され、研究心の旺盛なる氏は瓦斯倫喞筒の操縱に關しては組中の第一人者であり、組員を指導するに懇篤を極め、消防事務の發達に貢献大なるにより、縣知事より表彰を受け組員の信望頗る大である。趣味を圍碁に持ち造詣深しといふ。

馬橋村　小川三吉氏

氏は馬橋村の資産家又篤農家として知られ、所得税調査委員其の他に擧げられて功勞あり、氏子總代其の他各般の社會公共事業に盡瘁して令名高く、殊に消防に關しては馬橋消防組の最古參者で、公私時代を通じ消防に關係して既に三十年、大正九年部長に任ぜられ今日に及び功勞顯著にして縣知事より表彰せらるゝこと數次、組員の信望村民の信頼頗る大である。

馬橋村　横山郁三氏

氏は近衛輜重兵大隊に於て兵役に服し精勵して上等兵に擧げられ、除隊後在郷軍人分會班長として軍事智識の普及に努め、大正九年公設消防組成立と同時に入りて消

防人となり、後幾何もなく第七部長を命ぜられ、組頭を補佐して組の向上發展と組員の指導訓育に精進し、功勞の大なるものがある、氏の嚴父定市氏は村長其の他の要職にあつて自治の功勞者として知られ、父子共に村民の瞻望する所となつて居る。

田中村　窪田甚造氏

東京輜重兵大隊にあつて兵役を了したる氏は、在鄕軍人分會長として同會のために貢獻し、消防人としては第一部長を經て大正十三年組頭に就任、大いに消防事務の發展消防施設の整備改善に努力し、田中村消防組の今日あるは氏の力に負ふ所大であり、縣消防義會より功勞章年功徽章を授與表彰せられたる、亦故なきにあらずといはねばならぬ、手腕信望優れたる氏は、推されて村長、村會議員、煙草耕作組合長、青年團長、女子青年團長の顯職に就き、自治に關し社會公共事業に關し氏の關與せざるはなく、其の圓滿崇高なる人格は村民の師表たるのである。

田中村　飯塚德太郎氏

氏は田中村花の井にて高名なる精農家であつて精勵敏くべきものあり、青年團分團長として青年の指導訓育に當つて令名高く、大正十一年消防人となり、昭和八年小頭を拜命し、昭和八年十一月部長を命ぜられ、組頭を補佐して施設の改善組員の指揮指導に當り、典型的消防幹部として信望極めて厚きものがある。

田中村　岡本嘉吉氏

氏の嚴父利助氏は村會議員、國勢調査委員、學務委員資力調査委員等、の要職に歷任し、自治の功勞者として知られ、氏も亦父君の傳統を承け田中村青年團舟戸支部長として青年の指導訓育に當りて令名あり、昭和五年推されて消防部長に就任し、組頭を補佐して消防組の發達改善を圖り、組員の指揮指導に當り功勞顯著なるものあり、組員の信望甚だ大である、知事及び松戸警察署管內消防聯合會より表彰せられたる、亦故なきにあらずといはねはならぬ。

田中村　寺田正俊氏

氏は田中村の豪農に生れ、若くして東京に遊學し、明治大學に學び、業を卒りて歸鄕、田中村役場書記を奉職五年にして勇退、村會議員、傳染病豫防委員、戶數割調査委員、等に擧げられ自治に關し貢獻する所多く、田中村消防組第二部長に推され、消防事務の改善及び組員の指導訓育に盡し功勞顯著なるものあり、縣知事其の他より數次に亘り表彰せられ、組員の信望村民の信賴共に極めて大である。

小金町　高橋國之助氏

氏は天資聰明にして溫厚、鴻之臺野砲兵第十七聯隊にありて軍務に服し、精勤して伍長に昇進し、除隊後在鄕軍人分會長として同會のため盡瘁すること十二年、帝國在鄕軍人會長より其の功を表彰せられ、大正十四年消防人となり、昭和六年副組頭に擧げられて今日に及び、克く組頭を佐けて消防事務の改善向上と組員の統制を圖り殊に紀律の肅正と消防精神の振興に、鍛練せられたる軍人精神を基として其の徹底を期し、功勞極めて顯著である、氏の生家は小金町の資產家であり、嚴父米三氏は自治の功勞者として知られ、氏亦町會議員、水利組合委員等の要職にあり父子共に町民の信望極めて大である。

小金町　鈴木喜太郎氏

氏は私設消防時代世話人として消防に活躍し、大正十四年公設となると同時に小頭を拜命、後二年にして第六部長に推されて今日に及び、たゞに消防事務に精勵するのみならず、私財を投じて喞筒及び器具を寄附する等貢獻大なるものあり、現に町土木委員、町會議員、區長、信用組合長等の要職にあつて町發展に獻身的努力を盡し第五區の道路惡しく通行人の困苦見るに忍びずとし、自費を以て之れを修覆する等の德行擧げて數ふるに遑なく町民共の德を感謝せざるものはない。

小金町　石井卯吉氏

氏は大正七年消防界に入り非常世話人として活躍し、公設消防組となりてより愈活動目醒しく、昭和四年小頭を拜命して今日に及び、功勞極めて大である。氏は啻に消防に就てのみならず、青年團長として青年の指導訓育に當り、統計調査委員として自治に貢獻し、自警組合長として隣保に盡す、等の功績少なからず、村民の尊敬措かざる所である。

八木村　鈴木歲太郎氏

大正三年十月八木村消防組の公設せらるゝと同時に第五部長を命ぜられたる氏は、同十二年副組頭に推され、翌十五年組頭に就任して今日に及び、消防施設の改善整備に專念し、遂に金馬籠三條を得るまでに大成し、名組頭の名縣下に高く、縣消防義會より功勞章等を授與して其の功績を表彰せられ、其の他表彰賞狀等を受くること一再ならず、大正四年村役場書記の職を奉じ、昭和三年助役に就任し、村會議員たること二期、村治村政の樞機に參與し、青年團長として青年の指導訓育に當り、其の功績亦極めて大である、溫厚なる天資、圓熟せる手腕、素封家たる地位、三拍子揃ひたる村の第一人者といふべきか。

八木町　岩佐保氏

氏は村會議員區長等の經歷を有し、自治の功勞者とし

て知らるゝ作二郎氏の二男に生れ、資性怜悧才氣眉宇に漲るの風貌がある、十八歳にして消防人となり、昭和六年小頭を拜命、同八年部長に推され、當時縣下最年少部長であつたが、沈毅果斷急に處して處置を誤らず、平時施設の改善組員の訓練災害の豫防に努め業績大いに擧り名部長の名を謳はれ、青年團副團長として令名あり其の將來に多大の望を囑されて居る模範青年である。

八木村　楠見住太郎氏

氏は縣立野田農業學校に學び園藝に關する蘊蓄あり、大正十三年消防人となり、兵役服務のため一時中斷されしが、後再び斯界に入り擧げられて第七部長の現職にあり、機敏活潑時宜の處置を誤らず、部下の統制に秀で典型的消防幹部として令名あり、災害警防の功勞亦大なるものがある、消防人としてのみならず、在鄕軍人分會理事として同會のために盡瘁し貢獻せし所尠少でない、年と共に進む手腕と人望とは、其の將來に大いなる期待がかけられて居る。

八木村　大塚森一氏

氏は酒雜貨商を營み業務日に繁榮を極め、又養豚組合長として養豚に精勵し優秀の成績を擧げつゝあり、氏子總代として敬神思想を皷吹し日本精神の振興に努め、青年團幹事として青年の指導陶冶に當る、等社會公共のため盡瘁して貢獻大なるものがある、殊に消防に關しては大正十四年消防人となり、昭和七年部長の要職に就きて今日に及び、組の向上發展と災害の警防に竭し功勞顯著なるものあり、模範消防幹部として其の名高く、未來の組頭を以て目されて居る、嚴父故富三氏は八木村消防組第一部長として令名あり、父子二代相傳て消防に盡し村民より大なる感謝を受けて居るのである。

八木村　花井四郎氏

氏の嚴父孝之助氏は八木村消防組の創設者であり、前組頭であつて、其の功績極めて顯著であるのみならず、村治村政に寢食を忘れて奔走し、村民の啓發に盡し名村長として其の名を謳はれし士である。父君の傳統を承けたる氏は公設消防設置と同時に入りて消防人となり、大正十二年小頭を拜命越えて同十五年部長に推されて現在に及び、組の進歩改善災害の警防警火思想の普及に盡し功績顯著であつて縣知事其他より表彰せらるゝこと數次典型的消防幹部とし組員の信望村民の信頼絶大である、又歩兵第五十七聯隊より除隊後在鄕軍人分會長として活躍し、區評議員として部民の啓發に努めたる功勞亦大なるものがある。

我孫子町　成島久治氏

氏は資性溫厚にして熱誠、大正七年八月消防手を拜命

昭和七年二月我孫子消防組第一部長に擧げられて今日に及び、歩兵第五十七聯隊にて鍛練せられたる軍人精神を移して消防精神を振興し、機械器具の改善整備を圖り警火思想の普及徹底を期し、其の功績極めて大であつて組員より尊敬せられ、町民より信頼せらるゝこと絶大である。

我孫子町　渡邊俊雄氏

氏は質實剛健にして精勵人を驚かすものがあり、青年團幹事、在鄕軍人分會理事等として青年の指導陶冶と軍事智識の普及に當りて令名高く、又統計調査委員として煩瑣なる事務に鞅掌して其の任を果して手腕を發揮し、夙に消防界に入り、昭和六年第五部長に擧げられて今日に至り、功勞大なるにより表彰せらるゝこと一再でなく組員の信望極めて大である。

湖北村　小池喜一氏

大正四年消防界に入りたる氏は同十一年小頭を拜命し昭和六年組頭に就任し、、組の向上發達、機械器具の改善整備、災害の警戒防禦に最善を竭し、一面警火思想を普及し、火災の警防に力め、縣消防義會並に松戸警察署管内消防聯合會等より表彰せらるゝこと數次、名組頭として組員に心服せられて居る。又大正十一年以來湖北村青年團長、區長代理として村民の啓發に努めたる功勞亦少くない。

千葉縣野田警察署管内

川間村　小川莊作氏

氏は雜貨商を營みて信用厚く、川間商工會理事として村の振興發展に竭して功勞大なるものがあり、大正九年川間村消防組第一部小頭を拜命し、昭和三年十二月第一部長に推され、同七年六月本部長となりて今日に及び、組頭を補佐して組の向上改善と組員の統制に力め、名幹部として其の名を謳はれ、組員の信望厚く昭和四年一月六日選ばれて御親閲に參列の光榮に浴したるは、以て氏の技倆人格を知るべく、昭和八年縣知事より表彰を受けた、氏は又在鄕軍人分會副會長、農會總代として令名がある。

千葉縣佐倉警察署管内

八街町　越川勝太郎氏

氏の生家は素封家にして世々篤行家を以て知られ、氏は製材業を營み業務盛大を極め、町會議員、學務委員、戸數割調査委員、産業組合理事、等に擧げられ、自治に關し産業の發展に關し、貢獻大なるものがあり、名望家として重きに置かれて居る、消防熱心の氏は私設當時よ

り斯界に貢献し、大正七年小頭を拜命し、其の後一時退職したるも、昭和五年衆望止み難く推されて組頭に就任して今日に及び、組の向上發展に盡して功績多く、名組頭として尊敬せられ、縣知事其の他より表彰せられしこと一再にして止らず、信望大である。

八街町　三浦要人氏

氏は事に當るに熱誠と努力とを以てし、何事にても成就せざれば止まざるの風を有し、八街町第二區に食料品店を營みて業務日に盛大を極め、父兄會幹事としては學校と家庭との連絡を密にし、小學教育の徹底を期して令名高く、大正七年消防人となり、昭和四年小頭を拜命同八年推されて第二部長となり、機械器具の整備に力め組員の指導に當りては懇切を極め、部下を愛するの情深く、統制自らなり、名部長として組員信望甚だ厚く、縣知事其の他より其の功績を表彰せられしこと一再ならず年と共に進む手腕人格は、氏の將來の大なる發展を囑せしめて居る。

八街町　田村松之助氏

氏は曾ては里芋檢査所主任たりしが、目下自動車運輸業を經營して時代の尖端を行きつゝあり、消防に熱心にして大正九年第三北部が未だ私設消防たりし時代榮町消防組幹事として活躍し、昭和四年公設となるや第三部長

に推されて今日に及び、たゞに災害の防禦に竭すのみならず、火之見の建設、貯水池の增設、等斯界の發達改善に貢献し功勞顯著であり、町長は氏に酬ゆるに精勤賞を以てし、組員の信望極めて厚きものがある。

八街町　戸室筆吉氏

歩兵第一聯隊にあつて兵役を了したる氏は、在鄕軍人分會班長又は評議員として同會のために貢献し、大正八年消防手を拜命、昭和二年十一月小頭に推され、同八年第四部長に就任して今日に及び、組頭を補佐して機械器具の改善整備を圖り、組員の指導陶冶に當りて功勞極めて多く、名部長として其の名を謳はれて居る。

八街町　山下與右衞門氏

氏は明治四十二年公設消防組設置の際消防手を拜命し大正十三年小頭に擧げられ、昭和九年推されて第五部長の要職に就きて今日に至り、消防事務に盡瘁すること二十有六年、其の間災害の警防に、消防施設の改善に、組員の指導に、献身的努力をなし功勞の顯著なるものあり縣知事より表彰せらるゝこと數次、名幹部として組員の信望を負ふて居る、其の他衛生組合、並に火防組合幹事父兄會幹事として令名がある。

臼井町　兼坂巳之助氏

氏は資性溫厚にして然も活潑、大正十四年臼井町消防組消防手を拜命、昭和八年二月小頭に進み、同年十一月推されて第一部長に就任して今日に及び、災害警防に献身的活動をなして偉勳を樹てしのみならず、施設の改善に竭して功勞あり、表彰せられしこと一再ならず、組員の信望と村民の信頼とを双肩に擔つて居る。

酒々井町　苅儀三郎氏

氏は酒々井町の名門にして素封家、縣立佐倉中學に學びて俊才の譽あり、町長、町會議員、等の現職にありて村治村政を鞅掌し、聲名甚だ高く、大正四年酒々井町消防組第一部長を拜命し、同九年九月衆望により組頭に就任し、組の向上發展に努め、酒々井町消防組の今日の完成は氏の力によるもの極めて大であり、縣知事、佐倉警察署管内消防聯合會等より其の功勞を表彰せらるゝこと一再ならず、而して只に酒々井町消防のみならず、佐倉警察署管内消防聯合會副會長として管内各消防組の開發に竭したる功績亦大である、昭和三年十月御大典地方饗宴に際し天杯を賜り、翌年御親閲に參列の光榮に浴した等、皆氏の崇高なる人格によるものといふべし。

酒々井町　福田倉治氏

氏は昭和五年三月酒々井町消防組小頭を拜命し、同八年三月推されて第二部長の要職に就き、組頭を補佐して組の改善發達を圖り、組員の指導に當り、事に處して時宜の處置を誤らず、人格手腕相俟つて組員を心服せしめ統制自から成り、其の功績極めて大である、又町會議員たること三期、常に町政の改善を圖り、市場米組合長、ビール麥耕作組合長等とし産業の開發に盡したる功勞亦顯著であつて、町内第一人者として重きに置かれて居るのである。

四街道　村井德太郎氏

氏は明治四十三年公設消防組設置以來の消防人であつて、大正十年小頭に擧げられ、昭和三年部長に推され、同四年副組頭となり、同五年衆望により組頭に就任し、而して同八年七月惜まれつゝ勇退、その二十五年間には四街道消防組の獨立問題があり、金馬簾を受くること三條といふ異數發達がある、共に熱誠なる氏の努力によつて成就したもので、其の功績極めて偉大である、氏が數回の表彰を受けたる亦謂なきにあらずである、氏は消防に關するのみならず、自治に關し社會公共事業に關し貢献大なるものがあり、其の經營にかゝる旅館の業務盛大なる、皆氏の熱誠と努力によるといふべし。

四街道　吉田辨一氏

氏は食料品商を營み、三十九年間陸軍用達として誠實に奉公し、信用極めて厚く、明治四十五年以來消防人として活躍すること二十有餘年、其の間大正六年小頭に擧

げられ、昭和三年四街道消防組獨立と同時に部長に推され、同五年副組頭となり、同八年七月衆望により組頭に就任し組の向上發展に竭して功勞あり、殊に四街道消防組獨立に關しては氏の熱誠なる奔走が偉大なる効を奏し四街道消防組が金馬羅三條を得るまでに發達したるも、氏の力に負ふこと大である、縣知事其の他より數回に亘り表彰せられたる又故なきにあらずといふべし。

四街道　糸日谷　定吉氏

氏は明治四十二年以來四街道消防に盡瘁すること三十年に近く、四街道消防組獨立に關し氏の活動は目覺しきものがある、第二部長を經て昭和五年本部長に推され、越えて同八年七月副組頭に就任して今日に及び、四街道消防組の元老として組員の敬慕して措かざる所である、氏が前後五回に亘り縣知事及び佐倉警察署管内消防聯合會より表彰せられたるは、以て氏の功績の如何に大なるかを知るべく、自治に對する貢獻亦大なるものがある。飯料水雜貨及食料品商を營み、明治三十三年以來陸軍御用を達し、實直堅實にして信用愈厚きを加へつゝあるのである。

四街道　金子　金藏氏

氏は四街道驛開業後驛前に酒商を開店し、時代に適する氏の營業方針は日に繁榮を來し、信用極めて厚きものがある。氏の消防人となりてより既に十有餘年、四街道消防組獨立以前役員として活躍し、其の獨立に關しては奔走大いに力め、昭和八年二月第三部長に推され、同年七月本部長となり、組の改善と組員の統制に竭して功勞顯著なるものあり、縣知事其の他より數回に亘りて表彰せられ、名部長として組員の心服を受け、其の將來に多大の期待がかけられて居る。

四街道　飯島　吉五郎氏

氏は精農家を以て知られ、その勤勉實直なる同村中堅人物として重きに置かれ、大正二年消防人となり、昭和六年一月小頭を拜命し、同八年一月第一部長の要職に就き、佐倉歩兵第五十七聯隊にありて鍛練せられたる強健なる思想と軍人精神とを以て部下に範を示し、統制をして一糸紊れしめず、又組の改善向上に竭して功勞大なるものあり、表彰せらるゝこと數回に及ぶ、軍隊にありても精勵して上等兵に昇進し善行證書を授與せられ、除隊後千代田村在郷軍人分會にありて活躍し、昭和二年帝國在郷軍人會々長一戸大將より其の功を表彰せられ、同會の名譽會員に列せられた。

四街道　大川　寅治氏

大正十年消防人となりたる氏は、昭和四年小頭に進み同七年部長の要職に就いた。氏の部長たる第二部は四街道消防組中の最大區で、六百數十戸年額一八〇圓の夜警費計上されありしが、組員が自發的に夜警を引受けて費用を半減し、毎夜幹部一部員三にて夜警し、無火災を目標に努力を續け、遂に其の目的を達し得たるは氏の熱誠によるもので、組員の統制器具の整備間然する所なきは、又氏の指導よろしきによるのである、氏が各方面より數回に亘り表彰せられたる亦故なしとせぬ。

四街道　高橋　左近氏

氏は近衛歩兵第四聯隊に入りて兵役に服し、大正十五年消防界に入り、四街道消防組獨立後小頭に擧げられ、昭和八年第三部長の要職に就き、献身的努力を以て消防事務に竭し、功勞顯著にして一再ならず表彰せられ、組員の信望厚きものがある、氏は又自治に關しても貢獻大であり、在郷軍人分會其他社會公共事業に寄與せし所少なくない、米穀問屋を業とし考舗として信用絶大である

四街道　山崎　新藏氏

氏は大正九年消防界の人となり、昭和四年小頭に推され、同七年五月第四部長に就任し消火栓班長を兼ね、統制の一糸紊れざる氏の手腕信望絶大なるものといふべく縣知事其他より數回の表彰を受けたるも亦故なきにあらず、氏は消防に關してのみならず、自治に關し、社會公共事業に關し、篤行少なからず、功勞亦大であり、殊に兵士のよき友とし知られ、驛前に時計及雜貨商を營み陸軍御用の歴史をも有し、信用甚だ厚きものがある。

旭村　小川　廣三郎氏

氏の先考島之助氏は村收入役、學務委員として自治の功勞者を以て知らるゝ士である。氏亦其の傳統を受け村會議員たること八年、村土木委員、學校建築委員、小作爭議調停委員として自治の功績顯著なるものあり、社會公共事業各方面に貢獻する所極めて大である、殊に消防に關しては大正二年部長を拜命し、昭和二年副組頭に推され、同四年四月衆望により組頭に就任して現在に及び組の改善に盡し組員の素質の向上に努め、功績極めて顯著であつて、表彰せらるゝこと前後十數回に及び、父子相傳へ村民の瞻望する所である。

根郷村　石田　治郎兵衛氏

氏は明治四十四年八月公設消防組設置と同時に第三部長を命ぜられ、大正七年十二月組頭に就任して現在に及び、常に熱誠以て事に當り、災害防禦に、震災、風水害鐵道事故、等の救護に、自陣頭に立ちて活躍し範を衆に垂れ、組の向上發展に努力し、名組頭として組員の心服措かざるところ、其の功績極めて顯著にして表彰せらるゝこと枚擧に遑なき程である。氏の息治平氏も瓦斯倫機關部員として大日本消防協會主催講習會に出席し技能の

練磨に努め父子協力し一村の警防に竭す、亦佳話といふべし、氏は又村會議員として村政に關與して令名高く、地方開拓に竭したる功勞極めて大である。

根郷村　藤崎勝治氏

不言實行それは氏の主義であつて、堅實を以て信念とし、二十有餘年一日の如く消防に盡瘁し、昭和四年五月第四部長の要職に就き、組員の指導に當りては人格の向上を以て第一義とし、身を以て範を示し、組員心服して統制一糸紊れず、名部長の名を謳はれ、年功徽章功績章氏の胸間に輝いて居る、氏は消防に關してのみならず、自治及社會公共事業に盡瘁し貢獻する所亦極めて大であり、殊に青年の指導陶冶に當りて令名高きものがある。

根郷村　宮間巌氏

氏は明治四十二年公設消防組設置の際十七歳にして消防人となり、後小頭を拜命して活躍すること三年にして一時退職し、再び斯界に入り昭和八年一月第五部長に推されて今日に及び、功績顯著なるものあり、表彰せられしこと一再ならず、部員の信望極めて大である、氏の嚴父皐治氏は區長其の他の要職にあつたが、蒲柳の質なりしため、氏は年少の頃より之を佐け貢獻する所大なりしといふ。

根郷村　小出豐藏氏

氏は資性溫厚にして篤實精農家として知られ、夙晨薄暮鍬鋤に親み、稀に見る勤勞振は近郷に範とせられてゐる。明治四十二年公設消防組設置と共に斯界に入り、災害の警防に盡すこと二十有餘年、昭和七年第七部長の要職に就きて今日に及び、功勞顯著なるにより縣知事初め各方面より數度表彰せられ、部員の信望極めて大である

根郷村　成毛巳之吉氏

氏の嚴父辰五郎氏は消防界に活躍し貢獻大なるものがあつた、父君の引退後氏は其の志を繼ぎて消防人となり小頭を經て第二部長の要職に就きて今日に及び、組の向上發展、組員の指導訓育に努め、非常に際しては自ら難に赴きて衆に範を示し、精勵格勤父君の名を辱しめず、名部長として衆皆心服せざるはない、氏は農を以て業とし其の產物の品質良好なる亦比を見ずといはれて居る。

根郷村　小出榮吉氏

氏の嚴父勝太郎氏は村會議員其の他の要職にあり、村治村政に貢獻せし所大なるものがあつた、其の傳統を受くる氏亦村會議員たること三回、戶數割調査委員、其の他に擧げられ、自治に貢獻して父君の名を辱しめず、父子共に自治の功勞者として村民の尊敬措かざる所である消防に熱心なる氏は明治四十二年公設消防組設置と同時に消防人となり、災害の警防に竭すこと三十年に垂んとし、其の間小頭部長を經て、昭和二年七月副組頭に推されて今日に及び、職務を盡すに營々たるものあり、縣知事は數度に亘り其の功勞を表彰し、組員心服亦絶大である

千葉縣成田警察署管內

成田町　小野寺弘氏

氏は若くして東京に遊學し中央大學に學び、日露戰爭に出征軍功により勳七等功七級に叙せられて郷に歸り、町會議員に擧げられ、成田町助役に就任して町政の樞機に參與し、自治に貢獻する所頗る多く、金錢債務調停委員として町民の自力更生に寄與し、其の功績大なるものがある、新勝寺檀家總代としては思想善導に努め、其の他在郷軍人分會長其の他に擧げられ社會公共事業に竭し、殊に消防に關しては第一部長を經て、昭和七年組頭に就任し、消防事務の改善に竭して功績顯著なるものあり、功績章は氏の胸間に輝いて居る、氏は嚴として犯し難き威ある中に、人に接するに些の圭角なく、初對面のものすら敬慕の念なくして氏の許を去らしめざるの溫容あり、之氏が多年修練の致す所であらう。

成田町　大木左門氏

氏は資性溫厚にして事に當りて熱誠、然も規律に關しては嚴然一歩も假借することなき端正の士で、米屋栗羊羹本舗の今日の盛大も、氏が支配人として經營宜しきを得るが故といはれて居る。氏は步兵第二十六聯隊にありて日露戰爭に出征し、軍功により軍曹に拔擢せられ勳七等功七級に叙せられ、後在郷軍人分會副會長として同會のために貢獻すること多年、成田町消防組公設と同時に小頭を拜命、後第四部長の要職に就きて今日に及び、縣知事は年功徽章表彰狀を授與して其の功勞を表彰した、又現に農會總代として產業の開發に竭すこと大である。日露戰爭當時二〇三高地の攻擊に、氏の屬せし聯隊は殆ど全滅し生存者僅に二十名なりしが、氏は微傷だに負はず、更に各地に轉戰し、奉天大會戰にも參加したるが、身に一彈をも受けず、無事凱旋したるは實に奇績といふべく、是氏の武運の强きにもよるが又神佛の加護厚きによるべし。

成田町　加藤隆亮氏

氏は堂々たる體軀の所有者で、剛直熱誠の氣宇眉間に漲り偉丈夫の風丰がある、代々農を以て業とし、氏亦之を承け、區長、農會惣代たること數期に及び、部落民の休戚を擔ひ、產業の開發に竭して貢獻大なるものがあり曩に近衛野砲兵聯隊にありて格勤軍務に服し上等兵に擧げられ、除隊後在郷軍人分會理事たること多年、同會のために寄與し、大正十年第六部が公設せらるゝに際し小

頭を拜命、昭和六年其部長に推され、組員の指導消防事務の改善に竭し、功勞顯著にして組員の信望殊に厚きものがある。

● 遠山村　須賀澤平作氏

氏は德川時代なれば冥加出役を仰付けらるべき建築業に從事し技術優秀であり、溫厚篤實なる資性と相俟つて人望甚だ高きものがある、大正六年消防手を拜命、昭和二年救護班長、昭和四年第四部長を歷任し、昭和六年四月衆望により組頭に就任して今日に及び、昭和四年一月十二年勤續章、同七年十月年功徽章を授與せられた。人格高き氏は選ばれて宮內省より門鑑を授與せられ、御料牧場に出入を差許さるゝの光榮に浴して居る。

安食町　桑原幸助氏

氏は大正二年消防組頭に就任以來今日に至るまで引續きて其の職にあり、安食町消防組が公設となりたるは氏の力に負ふ所大であり、金馬簾を得るに至らしめたるも亦組の向上改善に盡瘁したる氏の功勞である、大正七年縣警察部長より賞狀を授與せられたるを初とし、同九年安食町より、翌十年縣知事より功勞徽章を、昭和二年年功徽章を授與せられたる、亦當然の事に屬するともいへる、氏は嘗に安食町消防に關してのみならず、縣消防義會理事として縣消防の開發に竭し、町會議員としては自治に貢獻し、郵便局長として郵便事務に努めたる功績も亦甚だ大である。

千葉縣木下警察署管內

布佐町　金子德太郎氏

氏は熱誠の人、大正十一年副組頭を拜命、昭和七年氏の義兄たる前組頭蒲生氏引退の後を承けて組頭に就任して今日に及び、施設の改善、組員の向上に竭し、昭和二年氏が發起人となりて布佐、大森、木下、布川、等を糾合して消防睦會を組織し、消防組の面目一新を圖る等、今日の布佐消防組の大成は氏の力による所極めて大である、縣知事其他より數回の表彰を受け、名組頭として組員の心服するは正に然かあるべく、之れ氏の熱誠の賜である、氏は布佐町に旅館を經營し日に隆昌を極むるも、亦氏の熱誠の然らしむる所といふべし。

布佐町　成山一太郎氏

氏は精農家を以て知られ、勤勉にして誠實、耕作組合長として產業の開發に竭し、其の他社會公共のため盡瘁して貢獻大なるものがある、殊に消防に關しては大正十四年第三部小頭を拜命し、昭和八年第四部設置と同時に推されて其の部長に就任して今日に及び、協同一致努力して公器の面目を發揮するを以て信念とし、身を以て範を垂れて組員を指導し、施設の改善整備に力め、名部長として組員の心服を一身に擔ふて居るのである。

木下町　坂卷權次郎氏

氏は木下驛前に酒店を經營し業務隆昌を極めて居るが國民として納稅の義務を完ふするは國力伸張上缺くべからざるものであり、國恩に報ずる第一義であるとの信念の下に納稅組合を組織し、木下町納稅成績を優良ならしめた功勞は偉となすべく、木下町祭禮主任として敬神思想を皷吹し日本精神の發揚を期し、衛生組合長として町民の保健に竭す等、功績擧げて數ふべくもあらず、殊に消防に關しては十年の久しきに亘り小頭として活躍し、昭和八年第一部長の要職につき、組員の指導訓育に當り、組員の信望町民の信賴深大である。

大森町　山口平吉氏

明治三十七年佐倉步兵第五十七聯隊に入營したる氏は後備步兵第二聯隊に編入され日露戰爭に出征し、奉天大戰に參加して赫々たる戰功をたて勳八等に叙せられた、大正五年消防人となり、小頭、部長、副組頭を經て昭和八年十一月大森町消防組頭に就任して今日に及び、組の向上發展と施設の改善に努め信望厚く、町衛生委員として町民の保健に盡したる功績も亦少くない、字大森に手廣く藥種商を營み業務隆昌を極むるも、氏の人格の反映といふべきである。

千葉佐原縣警察署管內

瑞穗村　一鍬田衷氏

氏は資性溫厚然も事に處して果斷、明治四十三年近衛輜重大隊に入りて兵役を了し、大正八年二月瑞穗村消防組第四部長を拜命し、同十一年十一月組頭の要職に就き同十四年四月退職したるも、昭和六年三月衆望止み難く再び推されて組頭となりて今日に及ぶ、以て如何に組員の心服厚きかを知るべきである、自治に關しては村會議員として村政に參與し、區長として部民の啓發に竭し、產業に關しては信用組合理事たること十有三年、其他社會公共事業に貢獻せし所擧げて數ふる能はず、村內名士として重きに置かれて居る。

瑞穗村　高橋欽爾氏

氏は剛健濶達の士、先考の後を承けて益家運を隆昌ならしむると共に、社會公共事業に盡瘁して貢獻する所多く、明治四十五年二月消防人となり、第一部長を經て、昭和六年七月瑞穗村消防組副組頭の要職に就きて今日に及び、年功徽章其の他は氏の胸間に輝きて過去の功勞を彰して居る。曾ては在鄕軍人分會副分會長たること多年現に村會議員として村政に關與し、信用購買販賣組合監

事として產業の開發に竭し、村民の信用極めて厚く村內の重きに置かれて居る。

香取町　木村爲之助氏

氏の父君長吉氏は香取町消防組第一部の創設者であつて、當時其の區の區長として令名があつた、氏亦父君の業を繼ぎ大正三年入りて消防人となり、昭和六年四月第一部小頭兼部長を拜命し、同九年四月副組頭に就任して今日に及び、縣知事より授與せられたる功勞徽章は過去の功勞を物語つて氏の胸間に輝いて居る、曾ては青年團分團長、農會總代、等として聲名高く、統計調査委員たること前後十有五年に亘りて今日に及び、區長代理として部落民の啓發に竭す、等の功績多く、篤農家として聞えて居る。

本大須賀町　小堀隆氏

氏の父君文吉氏は村會議員區長學務委員等として自治に貢獻し、殊に學務委員たること二十四年郡敎育會より表彰せられたる名士である、氏は父君の後を承け農事に專念し、愈家運を隆昌ならしめ、豪農として重きを加へ消防に熱心し明治四十四年消防人となり、昭和五年四月部長を拜命、同八年組頭の要職に就き、消防事務の改善發達に盡し、今日の本大須賀消防組の發展は、氏の力に負ふ所大であり、縣知事より數度其の功を表彰されたのである。

佐原町　栗山儀一氏

明治四十三年近衛第一兩師團選拔射擊大會に於て優秀なる成績を擧げ、閑院宮殿下より賞狀を授與せらるゝの榮譽を得たる氏は、大正十年北佐原消防組設置と同時に部長に推され、昭和六年十月組頭の要職に就きて今日に及び、喞筒配備の不足なるを痛感し、役員の手當半減を斷行して施設の完備に充て、從來喞筒の設備なく且つ水路に阻まれ、或は喞筒ある部落より隔りたる部落に喞筒を配置したるは、部落民の感謝措かざる所である、曾ては郡農會議員、町農會副會長、土木委員等に擧げられ、香北水害豫防組合議員たること十六年、現に佐原署管內消防聯合會幹事、信用組合理事、等の要職にあり、其の功績枚擧に遑がない。

新島村　椎名淳氏

椎名家は累代此地の名門且豪農として知られ、氏の祖父勇次郎氏は多年村長及び郡會議員の職にあり、自治功勞者として勳七等に叙せられ、現に千葉縣方面委員、地主會長として活躍し、父君清氏は收入役として村財政に鞅掌しつゝあり、氏は昭和二年新島消防組第一部長を拜命し昭和四年副組頭に擧げられ、同八年衆望により組頭に就任して今日に及び、消防事務に献身的努力をなすと

共に、郡聯合青年團理事、村青年團長として地方青年の指導陶冶に盡しつゝあり、三代を通じ何れも村の主要機關の樞機に參與し、貢獻大なるものあるは洵に榮譽なると共に村民の等しく尊敬して措かざる所である。

香西村　宮崎榮氏

氏の父君清治氏は多年村長、村會議員、農會長、信用組合長等の要職にありて村の自治開發に貢獻したる名士である。氏亦父君の志を繼ぎ消防に献身的貢獻をなすこと八年、小頭、部長を歷任して昭和八年衆望により副組頭に擧げられて今日に及び、功勞顯著なるものがある、曩に青年團長在鄕軍人分會長として令名あり現に農會總代として農事の改良開發に盡し、村治各方面に活躍して貢獻大なるものあり、二代相傳へて村民に瞻望せられ舊家として又篤農家としても其の名を謳はれて居る。

香西村　根本源良氏

資性溫厚にして純朴農事に精進して精農家を以て知られて居る、明治四十四年消防手を拜命し、大正三年步兵第四聯隊に入營のため一時消防生活を中斷されたるも、除隊後再び斯界に入り、大正十二年第三部小頭を拜命、部長、副組頭を經て昭和八年衆望により組頭の要職に就き、消防事務の向上改善に盡し、縣知事より其の功績を表彰せらるゝこと數次、組員皆氏の人格手腕に心服して居る、氏は又村會議員として村政に關與し、其の他社會公共事業に盡し其の功勞擧げて數ふるに遑なく、村內の重きに置かれて居る。

大倉村　香取清次郎氏

香取家は同地の舊家として知られ、氏の先考巳之助氏は大倉村長たりしこと二十年、其の逝去に際し村民深く之を悼み、村は決議を以て村葬としたるを以て見ても、其の功績の如何に大なりしかを知らるゝのである。かゝる父君の傳統を受けたるは氏、村長、村會議員、津宮外一町三ケ村組合會議員、香北水害豫防組合會議員、學務委員、大倉村地主會長、村農會長、郡會議員、氏子總代檀家總代、等幾多顯職にありて村治、郡治は勿論、地方開發に努力し其の功績擧げて數ふべからず、大正十四年小學校敷地寄附により賞勳局總裁より褒狀を、昭和三年六月縣敎育會長より敎育功勞表彰として銀杯一對を授與せられたるは、表彰の一例に過ぎない、殊に大正九年以來大倉村消防組頭として、消防事務の向上改善に力めて今日に及び、縣消防義會理事、佐原警察署管內消防聯合會評議員として縣下消防組の開發に竭し、其の功勞甚だ顯著である、豪放快濶なる氏は常に後進を指導誘掖し、一村の師表と仰がれて居る。

栗源町　石橋武右衛門氏

氏は豪放にして然も細心、大偉人の風格を有し、事に處して熱誠克く後進を指導誘掖し、鄕黨皆氏を敬慕せざるはない、若くして縣立茂原農學校に學びて俊才を以て聞え、大正十四年粟源町收入役に擧げられ、昭和五年五月粟源町會議員に當選し、越えて七年町助役に推され、翌八年町長に選ばれて今日に及び、常に町政の樞機にありて自治の功勞多く、昭和二年四月農會長として産業の開發に竭し、大正十四年消防組頭に擧げられ、組の改善を圖り、其の在職中金馬簾甲種乙種併て三條の使用を允許せらるゝまでに向上せしめ、縣知事より功勞徽章及年功徽章を授與表彰せられ、昭和七年八月退職するや、同年九月香取郡消防聯合會顧問に擧げられたのである。

千葉縣小見川警察署管内

神里村　小山田　清海氏

氏は縣立佐原中學校卒業後更に進みて青山學院に入りて螢雪の業を積み、後育英の事に當り、又役場吏員として村政の樞機に參與し、青年團長として青年の指導陶冶に盡し、在鄕軍人分會長としては軍事智識の振作に努めて令名あり、香取郡葉煙草耕作組合聯合會副會長として産業の開發に貢献する所多く、神里村消防組頭に就任しては消防事務の向上改善に献身的努力をなし、組員の心服を得村内に重きをなして居る。

神代村　宮内　伊兵衛氏

氏は明治四十四年九月神代村消防組に入り消防人となり、災害の警防に献身的努力をなし、大正五年八月推されて第一部長に就任して同六年に及び、同十四年再び推されて第一部長となり、昭和二年まで其の職にあり、同六年四月副組頭に擧げられ、組の改善組員の統制に竭すこと二年、同八年九月衆望により組頭の要職に就きて今日に及び、克く組員の訓練、機具の改善整備に力め、昭和九年三月小見川警察署管内萬歳村外五ケ村聯合演習に際し、勤續二十二年間成績優良なるにより、縣知事より表彰せられた、氏が消防以外社會公共に盡したる功勞は枚擧に遑なく、組員及村民の信頼極めて厚きものがある

豊浦村　大坂　眞作氏

氏は村内の豪農として知られ、村會議員、區長、學務委員、等に擧げられて自治に貢献し、信用組合長たりしこと六年、地方經濟界及産業の開發に盡し、同方面委員として隣保の誠を致しつゝあり、消防に關しては明治四十五年一月以來豊浦村消防界に盡瘁し、小頭を經て大正十四年十二月組頭の要職に就き、昭和五年二月組に金馬簾一條の使用を認許せらるゝまでに組の向上發展に努力し、昭和五年功勞章を授與せらるゝ榮譽を得、現に消防

顧問として間接に消防事務の改善を圖り、組員及村民より多大の感謝が捧げられて居る。

橘村　飯田　暉一氏

氏は資性謙讓にして犧牲的精神に富み、常に人の美を讃へて自己の功を語らず、事に處して果斷眞に理想的消防人の風格がある、橘村消防組に消防人たること二十有五年、小頭、部長、副組頭を歴任し、昭和六年十二月衆望により組頭に就任して今日に及び、消防事務の改善に竭し、橘村消防組が優良消防組として金馬簾の使用を允許せらるゝまでに發展したるは、氏の力によるといふも過言でなく、縣知事より數回表彰せられたる亦故なきでない。

千葉縣多古警察署管内

多古町　石神井　清氏

氏は間倉の豪農に生れ資性剛毅活潤、明治四十二年野砲兵第一聯隊に入營し精勵軍務に服し、下士適任證及び善行證書を授與せられ、後備演習召集に際し伍長に任命せられ、在鄕軍人分會理事及び副會長として多年同會のために盡瘁して貢献多く、夙に消防人となり部長を經て昭和八年多古町消防組副組頭の要職に就き、克く組頭を補佐して消防事務の改善と組員の統制に竭し、組員の信望極めて厚く、昭和九年二月縣知事より功勞章を授與し其の功績を表彰せられた。

久賀村　加瀬　實氏

氏は元祿年間より代々名主たりし名門に生れ、謹嚴にして覇氣に富む。佐原中學校に學び天稟の才を磨き、父君の後を繼ぎ乘合自動車業香取自動車商會を經營し、村會議員として村治に盡す傍ら消防組頭に就任し、設備の改善訓練の達成に努力し、遂に昭和五年二月十一日を以て千葉縣知事より優良消防として金馬簾一條使用允許せらるゝに至らしめたるは、之れ氏の力に依るところ大である、其功により功勞徽章を授與せられた。

久賀村　平山　正氏

氏は少壯にして機略あり、父祖二代久賀村收入役を勤め、氏亦昭和二年久賀村收入役として二期に亘り就任して令名あり、大正十五年來昭和八年に至る間消防に盡力し遂に久賀村消防組頭として千葉縣知事より金馬簾二條使用允許を受けしめた、かく功勞顯著なるにより知事より功勞徽章を授與表彰せられたのである。

久賀村　土井　茂三郎氏

氏は久賀村の豪農に生れ、資性溫厚にして養蠶に極めて深き造詣を有して居る。先考吉郎氏は多年區長等の要職にあつて部民の啓發に努めて令名があつた、氏亦父君

の志を繼ぎ社會公共のために盡瘁し、村會議員、區長に擧げられて村治村政に關與して自治功勞多く、村農會總代としては產業の開發に竭し、貢獻大なるものがあり、消防に關しては若くして消防人となり部長として活躍して名幹部の名を謳はれ、昭和九年四月衆望を負ひて久賀村消防組頭に就任し、益大いになす所あらんとし、大なる期待がかけられて居るのである。

千葉縣旭町警察署管內

旭町　加瀨健治氏

氏は旭町の素封家に生れ、義俠心に富み德行多く、町民の尊敬措かざる所であり、材木商を營み業務極めて隆昌なるも、氏の人格の反映である。曩に町長、町會議員に擧げられ旭町々政を鞅掌して功績多く、現に農會長、信用組合長、工場懇話會長、商工會長、耕地整理組合理事、等の顯職にありて專ら產業の開發と旭町の發展に盡瘁して貢獻頗る大である。而して公器としての消防組の重要性に鑑み、自ら進みて旭町消防組頭に就任し、組の向上改善と災害の警防に最大の努力を竭し、業績大いに擧がるを見る。氏の養嗣子了介氏も岳父の意を承け第六部長の要職にあり、父子相携へて消防に盡す亦一佳話といふべきである。

三川村　島田佐一氏

氏は農を以て業とし、副業として傘の製造を營み、其の製品優良なるを以て聞えて居る、是氏の資性溫厚用意の緻密なるによるものといへる。公共心厚き氏は資力調査員、家屋稅調査委員、國勢調査委員、等として自治に貢獻し方面委員として隣保に竭し、農業組合長として產業を開發し、納稅組合長として諸稅の完納を圖り、青年團長として青年の指導陶冶に當る等、其の功績枚擧に遑なく、殊に消防に關しては大正三年以來斯界に活躍し、小頭、第一部長、副組頭を歷任し、昭和七年十月衆望により三川消防組頭に就任して今日に及び、組の改善に、災害の警戒防禦に、警火思想の普及に、身を以て範を示して組員を誘導し、業績甚だ上り、組員の信望村民の信賴共に日に厚きを加えて居る。

矢指村　八木良作氏

氏は質實剛健篤農家を以て知られ、村民の信望極めて厚く、產業組合理事として農事の改善に竭し、縣耕地救濟事業の事務を擔當し、現下の不況打開と農村自力更生に貢獻する處大なるものがある。大正八年矢指村公設消防組設置と同時に推されて第四部小頭に就任し、施設の改善組員の技能の向上に竭して功勞多く、昭和九年二月衆望により組頭の要職につき、矢指村消防組の大成に消防本來の使命貫徹に、着々として共の歩を進めつゝあるのである。

飯岡町　宮內庫太郎氏

大正十年消防人となり、小頭、本部長、副組頭を歷任し、昭和七年三月衆望に依り飯岡町消防組頭の要職に就き、事に當りて果斷、機に臨み變に應じて時宜の處置を誤たず、部下を愛するの情厚くして然も紀律を重じて一歩も假借せず、身を以て衆を率ひ、名組頭の名を謳はれて居る。又町會議員、漁業組合長の顯職にあり、町民の利福の增進を圖り、產業の開發に竭したる功勞亦少なくない。消防の功勞に對し功勞徽章を授與表彰せられ、賞狀を受けたること數次に及ぶ外、各般の功績に對し、表彰せられたること枚擧に遑なく、町民の尊敬措かざる所となつて居る。

千葉縣八日市場警察署管內

共和村　大塚傳藏氏

大正十四年十二月匝瑳郡消防組聯合會長より氏に贈りたる表彰狀に、『溫厚着實ニシテ消防ノ職ニアルコト滿十五年其間一身ヲ犧牲ニ供シ熱誠職務ニ盡瘁シタル功勞尠カラス』とあるは、氏の資性と活躍を言ひ盡して居る。氏は明治四十二年私設消防組に入り、大正二年公設となるや消防手を拜命し、第一部長を經て組頭に就任し、鋭意施設の改善を圖り、火之見を建設し共の他器具を寄附し又組員の指導に竭し、遂に縣知事より金馬籤の使用の允許を得るまでに發展せしめ、災害の警防治安維持に當り精勵一日の如く、縣知事より功勞徽章を授與せられたる外表彰せらるゝこと幾回なるを知らず、昭和八年組頭退職後消防顧問として尙ほ活躍を續けつゝあるのである。

平和村　加藤伊助氏

代々醬油釀造を以て業とし素封家たる加藤家に生れたる氏は、鋭意父祖の業の守成に努め同業者間の權威となつた、大正十三年衆望を負ひ平和村消防組頭に就任するや、設備の未だ整はざるを憂ひ巨額の私財を投じ施設の改善と意氣の振張を圖り、今日平和村消防組が優良消防組として稱揚せらるゝの基礎を築き、難あれば身を以て之れに赴き、平時警火思想の普及に竭したる功績顯著なるものあり、縣知事より表彰せられしこと數次、今に至るも組員氏の恩義を思ひ、氏の德を慕ふこと極めて厚いものがある。

平和村　加藤安太郎氏

先考の志を繼ぎ消防に熱心し、昭和六年第五部小頭を拜命し、同八年本部長に就任して今日に及び、格勤其の職に努めて功績多く、父名を辱しめず、又在鄕軍人分會

副會長、青年訓練所指導員として青年の指導陶冶に當りて貢獻大なるものがあり、社會公共事には卒先盡瘁し寄與する所尠くない、産業に關しては山市醬油醸造株式會社取締役として斯界に重きをなし、年と共に進む手腕信望は氏の今後の飛躍を約束せしめて居る。

千葉縣東金警察署管内

東金町　前島榮治氏

前島家は東金の舊家であつて名門の譽高く、氏の嚴父治平氏は縣會議員町長等に擧げられ町治縣政に貢獻し、郡農會長として産業の開發に竭し其の功勞極めて顯著である、かゝる名門に生れ此の名譽の士を父君とする氏は千葉中學校卒業後東京に遊學し慶應義塾大學理財科に學び俊才を以て聞え、清簾高潔なる人格と圓熟せる手腕とは學識と相俟つて町民の尊敬措かざる所である、町助役として町の發展と町民の福祉の增進に努めて令名あり、消防人としては小頭副組頭を歷任して組頭の要職に就き組の改善向上と組員の指導練磨を圖り災害の警防と警火思想の普及に獻身的努力をなし、遂に東金消防組をして縣下第一の優良消防組たらしめし功勞は組の存する限不朽である。

東金町　眞行寺鍵右衛門氏

東金町にて有名なる料亭『あふら屋』は氏の祖父鍵右衛門氏の創設であつて、代々其の業と鍵右衛門を襲き、先代鍵右衛門氏は溫厚にして篤實區内部長として令名があつた、氏又父祖の業と其の名を繼ぎ、天資豪快義氣に富み、先考と同じく區内部長として部民の休戚を擔ひ隣保の誠を致して信望厚く、又稀に見る消防熱心家であつて夙に消防人となりて獻身的努力をなし、今第二部長の要職にあり、施設の改善組員の指導を圖り災害の警戒防禦に盡し、殊に重きを火災の豫防と警火思想の普及に置き一層の活躍をなし功勞極めて顯著なるものがある。

東金町　清宮清逸氏

氏の先考富藏氏は篤農家として知られ、農事指導員の職にあつたが不幸三十七歳にて夭死された、氏は父君の遺志を繼ぎ鋭意農事を研究し其の開發に竭し、夙晨薄暮鍬鋤に親みて倦まず町民の信望極めて大である、歩兵第五十七聯隊にありて兵役を了したる氏は、在鄕軍人分會幹事として活躍すること多年、大正四年消防人となり爾來消防事務に精勵し、現に東金町消防組第三部長の要職にあり、謹直清廉なる人格と熟せる手腕とは組員を心服せしめ、統制見事にして事績顯著である。

東金町　佐久間繁氏

氏は漢學塾に學びて造詣深く、思想堅實にして溫厚熱

誠の士である、夙に消防人となり累進して現に東金町消防組第五部長の要職にあり、非常に際しては卒先難に赴き、平時機械器具の手入整備技能の演習訓練に身を以て範を示し、部下を指導するに懇切であつて名部長と謳はれ、其の功績顯著であり、青年團支部長として青年の指導陶冶に當り貢獻せし所も亦尠くない、とめ子夫人も夫君の意を體し防火思想の普及に竭し、夫婦共に消防熱心家として知られ、氏は農を以て業とし、先考吉松氏は精農家として知られ農事組合役員であつたが、氏も亦農事に精進し父君の名を愈高からしめて居る。

丘山村　黑川健氏

氏は資性溫厚にして篤實、農を以て業とし鍬鋤に親みて倦まず勤勉なること多くその比を見ざる程である、昭和三年丘山村消防組消防手を拜命格勤其の職に竭して功勞多く、昭和八年衆望により推されて小頭兼第二部長に就任して今日に及び、克く組頭を補佐して消防事務の改善と部員の指導訓練に努め、常に自ら卒先して事に當り典型的消防幹部として部内の信望極めて厚きものがある令兄榮五郎氏も夙に消防に關係し幹部として活躍して令名がある。

丘山村　鈴木進氏

佐倉歩兵第五十七聯隊にありて軍務に精勵し兵役を了したる氏は、在鄕軍人分會評議員班長として同會のために貢獻し、大正七年公設消防組設置と共に入りて消防人となり、昭和元年小頭を拜命、同年第三部長の要職に就きて今日に至り、其の熱誠を精勵とは組員を動かし統制一糸紊れず令名組を壓して居る、氏は父祖の業を繼ぎ農事の傍材木商を兼ね家運愈隆昌を極めて居る。

片貝町　飯高熙氏

飯高家は片貝町の名門且素封家であつて、氏は町助役町會議員等に擧げられ自治に貢獻し、山武販賣購買利用組合專務理事として産業及地方開發に竭して貢獻多く、曩に近衛歩兵第四聯隊にありて軍務に服し、在鄕軍人分會理事として同會に寄與し、大正十五年公設消防組成立と共に推されて副組頭となり、昭和八年四月組頭に就任して今日に及び、事に處して果斷、然も溫厚克く組員を愛撫し、名組頭の名が高い、令息毅熙氏は成東中學校に俊作氏は千葉商業學校に在學し共に秀才の聞が高い。

片貝町　吉井清太郎氏

私設消防時代頭取として活躍した嚴父清藏氏の傳統を承くる氏は、亦私設消防時代より消防に關係し、昭和六年公設となると共に部長を拜命し、同九年副組頭の要職に就き、消防事務の改善に竭し果敢事を處して功勞多く曩に横須賀重砲兵聯隊に編入され日獨戰爭に青島に出征

し軍功により勳八等に叙せられ、除隊後在郷軍人分會にありて活躍し、帝國在郷軍人會長一戸大將陸軍教育總監等より賞狀を賜り、功勞章を授與せらるゝの名譽を得、農會総代として産業の開發に貢獻せし所も少くない、自治に關しては町會議員として令名高く、雅趣豊にして俳句に長じ雅舟と號し居る。

片貝町　齋藤幸之助氏

氏は天資溫厚海産物製造家として名高く、國勢調査委員、統計調査委員等に擧げられて克く煩瑣なる事務を處理して令名あり、大正十五年公設消防組設置と同時に斯界に入りて消防人となり、昭和六年小頭を拜命し、同八年十一月第七部長に推されて今日に及び、精勵其の職に盡し部下の統制に秀で信望極めて大である。

鳴濱村　齋藤榮藏氏

氏は精農家を以て知られ農事の研究改善に孜々として撓まず、村民を指導して産業の開發に竭し村民の尊敬大なるものがある、私設消防時代火防組合幹事として活躍し、大正十二年公設消防組設置の際班長に推され、昭和二年十二月鳴濱消防組第一部長の要職に就きて今日に及び、功績の大なるものありて昭和七年二月東金警察署管内消防聯合會長より表彰せられたるを初め、賞狀賞品等を得たること數次に及んで居る。

鳴濱村　伊藤正己氏

氏は溫厚勤直の士で銚子商業學校に學び俊才を以て知られ、鳴濱南郷耕地整理組合役員に擧げられ其の手腕を發揮して令名がある。昭和五年鳴濱村消防組消防手を拜命、災害の防禦に獻身的活躍をなし火災豫防警火思想の普及に努めて功績多く、昭和八年十二月第三部長の要職に就き、組員の指導施設の改善整備に盡し、名幹部の名を謳はれて居るのである。

土氣本郷町　高橋隆氏

氏は資性溫厚篤實にして荒物商を營みて信用厚く、土氣本郷町商工會副會長として同町商工界の發展に努め、區長としては部民の啓發に竭して令名あり、其の他社會公共事業に盡瘁する所大である、殊に消防に關しては明治四十四年消防手拜命以來獻身的活躍をなし、小頭第二部長を歴任し昭和八年一月土氣本郷消防組副組頭の要職に就いた、其の間常に學術的研究と技能の練磨に努め、大正四年同六年の二回消防講習を受け、昭和六年東金町に於ける幹部講習會に出席し、其の得たる所を直ちに實地に應用して組の改善と組員の統制に努め、縣知事町長等より數次其の功績を表彰せられた。

正氣村　鵜澤實氏

氏は茂原農學校出身の秀才であつて農事に關し造詣深く、青年の指導陶冶に當りて令名あり、各般の社會公共事業に貢獻する所大である、殊に消防に關しては大正十年公設と同時に消防手を拜命し、小頭部長を歴任して昭和九年三月衆望により正氣村消防組副組頭に就任し、名幹部の名高く縣知事より表彰せられしこと數回に及ぶ。

正氣村　小高光作氏

氏の先考祝氏も消防界に貢獻し大なる事績を殘して居るが、氏も父君の志を繼ぎ昭和二年消防手を拜命し、新進の鋭氣を以て職務に勉勵し、同八年小頭に擧げられ、九年三月第四部長に推され、果斷事を處して時宜の處置を誤らず部下の統制亦美事である、家業たる農事に精勵し研究改善に努力し成績の良好なるものがある、其の熱誠其の勤勉可年紳士の典型として其の將來が期待されて居る。

公平村　石橋民義氏

氏は近衛野砲兵聯隊にあつて兵役を了し在郷軍人分會理事たること多年、大正八年公平村消防組消防手を拜命し、同十五年小頭に推され、昭和五年部長に就任し名幹部の名高く、表彰せられしこと數回、養蠶組合幹事として斯界の改善に竭したる貢獻亦大である。

公平村　宮川實氏

近衛歩兵第四聯隊にありて軍務に精勵したる氏は、除隊後青年訓練所主任指導員として青年の指導訓育に當り又在郷軍人分會理事として貢獻大なるものがあり、大正八年公平村消防組消防手を拜命し、昭和三年小頭に擧げられ、克く其の職に竭し功勞顯著にして昭和七年縣知事より表彰せられたる外、東金署管内消防聯合會より賞狀を授與せられた。

公平村　鈴木潤一郎氏

氏は稀に見る消防熱心家で大正八年公平村消防組消防手を拜命し、昭和五年小頭に推されて今日に及び、常に卒先難に赴き訓練を勵み功績顯著なるものあり、東金警察署管内消防聯合會其他各方面より表彰せられしこと數次に及び、自治に關する功勞亦少くない。

公平村　關八郎氏

横須賀海兵團にありて兵役を了したる氏は、在郷軍人分會に竭す所少なからず、各方面に德行多く表彰せらるゝこと數次、大正十四公年平村消防組消防手を拜命し、昭和九年推されて小頭となると共に部長に就任し、典型的幹部の稱がある。求名驛前に運送店を營み隆昌を極めてゐる。

福岡村　農宮官司氏

氏は農事研究家であつて本縣の旱害に鑑み、前後八年の歳月を費して地下水利用旱害防止の福農揚水法を完成

して我國農業界に大なる貢獻をなした、氏は此揚水法を防火に利用し、氏の宅には發動機二臺揚水喞筒九臺を備へ、益防火と農事の改良に研究を重ねつゝあり、各方面より視察研究のため氏を訪問するもの相踵いて居る、昭和八年衆望により氏は福岡村消防頭に就任したが、熱心なる研究家たる氏の組頭就任は、近く福岡消防組の施設に一大整備を齎し、其の面目を一新せしむべきを期待されて居る。

白里村　松島洋司氏

氏は機を見るに敏にして乾物卸小賣の大商店を經營し貨物自動車を以て商品の配給を行ふ時代の尖端的營業方針を執り、顧客の便益と販路の擴張に努めて好評を博し益信用厚きを加へて居る、消防に熱心なる氏は昭和三年白里村消防組の公設となると同時に推されて副組頭に就任し、同六年組頭に就任し、組の向上發展に專念し其の業績大いに擧り、昭和六年縣知事より功勞賞を授與せられたるを以て見ても、氏の功績の如何に大なるかを窺ひ得らるゝのである。

山邊村　吉原唯一氏

氏は山邊村の素封家に生れ資性溫厚にして篤實、區長として部民の休戚を擔ひ、其の啓發と福祉の增進に竭して令名あり、昭和三年山邊村消防組の設置と同時に消防

手を拜命し、同六年十月第一部長に擧げられ、八年十二月副組頭に就任し、組の向上發展と組員の指導統制に專念して着々其の實を擧げ、信望極めて厚く、表彰せらるゝこと數次に及んで居る。

源村　並木一郎氏

國亂れて忠臣出で家貧ふして孝子出づといふか、貧弱村源村に一偉人が出た、其の偉人とは氏の先考和三郎氏である。和三郎氏は熱誠の人であり、而して不言實行の人であつた、源村が山間の僻村であつて物資に惠まれず四隣の山林は濫伐せられ村財政は窮乏するを見て、之れが匡救は村政の緊縮、兒童教育の徹底及び殖林事業の完成の外途なきを覺り、明治二十四年村助役に擧げられ尋て村長に選ばれ村政を執掌するや、諸務を整理して平素村費の節約を行ひ、先づ學校及び隔離病舍の設備を整へ東奔西走村民の間に遊說して教育基金を造成し、之れに依つて學齡兒童の就學を奬勵する一方、殖林事業完成のため教育資金を運用し、低利資金の貸付を行ひて殖林を奬勵し、其の他公益事業を起して村民の利福を增進し、不撓不屈遂に昔日の貧弱村をして模範村としたのである然も氏の謙讓なる自己の功を誇らず之を發表しなかつたので我內務省も之を知らなかつたが、偶々米國の一雜誌に日本の模範村として源村の記事が揭載られ、米國政府より時の兒玉內務大臣に其の詳細に關し照會ありしため內務省の調査となり、明治四十年六月十六日此時既に物故せられし和三郎氏に對し千葉縣知事より木盃一組を追賞せられ、明治四十三年平田內務大臣は源村を模範村として表彰したのである、和三郎氏は源村更生の緒に付きて間もなく四十歲を一期として長逝されたが、其の偉業は愈其の根を擴げ枝を伸し永劫に朽ちず、村民氏の德を讃へざるはない。かゝる偉大なる功績者を父とする一郎氏は成東中學校に學びて秀才の聞え高く、常に修練を怠らずして人格手腕共に卓越し、前に本村助役に擧げられ現に村長として村治村政を鞅掌して自治の功勞顯著であり、又源消防組頭として消防事務の改善向上に努めて業績見るべきもの多く、今副組頭の閑職にあつて同組のために盡瘁を續け、村內の第一人者として村民の尊敬を受けて居るのである。

千葉縣成東警察署管內

蓮沼村　石橋竹次郎氏

氏は秋葉磯吉氏の二男に生れ懇望せられて石橋家の養嗣子となりたる人、性豪放果斷然も細心の注意を怠らず劍道に達し青年にして既に四段愈技神に入る、橫須賀重砲兵第二聯隊にあつて軍務に服し、精勤して下士適任證及び善行證書を授與せられ、除隊後在鄕軍人分會の役員たりしこと多年、本村消防組の公設せらるゝと共に推されて第六部長を拜命し、大正十四年組頭に就任して今日に至り、功績の顯著なるものあり表彰せられしこと數次村會議員として自治に貢獻し、又蓮沼村外三ケ村船溜組合評議員として令名旺である。

蓮沼村　堀江熊次郎氏

資性溫厚にして義氣に富み、社會公共のため盡瘁する所多く、本村消防組の公設以來消防人として活躍し、小頭を經て現に第四部長の要職にあり、無火災を以て理想とし、警戒を嚴にし防火思想の普及に努むると共に、一面機械器具の整備と組員の技能の上達を圖りて萬一に備ふること、治に居て亂を忘れざる古武士の用意がある。

蓮沼村　土屋岩松氏

氏は資性溫良淸廉の士農事に精勵し工夫研究を怠らず會つては畜耕組合會計として令名があつた、大正十三年本村消防組公設せらるゝと同時に消防人となり活躍すること十有餘年、其の間小頭を經て第十部長の要職につき部下の統制一糸紊れず、常に冗費を節して機械器具の整備を圖り業績大いに擧り、名幹部として其の名を謳はれて居る、氏の父君岩勝氏は水利組合委員として水害警防に竭し、貢獻の大なるものがあつた。

蓮沼村　池田政治氏

氏は野砲兵第十五聯隊にありて兵役に服し、除隊後在郷軍人分會役員たりしこと多年、本村消防組の公設と同時に入りて消防手を拜命し、現に第三部長の要職にある私財を投じて施設の改善を圖り、部下を犒ふに厚くして自から持するに薄く、消防幹部の典型と稱へられて居る

蓮沼村　伊藤伊四郎氏

氏は稀に見る消防熱心家であつて、大正十三年消防手拜命以來災害の警戒防禦に獻身的努力を拂ふこと十有餘年、現に第三部小頭として部員の指揮指導に當り、身を以て範を示し、組員の信望絶大なるものがある、氏の先考長四郎氏は區長村會議員として自治に關し功勞多く、水利組合委員として水害の豫防に竭し、消防部長として令名があつた、氏の消防に熱心なるも父君よりの傳統によるといふべきか。

蓮沼村　古作七五三氏

氏は資性豪放磊落、發助機船長として非凡の技能を有し信望極めて大である、大正十三年本村消防組公設と同時に消防手を拜命し、爾來十有餘年、難あれば卒先して之に赴き犧牲的精神を發揮して災害の防禦に當り、平時災害の警戒と防火思想の普及に力め、現に第三部小頭として部下を指揮指導し、愈其の本領を發揮し名幹部として知られて居る。

蓮沼村　石橋藤吉郎氏

氏は沈毅にして思慮深く、朝鮮歩兵第七十三聯隊にありて兵役に服し格勤を以て聞へ、下士適任證善行證書及び精勤證を授與せられ、除隊後在郷軍人分會班長評議員等として活躍すること多年、大正十三年消防手拜命以來誠實其の職に竭し、擧げられて第五部長となり、清濁併せ呑むの雅量ありて部下の統制に秀で、名部長として知られて居る。

大平村　渡邊惣三郎氏

渡邊家は地方有數の舊家であり、氏は練達の士である前に大正八年より同十三年まで縣會議員として縣政に參與し、村長に擧げらるゝこと三回現に其の職にあり、學務委員、村農會長、郡農會副會長を兼ね、消防に關しては大平村消防組の公設以來組頭として組の向上改善と組員の指導統制に當り、今日の大平村消防組あらしめ、功勞極めて顯著であつて組員の心服ぜざるはない、氏に三男があつて長子は帝國海上火災保險會社の書記長、次子は日本醫會三子は福岡縣立修猶館中學教諭の職にあり、何れも其の將來に大なる望がかけられて居るは目出度き限りである。

大平村　鈴木意一氏

氏は大平村の素封家鈴木家の長子に生れ資性溫厚にして篤實、農事の改善に工夫研究を勵て孜々として忘らず其の熱誠驚くべきものあり、又社會公共事業に竭すの志厚く、殊に消防に關しては昭和六年大平村消防組小頭を拜命し、同八年推されて第八部長に就任し、克く組頭を佐けて組の向上發展を圖り、部員の指揮指導に努めて令名高く、貯水池の改造增設を企圖し着々其の實現に邁進しつゝあるのである、消防組の外幾多の要職にあり、職務を行ふに毫も私心なく、誠心誠意事に當り信望極めて大である。

大平村　越川榮十氏

越川家は代々農を以て業とし、氏の父君は養鶏組合長養蠶組合長、等として農家の副業開發に竭して令名がある、氏も亦農事に精勵し其の改善工夫に努め、農事に關し造詣深きものがある、而して又消防に熱心であつて私設消防時代より斯界に入りて活躍し、公設となりても變らず、昭和五年第七部小頭を拜命し、同八年推されて部長に就任、施設の改善特に貯水池の改造增設を企圖し着々其の實行に向つて努力し、部員統制亦美事である。

大平村　增田貞吉氏

氏は至誠奉公の念に燃え憂國志士の風あり、私設消防時代非常組頭取に擧げられ、輕佻浮薄の風漸く農村に旺ならんとするを慨し、奮然起つて此惡風を矯正せんとして東奔西走、組員五十餘名を糾合し鎭守社頭に勤儉貯蓄の誓をたて、其の實行の方法として村の常使を非常連にて引受け、給米一戸當り米一外麥一升を得水田約八畝歩を共同耕作して收益を擧げ、之れ等を蓄積して非常連の經費に充つることを立案勵行したのである、今日第六部が本村消防組の範とせらるゝの發展を見たるは氏の立案が基礎をなすもので、實に第六部の恩人である。

大平村　北田直次郎氏

氏は資性溫厚にして理財に富み、徵兵せられて精勤伍長に進みし格勤の士である、大正十一年大平村消防組公設となるや推されて第六部長に就任し、增田頭取の意を繼ぎて組員の統制に當り、鍛練せられし軍人精神を移して消防精神の振作に力め、施設の不備なるを憂ひて之れが改善整備を企圖し、區民の間を奔走說得して寄附金を募集し、之れに豫て蓄積せる基本金の中三百六十五圓を加へ、金一千四百五十圓を以て喞筒の購入器庫の建設被服の統一を行ひて聲名赫たるものがあり、昭和三年十一月後進に途を開きて退職後本村消防組顧問に推され、殆ど一身を本村消防組の開發に供しつゝあるの感がある。

大平村　中村八郎氏

氏は鈴木巖夫氏と共に小頭として克く北田部長を補佐

し、北田氏の後を承けて部長に就任し、豪毅濶達よく部員を統制し、增田頭取の意を繼ぎて在職中一千二百十七圓餘の基金を蓄積し、其の內三百四十二圓餘を以て建坪十八坪の集會所を建設し、部員の消防事務の研鑽討究に資し大いに斯界の發展を計つた、氏は又產業の發達と文化の促進に努め其の功績亦尠からず、昭和七年退職後第六部顧問に推擧された。

大平村　增田　剛　氏

氏は其の名の如く剛直にして謹嚴然も溫情を以て部下に對し、之を指導するに懇切を極めた、第六部小頭として克く中村部長を補佐し、中村部長の赫々たる功績の一部は氏の力に負ふ所大なりといふも過言でない、小頭退職後第六部顧問として斯界の改善發達に力を致しつゝあるのである。

大平村　淺野平吉　氏

氏は增田剛氏と共に第六部小頭として中村部長を補佐し、其の大成に與つて貢獻の大なるものがあり、昭和七年中村氏の後を承けて部長の要職につき斯界のため獻身的努力を竭して撓まず、其の功績顯著にして前途有爲の青年部長として其の將來を囑望せられ、溫厚質實にして格勤なるは青年紳士の典型とされて居る。

因に淺野部長を補佐するに淺野卓、藤崎保郎の二青年小頭あり、共に篤實の士であつて大なる期待がかけられて居る、第六部が輝しき實績を擧ぐる所以のものは部長を補佐するに小頭あり、部員亦之に協力し上下渾然一丸となりて精進するの賜といはねばならぬ。

大平村　齋藤　寬　氏

氏の父君甚一氏は多年各般の社會公共事業に竭して功勞多く、殊に消防に關し貢獻し當村消防組顧問に推擧せられた、かゝる父君の長子たる氏亦消防熱心家であつて昭和七年推されて部長に就任し熱誠以て事に當り、施設の改善整備と警火思想の普及に最も意を用ひて其の實現を期し努力倦まざるものがある、氏は農を以て業とし農事の改善に工夫研究を忘らざると共に、養豚を行ひて農村副業の開發に資し、信望極めて大である。

大平村　武田喜重　氏

氏の父君は私設消防時代頭取として多年斯界に活躍して功勞顯著である、氏亦父君の意を繼ぎ昭和四年消防人となり、同六年第五部長を拜命し、施設の改善に災害の警防に又警火思想の普及に最善の努力をなし、名部長として組員の信望厚く、又前には統計調査委員として煩瑣なる事務を鞅掌し、現に養蠶組合長として農村の更生を圖り其の功勞亦大である。

上堺村　佐瀨近次　氏

氏の先考寅次郎氏は村會議員として村治村政に參與し氏子總代檀家總代としては敬神思想と祖先崇敬の美德を皷吹し、其の他社會公共のため盡瘁し貢獻する所大であつた、氏亦父君の意を繼ぎ村會議員、學務委員、氏子總代、檀家總代等として先考の轍を踏み、昭和六年上堺村消防組頭の職につき積極的施設の改善と消防精神の作興に努め、地方稀に見る發達せる消防組たらしめ、名組頭として組員の尊敬して措かざる所である。

上堺村　秋山和一　氏

氏は縣立茂原農學校出身の俊才であつて圓熟せる人格手腕の所有者である、農事に蘊蓄あり熱心なる研究を怠らぬ氏は、農會總代同評議員として農村の振興に竭して貢獻する所多く、消防に關しては本村公設消防組設置と同時に小頭を拜命し後部長に推され、斯界の向上發達に獻身的努力を拂ひ組員の信望極めて大である、氏がかく各般の社會公共事業に竭して功勞大なるは、村會議員、區長、其の他幾多名譽職に擧げられて令名あり、且つ德行家として知らるゝ先考東四郎氏よりの傳統によるものであるであらう。氏は趣味を園藝に持ち朝夕花卉に樂しみつゝありといふ。

南鄕村　鈴木四郎　氏

氏の父君莊作氏は私設消防時代より斯界にありて活躍し、公設後は部長を拜命し貢獻大なるものがあり、養蠶組合副組長其の他各種顯職にありて功勞が多かつた、かゝる名士を父君とする氏は南鄕消防組の公設せらるゝと共に入りて消防人となり、昭和三年小頭を拜命し、更に推されて第六部長となり、至誠奉公の誠を致して父君の名を辱しめず、組員より絕大なる心服を受けて居る、家業たる農事に就ては常に之れが改善に工夫研究を怠らず篤農家として信用大なるものがある。

南鄕村　齋藤清一　氏

氏は大正五年近衛步兵第四聯隊に入りて兵役に服し、格勤其の職に竭し、拔擢されて伍長に昇進し除隊後在鄕軍人分會役員たること多年貢獻大なるものがある、消防に關しては昭和八年南鄕村消防組小頭拜命と共に部長に推され、軍隊的紀律を以て部下を統制し、大いに消防精神の發揚に努め、信望極めて厚く、私設時代より斯界に活躍して功勞大なる氏の父君權次郎氏の髣髴たるものがある。

南鄕村　高橋明治　氏

氏は談論風發理路整然たる雄辯家であつて、村青年團長郡聯合青年團役員として青年の指導陶冶に當りて令名あり、大正八年南鄕消防組消防手を拜命し、昭和六年小頭に擧げられ、同七年第一部長の要職につき常に身を以

て衆を率ひ功績の大なるものがある、父君七三郎氏も消防小頭、區長、其の他の公務に當り熱誠の人であり、父子共に村民の瞻望する所である。

大富村　太田　壽　氏

氏は近衛輜重兵大隊に屬し日露戰爭に出征し、勳功により軍曹に進み勳七等に叙せられたる勇士であつて、資性溫厚にして理財に長じ、村助役村會議員に擧げられ自治に貢献し、明治四十三年大富村消防組公設せらるゝと同時に消防人となりて斯界に活躍すること三十年に垂んとし、其の間小頭、第三部長、副組頭を歷任して昭和八年組頭の要職に就き、常に身を以て衆に範を示し、消防事務の改善向上に努め、昭和九年一月縣知事より功勞章を授與して其の功績を表彰せられたる外、表彰せられしこと數回、其他各般の社會公共事業に盡瘁したる功勞亦大にして、村民の尊敬して措かざる所である。

大富村　實川　誠一郎氏

氏は溫厚篤實なる紳士であつて其の手腕圓熟、村助役村會議員として村政を鞅掌し村民の福祉の增進に努め、養蠶組合長として產業の開發に竭して功勞大なるものあり、大正十五年大富村消防組部長を拜命し、其の後一時退職したるも衆望により再び部長となり、昭和七年二月副組頭の要職に就き、刻苦精勵施設の改善組員の統制警

火思想の普及を圖り、各方面より表彰せられしこと一再ならず、名幹部の名を謳はれて居るのである。

大富村　戸村勝三氏

氏は明治四十四年消防手を拜命以來大富村消防界に活躍すること二十有餘年將に三十年に垂んとし、其の間小頭を拜命し、本部長に擧げられ精勵其の職に竭し、功勞顯著にして表彰せられしこと數次に及び信望極めて厚く消防以外各般の社會公共事業に盡瘁し貢獻せし所亦大であつて、村內の重きに置かれて居る。

大富村　渡邊政一氏

明治四十三年消防手を拜命したる氏は、爾來二十有餘年將に三十年に垂んとする久しきに亘つて大富村の災害警防に當り、其の間小頭を經て部長に擧げられ、組の向上改善を圖り組員の指導に竭し功勞顯著なるものあり、縣知事其他より數回に亘りて表彰せられ、組員の尊敬して措かざる所である、氏が消防以外の各般の社會公共の爲めに盡したる貢獻亦尠なからず、信望大である。

横芝町　吉田　清氏

氏は横芝の名門多額納稅者であつて練達の士として知られ、若くして縣立成東中學校に學び、後近衛步兵第二聯隊にありて兵役に服し、陸軍步兵少尉に任ぜられ正八位に叙せられ、在鄕軍人分會長たりしこと多年、又町會議員として町政に參與して令名あり、醬油釀造業を營みて其の品質の良好なるを以て販路極めて廣く、横芝商工組合理事長の職にありて產業の開發と横芝町の發展に盡瘁しつゝあり、大正十三年横芝町消防組第二部消防手を拜命し、第二部長を經て昭和七年衆望により組頭に就任し、斯界に盡瘁して功勞大なるものあり、其他各般の社會公共事業等に貢献せしこと枚擧に遑なき程である、昭和六年三月忠魂碑建設に當り、碑石を寄附して其の事業容易ならしめたるは、古武士の俤を偲ばしむるものがある。

横芝町　中澤留五郎氏

氏は鮮魚商を營み、其の營業方針の誠實振りは顧客の信用を得、業務隆昌を極めて居る、犧牲的精神横溢し義氣に富む氏は、消防の重大性に鑑み、昭和三年横芝町消防組消防手拜命以來斯界のため献身的努力をなし、小頭に擧げられ、第一部長に推され、名部長として組員の信望を一身に蒐めて居るのである。

横芝町　霞　壽泰氏

氏は資性溫厚、薪炭及鷄卵商を營みて信用厚く、在鄕軍人分會幹事として活躍し、青年團支部長として青年の指導陶冶に當りて令名あり、大正十二年横芝町消防組消防手を拜命し、爾來率先して難に赴き、機械器具の整備に盡し、克く消防の本領を發揮し、昭和四年本部員となり、同八年第一部小頭を拜命し、克く組頭を補佐して組員の指揮指導に當り功績大なるものあり、信望大である

横芝町　下島義庫氏

氏は煉炭工場を設置し廣大なる販路を有し。實直なる營業方針に業務は隆昌を極めて居る、大正十二年横芝町消防手を拜命以來災害の防禦、機械器具の整備、警火思想の普及に力め、昭和七年第一部小頭に推され克く部長を補佐して組員の指導に當り、名幹部として其の將來を囑望されて居る。

横芝町　井上新太郎氏

氏は金物商營みて業務隆昌を極め信用甚だ厚く、納稅組合長として納稅成績を優良ならしめ令名が高い、大正八年横芝町消防手を拜命し、昭和九年一月第二部長に補せられ、瓦斯倫喞筒の購入、貯水池の完備、被服の改善等施設の改善は氏の努力による所極めて多く、功績極めて大なるものがあり、名部長の名を謳はれて居る。

横芝町　眞行寺多吉氏

氏は篤農家を以て知られ農事の改善に孜々營々として撓まず、區長代理として部民の啓發に竭して令名がある大正十二年横芝町消防手を拜命、爾來斯界のため犧牲的精神を發揮して奮勵克く消防の本領を發揮し、昭和八年

一月第二部小頭に擧げられ、部長を佐けて消防事務の改善に努め、信望極めて大である。

横芝町　宮本嘉一氏

昭和三年横芝町消防手を拜命したる氏は勉勵其の職に竭し模範消防手と稱へられ、同八年一月第二部小頭に推され克く部長を佐けて施設の改善整備に竭し、益々消防技能の練磨と警火思想の普及に力め其の功績顯著であつて名聲旺である、米穀商を營み業務の盛大なるは、氏の溫厚篤實なる資性の然らしむるものといふべし。

千葉縣茂原警察署管內

茂原町　丸有章氏

丸家は代々醫を以て業とし、氏も亦父祖の業を繼ぐため千葉醫學專門學校に學びて俊才を以て聞え、業を卒へて開業し眼科及內科を得意とし、茂原町消防組公設以來消防醫として組員の傷痍救護に當り、後推されて同組組頭に就任し熱誠其の職に竭し、茂原消防組の今日の發展は氏の力によるものといふても過言でない、氏は資性溫厚にし淸廉寬度、德行極めて多く、前に町會議員として町政に參與して町民の福祉增進に努め、區長として部民の啓發に竭し、各般の社會公共事業のため盡瘁したる功勞亦枚擧に遑なく、地方民敬慕の的となつて居る。

廳南町　白鳥平一郎氏

白鳥家は盛大に醬油釀造業を營み傍叺莚の加工販賣を業とし、長生郡を中心に廣く全縣下に亘り農家の副業として其の製法の普及を圖り、自力更生と失業の救濟に資すること既に四代に及ぶ、氏は其の四代の當主であつて騎兵第十五聯隊にあつて兵役に服し、町會議及び町助役として町政に參與し自治の功勞者として知られ、各般の社會公共事業に盡瘁して貢獻の大なるものあり、殊は消防に關しては夙に斯界に活躍し小頭部長を歷任して組頭に就任し、熱誠事に當りて今日の廳南町消防組の發達を見るに至らしめ、閲熟せる手腕人格は町民の等しく敬慕する所、同町の重鎭である。

日吉村　山越信司氏

氏は豪毅潤達責任感强く、多年警察界に其の敏腕を振ひ、鬼熊事件の功勞者として知られて居る、昭和三年官を辭し村收役に擧げられて村財政を料理し、村會議員村助役に選ばれて村民の福祉の增進を圖り、各般の社會公共事業に盡瘁貢獻せし功勞枚擧に遑なく、殊に消防に關しては第一部長、本部長、副組頭を歷任して組頭の要職に就き、施設の整備、組員の指導、警火思想の普及に其の蘊蓄を傾け、斯界の向上發展に專念し業績甚だ擧り、功績は燦として輝て居る。

日吉村　鵜澤榮氏

氏は英氣橫溢潤達の士で、青年團幹事、青年會長として青年の指導陶冶に竭して令名あり、大正五年二月日吉村消防組消防手を拜命以來同村災害の警戒防禦に獻身的努力をなすこと二十年、昭和九年三月二日第一部長の要職に就き功績の大なるものあり、昭和六年四月十五日茂原警察署管內消防聯合會長より表彰せられたるを初め、表彰せらるゝこと數次、其の將來に多大の期待がかけられて居る。

豐國村　中村薰氏

氏は高德卓見の宗教家且つ思想家であつて、昭和維新の志士として松岡洋右氏と相交通する所あり、前に軍籍にあつて陸軍步兵中尉に進み從七位に叙せられ、長生郡將校團長、同顧問、在鄉軍人分會長、青年訓練所指導員等として軍事思想の普及に努め、昭和六年消防界に投じ昭和六年九月衆望により組頭に就任し、幾多の困難と戰ひつゝ設備の改善、組員の訓練に努力し、公器の面目を發揮するに專念し、功勞顯著なるものがある。崇高なる人格と圓熟せる手腕とを有し、然も淸廉にして困難に耐え他を導くに自ら範を示す氏の如きは、稀に見る消防人の典型といふべく、一般敬慕措かざる所である。

西村　桐谷暉氏

氏は多年軍籍にあり陸軍步兵少佐に任ぜられ正六位勳五等に叙せられ、大正八年西伯利亞に出征し二年間酷暑嚴寒を冒して各地に轉戰し、赫々たる武勳をたてし男士にして、資性溫厚雅量豊かに人格手腕兼ね備はり、歸鄉後推されて村長に就任し村政を鞅掌して事績擧り、各般の社會公共事業に關與して貢獻せし所枚擧に遑なく、殊に消防に就ては昭昭七年二年衆望に依り西村消防組頭の職に就き、多年修練せる軍人精神を移して消防精神を振作し、施設の改善整備を圖り、今日の西村消防組の發展をなさしめ、本村の女子青年團員、小學兒童に至るまで克く消防精神の普及し居るは、氏の力に依る所大である

西村　松崎七一氏

朝鮮步兵第七十三聯隊にありて軍務に服したる氏は、青年分團長、在鄉軍人分會長、青年訓練所指導員として青年の指導陶冶と軍事智識の普及に竭し、其他各般の社會公共事業に貢獻せし所大なるものがある、大正十三年三月四村消防組小頭を拜命し、昭和六年三月第一部長に推され、施設の改善、組員の訓練、災害の警戒防禦に獻身的努力をなすと共に、警火思想の普及に力め、功績顯著なるにより縣知事其他より數回表彰せられ、部員の信望を一身を集めて居るのである。

西村　齋藤信吉氏

氏は明治四十五年消防人となり、大正十四年西村消防組小頭を拜命し、昭和六年推されて第三部長に就任し、犧牲的精神を發揮して災害の警防に當り、施設の改善に努力すること二十有餘年、施設の改善に私財を投じ一般寄附金の募集を容易ならしめたる等德行尠ならず、縣知事其の他より數回表彰せられた、氏は消防に關し功勞顯著なるのみならず、在鄕軍人分會副會長及會長たること多年區の評議員、村道路委員、等として自治に竭し、其の他各般の社會公共事業に貢獻する所亦尠なからず、信望大なるものがある。

新治村　白鳥壽正氏

新治村の豪農を以て知らるゝ氏は、常に農事と小作農待遇の改善に工夫研究を怠らず、農民の指導者と仰がれ吉井區長、村會議員、村助役に擧げられて村民の福祉增進に努め、自治の功勞大なるものがあり、各般の社會公共事業に盡瘁して貢獻する所多く、殊に消防に就ては昭和二年三月新治村消防組第六部長を拜命し、同八年二月衆望によりて組頭に就任し、事に當りて果斷組員を指導するに懇切にして、施設の改善、組の向上、災害の警防に寢食を忘れて活躍し、模範組頭として信望を博して居るのである。

新治村　大住和三郎氏

氏は資性溫厚農を以て業とし、區長としては部民の休戚を擔ひて其の利福增進と啓發に竭し部民の尊敬厚く、昭和二年新治村消防組消防手を拜命し、同六年第四部長に推され、更に同八年八月副組頭に就任し、克く組頭を補佐して組の向上發展を策し、熱誠事に當りて功勞多く信望極めて厚きものがある。

新治村　長谷川菊次郎氏

氏は青年團長在鄕軍人分會幹事たること多年、青年の指導陶冶に當りて令名あり、私設消防組時代より非常連世話人として斯界に活躍し、公設消防組設置後新治消防組小頭を拜命し、昭和八年第二部長に推され、多年の經驗を應用して組員の指導と災害の警防に竭し、組頭を補佐して組の改善向上に努め、其の功勞顯著なるものがあり、組員の信望を博して居る、家業たる農事に關しては其の精勵なること多く其の比を見ず、他の模範と仰がれ信用極めて大である。

新治村　關屋榮一氏

近衞步兵第四聯隊にありて軍務に服したる氏は、除隊後在鄕軍人分會役員として同會のために貢獻し、又青年團幹事淸和會々長等として青年の指導陶冶に當りて令名高く、私設消防時代より斯界に活躍し公設となりても變ることなく、昭和五年係長に、同八年小頭に、而して同

九年一月第三部長に就任し、常に犧牲的精神を發揮して災害の防禦に當り、部下を愛するの情厚く名幹部の名を馳せて居る。

新治村　當泉勘四郎氏

氏は資性溫厚にして篤農家を以て知られ、區長としては部民の啓發に竭し、青年團長としては青年の指導陶冶に努めて聲名高く、夙に消防界に活躍し、公設消防組設置せらるに及んで消防手小頭を經て昭和八年三月新治村消防組第四部長に就任し、格勤其の職に盡して功勞顯著なるものあり、組員の信望を博して居る。

新治村　鎗田春司氏

氏は在鄕軍人分會幹事たること多年にして同會に貢獻せし處多く、青年團長として青年の指導陶冶に當りて令名あり、私設消防時代より斯界に活躍し、公設消防組設置せらるゝや消防手を拜命し、よく犧牲的精神を發揮して災害の警防に當り、昭和二年小頭に擧げられ、同七年二月新治消防組第六部長の要職につき、組頭を補佐して組の改善向上に努め、茂原警察署管內消防聯合會長より表彰せられたるを以て見ても、其の功績の大なるを窺ひ得らるゝのである。

豐田村　岩崎信次郎氏

氏は淸廉勤直の士で、曾て千葉縣警察界の重要地位にあつて敏腕を振ふこと二十有餘年精勵格勤を以て聞え、官を辭して村政に與り貢獻大なるものがある、本村に公設消防組の設置せられたるは氏の慫慂と奔走に端を發し實に氏は豐田村消防組の創設功勞者である、昭和七年四月衆望により豐田村消防組頭となり、爾來之れが向上發展に熱誠なる努力を續け、部下を指導するに懇切を極め溫情溢るゝものあるも、事紀律に關しては一步も假借せず、恩威併せ行ひて統制一糸紊るゝなく、名組頭の名四隣に高く、村民の信望を一身に集むるも亦當然の歸結といはねばならぬ。

豐田村　齊藤健氏

氏は非常連時代より豐田村の災害警防に活躍し來れる士で、昭和八年一月豐田村消防組小頭を拜命し、同年八月第一部長に推され、熱誠以て施設の改善と組員の指導に當り、絕大なる信望を博して居る、氏は消防に關し功勞顯著なるのみならず、在鄕軍人分役員として軍事智識を振作し、青年團幹事として青年の指導陶冶に當り、農業組合副組合長としては產業の開發に盡し、統計調査委員としては煩瑣なる統計事務を處理する等、各般に亘りて功勞の大なるものがある、氏の父君與三郎氏も村會議員區長として功績多く、地方自治功勞者として知られ、父子二代共に村民の瞻望する所となつて居る。

豐田村　野口喜一氏

氏の父君松五郎氏は、區長、農會總代等として又自治に又產業に貢獻する所大であつたが、氏も亦公共に竭す志厚く、非常連當時より世話人として盡瘁し公設消防組設置後も消防人たること原の如く、昭和八年第二部小頭を拜命し、一層獻身的努力を盡して斯界に活躍し功績顯著なるものがある、任俠心厚く圓熟せる手腕を有する氏は、實に典型的消防人といふべきである。

豐田村　堀口清氏

氏は天資溫厚にして快活、在鄉軍人分會役員なりしこと多年にして同會のため貢獻せし所多く、統計調査委員養蠶組合理事として產業の發達に竭して令名あり、夙に私設消防組時代より斯界の人となりて活躍し、克く犧牲的精神を發揮して消防の本領を發揮し、昭和八年三月推されて豐田村消防組第六部長に就任し、愈活躍の大なるものあらんとし、其の將來に多大の期待がかけられて居るのである。

千葉縣一宮警察署管內

一宮町　竹久貞次郎氏

氏は謹嚴そのものゝ如き崇高なる人格者であつて溫雅緻密明晰なる頭腦と圓熟せる手腕とは、氏の關する事業をして悉く大成せしめざるはない、騎兵第十三聯隊に屬して日露戰爭に出征し、軍功により陸軍騎兵伍長に昇進し勳八等に叙せられ、在鄉軍人分會長として令名あり、國勢調査委員たること三度、又震災調査委員に擧げられ煩瑣なる調査事務を處理し貢獻大なるものがあり、一宮小學校後援會評議員、一宮實業學校商議員、として育英事業に盡瘁し、一宮實業會理事として產業の開發と一宮町の發展に努め、其の他社會公共事業に關與してなしたる功績枚擧に遑がない、氏が一宮町消防功勞者たることは餘りにも有名であり、たゞに一宮町消防組頭たるのみならず、千葉縣消防義會理事として縣下消防開發に盡したる功績亦大である。趣味を投網釣魚に持ち、之れに對する造詣深きものがある。

一宮町　土屋和夫氏

强固なる意志と健全なる思想とを表現する堂々たる體軀を有する氏は、清濁併せ呑むの雅量と謙讓の美德を備へ、町民の信望大なるものがあり、土木委員、耕地整理組合整理委員、農會總代、等に擧げられて貢獻大なるものがある、大正三年一宮町消防組消防手を拜命し、後幾何もなく推されて第四部長に就任し、常に身を以て衆を率ひて能く消防の本領を發揮し、功績顯著なるものがあり、名部長と稱へられて居る。

一宮町　御園生第三郎氏

氏は質實剛健にして然も注意周到、果斷以て事に處し時宜の處置を誤ることがない、步兵第四聯隊にありて兵役に服し、後在鄉軍人分會評議員たること多年、在鄉軍人を以て獨立消防隊を組織し一宮町の警防に當つたが、今は一宮町消防組第五部長の要職にあつて格勤其の職に竭し、典型的部長として其の名高く、耕地整理組合評議員、農會總代、として產業の開發に貢獻したる功績亦大である。

一宮町　鶴岡七郎氏

氏は前に青年團幹事、同團長として青年の指導陶冶に盡し、加藤郡長より表彰せられしことあり、資性坦懷研究心深き農村中堅人物として知られ、昭和二年三月馬耕技術優秀なるにより縣知事より表彰せられ、農家組合出荷幹事、一宮町東部耕地整理組合役員、として產業の開發に努めつゝあり、消防人としては一宮町の警防に當ること二十有餘年、累進して第七部長の要職にあり、常に施設の改善と火災豫防に努め、防火貯水池の堀貫井戸を研究して之を完成し、氏の屬する部が十三年間無火災の成績を有するは、亦氏の努力によること大である、氏に對する町民の信望厚き故なきにあらずといふべし。

一宮町　森田芳松氏

步兵第五十七聯隊にありて軍務に精勵し、下士勤務上等兵に進み、教育係、上等兵候補者選定係に擧げられ、優秀なる成績を示したる氏は、除隊後在鄉軍人分會役員として貢獻大なるものがあつた、消防人としては一宮町消防組第九部長として組員の指導訓育に當り、消防精神の振興と消防技能の進步向上に努め、消防事務改善に盡したる功勞顯著なるものがあつた、今消防界より退くも組員其の德を稱へて止まぬ。

一宮町　御園生謙三氏

町會議員、耕地整理組合評議員、其他各般の要職にありて貢獻大なりし代三郎氏の息に生れ、資性溫厚篤實にして信望厚く、大正四年一月町消防組消防手を拜命し、爾來斯界に活躍して功勞顯著なるものあり、累進して第九部長の要職に就き部下の統制に秀で名部長の名高く、趣味を蔬菜園藝に持ち造詣極めて深しといふ。

土睦村　池澤正一氏

池澤家は地方稀に見る舊家且つ名門であつて、村長として自治に貢獻大なりし信太氏を父君として、此の名家に生れたる氏は、潤達清廉地方政界の重鎭で、政友會に屬し辯論の雄として知られて居る。縣會議員、村長、等に擧げられては縣政に村治に高遠なる經倫を行ひ、帝國農會議員、同評議員、縣農會副會長、長生郡農會長、と

しては産業開發の抱負を實踐に移し、金錢貸借調停委員に擧げられては圓熟せる手腕を揮ひ、公共事業各般に亘る功績枚擧に遑なく、士睦村消防組頭として本村消防組の改善向上を圖るのみならず、縣消防義會理事として縣下消防の開發に竭し、功績極めて大である。

千葉縣大多喜警察署管内

大多喜町　田島隆太郎氏

氏は謹直清廉の人格者であつて、熱誠横溢し、義俠心に富み、他の爲めに盡瘁して勞を厭はず、同氏の家庭は私設人事相談所の觀を呈して居る、明治四十五年以來引續き町會議員として町政に參與して町民の福祉增進の爲めに健闘し、昭和二年縣會議員に選ばれて爾來縣政に竭す等、地方政界に重きをなし、各般の社會公共事業に貢献せし功勞は枚擧に遑がないが、就中消防事業に關しては三十有餘年間寢食を忘れて斯界に活躍し、大多喜町消防組頭としてのみにても既に二十年、大多喜町が千葉縣下第一の優良消防組の一たる名譽を擔ふまでに發達したるも、氏の力によるといふも過言でなく、大多喜警察署管内消防聯合會長、千葉縣消防義會理事、大日本消防協會千葉縣支副支部長、等として消防界の向上發達に盡したる功績は筆紙に盡し難い、令閨亦消防熱心家として警火思想の普及に竭し、消防組員を慰撫し、組員一同より慈母の如く敬慕せられて居る。

大多喜町　兒安甚三郎氏

驍將の下に弱卒なしといふ諺の如く、大多喜町消防組は多士濟々である、中にも本部長たる氏は、英氣潑溂剛毅沈勇にして雅量豊かに、名部長の譽高く、明治四十二年消防手拜命後小頭、部長、本部長に歴任し、多年の經驗と熟練せる手腕は他の追隨を許さず、田島組頭及び同氏令閨の德に感じ、消防の本領を發揚するため献身的努力を惜まず、其功績大にして縣知事其他より表彰せられしこと一再でない、氏は又區長として部民の啓發に盡し商工會理事、千葉縣木材商組合夷隅郡支部副組合長、大多喜署管内工場懇談會長、等として産業の開發に努め家業たる木材商は隆昌を極めて居る。

瑞澤村　木村盛氏

剛毅沈勇熟慮斷行の士、歩兵第二聯隊にありて軍務に服し格勤精勵、拔擢されて陸軍歩兵軍曹に昇進し、歸鄉後在鄉軍人分會副會長及び會長として活躍すること十年青年團長としては青年の指導訓育に當り、協行組合長としては農村の弊風打破と自力更生に努め、役場書記としては村治村政の樞機に參劃して功勞大なるものあり、私設消防時代より瑞澤村の警防に竭し、公設消防組設置と同時に消防小頭を拜命し、爾來累進して現に組頭の要職にあり、縣知事より功勞徽章を授與せられたるを以て見ても、其の功績の如何に大なるかを知らるゝのである組員の信望村民の信頼の大なるはいふまでもないことである。

瑞澤村　小川中氏

小川家は祖を清和源氏に起し、佐竹藩にあつて錚々たる家柄であつたが、主家の沒落に遇ひ小川治郎右衛門當陸より瑞澤村に移りて一家を草創し、代々名主勤役苗字帶刀御免となつた由緒ある名家であつて、之を近代に就て見るも、祖父は地租の改正に盡して功あり、父君清氏は教導職中講義の榮職にある、かゝる名門に生れたる氏は、眞摯にして研究心に富み、縣立茂原農學校に學びて秀才を以て聞え、卒業後農商務省産業試驗所に奉職し、又教職にあつて育英に努め、村會議員、其他幾多名譽職に擧げられ、社會公共のために竭して功績顯著である、中にも消防の社會施設としての重要性に鑑み夙に之に關與し献身的努力をなし、擧げられて副組頭の要職につき、組頭を補佐して組の改善向上を圖り、典型的幹部として令名がある、氏は劍道及び書道に趣味を有し、練磨して奥義を極め、香洞と號して居る。小川家は由來長壽の系統で、祖父作造氏八十三歳、祖母チヨ女八十一歳、父君清氏六十二歳、皆健在にして三夫婦揃ふて一家にあるは目出度き限りである。

總元村　酒井兵治氏

氏は資性溫厚怜悧にして思慮深く、然も清濁併せ呑むの大度を有し、近衛歩兵第四聯隊にありて兵務に服し、除隊後在鄉軍人分會長、青年團支部長、として軍事智識の振作と青年の指導陶冶に當りしこと多年、現に區長として部民を啓發し、村農會總代、同會評議員、農家組合長、として産業の開發と農民の利福增進に努め、共に功績極めて大であり、夙に消防人となりて總元村警防に竭し、推されて組頭の要職に就き、消防事業の改善發達を圖ると共に、無火災を目標に警火思想の普及徹底を期し刻苦勉勵業績甚だ擧り、組員を指導誘掖するに懇切と溫情とを以てする一面に於て、紀律の肅正を圖りつゝあり今日の總元村消防組の發展と村民一般の警火思想の普及は、實に氏に負ふ所極めて大であつて、組員の信望村民の信頼の絶大なるものあるは、故なきにあらずといふべきである。

老川村　野口宗三郎氏

野口家は德川時代苗字帶刀御免の老川村の名門であつて、先考三次郎氏は郡會議員、縣會議員、縣參事會員、其の他幾多の名譽職に擧げられたる名士であつた。かゝ

る名門に生れかゝる名士を父君とする氏は、天資謹直溫良、各般の社會公共事業に關與して貢献せし所多く、殊に學務委員として村民の啓發に力め、消防組頭として老川村の災害警防に任じて功勞最も顯著である、氏は書道に趣味を有し其の技神に入り、且つ多くの名筆珍蹟を藏すといふ。

國吉町　小高俊海氏

明治三十四年千葉醫學專門學校を優秀なる成績を以て卒業したる氏は、明治三十七年二月日露戰爭に從軍し、明治四十三年國吉町にて開業し、國吉町在鄕軍人分會長夷隅郡在鄕軍人聯合分會長、町會議員、郡醫師會長、郡學校術生會長、青年團長、等を歷任し、其他各般の公共事業に盡瘁し貢献大なるものがあり、其の功績擧げて數ふるに遑なく、昭和九年二月推されて國吉町消防組頭に就任した。氏の如き公共心に富む練達の士を、組頭に戴き得たる國吉町消防組は多幸であつて、今後當組が一大發展をなすべきは、蓋し火を睹るよる明である。

千町村　田邊信夫氏

田邊家は代々醫を以て業とした、氏亦千葉醫學專門學校に學び俊才を以て聞え、業を卒へて父祖の業を繼ぎ、千葉縣刀圭界に聲名高きものがある。而して村會議員としては村民の福祉增進を圖り、學校醫としては學童の保健に努め、青年團長として青年の指導陶冶に當る等、各般の社會公共事業に盡瘁し功勞大なるものがある、中にも消防に關しては、千町村消防組頭として、科學者的緻密明晰なる頭腦を以て、組の改善發達を圖り、溫情を以て組員を指導誘掖し、着々として大成の實を擧げ、絕大なる信望を博して居るるである。

西畑村　三上正巳氏

氏は縣立大多喜中學校出身の秀才であつて、頭腦明晰なる敏腕家として信望極めて厚く、青年團長として青年の指導陶冶に當りて令名あり、夙に消防人となりて西畑村の警防に盡瘁し現に西畑村消防組本部長として組員の心服深く、將來の組頭を以て目せられて居る。

西畑村　岡田丑之助氏

大多喜警察署管內には國手にして消防組頭たるの士が多く、氏も亦其の一人であつて、西畑村消防組のため寢食を忘れて盡瘁し、多大の功績がある、加之村會議員、學務委員、學校醫、傳染病豫防醫、鐵道省囑託醫、信用組合監事、金錢債務調停委員、等の幾多公職にあり、且つ各種社會公共事業に盡瘁し、貢献の大なるものがあり村民より多大の感謝が捧げられて居る。

上瀧村　河野弘一氏

河野家は由緒ある舊家であり素封家として知られ、先考萬右衛門氏は村長其の他の榮職にありし名士であつて此名門に生れ此名士を父とする氏は自から貴公子の風格あり、人をして敬慕せしむるの德を有して居る。若くして早稻田大學に學び、村會議員、學務委員、等に擧げられて自治に貢献し、千葉貯蓄銀行支店長として地方財界に重きをなし、上瀧村消防組頭としては組の改善向上、組員の指導誘掖、警火思想の普及、等消防組の本領發揚に努力して功勞あり、名組頭として其の將來に一層の期待がかけられて居る。

上瀧村　山本武司氏

山本家は德川時代より苗字帶刀御免の名門であつて、祖父代二氏は基本金により貧困者を救濟するを目的とする財團法人、夷隅伊甚恤救社の創設發起人であり、先考幹氏は村長として自治に功勞大なりし士である。其の傳統を受くる氏は大多喜中學校の出身であつて、青年團副支部長、氏子總代、夷隅郡畜產組合幹事として令名あり現に區長として部民の啓發に竭し、消防組本部長として上瀧村消防組の改善向上に大なる功績あり、將來に多大の期待がかけられて居る、畜產に趣味を有する氏は、地方發展につき畜產奬勵を考究しつゝあり、其の將來は刮目して待つべきものがある。

千葉縣大原警察署管內

大原町　山口太郎氏

氏は豪放にして快活、清濁併せ呑むの襟度を有し、多年の修練と經驗とにより手腕愈圓熟し、大原町に於ける少壯實業家の第一人者として自他共に許して居る。若くして縣立茂原農學校卒業後東京に遊學し、明治大學に學びて商科を得業し、歸鄕後各種事業に關係して敏腕を揮ひ、又各般の社會公共事業に盡瘁し貢献する所多く、殊に消防に關しては、大原町消防組第五部長として献身的努力をなし、衆を率ふるに身を以て範を示し、災害の警防警火思想の普及に竭すのみならず、組頭補佐役として施設の改善と組員の統制を圖り、縣下優良消防組として名ある大原町消防組をして一層の光彩を添へしめ、名幹部の名を博し、絕大なる組員の信望と町民の信頼を負ふて居るのである。

御宿町　中村和氏

常に高所より大勢を達觀して正しき觀察を下し、以て百年の計を樹て、然も其の時代に即する施政を行ふは、大爲政者の執る所である、氏は即ち其人であつて、幾多の名譽職たあつて御宿町の發展と町民の福祉增進に竭し御宿町助役として直接町政執行の要地に就くに及んでは天禀の事務的才能と圓熟せる手腕とを揮ひ、海水浴客の誘致其他町發展の大方策を樹立し、着々之を實行して名

助役の名を得、御宿町消防組頭に就任しては、公器としての消防組の重大性に立脚して町消防組の改善發達を圖り、施設の整備、充實組員の技能の進歩、及び素質の向上に、東奔西走してために寢食を忘れ、町消防組をして異數の發達をなさしめ、消防の理想は災害の防禦より災害の豫防にありとの信念により、災害の豫防と警火思想の普及徹底に力めて之が實現を期し、かくして名組頭の名を得たのである。氏の御宿町のためになしたる所かく大にして、其の功や偉なりといふべし。

浪花村　市原市松氏

放膽にして然も細心、恰も古英雄の如き天禀を有する氏は、縣立大多喜中學校に學びて英才の譽高く、業に就いて家業を繼ぎ海產物製造業を經營して業務隆昌を極め區長としては部民の休戚を擔ひて隣保の誠を致し、德行多く德望家として知られて居る、而して又稀に見る消防熱心家にして推されて、浪花村消防組頭に就任し、組の改善發達を圖り着々として之れが實現に努力し、組員を犒ふに厚く、指導誘掖大いに盡し、信望極めて大であつて、其の將來を囑望されること大である。

浪花村　吉田三郎氏

氏は謹直にして信義に厚く、責任感の强き士である、横須賀海兵團にありて兵務に服し、歸鄉後私設消防時代

其の役員として浪花村の警防に終始し、功勞大なるものがあり、公設消防組の設置せらるゝに當り小頭を拜命し難あれば卒先之に赴き、平時災害の豫防に努め、組員を指導するに懇切を極め、第四部長に推され本部長を兼ね組員より慈父の如く敬慕せられ、信望甚だ厚きものがある

東村　日置定二氏

氏は東村の素封家に生れ、村收人役として村財政を掌ること十箇年、助役として村政の實際に當ること六箇年又村會議員區長に擧げられ自治の功勞大なるものあり、郡會議員として郡政に參畫し地方政界に重きをなし、郡農會評議員、村農會長、として產業の開發に竭したる功績も亦大である、其の他社會公共事業に盡瘁し貢獻する所尠少ではないが、殊に消防に熱心にして本村消防組の創設者であつて、現に東村消防組頭として名組頭の譽が高い。趣味を俳句と盆栽に持ち、藏する所の名什珍品は少くない。

東海村　中村善四郎氏

氏は不言實行の士であつて商才に長じ、米穀肥料商を營み、業務隆昌を極め、紳商として知られ、大日本米商組合千葉縣代議員、千葉縣米穀肥料商組合夷隅支部長の要職にあり、斯界に重きをなして居る。各般の社會公共事業に盡瘁たる氏の功績は、枚擧に遑がないが、中にも消防組頭として東海村消防組の發達改善に盡し、東海村の災害警防に當り功勞の如何に大なるかは、縣消防義會より功勞章を授與表彰せられたるを以て見ても之を知るべく、難破船、人命及び塔載貨物を救助せしこと幾回なるを知らず、中には第三師團の充員應召者を救助し、之れに旅費を與へ召集に應ぜしめたるが如き奇特の行爲もありて、其の德行大なるものがある。

千葉縣勝浦警察署管內

上野村　渡邊嘉助氏

氏は剛毅沈勇にして大度あり、他のために盡瘁して其の勞を厭はず、信望極めて大なるものがある。曩に植野青年團を創設して青年の指導陶冶に努め、青年の意氣と美風の發揚に貢獻大なるものがあり、數期の久しきに亘り區長として部民の啓發に竭し、且つ其の福祉の增進に努め部民の尊敬の的となつて居る。上野村消防組の公設に際してなされたる氏の盡力の如何に大なりしかは、既に周知の事實であるが、組頭に就任するに及び名實備はる上野村消防組大成のため、村內未公設區に對し公設たらしむべく粉骨碎身の努力を續け、着々として其の實現に邁進しつゝあるのである、氏のこの熱誠とこの努力に村民等しく深甚の感謝を捧げて居る。氏の生家は代々農を以て業とするが、先考力藏氏は鍛治職を兼ね、其の非凡なる技は遠く各地にまで名聲赫たるものがある。

豐濱村　吉田豐作氏

吉田家の祖先は代々鶴舞の藩士であつて、氏も鶴舞にて生誕し明治二十四年上野村に移りて一家をなした、資性謹直にして數理に長じ、事に當りて熱誠、信望極めて大である。若くして育英に志し敎鞭を採つたが、明治二十八年退職して產業學校に入り、業卒りて本村役場書記を拜命し、助役に擧げられ、後村長に就任し、產業組合專務理事を兼ね、自治及び產業に關し功勞多く、各般の社會公共事業に關與し貢獻する所亦尠くない、就中消防に關しては、本村消防組公設の功勞者であり、其の成ると共に組頭に擧げられ、組の改善發達と組員の指導誘掖に努めて今日に至り、組員より慈父の如く敬慕せられて居るのである。

豐濱村　島津治助氏

氏の先考半七氏は剛毅果敢潛水業界の權威であり、潛水夫組合長として後進を指導誘掖したる高名の士である其の嫡子として生れたる氏は、父君の遺風を承けて義氣に富み公共心に厚く、現に區長代理、統計調査員、戶數割調査員、等として自治の功勞多く、消防の必要を說いて東奔西走し、私設消防組を建設し、更に進みて公設消

防組設置に努力し、其の成るに及んで第四部長を拜命し同組の向上發展と災害警防に寢食を忘れて盡瘁して今日に及び、絶大の信望を博して居る、漁業組合監事として斯界のために竭し、南總潜水士相互組合を創設して組員の利福增進を圖る等、産業上の功勞も亦尠くない、潜水業界の先輩であり業界開發に功勞大なりし故丹所春太郎氏の記念像の建立を發起し、丹所氏の功績を表彰すると共に潜水業發展に資せんとする、亦美擧といふべし。

千葉縣鶴舞警察署管内

鶴舞町　高石鶴見氏

鶴舞町隨一の呉服雜貨商として地方稀に見る大商店の店主たる氏は、自ら大家の風格を備へ、堂々たる體軀悠然たる温容、人をして畏敬せしむるものがある、氏が各般の社會公共事業に盡瘁せし功勞は枚擧に遑なきも、就中消防に關しては鋭意之れが改善發達に努力すること多年、今日の鶴舞町消防組の發展は氏の賜なりといふも過言にあらず、消防に關しては卓見を有し、今後愈其の理想の實現に向つて盡力されつゝあるのである。

平三村　竹下富四郎氏

氏は大多喜中學校の出身であつて英氣横溢潑剌たる活動家であつて、その明晰なる頭腦と圓熟せる手腕とは、氏の關與する事業に成功を齎し、現に平三信用組合理事として地方財界に重きをなし、産業の開發地方發展に貢献大なるものがある、氏が各般の社會公共事業に盡瘁せし功勞は枚擧に遑なく、殊に消防に就ては稀に見る熱心家であつて、平三村消防組頭として組の向上發展に竭し同組が優良消防組として金馬簾を授與せらるゝまでに至らしめたるは、氏の力に依るものといふも過言でないのである、自治に關しては村助役、村會議員、區長、として令名高く、本村の重鎭として畏敬されて居る。

平三村　田村勇作氏

若くして育英に從事し修練自ら力め、謹直にして恬淡德望高く、兵役に服しては上等看護手に擧げられ、現に農會役員、耕地整理組合役員、として令名あり、又消防熱心家であつて推されて平三村消防組副組頭に就任し、克く組頭を佐けて組の向上發展と、組員の統制に竭して功勞顯著なるものあり、組に金馬簾をを得せしめたるも氏の力に依るもの尠しとせぬのである、氏今や活動の最旺盛期にあり、其の將來の發展に大なる期待がかけられて居り、文學を愛好して造詣深きものがある。

里見村　平野馨氏

氏は里見村消防組公設の功勞者であつて、其の成るや推されて組頭に就任し、献身的努力を拂ひて組の發展と村の警防に竭して今日に及び、功績顯著なるものがある、曩に歩兵第五十七聯隊にありて軍務に服し、格勤精勵を以て聞え、拔擢せられて陸軍歩兵伍長に任ぜられ、在郷軍分會長たりしこと多年、村會議員としては自治に貢献し、村農會役員、市原郡畜産組合代議員、市原郡木炭同業組合代議員て等として産業の開發に盡し、其の他各般の名譽職に擧げられて功勞多く、村内の重鎭と仰がれて居る。

高瀧村　征矢賢一氏

征矢家は代々名主を勤め苗字帶刀御免の舊幕時代よりの名門であるが、氏は不幸十九歳にして父君の喪に會ひ一家の柱石として刻苦勉勵、幾多の艱難と戰ひて不撓不屈克く今日の大をなした、氏は剛毅果斷なる反面美しき感情を有し、四隣を懇切指導し、隣保の誠を致して人望高く、選ばれて村收入役、村助役を歴任し、更に推されて村長に就任し、昭和八年任期滿ちて退職するまで能く其職に竭し自治に關する功勞大なるものあり、其の他區長村農會長、等の要職にありて農村の不況打開、自力更生に奮勵し、貢献極めて大なるものがある、昭和八年高瀧村消防組は此の練達の士を組頭に迎え得た、今後の組の發展益大なるものあるべきは火を睹るが如く、其の將來が期待されて居る。

内田村　小出芳久氏

舊幕時代村の組頭たりし舊家たる小出家に生れたる氏は、謹嚴實直熱誠の士として郷黨に人望高く、明治三十三年頃私設消防組時代より斯界に活躍し、大正十二年公設消防組の設置に際しては東奔西走克く之れが設置に努め、其の成るに及び内田村消防組頭に就任して今日に至り、同組の今日の發展は氏の力與つて大である。氏は又區長、村會議員、等の要職に擧げられ、村政の改善、地方文化の開發に寄與し功績の大なるものがあり、村内の信望を擔つて居る、氏は俳句に趣味を有し造詣深く、俳人としての名聲四隣に聞えて居る。

千葉縣湊警察署管内

金谷村　能城治助氏

資性剛毅沈勇放膽にして然も細心、古英雄の慨ある海軍中尉にして、日露戰役其の他の軍功により青色桐葉章旭日章、瑞寶章、等を授與せられ勲五等に叙せられ、在郷軍人君津郡聯合分會長として令名がある、昭和二年推されて金谷村消防組頭に就任し、軍人精神を移して消防精神の振作に力め、紀律を肅正し、施設の改善を圖り、組員の指導訓育に竭し、業績大いに擧り、昭和八年縣知事より功勞徽章を授與せられたるを以て見ても、其の功

績の大なるを知らるゝのである。

佐貫町　三平　良氏

氏は酒醸造を業とし、佐貫町の素封家として知られ、若くして縣立木更津中學校卒業後、東京に遊學し日本大學に學びて商科を卒業し、人格識見共に高く、少壯有力家として自他共に許す所である、昭和三年四月消防界に入り、昭和八年推されて佐貫町消防組頭に就任して今日に及び、熱誠なる努力に其の未來が囑望せられて居る、而して嘗に佐貫町消防組のみならず、縣消防義會理事として縣下消防の發達向上に竭して令名がある。

千葉縣久留里警察署管内

久留里町　藤平金吾氏

氏は資性溫厚篤實、若くして東京に遊學し慶應義塾大學に學び學識廣く、國勢調査委員に擧げられしこと數回現に方面委員、戸數割調査員、として令名あり、大正九年久留里町消防小頭を拜命し、翌十年第一部長に推され同十三年衆望により組頭に就任して現在に及び、熱誠其の職に竭し名組頭として知られ、前に千葉縣消防義會理事として、縣下消防の改善發達に貢献大なるものがあつた、趣味を鄉土及古考學の研究に持ち、多くの古文書古記錄を藏し、孜々として研鑽を續けつゝあるのである。

氏の長兄量三郎氏は本町消防組創設功勞者で、町會議員、町長、縣會議員、等の顯職にあり、縣下其の名が高い

松丘村　矢島源之助氏

練達聰明行く所一として可ならざるはなき氏は、本村助役及び村長を歷任し、一時非常に紛糾せる村政を收拾し、學校統一を斷行し村内一校制とし、實習補習學校を新設し、農事改良の普及、納稅の向上、水利組合の設置に努力し、村條例を設定し、小學校基本金及び罹災救助資金の蓄積を實行し、村基本財産として實測面積五十五町四反歩の殖林を行ふと共に、部落有財産を統一して村有林とし、三十七町一反歩の殖林を完成し、其の增殖を行ふ等功勞顯著なるものがあり、村教育會長、農會長、村尙風會長として其の敏腕を揮ひ、青年團、處女會、産業組合、等の組織及び經營に盡力する等其の功績枚擧に遑なく、實に本村の一大恩人である、千葉縣知事君津郡長其の他より數回の表彰を受けたるも亦故なきでない、日本赤十字社特別社員、帝國水難救濟會終身社員、在鄉軍人會後援會有功會員、等に列せられて居る。

馬來田村　野村惠一郎氏

野村家は名主勤役苗字帶刀御免の舊幕時代よりの名家であつて、先考秀吉氏は育英に從事し、後馬來田銀行頭取として地方財界に活躍し、信望極めて厚かりし知名の

士である、氏は父君の遺風を承け溫厚謹嚴にして高潔なる人格を有し、東京帝國大學經濟學部出身の俊才である村内二派に分れ村政の紛糾甚だしく收拾困難なるの時、推されて村長に就任し、爾來村民一致團結圓滿なる村政の發達を示せるは、以て氏の手腕人格の如何に非凡なるかを如實に物語るものである、氏はかく村政の改革を行ひ下級村民の民情を察し、益其の福祉增進に努むると共に、馬來田村消防組頭に就任し、消防事務の改善發達に力め、組員の絶大なる尊敬と心服を得て居るのである。

富岡村　永澤松藏氏

氏は剛毅沈勇にして溫情厚く、歩兵第二聯隊に屬し、日清、日露、の二大戰に從軍し、日露の際乃木將軍の第三軍にあり、松樹山攻擊に決死隊に加りて左胸部に名譽の負傷を受け、軍功により勳八等に叙せられた、勇士である。鄉にあつては區長、衛生組合長等の職にあつて隣保の誠を盡し、其の他各般の社會公共事業に貢献大なるものがある、殊に本村消防組公設となると共に部長に擧げられ、更に副組頭に推されて功績顯著なるものがある氏の長子勝治氏は近衛歩兵第四聯隊にありて軍務に服し除隊後在鄉軍人分會役員となり、又本村消防組救護班付消防手として活躍し、衆人より其の將來を囑望されて居る。

富岡村　地曳專治氏

氏の先考源助氏は青年時代より政治に熱心にして自由民權を高唱し、千葉縣自由黨以來の政友會の重鎭であり村助役、村長、郡會議員、等に擧げられ功勞極めて大なるものがある。其の嫡子たる氏は父君を髣髴せしむる體軀を有し、濶達にして大度あり、近衛輜重兵大隊にあり て兵役に服し、除隊後在鄉軍人分會副會長たること多年學務委員として村民の啓發に努め、産業組合長として産業の發達を圖りて令名あり、富岡村消防組第四部長を拜命して災害の警防と消防事務の改善に努力し、信望極めて大である。

富岡村　中山隆氏

氏は縣立木更津中學校出身の秀才であつて、穩健にして謙讓、區長、村會議員、として自治に貢献し、農會評議員として産業の發達に竭し、徵兵共濟會を創立して之れが會長となる等、社會公共のため盡瘁する所多く、富岡村消防組第五部長として、消防事務の改善發達と村の防護に盡して功勞大なるものがある、氏の先考永三郎氏は戸長として地租改正に功績大なるものがあつた。

第五部の區域内に山口猛氏があつて消防に理解を有し喞筒購入に際し金三百圓を寄附したる以外、器具購入等に豫算不足の際、常に其の不足額を支出し、部員の出動

に際しては焚出を行ひ、時によりては酒肴を供へて部員を犒ふ等の寄特の行爲あり、中山部長初め部員一同感謝措かざる所である。

富岡村　鈴木　眞氏

氏は縣立木更津中學校の出身にして資性溫厚高雅、富岡村消防組第一部長の職にあり、克く組頭を補佐して消防事務の改善に竭し、難あれば卒先之に赴き、平時組員の訓練に努め、之を指導するに溫情を以てし、一面紀律の肅正を圖り、名部長として信望極めて大である、趣味を花卉園藝、盆栽、書畫、に有し、又圍碁を好くして名あり、先考恒次郎氏も圍碁に趣味を有し、技非凡にして其の名鄕黨に聞えた。

富岡村　鈴木清三氏

氏の生家は舊幕時代勤役苗字帶刀御免となりたる名門であつて、先考清三氏は村長として自治に貢獻することを大なるのみならず、衆議院議員として中央政界に重きをなしたる名士である、此嫡流を汲む氏は清廉高潔なる人格者にして、陰德を施して自ら快とし、信望甚だ高きものがある、東京帝國大學工學部造船科を卒業し一年志願として兵役に服して陸軍工兵少尉に任せられ、函館船渠株式會社に入りて造船界に有名なりしか、先考の喪に遇ひて歸鄕し、父君の名清三を襲名し、在鄕軍人君津郡聯合分會長、郵便局長、村會議員、等として令名を馳せ、其の他各般の社會公共事業に盡瘁して功勞大なるものがある、就中推されて富岡村消防組頭に就任し、組の改善發達と組員の指導に專念し、其の功績顯著なるのみならず單獨鐵骨火の見櫓を寄附せらるる等の篤行少なからず、組員及び村民の尊敬の的となつて居るのである。

富岡村　小野彌三郎氏

氏は元育英に從事し謹嚴廉潔であつて、二十有餘年信用組合理事の職にあり、旱害對策實地指導員を囑託され村經濟界及び產業界に貢獻し、農村の改善、自力更生に竭し、區長、村會議員、震災調査委員、等に擧げられて自治に寄與し、學務委員の現職にあつて村民の啓發に盡し、其の他各般の社會公共事業に盡瘁して大なる功勞がある、加之氏夫妻は稀に見る德行家であつて、富岡村消防組第三部の創設に際し、私財を投して東奔西走し、機具及び部員の充實を圖りて認可を得さしむる等、創立者ともいふべき努力を拂ひ、部員出動の際は茶菓其の他を供して其の勞を犒ひ、當時組員を愛撫し、何暮となく其の面倒を見、部の發達に助力し不言實行克く消防後援の實を擧げ、その配廬筆紙に盡すべからず、組員の感謝措くなき所であり、又帝國在鄕軍人會の趣旨に贊し、富岡村在鄕軍人分會基本財產とし金七百十圓を寄附し、大正

十五年九月帝國在鄕軍人會長一戸大將より表彰せられたるを初とし更に田一四反畝二十歩を寄附し昭和二年一月縣知事より表彰せられ、三度田一反六畝十三歩を寄附し同會長鈴木大將より感謝狀を授與せられ、更に同村に忠魂碑建設に際し田一反五畝歩をその建設資として寄附し今其の境內となり居る地三反歩は全部氏の寄贈する所である、氏の德行を數ふれは此外無數であつて、久留里警察署管內消防聯合會長、木更津稅務署長、臨時震災救護事務所長池田宏氏、その他より表彰せられしこと枚擧に遑かない、村民一般氏夫妻を神の如く尊敬するも、實に夫妻の德の致すところである、金錢に活淡たる氏は小作料の如きも、租稅と低金利に當る程度の低廉を課し、小作人の福利を圖つて居るが、その他の一面に於て商賣に熱心であつて雜貨商を營み、他の均衡上賣價を賣り崩すことをなさず誠實を旨とし業務盛大を極めて居る、氏は三男五女の子福長者であることは目出度い限りである

千葉縣北條警察署管內

神戸村　小澤熊太郎氏

氏は大正三年私設大神宮消防組副組頭として從來の火消を新式編成に改め、大正四年神戸聯合消防組を編成して其の副頭取に就任と同時に指揮係を兼ね、同七年十一月副頭取を引退したが、村の消防主任として庶務會計を掌り、同十二年公設消防組設置に際しては、設立事務一切の衝に當りて之を完成し、昭和二年十一月神戸村消防組副組頭に推され、同五年二月組頭となつて今日に及び本村消防に盡瘁すること二十年、村中第一の消防功勞者である、自治に關しては村會議員、村助役、村長、等として功績大なるものあり、村の社會公共事業一として氏の恩惠を蒙らぬものはない、殊に產業の開發に就ては努力の至大なるものがあり、各種の農業器具を發案大成して授賞せられ、產業組合安房郡部會長、產業組合中央會縣支會評議員、縣信用組合聯合會幹事、等の要職にあり て農民の指導啓發改善に努めつゝあり、大正八年精農家として時事新報より、昭和三年產業組合經營功勞者として縣より、同五年產業組合功勞者として全國大會に於て中央會頭より、其他の表彰枚擧に限りがない、氏は雅趣に富み和歌を好くし、その名高きものがある。

神戸村　飯田計治氏

氏は神戸村消防界に活躍すること既に二十有餘年、小頭、部長を歷任し、昭和五年二月副組頭は就任して今日に及び、克く組頭を補佐して組の改善發達に竭し、災害の警防に對しては多年の經驗と圓熟せる手腕を揮ひ、部下を指導誘掖するに溫情を以てし、名幹部の名高く、組

員より慈父の如く敬慕せられ、表彰せられしこと數次、村會議員、青年團長、園藝組合理事、等に擧げられて貢献大なるものがあり、現に出荷組合理事、金融會社監事等の要職にあつて愈其の本領を發揮し、信頼日に高きを加へつゝあるのである。

神戸村　小澤豐藏氏

氏は大正三年消防界に入り、同十二年小頭を拜命し、昭和四年推されて神戸村消防組第一部長の要職につき、難あれば卒先之に赴き、平時機具の整備組員の指導に竭し、殊に災害の豫防警火思想の普及に努めて功勞多く、部下を指導するに懇切を極め、典型的消防幹部の譽高く縣知事初め各方面より表彰せられしこと一再ならず、區の組長、青年團理事、在鄕軍人分會幹事、等に擧げられ社會公共のため盡瘁したる功績も亦少なからず、信望極めて大である。

神戸村　黑川市之助氏

氏は剛毅果斷然も用意周到にして手腕圓熟、私設消防時代より神戸村の災害警防に當り、大正十二年公設消防組設置と同時に小頭を拜命し、昭和七年十二月推されて第二部長の要職に就きて今日に及び、災害の警戒防禦に組員の指導訓練に、又施設の改善に、功勞の顯著なるものあり、表彰せられしこと數次、組員の心服村民の信頼

絶大なるものがあり、今後一層の活躍が期待されて居る又青年團長の職にありて青年の指導訓育に當り、令名甚だ高きものがある。

神戸村　上野廣吉氏

氏は赤羽工兵第一大隊にありて格勤を以て聞え、大正三年青島に出征し、軍功により勳八等に叙せられ白色桐葉章を下賜せられた、除隊後在鄕軍人分會役員たりしこと多年、大正十二年神戸村消防組小頭を拜命、昭和七年推されて第六部長の要職に就きて今日に及び、前部長寺田房五郎氏と協力貯水池五箇所を新設する等、消防施設の改善整備に竭し、功績の大なるものがあり、部下を指導訓練するに熱誠、災害の警防警火思想の普及に忠實にして、典型的部長と稱せられ、其の將來大いに嘱望せられて居るのである。

神戸村　渡邊傳吉氏

氏は神戸村消防界に活躍すること二十有餘年、昭和二年小頭を拜命し、同六年十二月推されて神戸村消防組第七部長の要職につきて今日に及び、多年の經驗と圓熟せる手腕とを揮ひて災害の警戒防禦に竭し、部下を愛するの情厚く溫情を以て指導誘掖し、組員より父兄の如く敬慕せられ、又克く組頭を佐けて組の改善發達に努め、功勞大なるものがあり、數次に亘りて表彰を受け、青年團長區長代理、として百年の訓育部民の啓發に盡瘁せし功勞亦少くない、雅趣に富み俳句をよくし、其の名亦高きものがある。

神戸村　石井定吉氏

氏は二十有餘年神戸村の警防に竭し、大正十二年公設消防組設置に當り、神戸村消防組小頭を拜命し、昭和二年一月第八部長に推されて今日に及び、部隊の指揮に當りては氏の右に出ずるものなく、施設の改善整備に熱心し、昭和八年獨立にて火之見を建設して部に寄贈する等の奇特の行爲あり、聲名組中に高く、功勞顯著にして表彰せられしこと數次である、精農家を以て知らるゝ氏は又園藝に趣味を持ち、其の研究を怠らず、斯界に盡すこと亦大である、氏の家族より氏を初め三人の軍人を出し昭和七年一月表彰せられたるは名譽のことである。

神戸村　鈴木貞藏氏

氏は資性溫厚にして熱誠、近衛歩兵第四聯隊にありて兵役に服し、除隊後在鄕軍人分會役員、青年團評議員として活躍して令名高く、昭和六年十二月消防界の人となり、昭和七年推されて神戸村消防組第九部長の要職につき、大いに消防精神の振興と警火思想の普及に努め、災害の防禦、施設の改善整備に關する功勞亦大なるものあり、名少壯消防幹部として其の將來に多大の嘱望がかけられて居る。

國府村　山口道太郎氏

氏は溫厚篤實にして謹直、崇高なる人格者である、縣立茂原農學校卒業後郡役所に奉職し、郡書記郡農會技手を兼務し、昭和三年退職、昭和御大典に際し、縣の指定により御即位式式典用の供物机代用米を獻納するの光榮を擔ひ、地方饗饌に招かるゝの榮譽に浴し、精農家として知られて居る、國府耕地整理組合創設と同時に推されて其の組合長に就任して今日に及び、郡農會副會長、安房尊農講社長、安房煙草耕作聯合會長、等の要職にありて產業の開發に盡し、昭和六年九月推されて國府村長に就任、村政を執掌し、其他各般の社會公共事業に貢献大なるものがある、殊に消防に關しては村長就任と同時に國府村消防組頭に推され、組の向上改善に孜々とし、其の手腕才能は國府村消防組の將來の發展の大なるものあるべきを約束せしめて居る、氏の功勞に對しては昭和八年二月十一日全國農業學校校長會より、農學校卒業生にして地方產業の功勞者として表彰せられたるを初め、各方面より感謝狀、表彰狀、賞品、紀念品、等を授與せられたること枚擧に遑なく、國府村に於ける第一人者として村民の尊敬措かざる所である。

國府村　高木彌吉氏

氏は大正十年國府村消防組消防手を拜命し、昭和六年小頭に擧げられ、同九年第二部長の要職に就き、熱誠其の職に竭し功勞極めて大なるものがあり、組員の信望村民の信賴共に絶大である、自治に關しては村會議員として村民の福祉の增進に努め、産業に關しては安房郡畜産組合代議員として斯界の改善發達に盡し、其の功勞亦大であつて、圓熟せる手腕と偉大なる人格とは、愈々村内に重きを加へて居る。

西岬村　鈴木健三郎氏

氏は歩兵第二十六聯隊に屬し日露の役に乃木將軍の麾下にあつて旅順奉天等各地に轉戰し、軍功により勳七等功七級に叙せられ、後在鄕軍人分會長として其の名を知られ、明治四十年以來村役場に奉職し、精勵格勤自治の功勞極めて大なるものがあり、各般の社會公共事業に盡瘁したる功績亦少くない、殊に昭和七年三月西岬村消防組頭に擧げられ、組の改善發達に竭し名組頭と仰がれ、信望絶大である。任俠心厚き氏は常に隱德を施し德行多く、氏の功勞に對し各方面より表彰せられしこと枚擧に遑がない。

西岬海岸に宏壯なる旅館があつて富士屋旅館といふ。これ氏の經營にかゝり、其の施設とサービスの優秀なるは、既に定評の存する所である。

西岬村　白石德二郎氏

氏は私設消防時代より西岬村の災害警防に盡瘁し、大正十五年五月公設消防組の設置と同時に小頭を拜命し、昭和八年八月推されて西岬村消防組第一部長に就任して今日に及び、其の功績顯著なるにより表彰せられたること數次、區總代として部民の啓發に努め、下原漁業組合評議員として斯業を開發したる功勞亦大であり、其の手腕人望日に高きを加へつゝあるのである、同村香に雜貨商を營み業績隆昌なるは、誠實なる氏の資性の反映といふべきである。

富崎村　宇津木修司氏

氏は明治十九年山武郡正氣村の名家に生れ、資性謹直清廉練達の士として知られて居る、曩に千葉縣警察界にありて敏腕を振ひ、木下、多古、鶴舞、久留里、旭町の各警察署長を歷任し、昭和五年退職、同六年七月富崎町助役に擧げられ、多年の蘊蓄を傾けて町政を執掌し、町の發展町民の福祉增進に盡し信望日に厚きを加へつゝあり、昭和八年十二月、前富崎町消防組頭木高治助氏引退の後を承けて組頭に就任して現在に及んで居る、氏の就任以來富崎町消防組は改善發展の目醒しきものがある、是氏の熱誠なる指導と努力とによるものといはねばならぬ。

富崎町　黑川又助氏

氏は資性溫厚にして謙讓、耕地整理組合創業以來其の委員に擧げられて今日に及び、貢獻大なるものあり、青年團取締役として青年の指導陶冶に當り、青年より父兄の如く敬慕せられて居る、其の他各般の公共事業に關與し功勞少なからず、殊に消防に就ては十數年の久しきに亘り富崎町警防の任に當り、昭和六年小頭に擧げられ、同八年第一部長の要職に就きて今日に及び、格勤其の職に竭し、功勞顯著にして屢表彰せられ、信望甚だ厚きものがある。

富崎町　小宮房次郎氏

氏は富崎町に於ける消防功勞者であつて、同町の災害警防に盡瘁すること二十有餘年に及び、其の間小頭に擧げられ、同八年十一月第二部長に就任し、組の改善發達組員の指導訓育に竭し、功勞顯著なるにより表彰せられたること數次、犧牲的精神旺盛にして部下を愛するの情深く、典型的消防幹部として其の名を謳はれて居る、先に青年團幹事として青年の指導陶冶に當り、規約の不備なるを改正して令名あり、其の他社會公共事業に貢獻する所大にして、信望極めて厚きものがある。

館山北條町　大内虎吉氏

氏は館山北條に於ける消防界の權威であつて、明治四十二年消防手拜命以來小頭部長副組頭を歷任し、昭和二年十二月館山町消防組頭の要職に就き、昭和三年北條警察署管内消防聯合會副會長、縣消防義會理事に擧げられ縣下消防の向上發達に貢獻し、其の功勞大にして屢々表彰せられ、昭和四年御親閲に參列の光榮に浴したのである、館山町及び北條町の併合により、當然起るべき兩町消防組の合併に際し、氏は消防精神を發揮し自己の位置を放擲し、北條町消防組頭に新組頭の地位を譲ることを提議し、兩組の合併を促進したるが如きは、感激なくして聞く能はざる逸話といふべし、氏は消防功勞者たるのみならず、町會議員、區長、等に擧げられ自治に貢獻し其の他社會公共事業に盡瘁したる氏の功勞は枚擧に遑なく、同町の重きに置かれて居る。

館山北條町　岩並辰藏氏

氏は旭川歩兵第二十七聯隊に屬して日露戰役に出征し旅順攻擊に參加して拔群の戰功あり、功七級金鵄勳章を下賜せられたる勇士であつて、剛毅沈勇を以て知られ、明治四十年消防界の人となり、小頭、部長を歷任し、昭和二年十二月館山町消防組副組頭に就任し熱誠其の職に盡し、克く組頭を補佐して組の向上發展を圖り、功績極めて顯著なるものがあり、縣知事より表彰せられしこと三度、其の他の表彰數度、名副組頭として信望大であり

自治に關する功勞亦少なからず、町内の重きに置かれて居る。

館山北條町　田中記一郎氏

大正三年消防手拜命以來二十有餘年、館山町消防に盡瘁して同町消防功勞者として知られ、昭和四年小頭、昭和七年救護班長を歷任し、同八年十月本部長に就任し、其の手腕他の追從を許さゞるものがあり、功績大なるものありて表彰せらるゝこと數次、衛生組合副組合長、其の他に擧げられ社會公共のため盡瘁したる功勞亦少なからず、信望極めて大なるものがある。

館山北條町　島津鍋太郎氏

氏資性溫厚謹直、歐州大戰當時横須賀重砲兵第一聯隊に屬して青島に出征し、軍功により勳八等に叙せられ、除隊後在鄕軍人分會役員として活躍し、又青年團役員として青年の指導陶冶に當り、貢獻大なるものあり、町長其の他より屢々表彰せられ、大正十四年消防手拜命以來斯界に盡瘁すること二十有餘年、館山消防組第二部長に就任し、信望極めて大である。

館山北條町　石井龜三郎氏

氏は大正五年消防人となり、昭和四年小頭に擧げられ同八年第三部長に就任し、難あれば卒先之に赴き、平時器具の改善整備と災害の豫防に盡瘁し、部下を指導するに懇切克く組頭を補佐して組の改善向上に盡し、組員の信望町民の信賴共に厚く、任俠心に富む氏は其の德行枚擧に遑なく、各方面より屢々表彰せられ、德行家として知られて居る。

館山北條町　鈴木源太郎氏

資性沈着にして事に當りて果斷、任俠心に富み、大正五年以來消防人として活躍し、昭和四年小頭を拜命し、同八年九月推されて館山町消防組第五部長に就任し災害の警防に、組員の指導に、施設の改善に、獻身的努力を重ね名望高く、曩に步兵第五十七聯隊にありて兵役に服し、除隊後在鄕軍人分會役員たりしこと多年、又青年團長として青年の指導陶冶に當り、自治に關しては戶數割調査委員其他に擧げられ、貢獻大なるものがある、柏崎に堂々たる酒店を經營、誠實に顧客本位を主義とし、隆昌を極めて居る。

豐房村　山口貞之助氏

氏は旭川步兵第二十六聯隊に屬し日露戰役に出征し、旅順奉天の大戰に參加し、軍功により勳八等に叙せられし勇士であつて、剛毅沈勇にして大度あり、事に當りて果敢然も時宜の處置を誤たず、將に將たるの器として知られ、在鄕軍人分會幹部として令名あり、明治四十二年消防手拜命以來、小頭部長を經て昭和六年推されて組頭

に就任して今日に及び、名組頭の名を謳はれて居る、消防に關し功勞大なるのみならず、村會議員として自治に貢獻し、安房郡白土同業組合長として斯界の發展に竭す等、功勞亦尠なからず、村内の重きに置かれて居るのである。

豐房村　鈴木聰藏氏

氏は縣立安房中學校に學びて俊才を以て聞え、同校卒業後漢學を學び劍道を修めて心身を鍛練したる練達の士であつて、夙くより父君庄造氏を佐けて自治に貢獻し、社會公共事業に盡瘁して其の名高く、二十二歲の時消防界に入り斯界に活躍すること三十年に垂んとし、小頭、部長を歷任し副組頭の現職にあり、克く組頭を補佐して組の向上發達を圖り、組員を指導するに懇切にして、災害の防禦に多年の經驗と圓熟せる手腕を發揮し、名幹部として信望絕大なるものあり、令息二人あり、共に劍道に長じ、長子貞夫氏は安房中學校劍道選手である。

豐房村　鈴木外記氏

氏は騎兵第一聯隊に屬し日露戰爭に從軍し、旅順奉天の大會戰を初め名地に轉戰し、軍功により勳八等に叙せられ、沈勇果斷を以て聞えて居る、凱旋後消防人となり豐房村の災害警防に當ること三十年、大正十年小頭拜命し、昭和三年第二部長に推されて現在に及び、功勞顯著にして名部長の名を謳はれて居る、氏の發案に基き同部には、消防組出動後の警戒に當るため、火防班が班長磯部森雄氏外十名により組織され、巡回留守居番ともいふべき任務に就くことゝなり居るは、以て他の範となすべし、氏は消防功勞者たるのみならず、青年團長たりしこと八年、區評議員たること多年にして、其の功勞亦少なからず、精農家として名聲高く、村内の重きに置かれて居る。

豐房村　石井竹松氏

氏は近衛步兵四聯隊に屬し、第一軍に編入されて日露大戰に出征し、沙河、奉天の大會戰を初め、前後二十七八回の戰鬪に參加して、拔群の勳功を樹て勳八等功七級に敍せられ、後在鄕軍人役員たること多年、之れと前後して明治四十年私設消防組副頭として消防界に入り、大正二年公設消防組第十部長を拜命して今日に及び、格勤精勵模範部長として其の名を謳はれ、功勞顯著にして表彰せられしこと一再ならず、青年會長、區評議員、統計調査員、道路委員、協行組合評議員、衛生組合長、氏子總代、農會總代、同會代議員、等としての功勞亦大であつて、各方面より表彰せられしこと枚擧に遑なく、村の重鎭として重きに置かれて居る。

保田町　川崎米吉氏

氏は明治三十八年消防人となり、横須賀重砲兵第二聯隊に入營のため一時消防界を去りしも、除隊後再び斯界に入り、小頭第二部長を歴任して昭和八年保田町消防組頭に就任して今日に及び、保田町の災害警防に盡瘁すること三十餘年、今日の保田町消防組の發展は氏の力による所大なるものがあり、縣知事より表彰せらるゝこと三度其の他の表彰枚擧に遑なく、名組頭として其の名を謳はれて居る、加之町會議員、區長、漁業組合理事として自治に、産業に、氏のなせる功勞亦極めて大にして、其の手腕人望は愈氏の重きを增して居る。

保田町　笹生　林之助氏

氏は資性溫厚謹直にして道義心に厚く、佐倉歩兵第五十七聯隊にありて格勤其の職に竭し、拔擢せられて軍曹に昇進し、除隊後在郷軍人分會副分會長、同會長を歴任し、同會に寄與せし所多く、明治四十五年保田消防組消防手を拜命し、小頭、第四部長を歴任し、昭和七年推されて副組頭に就任して今日に至り、功績顯著にして表彰せられしこと一再ならず、年功徽章は其の胸間は輝き組員の信望、町民の信賴、共に絶大なるものがある、所得税調査委員其の他に擧げられて自治に貢献し、漁業組合長として産業の發展に竭したる功勞亦大にして、町内の重鎭と仰がれて居るのである。

保田町　鰭崎　金太郎氏

氏は保田町大吉區屈指の素封家にして崇高なる人格の所有者であり、佐倉歩兵第五十七聯隊にありて軍務に服し、格勤其の任務に竭し後備召集の際伍長に昇進、在郷軍人分會副會長たりしこと多年、明治四十五年消防人となり、大正十五年小頭に擧げられ、昭和八年第五部長に就任して今日に及び、保田町消防界に活躍すること二十有五年、功績顯著にして表彰せられしこと數次、信望大なるものがある、氏は消防功勞者たるのみならず、各般の社會公共事業に盡瘁し貢獻する所亦少なからず、村民の瞻望する所となつて居る。

富浦村　小澤　喜一郎氏

氏は精農家として知られ夙晨薄暮鍬鋤に親みて倦まず其の精勵は郷黨の範となすべきものがあり、農業調査員區組長、等に擧げられて貢獻大なるものがあり、青年團幹事としても令名があつた、大正五年消防界に入り、災害の警防に献身的活躍を續け、昭和八年三月小頭を拜命すると共に第二部長に推されて今日に及び、縣知事、村長等より數次に亘り表彰せられたるを以て見ても、其の功績の如何に大なるかを知るべく、組員の信望村民の信賴共に大なるものがある。

岩井町　沼田　清一郎氏

氏は岩井町に盛大なる金物問屋を經營し、同町商工團長として町の發展並に産業の開發に盡し、町會議員、學務委員、區長、方面委員、等に擧げられて自治に貢献し功勞の大なるものがあり、各般の社會公共事業に盡瘁する所亦尠少ならず、殊に消防に關しては、明治四十五年岩井町公設消防組設置と同時に消防手を拜命以來、小頭第二部長、本部長、副組頭を歴任し、昭和七年二月衆望によりて組頭に就任して今日に及び、其の功勞を表彰せらるゝこと幾回なるを知らず、組員の信望村民の信賴共に絶大なるものがある、氏が町内の重鎭と仰がるゝも、豊富なる經驗、圓熟せる手腕、並に修練による人格の致す處といはねばならぬ。

千葉縣千倉警察署管内

南三原村　笹子　藤太氏

氏は識見手腕人格兼ね備はる所謂練達の士であつて、然も英氣横溢する活動家であり、地方政界の重鎭である曩に縣會議員として縣政界に活躍し、村長として村治村政に其の敏腕を揮ひ、現に安房郡畜産組合長、安房郡農會評議員村農會長として産業の開發に盡瘁して功績の大なるものあり、南三原村消防組頭として組の向上發展に努力し、組をして今日の發展あらしめ、村民の警火思想の普及せるも氏の力に負ふ所極めて大である、村民の氏を尊敬して措かざるも、亦故なきにあらずといはねばならぬ。

豊田村　吉田　淵氏

氏は資性溫厚にして謹直、安房郡丸村遠藤定次郎氏の息であるが、懇望せられて吉田惣八氏の養嗣となり、初め千葉縣警察界にありしが後朝鮮總督府に轉じ、各地警察署長、高等課長、警務課長、等を歴任し警視に昇進、退官歸郷後村會議員、方面委員、等に擧げられ村政に參與し、鋭意本村の産業の振興に就き研究を重ね、着々其の結果の實現に努力し、又推されて豊田村消防組頭に就任し、災害の防止が民福增進の第一歩をなすことの信念より、災害の豫防と警火思想の普及に竭すと共に、益組の改善發達を圖りて萬一に處して遺憾なきを期し、奮勵努力されつゝあるのである、村民の氏を德とし尊敬措かざる、亦故なきにあらずといふべし、氏は趣味を俳句に持ち半山と號し、其の名四隣に轟いて居る。

白濱町　高木　仙松氏

氏は豪放にして恬淡然も用意の周到なるものあり、英氣潑溂たる活動家である。近衛歩兵第一聯隊に屬し日露戰役に出征し、拔群の勳功を樹て勳八等功七級に叙せられ、四十一年憲兵科に轉じ、憲兵伍長に任官し、退官歸

郷後町會議員として町政に參與し、方面委員として社會事業に竭し、町農會長、漁業組合長、郡農會代議員、郡水産會代議員として産業の開發に努め、又白濱町消防組頭として組の改善發達を圖り、町の警防を一層强固ならしむると共に、縣消防義會評議員として縣下消防の發展に寄與する等、其の活躍目醒しきものあり、本郡の重鎭として重きに置かれて居るのである。

千歳村　佐久間　竹松氏

氏は進取の氣象に富み才氣縱横、行く處として可ならざるはなく、海産物製造業及漁業を盛大に經營し、千歳村漁業組合長同理事として斯界の發展に努め、又千歳村消防組頭として村の災害警防の任に當り、消防事務の改善向上を圖ると共に、縣消防義會評議員として縣下消防の發展に寄與し、功績の大なるものあり、村民の尊敬して措かざる所である、氏は先に鐵道大隊に入營し、格勤任務に竭し上等兵に昇進し、下士適任證を下附せられ、除隊後在郷軍人分會役員として同會に貢獻せし所亦尠少でない。

和田町　小泉　定次郎氏

氏は資性篤實にして快活、事に當りて熱誠、經節海草等海産物の製造を業とし、蓁五の商號は全國に涉りて赫々たる聲名を有し、信用極めて厚きものがある、區評議員としては隣保の誠を致し、和田町漁業組合總代としては産業の開發に竭し、其の他各般の社會公共事業に寄與大なるものがあるが、殊に明治四十五年消防人となり、小頭部長を歷任して和田町消防副組頭の要職に就き、克く組頭を補佐し組の向上發達と組員の統制に努め、無火災を以て理想とし之れに向つて邁進しつゝあり、名幹部の名を謳はれて居るのである。

和田町　間宮　傳吉氏

區長、農會總代、等として多年活躍し、功勞顯著なる平治氏の嫡出たる氏は、父君の傳統を承けて公共心厚く義氣に富み、事に當りて熱誠、曾ては青年團長として青年の指導陶冶に當りて令名あり、消防人となりては小頭部長を歷任し和田町消防組に就任し、町の災害警防に任し、其の組の向上改善に努力するのみならず、縣消防義會理事として縣下消防の發展に竭し、功勞の顯著なるものあり、和田町信用購買組合長として經濟界及び産業界に貢献する所尠少ならず、其の手腕人望町の第一人者として重きをなして居る。

千倉町　押元　才治氏

素封家として知らるゝ氏は豪放磊落にして大度あり、且非凡なる手腕を有し、千倉といへば押元、押元といへば千倉といふ程、それ程有名なる大人物にして町内の事は勿論安房郡の社會公共事業、一として氏を煩はさゞるものなく、縣會議員たること數期、其の他氏の有する名譽職は枚擧に遑なき程である、殊に地方の發展と消防とは氏の最も意を用ふる所であつて、産業組合長として熱心に産業の開發に盡瘁し、千倉町消防組の發達のみならず千葉縣消防今日の發達は、氏の力に負ふ所極めて大である。

千倉町　安田　庄兵衛氏

氏は清廉謹直熱誠の士であつて、町會議員、學區會議員、家屋税調査委員、等に擧げられて自治に貢献大なるものあり、千倉町消防組本部長としては組頭を補佐して組の向上改善を圖り、組員の統制に努め、消防功勞者として知られ、旅館營業組合副組合長としては斯業の向上發展に盡瘁する等、其の功績枚擧に遑なく、千倉町の重要人物として重きをなして居る、氏の經營に係る川尻旅館は其の歷史古く、景勝の地に位置し、眺望絶佳、加之施設の完備と堅實なる營業振は本町隨一と呼ばれて居る

丸　村　石田　嘉一氏

石田家は丸村に聞ゆる舊家にして名門であつて、氏の父君猪吉氏は村長、村會議員、區長、等の顯職にあり、自治功勞者として知られ、現に方面委員として社會事業に竭し、氏子総代、檀家總代として敬神崇祖の思想皷吹に努め、齡喜壽に達して矍鑠たるものがある、此名士を父として此の名家に生れたる氏は、謹直清廉父君に髣髴騎兵第十六聯隊にありて兵務に服し格勤精勵、拔擢されて伍長に昇進し、除隊後在郷軍人分會長、青年訓練所指導員、青年團長たること多年、村會議員、土木委員、丸村消防組本部長、等に擧げられて功績顯著なるものあり郵便局長として敏腕を揮ひ、手腕、力量、地位、三拍子揃ひし村の重要人物として、村民の瞻望する所である。

北三原村　眞田　武氏

村會議員、區長として自治に貢献大なりし房吉氏の嫡子たる氏は父君の傳統を承けて公共心に富み、義氣に厚く、騎砲大隊にあつて兵務に服し格勤精勵を以て聞へ、拔擢されて伍長に昇進し、除隊後在郷軍人分會長たること多年、村收入役に擧げられて村財政を司ること二期、村會議員たること久しく、産業組合理事として産業の開發に當り、北三原消防組頭に推されて消防事務の改善向上と災害の警防に竭す等、功績極めて顯著にして、父君の名を辱しめず、益々之を發揚し、村民尊敬の的となつて居るのである。

健田村　小山　萬治氏

氏は縣立安房中學校出身の逸材であつて、一年志願兵として歩兵第五十七聯隊に入隊し、軍務に精勵し陸軍歩

兵少尉に任せられ正八位に叙せられ、在郷軍人分會長、青年訓練所指導員として令名高く、推されて健田村消防組頭に就任し、健田村防護のため獻身的努力を吝ます、組の改善發達を圖り着々之を實現し、名組頭の名を謳はれて居る。

千葉縣鴨川警察署管内

天津町　吉野　清　氏

氏は資性剛毅沈勇にして清濁併せ呑むの大度あり、義俠心厚く、其の部下を愛すること他の追從を許さず、實に將に將たるの器といふべく、土木建築請負業を營み業務隆昌を極め、其の名縣下に高く斯界の重きに置かれ、千葉縣土木請負業組合安房支部長に擧げられ、町會議員として町政に盡瘁し、功勞の大なるものがあつた、氏の職業柄德川時代なれば冥加出役を仰せ付けられるのであるが、今日は衆望により天津町消防組頭の要職につき、災害の警防に施設の改善に組員の指導に犧牲的活躍をなし、名組頭の名を謳はれ名望絶大なるものがある。

天津町　北浦靖三　氏

氏は天津町富川文吉氏の二男に生れ、懇厚せられて北浦家の養嗣子となり、資性溫厚にして信義に厚く、大正元年歩兵第五十七聯隊に入りて兵役に服し、軍務に精勵して上等兵に擧げられ、除隊後在郷軍人分會理事たること多年、大正九年天津町消防組消防手を拜命し、小頭、部長に歷任し、副組頭に就任して現在に及び、克く組頭を補佐して組の改善發達に竭し、難あれば卒先之に赴き其の消防に熱心なること多くの比を見さる程で、部下を愛するの情厚く、典型的消防幹部と仰がれて居る、天津町小學校前に文房具商を營み、信用厚きも氏の資性の反映といふべきである。

天津町　田村乙吉　氏

田村家は代々菓子製造卸小賣業を營み、氏に至りて業務愈繁榮し、鴨川警察署管内十箇町村菓子製造同業組合長たること六箇年、斯界の發展向上に竭して功勞多く、又各般の社會公共事業に盡瘁し、貢獻する所極めて大なるものがある、特に消防に關しては、明治三十八年以來天津町の災害警防に活躍すること三十有餘年、町内第一の消防功勞者として知られ、小頭を經て部長の現職にあり、事に處して熱誠果斷にして時宜の處置を誤らず、施設の改善、組員の指導、火災豫防、等の功績顯著であつて、功勞章は其の胸間に輝いて居る。

鴨川町　田原安次郎　氏

氏は剛毅果敢にして溫情厚く、部下の統制に秀でゝ部下を動かすこと四肢を動かすが如きの慨がある、代々建

築請負を以て業とし、氏に至りて事業益繁榮し、長狹中學校劍道々場、君津郡竹岡小學校、並に富津周西の各小學校を初め、本縣下第一の稱ある鴨川町吉田屋旅館等は氏の設計建築になり、田原工務所の名聲各地に旺である横須賀野戰重砲兵第一聯隊にありて兵役に服し、精勵格勤下士適任證を下附せられ伍長勤務上等兵となり、除隊後在郷軍人分會役員たりしこと多年、大正三年以來鴨川町消防組に入りて消防人となり、小頭を經て第一部長の要職に就き、よく犧牲的努力を拂ひて消防の本領を發揮し、典型的幹部として名望功績赫々たるものがある。

鴨川町　杉山才治　氏

氏は町會議員、區長代理の現職にありて町民の福祉增進と町の發展に精進し、自治の功勞大なるものがあり、明治三十四年以來鴨川町の災害警防の任に當ること實に三十有五年、町内第一の消防功勞者であつて、消防手、小頭、部長、副組頭を歷任して組頭に就任して今日に及び、事に當りて熱誠部下を犒ふに厚くして自持すること薄く、紀律を重んじ、訓練に勵み、稀に見る典型的消防人にして名組頭の名高く、啻に鴨川町消防組の改善向上に竭すのみならず、千葉縣消防義會評議員として縣下消防開發の功亦尠少でない、曾て國勢調査員たりしこと三度、煩瑣なる調査を完成して表彰され、其の他各般の社會公共事業に貢獻して表彰せられたること數次、鄕黨の信賴絶大なるものがある。

小湊町　平野孝　氏

町會議員として小湊町の發展と町民の福祉增進に努力しつゝある氏は、小湊第一の旅館として、施設の完備、サービスの優秀を以て聞ゆる清海家旅館の經營者であつて、土地發展の一助たらしめんと大正十四年別館を新築し、各地よりの遊覽客の誘致に力を致し、之に刺戟せられ隣接沿岸に旅館の大建築多きを見るに到り、町の發展に大なる貢獻をなした、又町の發展の基は災害の警防を第一とするといふ見地より、小湊町消防組頭として組の改善發達と警火に努め、其の功績極めて多く、義氣に厚き氏はよく組員の面倒を見、組員より父兄の如く敬慕せられて居る、氏が町内に於て重要人物中の重きに置かるゝも、亦故なきにあらずといはねならぬ。

東條村　小倉要藏　氏

鴨川街道浦の脇に堂々たる履物商がある、之れ氏の經營に係るもので、氏は自ら大家の風格を備へ、悠然たる態度溫容、接する者をして親みの内に尊敬の念を生ぜしむるの慨がある、氏は稀に見る消防熱心家であつて、私設消防組時代より東條村の災害警防に盡瘁し、公設消防組の設置と同時に小頭を拜命し、後推されて組頭となり

難あれば卒先して之に赴き、身を以て衆を率ひ、平時施設の改善、組員の指導訓練、火災の豫防に努め、組員の信望村民の信頼共に絶大なるものがあり、表彰せらるゝこと枚擧に遑なきを以ても、其の功績の如何に大なるかを知り得るのである。

栃木縣宇都宮警察管内

宇都宮市　齋藤太兵衛氏

明治九年四月宇都宮市の名門前代太兵衛氏の長男として生れたる氏は、幼名を善次郎と呼び、宇都宮中學校、國民英學會、東京商業學校、等を卒へて縣下の財界に雄飛し、溫良醇厚の資性と、交友に厚き情誼とは忽ち一般の衆望を荷ふに至る。後父祖の業を繼ぎ、太兵衛を襲名するに及びて益々財界に重きをなし、現に下野興業株式會社、宇都宮瓦斯株式會社長、下野銀行、下野新聞社、等の取締役等を兼ね、私立宇陽幼稚園長、相續税審査委員、大日本消防協會代議員、等の要職にある外、地方並に帝都の著名銀行、會社等の重役及び大株主として知られてゐる、氏又曾ては宇都宮市會議長として令名を馳せ大正十三年始めて衆議院議員に當選し、昭和三年二月普選第一次の總選擧に再選されてより中央政界に共の材を認められ、昭和五年の總選擧に三度當選するに及んで聲

望頓に高く、現に政界の一重鎭たり。氏は又幾多の社會事業、公益事業等に至大の淨財を投じて貢獻する處多く終に共の功績により大正九年十一月紺綬褒章を下賜せられ、昭和九年十六日桐生市に於ける行幸關係府縣消防組御親閲の際共の功勞を御嘉納あらせられ單獨賜謁を仰付らる、氏が一生の光榮たるは勿論、洵に一門並に鄕黨の譽である。多額納税者にして宇都宮消防組頭たるも又異數の例と云ふべきである。

宇都宮市　齋藤金次郎氏

溫容のうちに果斷の英氣を藏し、豪快にして犧牲的精神に富む、宇都宮市消防副組頭齋藤重次郎氏こそ眞に共の處を得たるものである。明治二十八年小頭を振出しに消防の事に從ふこと四十有餘年、身を挺して難に赴くこと幾度、共の功勞は酬ひられて消防義會、共他より數次表彰され、昭和七年九月衆望により推されて副組頭となつたのである。氏も又名門の出で現に多額納税者であり菓子商を始め幾多の店舗を有し、電氣館、帝國館、花屋敷、歌舞伎座、宮松座等を經營して市の興行界に君臨するさま正に現代演劇界の王者、松竹社長大谷氏を彷彿たらしむるものがある。

宇都宮市　鄕間辰吉氏

宮島町に米穀薪炭商を營み家運益々隆昌なる氏は大正七年消防組に入ると同時に小頭を拜命し、大正十五年衆に推されて第六部長となり、今日に及んでゐる。年齒漸く不惑を超え、性極めて溫良而も雅量あり、手腕識見の秀でたる素より凡庸の器ではない。曾ては宇都宮在鄕軍人第三分會理事を多年勤め、現在市消防組の中堅幹部として共の前途を囑されてゐる。昭和二年十年勤續功勞者として縣より表彰された。

宇都宮市　岡邊好次郎氏

近衛野砲兵聯隊に義勇奉公の大義を勵むた氏は、除隊後も在鄕軍人分會副會長として多年會員の指導に從ひ、後大正六年小頭として消防組に入りて以來、其他の公職を悉く斥け、一意警備の大任に邁進し、大正十三年組員の輿望を荷ふて第拾部長に推された。資性敦厚而も活潑なる手腕家で克く人を容るゝの雅量がある、大正十四年縣消防義會宇都宮支部の表彰を首め、昭和二年一月十箇年勤續功勞章、昭和七年功績章を贈られたる外、各方面から表彰されてゐる。部長として市民は氏の如き至誠熱意の人を得て始めて其の生業に安んずるを得るであらう氏は明治十九年六月二十一日生れ當年五十一歳の分別盛りで共の前途は洋々たるものがある。

宇都宮市　古泉美太郎氏

明治二十七年七月生れの氏は、當年四十二歳の男盛り市の中堅幹部として、共の將來に多大の待望をかけられて居るが幼時より向學心篤く、小學校を卒へるや漢學界の一權威圓山信泉氏に就きて漢學を修め、後笈を負ひて帝都に遊び英語及簿記を學び、溫厚の資性と不斷の活動とは現に宇都宮市參事會員、宇都宮商工會議所常議員の要職にあり、消防組には大正十五年小頭として入り幾許もなく第八部長拔擢されて今日に及んでゐる。

宇都宮市　齋藤精一郎氏

資性極めて溫良、交誼に厚き活動家で、宇都宮驛前に松の家と號し、構内立賣業を營み業務隆昌信用甚だ厚く斯界に重きをなして居る。大正十二年三月宇都宮市消防組小頭を拜命し推されて第五部長の現職にあり精勵格勤名部長の譽高く共の將來に囑望大なるものがある。昭和七年十箇年勤續章を贈られ共の功勞を表彰せられた。

宇都宮市　鈴木靜之輔氏

馬場町の街衢に堂々三階建洋館の店舗を有つ氏が卓見の持主であることは云ふ迄もない。大正八年十二月消防組に入るや直ちに小頭を拜命、共後間もなく現在の第九部長に拔擢され、縣消防義會より十箇年勤續章を贈られた、火災保險加入者の超過保險を調査し、警火思想を普及する等の功勞大なるものがある。氏は溫良の資性と強い信念とをもち町内幹部中重きを爲して居る。

宇都宮市　杉山昇一郎氏

料亭結城屋の主人たる氏は宇都宮中學校の出身で、明治三十三年三月生れ未だ不惑の年齒には達しないが、圓熟せる人格の持主で衆望を荷ひ、昭和四年消防組に入ると同時に現在の第四部長の職に就かれた。氏は又宇都宮市中央料理組合組合長、納税組合長、旅館組合會計等を兼務し夙に其の手腕を認められてゐる。

宇都宮市　加藤鑛造氏

野州炭で名高い、地方産業たる薪炭商を營む氏は明治二十五年十二月を以て生れ、仙臺市立商業學校出身の秀才で英氣果斷の資は忽ち信望を博し既に過去二期を通じて宇都宮市會議員たり、消防組へは昭和五年第十部常備部の小頭として推され現在に及んで居る。

宇都宮市　池田幸吉氏

父子二代に亘り消防の事に盡瘁しつゝある氏は、納税組合副組合長、白米商組合評議員、同組合幹事、雜穀商組合役員等を兼ね第四部小頭として部下の衆望を荷ふて居る。宇都宮第三商業學校第十四回の卒業生で同校商友會の幹事として母校のために努力を惜まない、斯く氏が公共に奉仕するは嚴父幸吉氏が、市會議員、商工會議所議員、所得税調査委員等に當選して終始市民のために活動し來つた、其の訓育が與つて力がある。氏は明治三十年七月生れにして漸く不惑に達せんとし愈其の信望を加へて居る。

河原町　清水文吉氏

昭和四年第十部小頭に推されて現在に及ぶ、氏は宇都宮第三商業學校第十一期の卒業生で明治三十三年一月出生の小壯派、機敏な活動家で性質極めて溫良、友誼に厚いので人の信頼を得て居る。

宇都宮市　福田富次郎氏

當年二十七歳潑溂たる青年の意氣に炎ゆる氏は、昭和七年四月八日第一部小頭に拔擢されて居るが、宇都宮商業學校卒業後直ちに父祖の業を繼ぎ、パン製造販賣業として宇都宮驛構内立賣、陸軍第十四師團御用商人となり信用特に高く現在宇都宮パン商組合長、江野町會計係等に任ぜられて居る。

宇都宮市　石川清一郎氏

幼にして學に志し、下野數學院に漢文及び數學を修めて英才の聞え高かつた氏は、薪炭卸商を營み當年三十五歳の紳商で、其の前途を囑望されて居るが、消防組には昭和二年十月第六部小頭として入り今日に及んで居る。現に今小路町委員、納税組合長、縣木炭審査員、薪炭商組合長等を兼ねてゐる。

宇都宮市　高田運平氏

相生町草創の名家、十六代連綿として氏に及ぶ佛具商で、明治二十五年八月二十六日生れ宇都宮師範學校卒業後笈を負ひて上京、中央大學豫科に入學したが不幸途中退學の已むなきに至り、父祖の業を繼ぎて家運益々隆昌昭和七年五月消防組に第五部小頭として入り、現に相生町々務委員、納税組合會計等を兼ね、中堅人物として知られて居る。

宇都宮市　小林喜一郎氏

第八部小頭たる氏は明治三十三年十二月六日に生れ第十三回市立商業學校の出身で、嚴父庄太郎氏が商工會議所議員、其他の名譽職を兼ね、自治の功勞者であつた其の後を襲ひ、昭和六年第八部小頭に推され、現在に及び溫厚篤實の士で少壯幹部中重きに置かれて居る。

宇都宮市　宇塚正三九氏

溫良にして謙讓の氏は、又克く人を容るゝ雅量あり、手腕衆に秀で昭和七年推されて第六部小頭となつた、氏は宇都宮商工會議所議員にして商業部長を兼ね相生町評議員、藥業組合副組合長等の要職に就き、明治二十八年二月十二日生れ少壯幹部で、其の縱横の才能は大に其の將來を期待されて居る。

宇都宮市　長野作二郎氏

年齒漸く自立の歳を超えたる氏は、市立商業學校卒業後父の業を繼ぎて、材木町に製粉製麥工場を經營し、沈着果敢の逸材で、一般市民の信望を博し市會議員、商工會議所議員、方面委員、白米商組合副組合長、栃木縣穀物商同業組合代議員、等の要職にあり、昭和六年消防組に入り第四部小頭に推されて現在に及び、其の前途洋々たるものがある。

平石村　福島武宣氏

故祖父重三郎氏が三代の組頭として其の礎石を築いた同村消防組は氏を組頭として迎へた、昭和三年以來部下の統制益々宜しきを加へ一村の信頼を博して居る。氏はこの地方の代表的豪農の息で、宇都宮中學校を卒へ笈を負ふて上京、慶應義塾大學理財科に入り大正十二年學窓を出づるや、直ちに銀行界に其の手腕力量を揮ひ、更に宇都宮第五十九聯隊主計科に一年志願兵として入隊、同十五年滿期除隊後再び銀行界に在つたが、父重三郎氏の後を襲ひて鄕里に復り、昭和二年陸軍三等主計に任ぜられ正八位に叙せられ、同四年此の地に始めて郵便局設置さるゝと共に初代局長に推され、現に消防組頭の外同村小學兒童保護者會の初代會長として村民に畏敬されて居る。

平石村　竹村松男氏

下野中學出身の氏は英邁の資と果敢の質とを以て、其

の將來を囑目され大正三年消防手を拜命し、同十五年規程の改正に依る副組頭設置と共に、一躍其の要職に就いたのを見ても氏が如何に衆望を荷ふて居るかゞ窺はれる曾て宇都宮輜重第十四大隊に入隊衛生部員となり、除隊後在鄕軍人分會幹部として活動せる外現に二期を通じての村會議員であり、方面委員を兼ねてゐる、明治二十八年一月十五日生れの英材で、既に大正八年十二月消防勤續滿二十箇年の功勞章を授與されて居る。

瑞穗野村　增淵平右衛門氏

村名に因む米麥の主產地に先考と二代に亘る組頭だる氏は、大正五年始めて消防手を拜命、昭和二年前任者の後で襲ふて其の大任に就いたが資性溫厚篤實、一村の信望特に高い。

古里村　高鹽惠誠氏

氏は宇都宮農學校卒業後、大正三年宇都宮第五十九聯隊に一年志願兵として入隊、大正七年小尉に任ぜられ正八位を授けられてゐる。大正三年消防手を拜命、小頭、部長等を經て昭和五年組頭に推され、現在青年團長、軍人分會長、村會議員、農會總代、信用組合監事等を兼ね一村の信用を一身に收めて居る。

絹島村　鈴木慶一郎氏

日露戰役第三軍の勇士として二〇三高地其の他に轉戰し、其の功に依つて勳八等旭日章を授けられた氏は、明治三十九年小頭、昭和四年副組頭に累進して今日に及び此の間ガソリンポンプ購入の英斷等あり、土木建築請負を業とし信用組合理事、監事、農會總代、等の經歷を有し、現に縣土木建築組合河內郡支部長であり、任俠の風は大衆の信頼を得てゐる。

姿川村　坪山浩太郎氏

卓見の氏で、其の退部に際しガソリンポンプの必要を痛感し組頭、後任部長等と謀り之を購入して以來同村の消防組は其の面目全く改まつた。明治四十年消防手となり、其後部長に進み、昭和五年に至る迄滿十二箇年間、其の職に在り今も尙ほ部外にあつて種々之に力を添えて居る、二十三年十一月三日生れの四十六歲、同村農會總代として農業の指導に當つて居る。

豐鄕村　半田喜太郎氏

淳朴質實の精農家で、非常に研究の結果を示して範を垂れ、農事に精進すると共に消防の事にも熱誠之に從ひ大正十一年消防手を拜命、後累進して現在組頭となり、手腕を揮ひつゝあり。曾て步兵第五十九聯隊に入營し下士勤務上等兵に進みて除隊、多年在鄕軍人分會理事として努力し、現に村會議員、農區長、信用組合評議員、等に選ばれて居る。明治三十一年の出生。

豐鄕村　古瀧新七郎氏

父君淸四郎氏が消防組公設當時、第三部長として活動して居た事から關心を有つて居た氏は下野中學を卒へ父祖の業に精勵しつゝ明治四十五年消防手となり、二十餘年の久しきに亘り第二部小頭、部長等を勤め昭和七年副組頭に推されて現在に至り、村會議員、農會總代等を兼ねて村民の信任を得て居る、明治二十七年七月八日生れの少壯年幹部で質素剛健の士である。

國本村　本澤藤三郎氏

頭腦極めて緻密なる氏は、而も事に處するに熱誠、明治四十三年騎兵第十四聯隊除隊後、在鄕軍人分會理事として多年盡瘁せる勞酬ひられて、聯隊區司令官より表彰されたる事あり、年齡僅かに十八の青年當時より消防に入り小頭、部長を經て現在副組頭に推され、方面委員、納稅組合長、衞生支部長、等を兼ねて居る。特に同村の納稅組合は大正七年以來滯納者は勿論納稅期日に後れるものすら一人もなく、全く他の模範として推賞されて居る、明治二十年六月出生。

田原村　木村大吉氏

氏は明治十九年十九年十二月九日生れ本年五十歲漸く初老に入つたが元氣益々潑剌、明治四十一年消防手を拜命、大正十年十二月十六日小頭、同十四年十二月二十二日部長、昭和八年十一月十六日衆に推されて組頭となり現在に及んで居る。氏の剛健は父君芳太郎氏が本年七十二歲の高齡ながら尙ほ鍬鑠として壯者を凌ぎ前後十二箇年の久しきに亘り逆面區長として自治體のことに努め、昨年退職と共に永年勤續者として表彰されて居る、其の衣鉢を傳ふるもので特に一家團樂和氣堂に滿つる家庭は村民の羨望する處である。

田原村　磯良助氏

偉大なる體軀の持主である氏は、頗る快濶豪氣の士で本年四十三歲、幼にして父君に別れ、其の業を繼ぎ精農家として知られ大正五年消防手を拜命、同十五年第九部小頭、昭和六年同部長に累進せる外、三期を通じて村會議員に當選し、水利組合會議員、信用組合評議員、土木委員を兼ね獻身的努力に吝まない。先考良平氏は又明治三十二年町村制實施以來の村會議員並に區長で、父子二代に亘る自治の功勞者である。

羽黑村　添田善一氏

縣立宇都宮中學校を卒へ、一年志願兵として輜重兵小尉に任ぜられ、正八位に叙せられたる氏は、明治三十二年四月生の新鋭で、除隊後在鄕軍人分會長、青年團長、青訓指導員として活動し、數期に亘りて收入役に就任、自治のために盡したる外、大正十二年消防手を拜命、小

頭、部長、副組頭等に累進して現在に及んで居る。
氏は博學多識の人で、農村振興に尤も意を用ゐ、警備の事にも、熱誠其の衝に當つて居るが、趣味頗る廣く、テニス、陸上競技、登山等往くとして可ならざるものはない。

城山村　鈴木史郎氏

氏は明治三十九年消防手を拜命、程なく部長に進み、昭和四年組頭に推されて現在に及び、城山村信用販賣購買組合長を兼ねて居る、此の間青年團長、村會議員に當選し、終始公共の爲めに不斷の努力を致して居る、風丰堂々として悠揚迫らす自然の權威を備へ、特に讀書に趣味を有し萬卷の書を讀破せる其の識見は、村民の畏敬する處で、明治二十年生れ當年四十九歲、此の地方の重鎭として知られて居る。

篠井村　田代清次氏

近衛第三聯隊後在除隊鄕軍人分會に班長及評議員たりしこと多年、軍隊仕込みの極めて謹直な精農家で、大正四年消防手を拜命、小頭を經て部長に擧げられ現在に及んでゐる。當年四十四歲正に圓熟せる社會人で、性剛直なるも果敢に長けて雅量あり、特に風格活淡義氣に富みて地方の信望益々高い。先考竹松氏も又二十年の久しきに亘り消防に獻身的努力を拂つた功勞者である。

羽黑村　手塚勝氏

一般農事の外肥料製絲を營む氏は德行高き人格者として知られ、宇都宮中學卒業後輜重第十四大隊に入隊、輜重小尉に任ぜられ正八位に叙せられて歸鄕、多年軍人分會長を勤め、同窓會長に推され、最近の二期を通じて村會議員に當選、大正六年十一月小頭として消防組に入り部長、副組頭を經て組頭に進み、部下の統制に非凡の才能を有し、明治三十三年六月二十四日生正に不惑に達せんとする本村の重鎭で、趣味として劍道を良くする。

國本村　高橋左京氏

大樹家隆な頃は苗字帶刀御免の家柄に生れた氏は、宇都宮中學校卒業後消防に入り小頭、部長と累進して組頭に推され現在に至つたが、洵に明朗な性格の持主で、美髯を蓄へ會ふ人每に好感を與ふる、當年四十六歲の分別盛りで、河內郡所得調査員、國本村信用販賣組合長、助役等を兼ねてゐる。

羽黑村　池田勇一郎氏

氏も亦日露戰役の勇者で功に依り勳八等を授けられてゐる、圓轉滑脫の性は克く他と融和協調を保ち、消防在勤中は數代の部長を補佐し、ポンプの新調、服裝の改善火防用水溜渠等を首め、御大典奉祝記念事業として鐵骨火之見櫓の建設等、悉く氏の力に俟つ處多く全く同村消防の恩人と云はれてゐる、至誠熱意の人で隱退後も消防組に盡すこと現職當時と變りなく、農事に關しても自ら研究の結果を示して鄕黨を指導する精農家として知られてゐる。

篠井村　和田稻市氏

沈毅豪宏の質ながら尙ほ謙讓の德を具へ、雅量豐かなる氏は、縣立宇都宮農學校を卒へて近衛第三聯隊に入營歸鄕後は在鄕軍人分會副會長たること多年、消防組には部長を振出として入り、昭和三年組頭に擧げられて今日に至り、數期村會議員に當選、其他村內數多の名譽職を兼ねスポーツに多大の趣味を有してゐる、當年四十七歲

横川村　大塚吉右衛門氏

氏は明治三十二年生、昭和二年十一月第七部長に推擧せられ、同八年十一月衆望を擔ひて組頭の重任に就く、消防關係爾來銳意、設備の改善、警火思想の普及、災害防備に獻身的努力は周知の事實にして、名組頭として譽れ高く、殊に巳を持するに薄く部下を犒ふに厚く、自ら長たるの德を備ふ。

栃木縣小山警察署管內

野木村　舘野英氏

小山藩當時の勤役、苗字帶刀免許の素封家の曾孫に生れたる氏は縣立栃木中學校卒業後、盛岡高等農林學校農學科に學び、學業成りて歸鄕するや父祖の業を繼ぎて農業を經營、特に栗の栽培に習得の蘊蓄を傾け、聲價頓に高く數度獻上の光榮に浴してゐる。嚴父儀之助氏又町村制施行當初より繼續村會議員に當選、數期郡會議員たりしことあり、父子二代を通じて自治並に公共の事に盡し清廉潔白、眞摯にして仁慈の念に富む其の德を慕ひ村民の信賴特に高い、明治二十二年出生本年四十七歲、曾て青年團長を勤め、消防組には第八部長として大正五年入部、副組頭を經て現在の組頭に擧げらる。

姿村　山口德右衛門氏

明治四十一年三月小頭を拜命し、大正十一年一月部長に進み、昭和二年十二月副組頭同七年十二月組頭に推されて今日に至る迄二十七ケ年の久しきに亘り、消防のために獻身的努力を致し、既に二十ケ年勤續章を授與されて居る氏は、明治十七年出生正に男盛りである。

桑村　土谷淺次郎氏

明治四十三年初めて消防手を拜命、爾來累進小頭、部長、副組頭等を經て昭和七年組頭となり、現在に至る迄二十五ケ年間同村消防組の改善、發展等に不斷の勞力を傾け、昭和四年水戸市に於ける御親閱に參列の光榮を荷ふて居る。

間々田町　柿沼熊藏氏

玲朗玉の如き人格は接する毎に敬慕の念禁じ難く、而も隱德家として德行高く、溫容の裡に進取の氣象を具へ生業たる米穀肥料の家運益々旺なる氏は、縣立栃木中學校を卒業後、歩兵第五十九聯隊に一年志願兵として入營少尉に任ぜられて正八位に叙せられてゐる、除隊後、在鄉軍人會副分會長たること僅かに一年、會長に擧げられてより十五ヶ年其の任にあり、昭和三年御大典に方り在鄉軍人分會長として參列、同七年水戸市に於ける御親閲には在鄉將校として之に加はるの光榮に浴してゐる。大正八年一月第三部長として初めて消防人となり、後累進して現に組頭の大任に就き、町會議員を兼ねてゐる。先考熊藏氏又組頭、町會議員、郡會議員、其他の名譽職に在り、氏は其の衣鉢を承けたるものであつて、明治二十四年五月出生本年四十五歳洋々たる前途に輝いて居る。

間々田町　中村清司氏

縣立栃木中學を卒へ小學校に教鞭を取りたることあり多年青年團長として其の指導に任じ、大正十一年消防手を拜命、部長を經て現に副組頭たり、父君林之助氏は三期に亘りて町會議員に當選、區長、其他の名譽職に在りて氏を訓薫す、明治三十五年出生本年三十四歳の新鋭にして潤達淡快、明晰なる頭腦の持主として信望殊に高い

趣味として劍道を良くする。

間々田町　寺田岩藏氏

往年曾咸興歩兵第七十四聯隊に在りてシベリヤ事變に從軍し、勇名を馳せた氏は、大正五年消防手を拜命し、小頭を經て現在部長に進み十年勤續章を得て居るが、軍隊仕込みの謹直な士で青年團長、在鄉軍人分會評議員、青年訓練所副班長、等の經歷を有し、十年の久しきに亘りて農事奬勵委員を勤めて居る。

間々田間　橋本俊郎氏

頭腦明晰、進取の氣象に富み、自彊不息稀に見る活動家たる氏は、本町二丁目に堂々たる店舗を構へ盛大なる酒類商を經營、大正十三年消防手を拜命、同時に喞筒主用者となる、昭和八年十二月第三部長に補せられ、同九年本縣消防義會小山支部より十ヶ年勤續表彰を受く、青年團副團長、自力更生委員、或は衛生委員を兼ね、各方面に亘り獻身的努力は隣閭普く感嘆、將來を大に囑目せらる、齡漸く三十歳の青年紳商なり。

間々田町　佐藤章作氏

豪農にして精農家たる氏は齡四十歳、曾ては近衛歩兵第二聯隊に入營、歸鄉後は在鄉軍人分會班長たり、大正二年消防手拜命と同時に喞筒主用者となり、同十二年小頭に任ぜられ、昭和四年第一部長に補せらる、斯界關係爾來一意專心上司を補佐、部下を慰撫し、器具に機械に諸施設に熱誠なる不斷の努力は、其の功績顯著なるもの頗る多く、天資淳厚責任感熾烈の士にして名部長の好評高し。

間々田町　田口文治郎氏

曾ては歩兵第二十七聯隊に入營、精勤章を下附せらる殊に武術に優れたる勇士にして大隊競技に賞狀を授與せられたり、大正九年消防手拜命と同時に喞筒主用者に任せられ、昭和六年本縣消防義會小山支部より十箇年勤續表彰せらる、同八年十一月衆望を擔に第五部長に補せらる、質直剛健消防熱心家にして部内の統制整然として名部長の評高く、又家業農事に親み精勵恪勤良く鄉徒に範を示す、齡漸く四十三歳の男盛にして本町の中堅たり。

間々田町　大橋茂一氏

明治四十四年宇都宮歩兵第五十九聯隊に入營、衛生隊に編入せられ、朝鮮羅南衛戍病院に特派せられし歴を有する氏は、大正六年消防手拜命、同十年小頭に任ぜられ昭和七年第七部長に補せらる、曾て本縣消防義會小山支部よりは表彰せらたる名部長にして、區長、農會總代等の名譽要職を兼ね、警備自治に產業に、氏の各方面に亘り鋭意盡瘁せらるゝ功績は一々枚擧に遑あらず、實に社會公共心に富む地方の豪農にして、德望殊に厚く齡四十五歳、本町の利け者なり。

間々田町　山本誠次郎氏

由緒ある舊家にして縣南の素封家、雅趣に富み人格高潔なる氏は、縣立栃木農學校出身の英才にして、曾て宇都宮輜重隊に入營したる閲歴を有す、明治四十四年五月消防手拜命、大正十三年小頭に任せられ、昭和七年第六部長に補せらる、曩きには本縣消防義會小山支部より表彰せられし功勞者にして、斯界關係爾來貢獻せられて功績は偉大にして、殊に消防精神の皷吹に努む圓熟せる人格は歩少の圭角なく、自ら初對面に於て敬慕の念を起さしむるの德を有し、齡四十三歳にして本町の重鎭なり。

間々田町　篠原保市氏

曾ては近歩第三聯隊に入營善行證書を附與せられて滿期歸鄉後、在鄉軍人分會長たること多年、又青年團副團長として地方文化の向上に貢獻し、大正十二年十月初めて消防界の人となり、昭和八年九月第九部長に推擧せらる、家業農事に精勵極めて緻密なる頭腦の所有者にして現に蠶業統計調査員を兼ね、齡四十五歳の活動盛にて信望殊に厚し。

間々田町　日向野豊次氏

由緒ある舊家にして、町會議員、區長たる事實に十七箇年の久しきに亘り、良く村政に參與自治功勞者を父に

持つ氏は、栃木縣立栃木農學校出身の秀才、大正二年小頭拜命、同十三年三月第十部長に推擧せらる、眞摯なる人格者にして農事に親み自ら研究して而して鄕徒に範を示す、大正十五年十一月本縣消防義會小山支部より表彰せられ、昭和八年五月時の知事半井清閣下より表彰狀を受く、氏が組頭を補佐、部下を慰撫し一絲亂れざる統制は餘りも有名なり、長男榮君も及栃木農學校出身にて在學中文部省より表彰せらたる秀才なり。

穗積村　小野寺　利雄氏

小野寺城主、小野寺善治太郎道綱を祖先とし北條早雲の關東攻略に會し落城の際嗣子兼貞、父道綱の首級名もなき葉武者の手に渡るを恥ぢて自ら之を刎ねて所領攝津國渡良井郡伊佐沢村に逃れ閑居すること七年、後下野國上ノ石鄕に移り世々代官たりし名門の出で、流石に大義を知る道綱の衣鉢を傳ふる同家は、代々尊皇憐民の政を布きて隣閭の尊敬特に厚く、先考長瀛氏は多年村會議員として自治の振興に努め又消防公設富時第十一部長に推されて居る、武士道を以て更生の信念とし歷代の世主悉く古武士の風格を具へて居る。利雄氏は特に田園に親み讀書に趣味を有し、晴耕雨讀の農村紳士で、大正三年消防手を拜命し、小頭、部長等を經て現在副組頭に推され衆望を荷ふて居る。明治三十年生れ未だ不惑の歳に達せぬ新鋭の村である。

穗積村　小林　福重郎氏

氏は大正五年消防手として入り、累進して現に組頭の要位に就いて居る、父君要藏氏又區長、農區長を多年勤めて公共の爲めに盡した、父子二代を通じての社會人で茨城縣結城町の敎義館に漢學を修め、頭腦緻密、高潔なる人格者として知られて居る、明治二十四年二月に生れ精農家にして村會議員を兼ねて居る。

穗積村　藤沼　僖作氏

氏の嚴父庄三郎氏は廿有餘年消防の爲めに盡瘁し、前後二回十年及二十年勤續章を贈られ名部長の譽を揚げた人で、氏が消防に献身的努力を致すのは其の遺志を繼いだものと云つてよい、大正十三年十月小頭となり、昭和七年部長に進み現在に及んでゐる、此の間青年團役員たること十五年、今も村の青年男女より畏敬されて居る、同村消防組の使用する機械類は他の羨望に値する優秀新鋭のものであるが、之等は悉く氏の主唱によつて購入されたもので、組合一同其の勞を多しとして居る、氏は慶應元年生れ當年七十一歳の老部長である。

瑞穗村　田中　康氏

氏は本村高島の人、曾ては步兵第五十九聯隊に入營、除隊歸鄕後は在鄕軍人分會役員たる事多年、大正八年初

めて消防界の人となり、昭和四年小頭に任せられ、同七年第八部長に推擧せらる消防人として鋭意斯界の向上發達に努力せらるゝ功績は偉大にして實に名部長たるの定評あり又本縣消防義會小山支部より表彰せらる、天資聰明同情心に富み精農家を以て知らる現に農事奬勵會員を兼ね農村振興に寄與する所頗る大にして齡漸く不惑なり

瑞穗村　河部　武市氏

縣立宇都宮農學校出身の英才にして、曾ては一年志願兵として步兵第五十九聯隊に入營、大正十四年步兵少尉に任官、現に在鄕軍人分會長たる氏は、大正十三年消防手拜命、昭和四年第十部長推擧せられ、現在に至る間斯界の發達に殊に消防精神の皷吹に、理想消防たらしむ可き不斷の努力は鄕黨等しく信賴する處にして、德望尤も篤く、活撥英邁人格高潔なる紳士なり、因に祖父由造氏は本村消防組の創設者にして曾ては各名譽要職にあり活躍自治功勞者たり、現に七十九歳の高齡を以て元氣矍鑠尙壯者を凌ぐ慨あり。

瑞穗村　松永　眞次氏

現に村會議員にして本村に重きを爲す岩之助氏を父に持ち、質實穩健にして大勢の着眼に秀たる氏は、曾ては騎兵第十八聯隊に入營、歸鄕後は在鄕軍人分會評議員たる事多年、大正十二年消防手拜命、昭和四年小頭に任ぜられ、同八年三月衆望に依り第九部長に推擧せらる、斯界關係以來鋭意努力せられし功績は顯著なるもの頗る多く、殊に部隊統卒の才能に秀て一絲亂れざる統制振りは到底凡庸ならず、因に同部は本縣消防義會より昭和九年十二月、二十箇年無火災表彰を受けたる名譽の部なり、又同部員信號手青木國二郎君の勇敢にして責任感の强きを氏は讃へ居られり。

栃木縣栃木警察署管內

栃木野　松本　松藏氏

氏は若くして東都に遊學し最高學府に學びて研鑽大いに力め、常に修練を怠らず、天禀の大器を完成し、手腕識見、人格、兼ね備へ、練達堪能の士として鄕黨の瞻望する所である。放膽にして細心、常に高所より大觀し然も時代に即する企畫をなすの卓見ある氏は、栃木町の政治界、實業界は勿論、各般の社會公共事業一として關與せざるはなく、其の功績枚擧に遑なきも、殊に消防に關しては大正三年消防小頭を拜命するや、先づ組織を整備し統制を圖るの急務なるを覺り、鋭意組員の素質向上と積弊の打破に努め、苦心を重ねて面目を一新し大正十三年栃木町消防組頭に就任するや、一段の努力を以て消防の改善發達に精勵し各地の優良消防組を視察研究して組

員の敎導組織の改善、施設の整備擴充に昂め、東奔西走瓦斯倫喞筒四臺、自動車喞筒一臺の配備を完成し、栃木町消防組をして紀律訓練及び施設に於て縣下有數の優良消防組たらしめたるは、實に二十有餘年に亘る氏の不斷の努力の功といはねばならぬ、今や大栃木市の建設に際し氏の手腕に俟つべきもの愈多く、大栃木市の成立によつて當然來るべき栃木市消防組としての改組問題は目前にあり、益氏の健在を有意義ならしめんとして居るのである。

栃木町　小根澤登馬雄氏

消防界稀に見る辯論の雄にして、頭腦明晰、緻密周到なる智謀は克く松本組頭を補佐して剩す處なし、凡そ公私共に松本氏の在る處、影の形ちに添ふ如く氏のあらざるなく、此の兩者は洵に絶好の名コンビであり、バッテリーである。栃木中學を卒へるや早稻田大學文科に學び歸來公共の爲めに盡瘁し、現に消防副組頭の外栃木町衛生會組合副組長、所得稅調査委員、農會副會長、購買販賣組合專務理事等を兼ねて居る、明治十六年を以て生れ政治並に讀書に多大の趣味をもつてゐる。

栃木町　山野井正義氏

多年稅務署官吏たりし氏は、消防組中の變り種で、川魚牛馬肉商を營むでゐる、世故に長け、而も豪快なる質と極めて明敏なる頭腦を有し、同情心厚き爲め衆望を荷ひて、現に第四部長に擧げられてゐる。

栃木町　廣澤辰三郎氏

氏は立志傳中の人であり、獨學螢雪の功を積みて機械技術に造詣深く、明治三十年廣澤鐵工所を創設して其の經營に任じ、建築、鐵骨、鐵柱、鐵塔、諸機械、汽機、汽罐の製作の外、燃料經濟の國家的見地より風呂釜發明に成功し、既に四種の特許を得家財又至大の富を致し、昭和七年帝國產業奬勵所より名譽優等賞を授けられて居る明治二十五年生れ、大正五年消防手を拜命後機械部特設と同時に機械部長に補せられ、栃木町消防組の威力は氏の技術に俟つ處が多い。

栃木町　橋本信三郎氏

氏は埼玉縣北埼玉郡川邊村の產で、幼少の頃本縣佐野町の某商舗の商業見習徒弟であつたが、感ずる所ありて上京、日本橋區本町三丁目貿易商加藤商店に入り、更に南洋ユマフリヤ群島に渡り、藥草、製藥事業を視察研究して歸朝、本町に藥種商を開業、家運年と共に隆昌に赴き二十年の久しきに亘りて衞生委員、栃木町衞生組聯合會の幹事及理事を勤め、昭和二年本縣知事より表彰狀並に置時計を贈られて居る、消防組へは小頭として入り、現に第二部長に推され、居町の協議員、方面委員、町是第三區實行委員、藥業組合幹事、等を兼ねて居る。趣味として弓道を良くし、日置流竹林派二段の允傳を許されてゐる、堅忍不拔、意志尤も强固にして衆望殊に厚く、氏も又立志傳中の人である、長男要君は資性明朗技能優秀なる藥學士である。

栃木町　小橋利吉氏

風貌堂々として剛直、而も仁俠の風は衆望自ら集まる氏は當代の劍聖高野佐三郎氏に學びたる、劍道四段の勇者で、埼玉縣警察部、及び東京明信館敎授たりし事あり現にも消防小頭の外、方面委員、桐材製造業役員、等を兼ねて居る、今や活動の最旺盛なる五十歲で、夫妻揃ふて菊造りり趣味を有つて居る。

栃木町　高橋清一郎氏

足袋洋品商天野屋の店主たる氏は、錦心流琵琶の名手で、錦晴と號し奥傳の腕を有つて居る、栃木商業學校の出身で、明治三十八年十二月一日生正に自立の歲を迎へた許りの少壯有爲の材だ、消防組に入りて以來既に十年第二部小頭として部下の信賴を得てゐる。

栃木町　清水彦平氏

往年日露戰役の勇士たりし氏は、父祖の業たる釜新提灯商を營み、明治四十年消防手を拜命し、後小頭を經て部長たりしも、部制編制替により現在の第五部小頭に推され、此の間二十有七年に亘る消防の功勞者であり、既に十ヶ年勤續表彰を受けて居る。明治十六年生れ將に活動の最旺盛に入れる分別盛りで、資性謹嚴、剛直なるも世事に通じ圓熟せる人格と、謙讓の德とを具へ信望殊に厚い。

栃木町　日向野六郎氏

父君平馬氏が町農會長、家屋稅調査委員、消防部長として產業に警備に盡瘁せる意志を繼いだ氏は、縣立栃木農學校卒業後、步兵第五十九聯隊に一年志願兵として入營、除隊と共に農業に從ひ、消防手小頭を拜命、曾て靑年同志會會長たりしことあり、現に在鄕軍人分會理事、產米受檢組合理事を兼ねて居る、明治三十四年生れ少壯者で、卒直淡快些事に拘泥せず、將來の部長として囑目されて居る、嚴父平馬氏は公私の事總てを氏に讓り、悠々自適後半生を樂しむで居る。

栃木町　森戸小平氏

日露の役第一軍の勇士として滿洲の野に轉戰し、武勳により勳八等桐葉章を授けられて居る氏は、凱旋歸鄕後多年在鄕軍人分會役員を勤め、現に名譽會員として遇せられて居る、大正三年消防手小頭を拜命、一時引退して居たが、大正十四年第五部長に補されて、再び消防人となり現在に及び、昭和九年桐生市に於ける御親閲には參

列の光榮に浴して居る、一面又農事の熱心なる研究家で克く鄉黨を指導し、精農家として範を垂れて居る。明治十一年生れの當年五十八歳、眞摯にして而も沈着、世事に通じて衆望を荷ふて居る。

部屋村　山中要八氏

氏は明治三十三年を以て生れ、適齢の際近衛歩兵第二聯隊に入營、一等兵となつて除隊歸鄉後、在鄉軍人分會副會長に推され、大正十三年消防手を拜命、爾來累進昭和五年に副組頭となり、次いで昭和八年五月衆望により組頭に擧げられ現在に及むでゐる、溫厚篤實の農村紳士で、部屋村區會議員、家屋稅調査委員、等を兼ねてゐる荒物雜貨商を營み亡父要八氏は多年村會議員を勤め、第四代組頭として功績顯著今も噂に殘つて居る。

三鴨村　上岡泰一氏

伍長勤務上等兵である氏は、第五十九聯隊入營中精勤章を三つも授けられて居る至誠勤勉の人でる溫厚の資性と俟つて鄉黨の信望高く、除隊後七年間在鄉軍人分會事務理事として同會基本財産造成に至大の力を與へ、擢ぜられて青年團長に推され、青年指導と共に同團の基本財産を造成して其基礎を鞏固ならしむる等、功績一二に止まらず、大正二年消防手を拜命以來、小頭、部長を累進し、昭和五年二月前組頭物故の後を承けて組頭に就任今日に及んでゐる、同村消防組の成績頗る秀で、優良消防組の譽を揚げて居るのも氏の力によるものと云つてよい此の間栃木縣第六區組合聯合青年團長、三鴨青年訓練指導委員等として活動し、屢々私財を投じて公共の爲めに盡瘁する其の德行は、益々大衆の信望を加へ、特に團體統制の才能に至つては他の追從を許さない、氏は明治二十七年生れであつて、其の前途大に期待されてゐる。

藤岡町　阿部利三郎氏

溫良、恭謙讓の美德を具ふる氏は、大正五年十一月消防手を拜命、昭和二年一月小頭に推され、同七年十二月第三部長に擧げられ現在に及んでゐる。事に當りて熱誠克く其の職責を盡くし、既に大正十三年十二月縣消防義會より十ヶ年勤續章、同十三年十一月精勤章、等を贈られてゐる。明治三十三年一月生れであつて、其の前途を囑目されてゐる。

藤岡町　三ッ井與四郎氏

溫厚な資性と、敏活な手腕とを有する氏は、大正九年消防手となり、昭和三年一月小頭、同八年十二月第五部長と累進して今日に至つて居る、此の間大正十五年には十ヶ年勤續章を、更に昭和八年十二月には勤續廿ヶ年章を夫々縣消防義會より贈られて居る、明治十九年一月生れの氏の尙今後の活動が大いに待望されてゐる。

吹上村　赤羽根辰太氏

君子人の風格を有する氏は、縣立栃木中學校卒業後近衛歩兵第三聯隊に入營軍務に精勵、歸鄉後は大正十四年より繼續村會議員に當選して自治の振興に努め、衆望により推されて消防組頭となつた外、農會總代、同副會長等を兼務して産業の警備の兩方面に其の手腕を揮つてゐる。明治二十八年生れである氏は、正に不惑の歳を超え信望益々高きを加へて居る。

豐田村　田村新藏氏

夙に大人の風を具へし氏は、悠揚迫らず、世故に通ずるに從ひ愈々衆望高く、曾て近衛中野電信隊に入りて軍務に精勵し、歸鄉後在鄉軍人分會評議員、專務理事、等を勤むること十餘年、其の勞を表彰され、又農區長、受檢組合理事として殖産の事に努め、大正四年二月消防手を拜命、同十四年部長に、昭和四年衆に推されて組頭に就任現在に至り、部下統制の妙を極め名組頭の譽高い、農會評議員、農林省統計調査委員、信用購買販賣組合理事の外、前期二期に亘りて村會議員、等を兼ねてゐる。明治二十四年一月生れ本年四十五歳、

豐田村　塚原錦一郎氏

明治二十二年八月を以て生れたる氏は、適齢の際工兵第七大隊に入營、鄉里に歸りて在鄉軍人分會評議員農區長なりし事多年、後大正十四年消防手を拜命、程なく部長に擧げられ現在に及んでゐる、資性溫厚篤實の精農家で、父君金五郎氏は殊に敬神の念深く、現に天理教會宣教所長として信徒を導いてゐる。

豐田村　橋本仁左衛門氏

この地方稀に見る大農家たる氏は、先考軍藏氏が賣名的の行爲を嫌ひ常に表面に立つを欲せず、質實剛堅農事に精進し、或は山林沼池を開墾して良田となし、其の體驗を示して鄉黨を指導しつゝあつた、其の遺志を守りて精農家の聞え高いが、村民を救ふ警備の大任は忽緒に附すべからざるを知りて、青年團支部長及理事を他に讓りて、大正九年消防手を拜命、小頭を經て現に第十一部長に就き農區長を兼ね、昭和九年桐生市に於ける御親閲の際は參列の光榮に浴してゐる、明治三十三年生れである氏は、未だ不惑に達せぬ有爲の材である。

豐田村　塚原新平氏

至誠の人で、特に其の圓熟せる人格は德望隣閭に普く野砲兵第十四聯隊除隊後、在鄉軍分會班長たりしこと多年、後大正八年二月二十八日消防手となり、小頭を經て現在の第十八部長に推されたが、氏の今日あるは先考喜藏氏の訓薫が與かつて力ある、明治二十七年九月廿日生れの氏は年不惑を超え愈重きを加へて居る。

豐田村　柏瀬善一郎氏

萬延元年の創業にして、銘酒若駒の醸造元たる堺屋の嗣子として明治二十九年一月を以て生れた氏は歩兵第五十九聯隊に一年志願兵として入營、除隊後在郷軍人分會長、同聯合會理事及び消防部長として現在に至つて居る特に軍務にあつては志願兵中異數の拔擢で從七位、歩兵中尉に任ぜられて居る、堂々たる風采と社交に長けたる福德圓滿の資性とは克く部下の和を得て居る。

豐田村　福田覺市氏

沈默實行の氏は、謹正醇朴衆望を荷ひ曾て青年團支部長として令名あり、現に消防第十二部長、農會總代、豐田村外八ヶ村水利組合會代議員を兼ねて居る、明治三十三年十月生れの氏は洋々たる前途を有し、父君覺四郎氏は菊花の栽培に趣味を有し、芳薫其の家庭にたゞようてゐる。

豐田村　荒川嘉一郎氏

沈毅豪放にして雅量あり、身を挺して公共のために盡す氏は、嚴父三四郎氏が同村警備の大任を思ふて東奔西走終に今日の雄大なる消防組たらしめたる功業を親しく見聞して居たので、夙に消防人となり既に十數ヶ年の歲月を送り、現に第十三部長たるの外、副業組合支部長として農家經濟の難局打開に勞めて居る。明治二十八年生れにして、大衆の信賴を得て居る。

豐田村　岡泉德左衛門氏

先考政太郎氏が農事に精勵して、克く後進を敎へ信望漸く高く、五十二歲の活動盛にして早くも永眠せられたる痛措の情は當然氏の上に注がれて、村人は其の生育を待望して居たが、氏は適齡と共に近衛歩兵第二聯隊に入營、伍長勤務上等兵に進みて歸鄕し今も尙在鄕軍人分會理事の現職に在り、消防組へは大正十一年消防手として入り、小頭を經て第二部長に推され、現在に至つて居る天資快活、常に大勢に着眼し殊に部隊統制の才能に秀で名部長の定評がある、明治三十一年十二月三十日生れであつて銃獵に趣味を有し栃木縣獵友會栃木支部創立以來の評議員でもある。

豐田村　小貫代藏氏

氏は警察官出の精農家で、同郡野本村大字友沼大高喜兵衛氏の四男として生れ、長じて小貫家の養嗣子となつた、茨坂縣古河町實業校の出身で、歩兵第八十聯隊に兵役の義務を卒へ、歸鄕後在鄕軍人分會部長に推され、昭和四年消防手を拜命、間もなく小頭となり部長に進みて現在に及んでゐる、明治三十七年十一月を以て生れ、讀書を趣味と爲し、所謂晴耕雨讀の農村紳士である。

豐田村　相川新一郎氏

五代連綿たる土木建築請負業者たる氏は、豪放快活、仁俠の風に富み衆望殊に厚く、生業愈旺にして縣廳、鐵道、諸學校等の指定請負人として活動し、消防手拜命後程なく小頭に進み、次いで部長に補せられて現在に至つてゐる、明治十七年二月生れで益重きを加へて居る。

豐田村　中田源治氏

先考源一氏以來、二代に亘る精農家にして、其の生産物は各地の品評會に於て、賞狀を授與されたこと一再に止まらない、素より其の由て來る處、氏が大正青年同志會に於て漢文、國語を修めたる後、豐田村主催農事講習會、下都賀郡主催青年幹部講習會、西ヶ原養蠶講習所、等に於て所定の課程を習得し、之を實際に活用して業績を擧げて居るからである、曾て多年青年團支部長たりし外、農區長、字評議員を兼ねて居たが、大正九年十二月一日消防手を拜命、昭和五年五月十七日小頭に任ぜられ現在に及び更に大正十一年五月以來修養團下都賀郡支部幹事、昭和五年十月以來日光東照宮献穀講理事囑託を兼ね、本縣消防義會より十ヶ年勤續者として表彰されて居る氏は、明治三十一年六月生れで氏は文藝の人であり青年團支部長時代一日一善の修養歌を自作し、或は火防宣傳歌を作り、成は火の用心ポスター等、何れも自費を以て印刷し、每戸に之を配布せる德行を賞し、同消防組頭より感謝狀、及び表彰狀を贈られてゐる。

豐田村　河村兵藏氏

宇都宮輜重第十四大隊に於て軍務に精勵し、歸鄕後在鄕軍人分會役員、青年團の創設、信用組合幹事等の閱歷を有する氏は、大正十一年消防手を拜命、小頭を經て第十四部長に補せられ現在に及んで居る、氏の祖先は小山藩の家臣にして此の地に居を卜し、世々鄕士であり、名主たりし名家で、祖父朴一郎氏は戶長を勤め、先考彥七郎氏は信用組合理事として地方の產業界に貢獻し、郡農會長より精農家として表彰されて居る。明治三十一氏十一月七日生れの氏は、資性活達、些事に拘泥せず、仁義の念に厚いので殊に衆望を荷ふて居る。

豐田村　橋本千代吉氏

父嘉十氏は、往年消防手として活躍し六十三歲の高齡に達して尙ほ健在だが、氏は大正九年消防手を拜命し、同十二年小頭に進み、昭和三年第七部長に推されて現在に至り、副業組合幹事を兼ねて居る、明治三十年十一月八日出生、質實剛堅、思慮周密にして着々業績を擧げてゐる。

豐田村　生井淺次氏

生井家は舊幕時代、名主勤役苗字帶刀御免の家柄であつて、豐田村の舊家として知られてゐる、此の名家の當

主たる氏は、資性溫厚、篤實義氣に富み、公私に奔走して其の勞を厭はず、村民の尊敬措かざる所であり、家業たる農事の改善工夫に孜々として其の勤勉精勵鄕閭に模範として仰がれて居る、夙に消防人として災害の警戒防禦に當り、副組頭に就任して粉骨碎身し難あれば卒先之に赴き、平時組員の指導、施設の整備充實に努め、名副組頭として組員の心服せざるはなく、組員の信望、村民の信賴共に絕大である。

犬飼村　島田雅一氏

封建當時には苗字帶刀御免の名門として知られ、幕末の際總督錦旗を奉じ大島圭介の東軍征討に當り官軍の陣營たりし舊家に生れたる氏は、明治大學に學びたる後、一年志願として兵役の義務に服し正八位砲兵少尉に任ぜられ、曩に在鄕軍人分會長、衛生組合長として令名を馳せたが、現在は衆望に推されて消防組頭の任に就いて居る外、過去十箇年餘に亘りて村會議員に當選、方面委員家屋稅調査員、郵便局長を兼ねてゐる、氏の祖父武七郎氏は、名主、戶長等を勤め、先考半三氏又村長消防組頭として衆望を荷ひ、氏は實に其の衣鉢を傳ふるもので終始消防事業の改善に努め、幾多創始の事績をのこして居り、其の前途を囑目されてゐる。

南犬飼村　山野一雄氏

嚴父定治氏が警備、學事、自治等に偉業に收めた其の後を襲ふ氏は、極めて眞摯熱誠の士で、縣立宇都宮中學卒業後、在鄕軍人分會常務理事、青年團長、女子青年團支部長、產業統計調査委員、農業調査員、米穀調査員、實行組合聯合會々長、等を勤めて鄕黨を指導し、現に村會議員、消防第四部長、學務委員を兼ねて居る、明治三十年十月生れの氏を、一般村民は將來の消防組頭、村長として其の前途を期待してゐる。

南犬飼村　臼井紀道氏

明治二十二年、舊幕時代勤役の名家に生れたる氏は下野中學出身にして、正に世故に通じ、雅量を以て衆望あり、父君安之助氏は戶長、稅務屬、縣屬等を勤めた人で氏は其の感化を受け、現に消防第五部長の外、村會議員農會總代、統計調査委員等を兼ねてゐる。

瑞穗村　富山茂雄氏

明治二十九年を以て生れ、縣立栃木中學校を卒へ、步兵第五十九聯隊へ一年志願兵として入營、正八位陸軍步兵少尉に任ぜられた氏は、多年在鄕軍人分會長として功を收め、現在同村消防組頭として克く部下を統率する德望家で既に不惑に達し愈重きをなして居る。

瑞穗村　鹽田武治氏

氏は慈善心に富み、社會公共のため常に全幅の力を致す篤志家で、大正二年消防手となり、累進して第二部長に補せられて居る外、米穀生產調査員、衛生組合副會長寺惣代、神社總代、農事奬勵員、を兼ね國勢調査の都度調査委員にも擧げられて居る、明治三十一年生れ。

寺尾村　石川勘右衛門氏

祖父の業、製材の外、酒、雜貨商を經營する氏は、村內有數の豪家で、夙に自治の振興に志し、收入役、助役等を夫々二期勤め、更に村長として一期村治、並に村財政の基礎を固め、三期に亘りて村會議員に當選せる外、同村鎭守宮の氏子總代、會計、等に推され傍ら靑年團支部長として靑年の指導に任したる經歷を有する練達の士で、現に同村消防組頭に擧げられ明治二十四年十二月十日生れで尙多く春秋に富み、其前途を囑目されて居る。

寺尾村　矢澤太平氏

氏は溫厚謹直、若くして育英に志し縣下敎育界に令名高きものがあつた、退職後村會議員に擧げられ、自治に奔走し貢獻大にして、其の他各般の社會公共事業に盡瘁して功勞顯著である。推されて寺尾村消防組頭となるや組の向上發展に竭し、施設の改善整備を圖り組員の消防技能の進步に力むると共に、警火思想の普及には特に意を用ひ、其の業極めて顯著なるは周知の事實であつて、名組頭の名四隣に響いて居るのである。雜貨商を營み其の業務の隆昌なるも、至誠以て事に當る氏の資性の現れであるといふべし。

中村　岸亘氏

嚴父傳市氏は常に村治に意を注ぎ、村長、消防部長、村會議員、郡會議員、等に擧げられ奉公の至誠を致して居たがその訓董を受けたる氏は、適齡と共に宇都宮步兵第五十九聯隊に入營伍長に進みて退役、後父祖の業を繼ぎ大正元年消防手を拜命、大正七年小頭同十二年部長に累進し、昭和五年副組頭に推されて以來既に六年を經過して居る、氏は帝都錦城中學の出身である。

家中村　渡邊德氏

氏は大正六年消防手を拜命し、昭和七年部長に拔擢されて現在に至つてゐる、既に昭和二年には十箇年勤續章を贈られてゐる。此の外靑年團支部長、農區長、方面委員、衛生委員たりし經歷を有し、現に農事實行組合長を兼ねて居る、趣味として乘馬を良くする。

家中村　根本忠治氏

小學校を卒へてより私塾に通ひて專ら修養に努めた氏は農事に精勵し、大正七年十二月廿日消防手を拜命、昭和四年一月小頭に進み、同八年十月部長に補せられて現在に及んで居る。篤實溫厚の君子人で明治三十三年八月十五日を以て生れ、熱誠事に當り村內重要人物として自他

共に許されてゐる。

家中村　若林　岳氏

氏は本年不惑の壯年高潮期に達したが、消防組へは大正七年消防手として入り、昭和二年十二月小頭、同六年部長に累進して今日に及んでゐる。氏は終始消防のことに專念し、事業の改善に努め、機械器具の改良、等氏の力に俟つ處極めて多い、昭和九年十月桐生市に於ける消防御親閲の際には參列の光榮に浴し、前には青年團幹事等の經歴を有して居る。

家中村　長市三郎氏

氏も又獻身的消防人で、昭和二年消防手を拜命、同三年小頭、昭和八年十二月部長に累進して今日に及んでゐる。尙ほ氏は適齡と共に宇都宮騎兵第十八聯隊に入營、縫工卒として軍務に服し、歸鄕後在鄕軍人分會評議員並に班長たりしこと十餘年、消防組に入りて機械部に其の手腕を揮ひ、部下の統率宜しきを得、其他服裝改善に努め、昭和九年の御親閲に參列の光榮を荷ひ、同村經濟委員を兼ねてゐる。

家中村　鳩山庄平氏

氏又昭和九年の御親閲に參列の光榮に浴した消防人で家に在りては專ら農事を勵み、村內中樞人物として知られて居る、大正十三年消防手を拜命、同昭和六年拔擢されて部長となり現在に至つて居る、本年四十二歳。栃木農學校出身、敏腕家で衆望を荷ふて居る。

家中村　青木喜三郎氏

石材請負を生業とする氏は、大正七年消防手を拜命、機具手を承はり昭和五年小頭に任ぜられ、同六年部長の要位に就き今日に至つて居る、氏は身を挺して公事に赴く熱誠の人で、部內の統制寔に宜しきを得、衆望殊に高い。本年四十二歳。嚴父宣之進は六十八歳の高齡に達し曾て村會議員として自治に努め、現在別に雜貨商を營むで居る。

家中村　谷田具惣三氏

嚴父定四郎氏は、明治初年より消防役員として盡瘁せる功績絶大であるが、其の後を承けた氏は、昭和二年消防手を經ずして直ちに役員の要位に就き現在に至り、昭和四年のポンプ改造、服裝改善、には至大の力を致し、消防の事には寢食を忘れて精進するので鄕閭の信望を荷ふて居る。本年三十六歳。

栃木縣佐野警察署管內

佐野町　山田元吉氏

氏が大正十一年佐野町消防組頭拜命以來、從來兎角不活潑であつた佐野町消防組の大改革を斷行し、組員の訓

練に努めて精鋭の名をなさしめ、機械器具の改善整備に盡し、熱誠を以て町民を動かして自動車喞筒を購入し、水利の充實を圖りて貯水池を新設し、災害の警戒に力め年々火災度數を減少せしむる等、其の功績は餘りにも顯著であつて、佐野町消防組をして足利市消防組と相對立して縣下最優秀消防組たらしめたるは、實に氏の不斷の努力によるといはねばならぬ。又氏個人としても、明治四十年十二月陸軍機動演習中火災豫防に從事し明治四十三年縣下大洪水に際し危險を冒して消防に盡瘁し、何れも功勞顯著なるにより縣知事より賞せられた。氏は啻に佐野町消防組頭としての功績により數次表彰せられたるのみならず、大日本消防協會代議員として我國消防開發のため盡瘁せしこと多年にして、大日本消防協會第一次表彰の選に入るの名譽を得、今大日本消防協會栃木縣支部長の職にあり、昭和九年十月地方御巡幸に際し、消防功勞者として單獨賜謁の光榮に浴したのである。氏が消防人としてのみならず、佐野町の發展のため其の他各般の社會公共事業に盡瘁なしたる貢獻は極めて大であつて町民の信望と感謝の絶大なるものあるは、氏が熱誠と努力の歸結であるのである。

赤見村　金井龜吉氏

溫容以て人に接し、抱擁力大なる氏は、兵役を卒へて久しく軍人分會長たりし事あり、及青年團支部長、產業調査員、國勢調査員、等を勤め、大正十二年消防手を拜命、同四年小頭、同七年部長と累進して現に副組頭の要位に就いて居る。嚴父覺藏氏又往年區長代理、區長等に推されて自治の振興に努め、或は氏子總代に選ばれて敬神の念を村民に培ふ等、溫厚圓滿の士であつた、其の嗣子たる人が人格的に玲瓏たるも又、故ある哉といふべく氏は當年三十九歳眞に晴耕雨讀の農村紳士である。

赤見村　割田儀一郎氏

謹直にして而も謙讓の德を具ふる氏は、自ら織物業を創設して地方產業に貢獻せる傍ら、曩きに青年團支部長として青年の指導に任じ、大正五年消防手を拜命、後小頭、部長、副組頭等を經て現に組頭に就任、產業組合評議員を兼ねて居る、本年三十七歳正に春秋に富み、頭腦明晰、淸廉潔曰、名組頭の名を馳せて居る。

赤見村　四十八願恒吉氏

思想穩健、性快活なる氏は、又仁俠に富み、鄕黨の信望を得て得るが、父祖以來織物業を營み氏に至つて愈々家運隆昌、嘗て青年團支部長たりし事あり、大正十一年消防手を拜命、小頭を經て現に部長に推されて居る、當年三十三歳。事に處するに熱誠克く其の職責を盡して居る。

赤見村　關根忠治氏

氏は明治四十一年十一月を以て生れ新進氣鋭の俊敏で縣立佐野中學を卒へ、青年團支部長に推され、尤も良き青年の指導者であるが、昭和四年消防手を拜命、小頭を經て現に第七部長を承はつて居る、水車及米穀商を業とし規模頗る大、天才的經營の才のひらめきと云つてよい趣味として圍碁を良くし、又座有新刊書が必ず備へられて居る。青年部長の身邊衆望自ら集まり、將來の組頭として期待されて居る。父君只司氏は日露戰役出征の勇士で、武功に依り功七級勳八等を授けられてゐる。

赤見村　大士　菊三郎氏

農は國本の敎を守り父祖の業に精勵する氏は、暫らく青年團幹事として、其の指導に任じて居たが、大正元年消防手を拜命、小頭を經て現に第四部長の要職に就いて居る、明治三十年七月れの最盛壯年期で、醇朴實直を以て聞えてゐる。

常盤村　奈良部利市氏

先考九十郎氏旣に組頭として令名を馳て、仁義に厚く神社或は寺惣代として、敬神崇祖の念を敎へた、其の嗣子である氏は、適齡と共に輜重第十四大隊に入營、除隊後在鄕軍人分會評議員、班長、副會長と進み、更に青年團支部長たりしことあり、大正七年消防手を拜命、小頭部長と累進して現に組頭として衆望を荷ふて居る、明治三十五年を以て生れ、眞摯熱誠の人として其の前途を一層期待されて居る。

犬伏町　熊倉助次郎氏

克く大勢に着眼して機を見るに敏、典型的活動家にして巨萬の財を積み、而も同情心に富む陰德家として知られたる、父君巡吉氏の長男として、明治二十三年を以て生れたる氏は、兵役の義務を了りたる後各地の事業界を視察して多くの名士と親交あり、玲瓏珠玉の人格は自ら周圍の敬慕する處となり、昭和九年消防人となりたる當初より衆望に推されて組頭に擧げられて居る。犬伏町消防組の將來は、氏ありて始めて刮目に値する。

植野村　岡田半氏

群馬縣立小泉農學校出身の氏は、近衛步兵第四聯隊に入營上等看護兵となつて除隊、後在鄕軍人分會長及び青年團長を多年勤め、大正九年消防手を拜命し、同十三年小頭、同十四年部長と累進し、後組頭に推されて現在に至つてゐる。嚴父宥治氏亦部長の要位にあつた、父子二代に亘る消防人で、清濁併せ呑むの大雅量は、部下の統率宜しきを得、名組頭の譽を擧げてゐる、明治三十五年生れの少壯有爲の材で、村會議員を兼ねて居る、釣魚に趣味を有する外、晃陽會員として菊造りに造詣深く屢々名花を出して入賞してゐる。

植野村　淺野清一郎氏

世々酒造業を營み、銘酒清正の釀造元である氏は、縣立佐野中學の出身で、大正九年消防手となり、小頭を經て現に第二部長の要位に就いてゐる。先代清吉氏又往年の組頭として令名あり、明治三十六年出生、才氣縱横、克く部下を統祿して其の將來を待望されてゐる。

界村　出居德一郎氏

群馬縣立小泉農學校卒業、後多年青年團會計、支部長を勤めた氏は、國勢、產業、農業調査員として殖產興業のことに努め、大正十一年九月消防手を拜命、小頭、部長と歷任して、昭和八年組頭に擧げられ現在に至つてゐる、此の間、諸設備の改善、紀律、訓練、防火思想普及等に專念せる其の功績顯著にして、從て組員の信頼尤も厚く、頭腦明晰、進取の氣象に富むでゐる、明治三十七年生れ自立の歲を超ゆること僅かに一歲。嚴父德太郎氏又消防第三部長たりしこと實に十二ケ年の久しきに及び或は青年團長、學務委員、村會議員たりし閱歷を有し、現に信用組合專務理事を勤むる同村の重鎭である。

堀米村　篠原貞造氏

先考得太郎氏は、溫厚仁慈の人として德望高かつたが四十二歲にして夭折せられ、其の後を襲ふて大規模に水車製粉事業を經營する氏は、佐野中學校の出身で、大正十年十二月消防手を拜命、昭和五年小頭に進み、同九年十二月推されて組頭となつた、明治三十四年生れ、同村の少壯幹部で前途大に囑望されてゐる。

葛生町　村樋東一氏

氏は大正七年消防手となり、小頭第二部長を經て、昭和五年現在の要職に就いた人で、資性溫厚、而も力量手腕共に卓越し、消防のことは素より自治方面に於ても缺くべからざる中心人物で、東京錦城商業學校を卒へて後父祖の業を繼ぎ、石灰製造工場を經營し年產額三十餘萬圓に達して居る、明治十四年八月生れ、元氣壯者を凌ぎ此の名組頭の下俊敏有爲の材を網羅する同消防組の將來は刮目して見るべきである。

旗川村　田村清次郎氏

祖父耕平氏は初代の組頭であり、父君耕平氏は三代目の組頭として盤臺の基礎を固め、今又氏が其の後を襲ふて組頭となり、三代を通じての組頭を出して居るのは如何に衆望が厚く、其の手腕力量他の追從を許さず、氏を措いて外に適材を見出し得ないからである、旣に明治四十五年より消防人として活躍せる氏は、大正十二年縣消防義會より其の功績を表彰され、其他各方面より表彰並に感謝狀を贈られてゐる、明治十九年二月生れの男盛り

で、眞に洋々たる前途に輝き現に農會代議員、家屋稅調査委員、債務調停委員、等を兼ねてゐる。

田沼町　池澤千代松氏

大正三年六月初めて消防界に入り、昭和六年四月小頭に推され、同八年四月第三部長に擧げられた氏は、溫良謙讓の人で、其の手腕力量又凡庸の器ではない、氏は又國家の干城としてシベリヤに征し、功によりて勳八等白色桐葉章を授けられてゐる。尙自治方面に關しても功勞く、多年在鄕軍人分會班長、靑年團長として地方靑年の指導に任じたる事多年、同村中堅幹部として聲望高く明治二十九年十二月二十四日生で、今後を大に期待されてゐる。

氷室村　影澤谷司氏

氏は大正九年消防界に入り、大正十年小頭、昭和三年三月第一部長に榮進し、昭和八年二月衆望に推されて組頭の要職に就いた、資性溫良、而も活潑なる手腕家で特に雅量ありて衆望を荷ふて居る、明治二十七年二月二十八日生れ、益々世故に通じ其の將來を囑目されてゐる。

新合村　齋藤恒吉氏

氏は既に村會議員、信用組合理事、同組合長、神社總代、衛生組合支部長、農會總代、同代議員、木炭組合代議員、養蠶實行組合理事、等の經歷を有し、同村の中樞人物であるが、明治二十九年初めて消防界に入りて同四十年小頭、大正六年第三部長、等を經て、昭和八年一月組頭に推されて現在に及んで居る。明治十四年六月生れ大正四年十一月には縣警察部長より十ケ年勤續賞を贈られてゐる。

佐野町　達藤嘉平氏

品行力正にして卓越せる識見を有する氏は、大正十二年十月消防界に入り、大正十四年小頭、昭和三年五月第四部長に擧げられ今日に及んでゐるが、此の間昭和八年十一月には縣消防義會佐野支部長より十ケ年勤續章を贈られ、水戸、桐生市と二回に亘りて御親閲に參列の光榮に浴してゐる、明治二十二年十一月生れ、自治方面に於ても同町の中堅幹部として囑望されてゐる。

佐野町　沼岡高之助氏

氏は適齡と共に宇都宮第五九聯隊に入營下士勤務上等兵に進みて除隊後、在鄕軍人分會幹事として分會のために盡し、其の手腕を認められたが昭和二年二月小頭を拜命して消防界に入り、昭和四年四月十七日第二部長に擧げられて現在に至つて居る、明治二十六年二月十七日生れ、同町の重要幹部として今後を期待されてゐる。

飛駒村　東田五一氏

村會議員、信用組合理事、農會督勵員、統計調査員、

衛生組合第二部副支部長、日本國防同盟會飛駒理事、敎育奬勵會理事、民政黨栃木評議員等の經歷を有し、政治產業、自治、其他の各方面に活躍せる氏は、大正七年消防界に入り、昭和四年小頭、同七年十一月第二部長に推されて今日に至つてゐる。明治三十一年五月六日生れ、溫厚篤實の中堅幹部として衆望を得てゐる。

三好村　三好村消防組

組頭龜田氏を首め、役員並に幹部は何れも衆望を荷ふ代表的人物で、和衷協同其の職能に獻身的努力を傾倒し鄕黨を泰山の安きに置いて居る、三好村消防組の將來こそ洵に囑目に値する。

飛駒村　龜山喜八氏

氏は地方稀に見る舊家にして素封家たる龜山家に明治十四年六月生れ、明治二十九年初めて消防界に入り、同四十年小頭、大正六年第三部長、昭和三年組頭に就任現在に至る、溫良謙讓の士にして部隊統率の才能に秀でて名組頭として令名あり、又村會議員、信用組合長、神社惣代、農會惣代、同代議員、同評議員、木炭組合代議員等の經歷を有し、自治に、產業に貢獻せられし功績は顯著なるもの頗る甚大にして本村の重鎭。

栃木縣足利警察署管內

足利市　殿岡利助氏

氏は足利市消防界否栃木縣下消防界の偉大なる存在であり、亦足利織物業界の盟主であつて、其の卓見、其の手腕、其の人格、共に縣下の第一人者である。消防界に於ける氏の功績を見るに、大正八年三月足利市消防組第二部長として初めて消防人となり、翌九年八月推されて組頭に就任て、爾來同市消防組のため盡瘁すること十有餘年、大正九年六部制を五部制に改め、足利市消防組表彰規定及び同救濟規程を設け、基金一萬餘圓の組合を設立して組員の慰藉救濟を計り、昭昭三年常備部を設置し、自動車喞筒一臺を購入し、昭和御大典紀念事業として縣下各市町に先して六十五基の火災報知機を完成し、上水道の竣成に盡瘁して之を助け、特に消火栓八九を設け昭和六年更に自動車喞筒一臺消火栓用水管車五臺を增設し機械器具の整備をなすと共に、組員を整理して組の合理的改造を斷行したのである、此の間一の批難なく、組員の訓練警火思想の普及に努め、足利市消防組をして縣下第一の優良消防組たらしめたるは、實に氏の力によるのである。氏は嘗に足利市及び栃木縣消防の開發に功勞あるのみならず、多年大日本消防協會代議員として我國消防界のために竭し、大日本消防協會第一次表彰に受彰し昭和九年十月　天皇陛下地方御巡幸に際し單獨賜謁の

光榮に浴したのである。足利市織物同業組合長としては、銘仙及び人絹織に就て獨自の見識と抱負の下に、其の進歩改善を圖りて貢献大なるものあり、其の他各般の公共事業に竭したる功勞亦甚大であつて、氏の信望の大なる亦故なきにあらずといはねばならぬ。

御厨町　齋藤聯治氏

大正十二年消防手を拜命、昭和五年小頭、同六年一月部長に就任せる氏は、雅量ある溫厚の紳士で、既に昭和九年一月十ヶ年勤續章を贈られてゐる、曾ては青年團會計、足利郡聯合青年團代議員、御厨青年團評議員、等を勤め、明治三十九年一月九日生れ、現に區長代理をも兼ねてゐる。

御厨町　小竹甲作氏

大正五年以來の消防人で、昭和二年には縣消防義會より十ヶ年勤續章、同七年には十五箇年勤續章を授けられたる氏は、大正十三年一月小頭に進み、同九年二月第五部長に補せられ現在に及んでゐる。明治二十八年一月十五日生れ、不惑を超え曩きには青年團支部長、貯金組合長、國勢調査委員等の經歷を有し現に農區長、產米檢査理事、區長代理、統計調査委員、納稅組合等長を兼ねてゐる。

御厨町　土屋莊次郎氏

大正十年十二月七日御厨村に町制施行に伴ひ、第七部增設と共に初代部長に推された氏は、昭和三年五月部長に擧げられて今日に及んでゐる、此の間昭和七年一月十ヶ年勤續章を、同九年一月表彰狀を、夫々縣消防義會より贈られたる外、第三回國勢調査委員、前後十ヶ年に亘りて區長を勤め、自治の振興に貢献する處多大、明治十八年出生同町の重鎭で現に衛生組合支部長、自力更生會委員等の公職を兼ね德望殊に高い。

御厨町　笠原昇一郎氏

第十二回群馬縣太田中學出身者にして大正七年中央大學政治經濟科を卒業せる氏は、大正十年消防界に入り、同十二年小頭に進み、昭和九年一月第二部長に推され、御厨町青年團北町支部顧問、產業統計調査員等の現職に在り、明治二十八年三月生れ、溫厚篤實の英才で足利紡績株式會社足利工場會計主任として實業界に雄飛の基礎を築いてゐる。

御厨町　橋本四郎氏

近衛步兵第三聯隊を上等兵となつて除隊せる後、多年在鄕軍人分會理事たりし氏は、消防人として活動すること既に二十年、縣消防義會より十ヶ年及十五ヶ年勤續章を贈られ、昭和九年三月副組頭に就任、現在に至つてゐる。明治二十二年二月生れ、溫良謹直、現に大字協議員八坂神社世話人等を兼ね前途を期待されてゐる。

御厨町　丸山善吉氏

明治三十八年以來、三十有餘年に亘る消防の功勞者で既に縣消防義會より十年、十五年、廿年、廿五年の四勤續章を贈られて居る氏は、昭和六年一月第七部長に推され現在に及んでゐる、氏は又町會議員、家屋稅調査委員として自治にも多大の努力を致して居る、明治十九年一月十五日生れ、資性溫厚、榮町に食料品店を經營し家運又隆昌を極めて居る。

御厨町　橋本求馬氏

群馬縣立太田中學校第十七回の卒業生で、後大正十年早稻田大學に政治經濟學を修め、學業を卒へたは氏、父祖の業を繼ぎ殖產興業のことに努め、產業統計調査委員農會惣代等に選ばれてゐたが、昭和四年一月消防手を拜命、同五年一月小頭に進み、翌六年一月第六部長に推されて今日に至つてゐる。資性溫厚、人望を得てゐるのは嚴父高十郎氏が同町自治の功勞者にして、消防組頭たること二十年の久しきに亘り、其の機能の、向上發揚に多大の貢献を致し、今尙ほ消防の恩人として追慕されて居るが其の薫陶に依るものと云つてよい、氏は明治三十三年十一月生れ。

御厨町　稻村清三氏

大正八年消防手を拜命、同十四年一月小頭に進み、昭和六年一月第二部長に擧げられてゐる、氏は溫厚篤實の資性に依りて衆望を荷ひ、同町福居商業組合長、其他の要職にある、消防人としては既に昭和五年一月縣義會より十ヶ年勤續章を贈られ、明治二十七年一月生れ、呉服洋品商を營み、家運益々隆昌に赴いてゐる。

御厨町　石川保二氏

群馬縣立太田中學第二十二回の卒業生で、昭和三年消防手を拜命、同五年小頭、同七年部長と累進し現在に至つてゐる、氏は又多年青年團支部長として其指導に任じてゐたが、現に足利郡南部販賣利用組合專務理事等の要位に就き、謙讓の美德は克く衆望を荷ふてゐる、明治三十八年十二月生れの少壯部長。

筑波村　飯田貞太郎氏

氏も又消防界に在りての一異彩で、師範教育を受け小學校訓導より主席訓導に進み、三十年の久しきに亘りて縣教育界に貢献し來り、昭和三年十一月一日御大典紀念に、文部大臣より教育功勞者として表彰され勳八等を賜つた人で、昭和九年四月初めて消防人となり、同時に組頭に推されてゐる、資性溫良、人格識見共に高く同村小曾根區評議員、兵事委員、村實行組合委員、自力更生委員、生產檢査理事、農業土木工事委員、等を兼ね衆望自

ら身邊に集つてゐる、流石に教育家を組頭とする同村消防組の風格は、他の追從を許さない。

菱　村　和田寅吉氏

村會議員に當選すること四期、金錢債務調停委員、織物組合部會議員、同評議員等を兼ね、自治並に産業の功勞者として中堅幹部中に重きを爲す氏は、明治四十三年消防界に入り、大正元年小頭、同十年第二部長、昭和三年四月副組頭を經て、同八年組頭に推され今日に及んでゐる、資性溫良、謙讓克く人を容るゝの雅量あり、既に縣消防義會より大正十年十一月十ケ年、昭和三年十月二十年勤續章を授けられ、今後の活動に一層の期待をかけられてゐる、明治十五年十月十五日生れ。

菱　村　横倉種三郎氏

大正三年消防手を拜命し、同七年十二月小頭に進み、昭和六年十一月以來第三部長の職に在る氏は、適齡の際世田谷野砲兵第十聯隊に入營、適任上等兵となつて除隊歸鄕、後は在鄕軍人分會評議員、組合伍長として分會の事に當り、村にありては道路工事委員等の經歷を有し、現に養蠶組合評議員、其他の公職を帶びて信望殊に高く既に大正十三年縣義會より二十ケ年勤續章を贈らつてゐる、氏は明治十八年十二月二十五日生れ、溫厚謹直の人として今後を期待されてゐる。

菱　村　小堀源次郎氏

日露の役に出征し各地に轉戰、軍功に依り勳八等瑞寶章を賜はつた氏は、大正十五年初めて消防界に入り、同時に小頭に推され、昭和七年十月衆望に依りて第二部長に就任、現在に至つてゐる、資性溫良、而も事に臨みて果斷其の處置を誤まらず、部下の信賴殊に厚く、縣より十ケ年勤續章を贈られてゐる、明治六年三月十六日生れ檀徒惣代、區長、養蠶組合長、農會總代、郡農會代議員等の要職を兼ね前途を囑目されてゐる。

毛野村　小林英夫氏

群馬縣立桐生高等染織學校卒業後、一年志願兵として野砲二十聯隊に入營、除隊後多年在鄕軍人分會長たりし氏は、大正七年小頭に推されて消防組に入り、副組頭を經て現在組頭の要職に就いてゐるが、夙に大人の風格を備へし氏は些事に拘泥せず、恩威並に行はれて環境自ら偉才集まり、始めて氏に接するもの忽ち敬慕の念を禁ずるを得ず、明治二十七年十月生れ、地方稀に見る織物大工場を經營し、機械に關する蘊蓄深く、家運益々隆昌に赴き、消防組頭の外每期の國勢調査委員、産業調査委員を兼ね此の地方の中心人物として尊敬されてゐる。

毛野村　須永銀藏氏

氏は大正六年消防手を拜命し、爾後、小頭、部長を經て、副組頭に推され、組頭小林氏を補佐して剩す處がない、眞に此の兩氏は毛野村消防組の名コンビであり、好バッテリと云ふてよい、氏も又織物業を營み機械類に趣味を有し、常に消防組の機械器具の施設に對し遺憾なきを期してゐる、明治二十六年五月生れ　年正に小林組頭よりも一年の長者であるが、資性溫良、謙讓の德を有し其の圓滿なる人格衆望を自然に呼んでゐる。

毛野村　龜山勝太郎氏

氏は資性謹嚴にして質實剛健、事に當りて熱誠にして不言實行を主義とし、前に消防界に人たりしこと七年、一時勇退したるも、衆望止み難く昭和九年四月再び推されて毛野村消防組第三部長たるは、以て部員の信望如何に大なるかを知るに足るのである、氏は常に外飾を避けて內容の充實を旨とし、消防組の改善發達と災害の警防に努め、氏の屬する部が集合所の設備、優秀瓦斯倫喞筒の配備を完成し、警火思想の普及に努め、名譽の部旗を獲得し優秀部として其の名縣下に冠たるも、氏の力による所大である、家業として米穀商を營み、家運益旺なるは、誠實なる氏の營業方針の然らしむる所である。

小俣町　大川義勇氏

氏も又機業を營み、桐生工業學校の出身者にして、大正四年初めて消防界に入り、大正七年小頭、同九年第二部長、昭和二年副組頭を經、同七年衆望を荷ひて組頭に就任し現在に及ぶ、昭和三年十一月既に縣義會より十年勤續章を贈られてゐる、氏は明治二十四年二月生れ、資性溫良、而も雅量あり現に組頭の外、工業組合惣代、織物同業組合振興會幹事等を兼ね、地方産業界の中心人物として知られてゐる。

小俣町　石井喜一郎氏

足利工業學校第五回の出身にして、同じく機業家である氏は、大正三年消防手を拜命し、同七年十二月小頭、昭和三年一月第一部長、同七年一月副組頭に擧げられ今日に至る迄消防人生活實に二十有餘年に亘り、既に本年一月六日縣より二十年勤續章を贈られて居る、資性溫厚篤實、而も俊敏の手腕力量を以て組頭を補佐すること間然たる處なし、曾ては町會議員として自治の振興に盡し現に副組頭の外、小俣町輸出織物會々長、人絹織物工業組合幹事等を兼ね、地方産業の中堅人物として重きを爲してゐる、大に今後の活動を期待されてゐる、明治二十八年十月五日生れ。

小俣町　須藤廣吉氏

氏は大正八年消防界に入り、間もなく病氣のため一時引退したが、大正十二年衆の要請により再び消防人となり、昭和四年小頭、同七年十二月第一部長に推擧され今

日に至つて居る、人に接して謙讓の德を有するも、事に臨みて果斷其の處置を誤まらず、部下の統率宜しきを得て、名部長の聞えあり、明治三十一年二月生れの少壯幹部で、昭和九年九月一日縣より十年勤續章を贈られ、其の經營する輸出織物製造工場も益々隆昌を極めてゐる。

小俣町　金子巳之吉氏

宇都宮第五十九聯隊に兵役の義務を卒へた氏は、昭和二年消防手を拜命、同六年小頭に進み、同八年第二部長に補され現在に至り、曩きに在鄕軍人分會班長、並に役員として其の名を擧げ、同字中堅幹部として信望尤も高い、明治二十六年一月四日生れ、精米業及び雜貨商を營み前途を待望されてゐる。

小俣町　伊藤才次郎氏

流石にに足利織物の本場地方なので、同町の消防組は機業經營者に依りて幹部が組織されてゐる、氏も亦其の一人で、大正十一年消防界に入り、同十二年小頭に進み昭和七年十二月第三部長に推され、既に昭和七年一月縣消防義會より十年勤續章を贈られてゐる、資性溫厚、而も犧牲的精神に富むでゐるので、隣閭の信頼厚く、明治二十八年八月二十三日生れ、消防部長の外陪審員、納稅組合理事等を兼ねてゐる。

小俣町　香山次助氏

氏は適齡と共に近衛步兵第三聯隊に入營、上等兵となつて除隊、歸鄕後は青年團支部長、在鄕軍人分會評議員として活動すること多年、現に養蠶組合副組合長を兼ね消防組へは大正六年初めて加はり、同八年小頭に進み、昭和八年十二月以來部長に就任してゐる、明治二十六年十月二十四日生れ、溫厚篤實、同町中堅幹部として信望を得てゐる。

山邊村　小此木久七氏

往年のシベリヤ事變に出征して赫々の武勳を樹て、勳八等白色桐葉章を授けられた氏は、水戸工兵大隊を上等兵に進みて除隊、歸鄕後專ら履物商を營むで居たが、大正十二年初めて消防界に入り、昭和五年十二月小頭、同八年十二月第一部長に推されて現在に及び、昭和九年既に縣議會より十年勤續章を贈られてゐる、溫良の資性の裡に果敢の英氣を藏し衆望を荷ふて居る、明治三十年八月十六日生。

山邊村　松葉源太郎氏

氏も大正八年シベリヤ事變出征の勇士で、軍功に依り勳八等白色桐葉章を授けられて居る、宇都宮第五十九聯隊に入營し步兵上等兵となつて除隊、歸鄕後は青年團支部長、在鄕軍人分會班長、顧問として功績を擧げ同村中堅幹部の一人で、大正四年初めて消防界に入り、同七年兵役のため一時引退したが、同十一年再び衆望に迎へられて消防人となり、昭和六年小頭に推され、同十一年第四部長に補せられ今日に至つて居る、明治三十一年三月八日生れ、溫厚篤實を以て聞えて居る。

山邊村　山浦富藏氏

燃料界の王座を占むる三ツ輪印煉炭の製造元及び木炭卸商を營む氏は、大正十一年消防手を拜命、昭和二年小頭、同七年第五部長、昭和九年副組頭に累進し、昭和八年には縣消防義會より十年勤續章を贈られてゐる、氏は明治三十年八月生雅良豐かな溫良の紳士で、力量識見共に高く、消防副組頭の外種々自治體の要職を兼ね大に今後を期待されて居る。

山邊村　河內吉太郎氏

氏も又同村中堅幹部の一人で、父祖の業白米商を繼ぎ家運愈々隆昌を極めて居る、明治二十九年四月十三日生春秋に富み、消防界には大正七年消防手として入り、昭和四年一月小頭、同九年第五部長に推され、既に縣義會より十五ケ年勤續章を贈られて居る、資性極めて溫厚衆望殊に高い。

山邊村　大關幸一郎氏

消防人生活正に二十年に垂んとする氏は、既に縣義會より十年、十五年勤續章を引續き贈られて居る、明治三十二年一月十七日生、溫良篤實の士の大正四年消防手を拜命、昭和六年小頭、同八年一月部長に就任、曾ては青年團支部長を永年勤め、現に消防部長の外醬油組合支部長を兼ね、前途を囑目されて居る。

山邊村　前田敏一郎氏

習志野騎兵第十四聯隊出身の氏は、除隊後在鄕軍人分會幹部、並に班長として多年努力し、大正五年消防手拜命、昭和五年小頭、同九年第五部長に擧げられ、縣義會より二回に亘り十年、十五年勤續章を贈られてゐる、溫良の資、勤直の風共に鄕黨の信頼を得て、其の前途を待望されて居る、明治三十二年五月生。

山邊村　田島傳次郎氏

此の地方機業界の重鎭たる氏は、大正四年初めて消防界に入り、大正七年小頭に推され、昭和五年第二部長に進み、同八年四月衆望を荷ふて組頭の要職に就き現在に至り、曩きに縣義會より十年、十五年勤續章を夫々授けられて居る、資性溫良、恭謙讓の美德を具へ、而も人を容るゝの雅量あり、手腕、識見の卓越せる素より凡庸の器ではない、現に消防組頭の外織物業組合部會議員、銘仙會幹事を兼ね、產業界にも重きを爲して居る、明治三十一年五月二十三日生、其の經營する織物工場は益々隆盛に赴き村民は、氏の今後に多大の期待をかけて居る。

山邊村　須永傳次郎氏

氏は消防人生活二十三年の久しきに亘る功勞者で、既に縣義會より十年、十五年、廿年と三度勤續章を贈られて居る。即ち消防手たること十餘年の後昭和四年小頭に推され、同六年十二月部長に擧げられて現在に及んで居る、從て消防の實務に精通し、其の行動は衆の模範たるに足る、資性又溫良、克く部下を統率して名部長の名高く、曾ては青年團支部長たりしこと多年、現に消防部長の外競馬場地主代表をして居村の繁榮に資し、同地方中堅幹部として衆望殊に高い。嚴父源三郎氏は實行組合長神社總代、會計等の要位にあるが年漸く老いて氏が主として其の實務を代理して居る、氏は明治二十六年十月六日生、既に不惑の歳を超えて世故にたけ、非凡なる實務家として重きを爲して居る。

北鄕村　眞尾新吉氏

氏は大正五年消防界に入り、同六年小頭となり、同七年第二部長に推され、十四年一時引退したが、昭和九年衆望に依り再び消防人となり副組頭の要位に就き、活淡なる手腕家とし組頭を補佐して居る氏は、又斯界稀に見る素行方正の士で、村民の信賴厚く現に同村議員、銘仙會絞色研究會委員、宣傳委員等を兼ねて居る、其經營する織物工場は業績年と共に振ひ、この地實業界の中堅人物であり、自治方面の功勞者でもある、明治二十五年五月生其の前途大に期待されて居る。

三和村　殿岡正作氏

氏も又織物工場を經營し、足利織物工場懇話會理事、三和工場會副會長として斯界に重きを爲し、曩きには青年團支部長、在鄕軍人分會長として地方青年指導訓育に任じ、現に信用組合理事、人絹織物工業組合理事、土木委員等を兼ね、村會議員に當選すること前後四期に及び自治に對する功績も頗る顯著だ、大正八年消防界に出馬し、幾許もなく小頭に進み、第四部長を勤むること五ケ年、昭和五年十二月一時斯界を引退したが、衆望もだし難く昭和九年二月其の要請を容れて再び消防人となり、組頭として之を統卒して居る、明治三十年五月八日生れ正に不惑に達せんとし、資性溫厚、謙讓の美を具へ而も雅量あり、人物識見の卓越せる到底他の追從を許さない

梁田町　阿部一一郎氏

清廉高潔、各種社會事業には率先淨財を投じて之を後援する稀に見る篤行家で、鄕黨に自ら衆望を荷ひて一大勢力を爲す中樞人物である氏は、明治四十三年消防手拜命以來累進して組頭に推され、久しきに亘る消防界の功績は酬られて、昭和四年宮城前に於ける全國消防組頭御親閲を首め、同年十一月水戸市、同九年桐生市に於ける御親閲等に際し悉く參列の光榮に浴し、更に遡りて同五月總裁宮殿下御奉戴式には市郡代表として參列し、記念章及御紋章附御菓子を下賜せられ、縣義會よりは功績章及銀盃を贈られ、此の外警察電話架設に方り金二百五圓寄附の感謝狀、及び各種社會公共事業に寄附、並に盡瘁せる感謝狀及び記念品等を授與されて居ること枚擧に遑がない、氏は明治二十四年二月生れ、正に世故に長けたる練達識見の士、として今後の活躍に町民は一層の期待をかけて居る。

梁田村　石川定治氏

舊幕時代の勤役、苗字帶刀御免の名門石川家の養嗣子となつた氏は、群馬縣邑東郡小泉町長野善藏氏の二男に生れ、本年漸く三十五歳の壯年者で、大正十一年消防手を拜命、小頭、部長を經て現に副組頭にさ推れ、克く阿部組頭を補佐して同町消防組の名聲をあげて居る、資性明敏謹直極めて職務に熱誠なので益々衆望を得、昭和九年十月桐生市に於ける御親閲には參列の光榮に浴して居る。養父は數期に亘る村會議員で、現に其の職に在る。

三重村　穴原彌助氏

氏は野砲兵第十八聯隊出身の上等兵で、多年在鄕軍人分會長として其の訓練に方り、數期に亘る村會議員の外郡會議員、郡農會長、縣農會議員に當選し、現に村會議員を勤めて居る、消防界へは昭和八年初めて入り、直ちに組頭となつた人で、明治十九年十一月生れ、熟達鍛練、頭腦明晰、清快なる資性と快刀亂麻の手腕とは、衆の喝望する處となり、其の經營する輸出織物業の隆昌を俟つて、其の前途を囑望されて居る。

三重村　牛窪武男氏

熟慮斷行、夙に其の秀才を認められた氏は、青年團支部長、其他の要職に在つたが、大正十年消防手を拜命、小頭を經て現に第一部長に擧げられ、縣義會より十年勤續章を贈られて居る、明治三十二年生れの少壯部長で、縣立足利工業學校に學び、大規模の輸出織物工場を經營して居る。

三重村　穴原祐司氏

由來兩毛の地種々の特產品を出して居るが、氏は大正十三年輸出織物業より轉じて、ネクタイ專門製織工場を草創し優良なる成績を擧げてゐる、堂々たる風丰を具へ英敏なる頭腦と、事に處するに熱誠とは、衆望に副ひて此の地方の一重鎭となつた氏は、明治二十七年十二月生れの壯年盛りで、曾て青年團支部長として青年指導に任じたが、大正九年一月消防手を拜命、昭和四年小頭に進み、同九年部長に推されて現在に至り、去る昭和五年一月には縣義會より十年勤續者として表彰されて居る。

三重村　小林茅之助氏

氏は本村小林品吉氏の三男に生れ、天資淳厚怜悧、懇望せられて同苗作兵衛氏の養嗣なつた、前に青年團副支部長に擧げられ、青年の指導陶冶と地方文化の發達に竭して貢獻大なるものがあり、大正二年以來三重村消防界に活躍し小頭を經て第四部長に推され、災害の警防に、施設の改善整備に、献身的努力をなすこと二十有餘年、第四部をして二十年無火災の記錄を有せしむるも、氏の無火災の理想實現に精進したるの功與つて大なる力があるのである。當局より二十年勤續の表彰を受け、昭和九年十月相生市に於ける御親閲に參列の光榮を浴したるも氏の熱誠の致すところである。

三重村　故岩川竹太郎氏

十は恬淡清廉、任俠の念厚く德望家として高名である家業たる織物製造の改良工夫に努めて斯業の開發を計り區長、區評議員として部民を啓發し、三重村消防組第二部長として消防の改善發達に盡し、今日の同組の基礎を造り、社會公共のため盡瘁して功勞顯著なるものあり、佛道に歸依し淨林寺本堂改築を發起し、建築委員となりて之を成就し、永代院號居士の稱號を許され、貧困者救助救濟其の他の德行枚擧に遑なく、足利平和檢番を創立し之れが組長となりて信望を博したのである。不幸五十一歳の働き盛にて長逝せらるゝや、隣閭痛惜し、今日に至るも其の德を慕ひ、墓前に禮拜を怠らざるもの多きを數へて居るのである。

三重村　岩川龜太郎氏

氏は資性濶達義氣に富み、德望家として鄉黨の敬慕措かざる先考を髣髴せしむるものがある、騎兵第十三聯隊にありて兵役を了し、除隊後在鄉軍人分會役員、青年團會計たりしこと多年にして令名あり、大正十二年三重村消防手を拜命し、昭和八年小頭に擧げられ、推されて第二部長の要職に就き、組の向上發展に獻身的努力を盡し當局より記念品を贈られ又表彰せられしこと一再ならざるを以て見ても、其の功績の大なるを知るべく、名部長として好評があり、家業たる織物業を勵み家運日に旺である。

山前村　大野初三郎氏

曾ては每期の村會議員として村政に重きを爲し、今又消防最高幹部として功績顯著なる氏は、染色業界の權威として知られ、現に消防組頭の外村會議員を兼ねて居る氏は又社會公共事業に貢獻する所勘なからず、隣閭の信賴尤も厚い、資性醇厚、物慾に淡恬にして些の圭角なく圓滿なる人格は村民の敬慕する處で今後の發展を期待されて居る、齡四十七歳この地方の重鎭である。

山前村　武藤勇吉氏

崇高なる犧牲的精神に富む氏は、消防人として典型的な人で、聲望殊に高く、明治二十九年三月生れ正に不惑の年に達し居るが、適齡と共に步兵第五十九聯隊に入營し、歸鄉後は在鄉軍人分會幹事たりしこと多年、消防組へは大正三年初めて入り、幾程もなく小頭に進み、第二部長に推擧せられ、更に衆望に推されて副組頭に就任、今日に至つて居る、氏は桐生街道の要路に堂々たる建築物を建て勇屋料理店を經營し此の方面にも聲望を擔つて居る。

山前村　清水治三郎氏

氏は父君伴氏の傳統を承け、溫厚にして篤實任俠心に富み、大正八年山前村消防組消防手を拜命し、昭和四年小頭に推され、同七年第四部長の要職に就き、鋭意消防の改善發達に盡し、殊に無火災を理想として之れが實現に力め、事に當りて熱誠不言實行、山前村消防組が數回に亘り無火災表彰を受けたるも、氏の力に負ふ所極めて大である、名部頭として信望厚く、其の將來を囑望されつゝある亦故なしといはねばならぬ。

山前村　田野源七氏

步兵第五十九聯隊にありて軍務に精勵し、西伯利亞事件に出動して戰功により勳八等に叙せられ、白色桐葉章を下賜せられたる氏は、除隊後在鄉軍事分會にありて活躍し、昭和八年三月帝國在鄉軍人會長鈴木莊六大將より賞狀を授與せられ、又青年團博愛義團幹事たること多年洪水の際人命救助をなし表彰せらるゝ等の德行少なからず、大正十年十二月山前村消防組消防手を拜命し、後小頭に擧げられ第一部長に推され、山前村警防に竭すこと十有餘年、功勞顯著にして表彰せられしこと數次、名部長として其の名を謳はれて居るのである。

葉鹿町　大屋兵七氏

天資剛快、穩健なる思想の持主で、曾ては青年團長として其の指導に任じ、現に株式會社葉鹿織物市場取締役野州西部木炭同屋組合評議員、として地方產業の振興に寄與すること多大、消防事業に對しては、諸設備の改善と、消防精神の皷吹に努め、名組頭として仰がれてゐる當年四十歳、代々米穀商を營み家運益々隆昌、雅趣を謠曲、弓道、圍碁等に需め、此の地方の中心人物として自他共に許されて居る。

葉鹿村　粕瀨重壽氏

曾て青年團長として其の指導に任じ、或は實行組合長として地方產業の發達に力を致した氏は、大正八年消防手を拜命、後小頭を經て、現在第三部長に推されて居る氏は部下の統率に妙を得、一糸紊れざる統制は他の模範

とするに足りる、氏は本年漸く三十九歳其の經營する撚糸業は年毎に隆昌を極むる等、有ゆる方面に秀たる手腕を有する氏も又凡庸の器ではない。

栃木縣鹿沼警察署管内

鹿沼町　山本仁吉氏

氏は趣味の人で、寶生流の謡曲を能くする外、書畫に親み、彩管を執つても既に素人の域を脱して居る、曾て早稲田大學法科に學び、法學士の學位を得、現に消防組頭町會議員等を兼ね、議政壇上辯論の雄でもある。明治二十年生れで氏は醬油釀造を營み其の貴族的な風格は、町民尊敬の的となつて居る。

北押原村　鈴木孝二郎氏

舊幕時代勤役、苗字帶刀を許された傳統的の名家に生れた氏は、宇都宮農學校の出身者であつて、人格高潔貴公子の風格を具へ、現に村會議員、消防組頭、農會副會長、學務委員、等の要職を兼ねて居る、明治三十四年生れの少壯組頭で、部下の信頼極めて厚い、祖父要藏氏が本邦紡績界の泰斗として、當時權威並ぶものなかつたことは餘りに周知の事實である。

西大芦村　古澤傳七氏

適齢と共に歩兵第五十九聯隊に入營し、伍長に進みて除隊せる氏は、多年在郷軍人分會長、班長及會長として其の訓練に任じ、大正十年以來村會議員に當選し、當時の消防組頭を援けて、機械器具、服裝の改善、統一、警備費豫算の協賛に努め、昭和八年衆望を擔ひて組頭に就任するや、組員の統制、規律、訓練の徹底に努力し、或は經濟界現下の不況に鑑みて、消防費の全額村費負擔を說き、自ら瓦斯倫喞筒三臺を寄附して、斯道の向上發展に貢献せる功勞を認められ、同年十一月二十九日縣消防義會鹿沼支部長より表彰狀を授けられて居る。氏は又山村の疲弊救濟に專念し、郵便局長、製板材、木炭製造業を兼營して居るので、常に居村民五十餘名を使用して困頓者に職業を與へ、不斷の活動と仁俠の風とは、信望自然に氏の一身に集まり、現に消防組頭の外、農會長、青年聯合會長、不動植林株式會社副社長、上都賀畜産組合長を兼ね、自治並に殖産興業等に寄與すること至大である、氏は明治二十七年生れの最壯年期に達し、村民は今後の活動に絶大の期待をもつて居る。

粟野町　福田七右衛門氏

氏は稀に見る消防熱心家にして、明治三十二年十二月落合幸作氏の後を承けて粟野町消防組頭に就任し、大正十年前組頭に落合氏に職を讓りて退職したるも、越えて同十四年衆望止み難く再び組頭となりて今日に及び、同

年九月瓦斯倫喞筒一臺に購入したるを初めとし、昭和三年更に二臺を加へ、水利の充實を圖りて昭和六年小學校庭に貯水池を設け、更に同九年二月　皇太子殿下御降誕記念事業として用水路を新設し、鐵骨望樓の完成、器庫夜警詰所の改造新設を行ふ等、施設の改善充實に盡し、大正十二年私財を投じ組に組旗を寄贈して消防精神の振興に資し、訓練を勵行して組員の技能及び素質の向上を策し、消防後援會の設置を慫慂して組員の慰藉救濟並に施設改善に資する等、熱誠其の職に盡瘁し、組員皆氏を德とし一致協力統制一糸紊れず、今日の粟野町消防組の發展を見るに至らしめたのである。氏の功績の顯著なるにより數次に亘り縣知事其の他より表彰せられた。

加蘇村　中沼福壽郎氏

中村家は百數十年連綿たる豪家であつて、祖先より引續き自家所有山より得る原料を以て石灰を製造し、廣く各縣に販路を有し其信用厚きものがあり、氏の先考鎭八郎氏は村會議員、村收入役、其の他の名譽職にありて自治の功勞者として知られ、鄕黨の信望厚かりし知名の士であつた、此舊家に生れ、此の名士を父とする氏は自ら儀容あり、溫厚にして大度將に將たるの器である。近衛工兵大隊にありて兵役に服し、精勵して陸軍工兵伍長に拔擢せられ、除隊後在鄕軍人分會長たること十有餘年、村會議員として自治に奔走し、消防組頭として村の警防に獻身的努力を拂ひ、部下統率に秀で聲明赫々として居る。

加蘇村　檀淵憲太郎氏

氏の先考新一郎氏は溫厚篤實にして仁慈に富み、信用極めて厚かりしが、氏亦父君の傳統を承け沈着にして思慮深く、事に當りて熱誠、父君の業を繼ぎ農業と材木商を兼ね營み、製材工場を有し信用厚く、家運隆昌を極めて居る、若くして騎兵第十三聯隊にありて軍務に服し、格勤精勵を以て聞え、下士勤務上等兵に擧げられ、除隊後在鄕軍人分會副長たること多年、村會議員其の他の公職にありて村政に竭し、社會公共のため盡瘁して功勞多く、大正七年十二月加蘇村消防組小頭を拜命し、後推されて副組頭となり、身を以て衆を率ひ獻身的努力を以て職に竭し組員の心服を受け、統制一糸紊れざるものあるは以て偉となすべきである。

菊澤村　宇賀神孫作氏

氏は明治二十八年生れ所澤航空隊に入營上等兵に進級除隊後は在鄕軍人分會長、青年團支部長、國勢調査員、統計調査員、郡農會議員等の要職にありて貢献したる經歷を有し、現に村會議員として村政に參與、又本村消防組頭として設備の改善、紀律訓練、警火思想の普及に、

組員を督勵努力せらるゝ功績は頗る多く、隣閭の信望誠に篤く、資性淳厚、圓熟せる人格者にして素封家なり。因に先考平吉氏は區長其の他の要職にありて貢献不尠篤行家の譽れ高かりし人なりき。

菊澤村　大塚常時氏

農會長、同評議員、或は上都賀郡大麻競技會を開催、本郡農事改良に盡力、又消防組部長、或は組頭として實に二十有數年に亘り各方面に貢献頗る甚大なりし、勳八等吉太郎氏を父に持ち、明治三十四年生れの氏は曾ては青年團幹事として青年指導の任にあり、大正十五年消防界に入り、爾來設備の改善に、災害警防に力を致し、瓦斯倫喞筒購入に盡力せられし功績は周知の事實にして、實に名部長の定評あり、農會總代、統計調査員、衛生組合長を兼ね淳朴精勵の士にして、地方の豪農を以て唱る

西方村　中新井和一郎氏

大正四年十一月初めて消防界の人となり、爾來累進昭和五年組頭となり、縣消防義會鹿沼支部幹事とし活躍せらる、曾ては縣義會より銀盃を贈られ表彰を受く、現に村會議員、學務委員及青年團長としての榮職にあり、殊に青年の指導に在りては既に定評あり縣下の模範青年團長として重きをなす、氏の家業は酒造を營み、若くして東都に學び早大出身四十六歳の男盛にして、副組頭荒川氏の鋭俊なると組んで消防組は益々堅實なる發達を遂ぐる事を信ず、因に荒川氏は村主席書記として勤續十數年或は在郷軍人分會常務理事とし村内に信望厚き有爲の士たり。

板荷村　渡邊保平氏

祖先爾來人參奉行所直屬にて、同地方一帶に藥種人參の栽培を爲さしめ其の製造を業とし、御種日光人參金光社の名聲は全國に赫々として成功、今は之を廢業す、父君は卯太郎氏と稱し、村會議員、學務委員、等の要職にありて貢献、剛直清廉の士にして本村の利け者なり。氏は明治二十三年其の長男に生る、縣立宇都宮商業學校第二回卒業の秀才、天資聰明、圓熟せる人格者にして商機を捕る甚だ敏、氏に至りて材木商を經營し信用益篤く商勢頻に振ふ、現に消防組頭として斯界の進歩發達に熱烈なる努力家にして、信用組合理事、森林組合幹事を兼ね地方稀に見る素封家なり。

北押原村　高橋金三郎氏

曾ては近歩第三聯隊に入營上等兵に進級、除隊後は在郷軍人分會理事、同副會長、同分會長及青年團副團長たる事多年、現は農會評議員、學務委員、消防組副組頭の要職にありて貢献し、就中消防に係しては明治四十四年消防手拜命、爾來器具機械の改善に、紀律訓練に、一意専心献身的努力は其の勳績偉大にして信望殊に篤し、明治二十二年生の沈毅雅量を有し、而も周密なる頭腦の所有者なり、因に嚴父辨吉氏は七十五歳の高齢を以て尚壯者を凌ぐの强健家也。

南押原村　藤江久吉氏

溫良質實、信望篤き濱吉氏を父に持ち、曾ては近歩第三聯隊に入營、歸郷後は在郷軍人分會役員たる事多年、又國勢調査員數回、現に消防組頭の榮職にありて斯界の向上發達に貢献、又村會議員數期、學務委員四期、村農會評議員、信用組合幹事等々有ゆる樞要の公職を兼ね、警備に、自治に、産業に不斷の活動は其功績顯著なるもの甚だ多し、天資潤達、仁俠に富み本村の利けものにして、明治二十一年生の活動盛なり。

南摩村　牛久甚左衛門氏

天資磊落、人に接するに障壁なく初對面に於て恰も舊知の感あらしめ、極めて男性的なるも一般唱る豪放散漫にあらず、頗る緻密なる頭腦を有する氏は、明治二十四年生、曾て野砲第十四聯隊に入營兵役の義務を了し、又信用組合專務理事として其の敏腕を振ひ、稀に見る好成績を收め、現に消防組頭として信頼益々篤く、農會惣代を兼ね本村中堅人物にして地方の豪農なり、因に先考孫一氏は村會議員、其他名譽要職にありて貢献し溫厚篤實人のなりき。

栃木縣烏山警察署管内

烏山町　荒井貞次郎氏

大日本武德會烏山支部評議員、縣消防義會烏山支部副支部長、地方警備委員、等の要職にある氏は、大正四年十一月消防手を拜命し、大正六年小頭、同十三年第四部長と累進して、昭和四年九月十六日衆望を荷ひ組頭に就任し現在に至つて居る。資性溫良、力量識見共に高く、部下の信頼殊に高い、氏は明治十五年十一月二日生れの男盛りで大に今後を期待されて居る。

境村　齋藤松壽氏

前に村助役、村會議員、村農會長、信用組合專務理事として多年公共の爲めに盡瘁し、現境村々長として聲名赫々たる氏は、練達堪能人格崇高にして、村民の尊敬して措かざる所である。夙に消防の重大性に鑑み之れが改善發達に力め、組頭として自ら陣頭に立ちて衆を指揮指導し、機械器具の整備、消防技能の進歩に力を致すと共に、消防精神の振興と警火思想の普及徹底を期し、努力精勵組員の心服村民の信頼共に絶大である。

下江川村　齋藤秀雄氏

兵役を終りて、在郷軍人分會理事として多年共の衝に

あつた氏は大正二年消防手を拜命、大正九年第八部長に擧げられ、昭和二年副組頭、同八年三月組頭に就任、果斷なる力量の人で、既に縣消防義會より十年勤續章を授けられ、明治二十九年一月廿日生れ正に不惑に達し衆望を擔ふて居る。

栃木縣喜連川警察署管内

氏家町　渡邊富八氏

氏家町に堂々たる洋品雜貨商を營み信用極めて厚く、手腕人格識見共に高き氏は、幾多公職にありて其の手腕を揮ひて信望を博し、町内の重きに置かれて居る。氏が社會公共事業に竭したる功勞は極めて大なるものがあるが、中にも消防に關しては、氏家町消防組頭の要職にありて、組織の改善、機械器具の整備に努力し、組員の消防技能の進歩素質の向上を圖り、警火思想の普及に盡して寧日なく、氏家町消防組が優良消防組として旗冠を授與せられ、又其の第九部が模範部として縣消防義會より表彰せられたるも、氏の指導と努力の賜なりといはれて居る。消防に關する氏の如何に大なるかは數次表彰せられたるを以て之を知るべく、組員を犒ふに厚く指導懇切なる氏は、組員より父兄の如く畏敬せられ、名組頭と仰がれて居るのである。

氏家町　粕谷仙吉氏

氏は大正十年十二月消防手を拜命し、同十三年小頭に進み、昭和五年十二月第十部長に推され、同八年一月十六日副組頭に就任して今日に至つて居る。氏も兵役を終りて在鄉軍人分會長として其の訓練に任じたこと多年、時の帝國在鄉軍人會長一戸兵衛閣下より表彰狀を贈られて居る、明治二十七年二月十五日生れ、資性溫良にして手腕識見共に秀で、信用組合理事を兼ね米穀商を營むで居る。

上江川村　加藤賢重氏

青年團長、第一小學校改築委員、家屋稅調査員等の經歷を有する氏は大正五年消防手を拜命、昭和五年小頭に進み、同七年一躍して副組頭に就任し、既に大正十五年縣消防義會より十年勤續章を贈られて居る。明治三十一年五月生れ、溫良の天資と、克く人を容るゝ雅量とは、衆望殊に厚く今後を期待されて居る。

上江川村　森長四郎氏

資性沈着果斷克く事を處する氏は、大正二年消防手を拜命し、大正九年小頭に推され、昭和三年第三部長に擧げられ、同九年十月組頭に就任して現在に至つて居る、氏は自治殖産業にも功勞多く、曾ては青年團長、煙草耕作部長、改良組合長、第二校同窓會長、等の經歷を有し現に村會議員、農會總代、同會議員、道路改修委員長等の要職を兼ねて居る。明治二十四年生れ、圓熟せる人格の所有者で、既に消防人としては昭和八年縣議會より二十年勤續章を贈られて居る。

北高根澤村　岡本正雄氏

明治二十九年を以て由緒ある舊家にして素封家たる岡本家に生れたる氏は、資性溫厚圓熟せる手腕家として知らる。若くして縣立大田原中學校に學びて秀才を以て聞え、大正十四年消防人となり、爾來北高根澤村消防組小頭、第九部長、副組頭を歷任し、昭和九年衆望により組頭の要職に就き、鋭意消防改善發達に力めて功績大なるものあり、一千人に近き大部隊を統率するに寛嚴度を得一糸紊るゝなき手腕、到底凡庸ならず、村會議員としては熟慮斷行自治に貢獻する所少なからず、其將來に大なる村民の囑望がかけられて居る、父君龍藏氏は自治の功勞者であり、六十歳の高齡にて矍鑠父子共に村民の瞻望する所である。

北高根澤村　加藤喜一氏

資性淡快淸廉の士縣立宇都宮農學校出身の英才であつて、一年志願兵として歩兵第五十九聯隊に入り、格勤精勵陸軍歩兵中尉に昇進、北高根澤在鄉軍人分會長、鹽谷郡在鄉軍人聯合分會長、鹽谷郡將校會長として令名あり大正十三年消防界に人となり、小頭、第十六部長を歷任し、與望を負ふて北高根澤村消防組副組頭の職にあり、克く組頭を補佐し組の向上發展に竭すと共に、一千名に近き大部隊の統制に當り非凡の手腕發揮し、殊に部下を愛すると共に紀律の肅正を期し信望甚だ厚く、自治の功勞亦大にして將來の村長消防組頭を以て目せられて居る

熟田村　柄木田平氏

氏は若くして東京に遊學し駒場農科大學に學び、朝鮮總督府に農業技手として奉職し、歸鄉後大正二年四月熟田村消防組消防手を拜命し、三ヶ月にして小頭に昇進し昭和七年十一月副組頭に就任し、二十有餘年一日の如く粉骨碎身其の職に竭し、有志の間を歷說し自動車喞筒を設備し、木造火之見の危險防止と恒久的經濟を目的として全村に鐵骨火之見櫓を完成する等、熱誠を以て施設の改善を圖り、講習會を開き、或は私財を投じ冊子を刊行頒布して、組員の法規に關する智識及技能を啓發し、消防精神の涵養に盡瘁し、一般村民の警火思想の普及を圖る等、其の功勞顯著なるものあり、其の消防に熱誠なること他の追從を許さず、其の名縣下に轟いて居るのである。氏の功勞に對しては縣消防義會其の他より表彰せられしこと一再に止らず、就中消防人としての最高名與たる大日本消防協會よりの表彰を受けるは、栃木縣下消防

小頭としては蓋氏を以て嚆矢とするであらう。

栃木縣矢板警察署管内

大宮村　小島唯秋氏

大勢の着眼に敏にして、堂々たる風貌の裡に溫情溢るゝものある氏は、明治二十四年生れ、適齢と共に騎兵第十八聯隊に入營衛生隊に編入せられ、歸鄕後は在鄕軍人分會副會長として其の衝に方り、村會議員として村政に貢献する處多大、代々醬油釀造業及び土木建築請負業を營み機に臨み變に應じて着々其の業績を收めて居る。特に各種の社會事業には卒先淨財を投じて之を援け、而も其の名の出づるを好まず、玲瓏たる人格は鄕黨の信頼期せずして注がれ、所謂積善の家に餘慶の例に漏れず家運益々隆昌を極めて居る、消防組には昭和十年一月組頭として推擧せられ將來氏の手腕に俟つべきもの頗る多い。

栃木縣上三川警察署管内

本鄕村　藤田彦一郎氏

明治四十一年消防手拜命以來消防人生活正に三十年の久しきに亘る氏は、同村消防組の礎石を爲し、昭和四年衆望に推されて組頭に就任し、現在に至るの間其の技術訓練に、或は技能の向上に不斷の努力を傾け、消防精神作興其他に貢献せる處尠なからず、其の功績酬ひられて功績章勤功章と共に幾多の表彰狀を授けられ、更に自治殖産方面にありては村會議員、區長、國勢調査員の外現に統計調査員、蠶業組合長、家屋稅調査員、信用販賣購買組合支部長等を兼ね、農村振興に全力を傾倒し居村の衆望を一身に集めて居る。氏は明治九年生れ既に老境に入つたが剛健の質は壯者を凌ぐものがある。

本鄕村　小口隆次氏

縣立眞岡中學出身の氏は、多年學務委員として地方文化の向上に努め、現に村會議員、消防副組頭として村政の樞機に參與し、殊に消防に關しては鋭意其の改善に努め、其の功績顯著にして鄕黨の信頼殊に厚い。氏は天資恬淡、隣愍の情深き農村の好紳士で、嚴父彌四郎氏は區長、其他の要職に在り溫厚なる陰德家を以て知られ、この地方稀に見る素封家である。

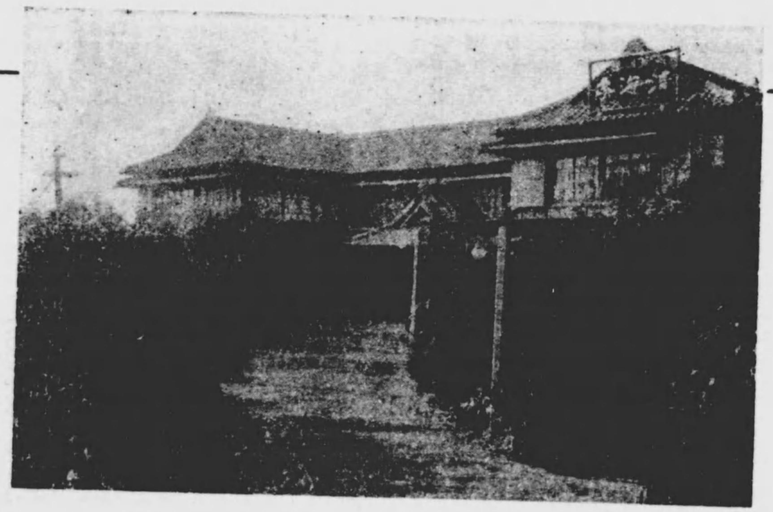
小山警察署管内・其ノ二

穗積村　茂呂明氏

佐野中學校出身の氏は、大正六年消防界に入り、昭和四年四月小頭に進み、同九年一月部長に推されて現在に至つて居るが思想極めて堅實、其の優れたる識見と相俟ちて衆望益々厚く、或は產業受檢組合理事たりしこと多年現に農區長を兼ね、村内中堅幹部として重きをなして居る、明治廿九年九月十二日生れ、消防に對しても機械器具の改善に力を致した功績は頗る顯著である。

穗積村　中島信次氏

大正三年步兵第五十九聯隊に一年志願兵として入營した氏は、除隊後在鄕軍人分會役員及び青年團支部長として其の衝に方りて手腕を認められ、昭和八年二月消防部長に推擧されて今日に及んでゐる。氏が初めて消防人生活に入つたのは大正二年二月で、爾來廿有餘年の久しきに及び、既に縣義會より昭和八年十二月廿年勤續章を贈られて居る。明治廿七年十月生れの氏は自治方面にも要位を占めて功績あり前途を囑目される精農家である。



房州小湊　旅館　清海家別館

陸軍省
海軍省
消防署
諸官衙

御用達

消防用布ホース專門製作並ニ販賣

合資會社

東京ホース製作所

東京市澁谷區幡ヶ谷原町八〇六

電話　四谷（35）四八五六番
電信略號（ト）又ハ（トホ）

出張所
大阪市西區新町南道リ五丁目六
電話　新町　四一二一番

會社ノ沿革

當社ハ最初個人ノ經營ニ依リ明治二十八年頃ノ創立ニシテ創立ノ當時ハ我國機械工業ノ幼稚ナリシ頃トテ本製織機ニテ製作ヲナシタルモノナリ然シテ我國ノ發達ト共ニ消防ニ工業ニ布ホースノ用途モ廣ク需要旺盛トナリタルニ依リ幼稚ナル本製機ヲ全廢シ電氣動力ノ優良織機ヲ据付ケ且ツ個人經營ヨリ會社經營ニ改メ優良ホースノ製作ニ成功シ往年盛ンナリシ輸入ホースヲ日本領土ヨリ影ヲ潛メシメタルモノナリ

重ナル納入先

海軍省、陸軍省、警視廳、諸官衙、全國各地ノ公私ノ消防組、等

製品ト製産力

製品ハ實際使用サルヽ各位ノ意見ヲ尊重シ不斷ノ研究ト改善ヲ以テ優良ホースノ製作ニ完璧ヲ期シ居ルモノナリ、一ケ年ノ製産數約六十萬呎ヲ算シ居レリ

製品の商標

◉日ノ出印　一等品　◉月印　二等品　◉星印　三等品

販賣店

關東方面—本社東京　關西方面—大阪支店（各地ニ特約販賣店アリ）

營業方針

迅速、丁寧、親切、良品ノ廉價、ヲモツトートシテ專ラ地方消防組ヲ第一顧客トシ其製品ノ七割迄ヲ消防組ニ納入シ居レリ

月日星	一級品	水壓	五〇〇ポンド
印の出印	二級品	水壓	四〇〇ポンド
印	三級品	水壓	二〇五ポンド

野趣豐かに
料理は江戸前
埼玉縣浦和市浦和橋
割烹 玉家
電話二一一六番
消防關係の御方様には特に御優待申上げます
御見學の際御中食なりと是非……

昭和十年七月十五日 印刷
昭和十年七月二十日 發行

【非賣品】

埼玉縣浦和市上木崎四、八九八番地
著作兼發行者 藏重耕一
埼玉縣浦和市五〇八番地
印刷者 布施久太
埼玉縣浦和市五〇八番地
印刷所 布施印刷所

複製不許

埼玉縣浦和市四、一三八番地
發行所 大日本消防發達史編纂協會

고ㅏ2585